

桐生新町水路跡

桐生新町水路跡

主要地方道桐生田沼線無電柱化推進計画事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

主要地方道桐生田沼線無電柱化推進計画事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二三

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2023

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



桐生新町水路跡

主要地方道桐生田沼線無電柱化推進計画事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

桐生市天神町一丁目、本町一丁目・二丁目地区は桐生新町重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、ここを通る主要地方道桐生田沼線沿いでは伝統的建造物群が並んだ街並みと調和した景観をつくりだすことを目的に共同溝敷設による無電柱化推進計画事業が実施されることになり、これに伴う発掘調査が実施されました。

桐生新町重要伝統的建造物群保存地区は、天正19(1591)年に徳川家康の命を受けて新たに町立てされ、在郷町として発展してきました。町立て当初からの敷地形態と共に、当時から生産が行われ、近代の桐生を代表する産業である絹織物業を中心に発展した町の形態として、江戸時代後期から昭和初期に建てられた主屋や土蔵、ノコギリ屋根の工場など、絹織物業に係る様々な建物が一体となり、製織町として特色ある歴史的な環境を今日に伝えています。

今回の発掘調査は、商店や住宅が建ち並ぶ地域のため、地元の方々にご不便をかけることが多々ありましたが、ご協力を賜り実施できました。対象となった遺構は、近世の町並みに上水を供給した水路遺構ですが、この水路構築についての構築状態や変遷などと、多くの陶磁器・ガラス製品をはじめとする近世から近代の出土品から当時の様相を復元できる成果を得ることができました。

この度、発掘調査の成果をまとめ、桐生新町水路跡の埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することになりました。発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご指導、ご協力を賜りました桐生土木事務所、県地域創生部文化財保護課、桐生市、桐生市教育委員会、地元関係者各位に感謝申し上げます。本報告書が地域の歴史や近世から近代の研究に広く活用されますことを願い、序といたします。

令和5年5月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 向田 忠正



例 言

- 1 平成29年度主要地方道桐生田沼線の電柱共同溝事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託、平成30年度主要地方道桐生田沼線の電柱共同溝事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託、令和元年度社会資本総合整備(防災・安全)(無電柱化・重点)に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託、令和2年度社会資本総合整備(防災・安全)(無電柱化・推進計画支援)に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託で実施された「桐生新町水路跡」の発掘調査報告書である。

- 2 桐生新町水路跡の発掘調査対象地は、桐生市本町一丁目、二丁目の主要地方道桐生田沼線の道路の一部と工事対象となる民地である。対象となる地番は下記のとおりである。

平成29年度 桐生市本町一丁目265-2、265-5、223-3、198-1～197-14の各東道路敷

平成30年度 桐生市本町一丁目194-4、196-3、196-1、197-14、198-11、206-1、206-2、210-6、210-9、221-1、222-5の各東道路敷

令和元年度 桐生市本町一丁目221-1、222-4、222-5、223-1、223-3、224-4、261、桐生市本町二丁目276-1、280-3、282-11、284-2の各東道路敷

令和2年度 桐生市本町一丁目221-1、196-3、202-8、261、223-4、二丁目282-11、281-11、乙263の各地番の一部とその東道路敷

- 3 事業主体は、群馬県桐生土木事務所である。

- 4 発掘調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

- 5 発掘調査の期間と体制は下記のとおりである。

発掘調査期間(履行期間)、発掘調査担当者

平成29年度 平成30年1月1日～2月28日(平成29年12月1日～平成30年3月31日)石川真理子・桜岡正信

平成30年度 平成31年1月1日～2月28日(平成30年12月1日～平成31年3月31日)石田 真・梅村唯斗

令和元年度 令和元年10月1日～12月31日(令和元年9月1日～令和2年2月28日)石田 真・長澤典子

令和2年度 令和3年1月1日～3月31日(令和2年12月1日～令和3年3月31日)本田寛之・原 雅信

遺構掘削工事請負 平成29年度、平成30年度、令和元年度、令和2年度の各年度とも(株)坂塚組
地上測量 平成29年度、平成30年度、令和元年度、令和2年度の各年度とも技研コンサル株式会社

- 6 整理事業の期間と体制は下記のとおりである。

整理期間(履行期間) 令和4年4月1日～令和5年3月31日(令和4年3月31日～令和5年3月31日)

整理担当者 神谷佳明(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

齊田智彦(令和5年3月1日～令和5年3月31日)

編集 神谷佳明・齊田智彦

執筆 第1章2節1項 矢口裕之、第2章 矢口裕之・田村 博、第3章4節3項 大西雅広

その他 神谷佳明

遺物観察 石器・石製品 岩崎泰一・神谷佳明、陶磁器・ガラス 大西雅広、金属器 板垣泰之

遺構写真 発掘調査担当者 遺物写真 大西雅広、板垣泰之、岩崎泰一、神谷佳明

保存処理 板垣泰之、関 邦一

- 7 石材鑑定 飯島静雄(群馬地質研究会)に依頼した。

- 8 発掘調査の記録及び出土遺物は、群馬県埋蔵文化財センターにて保管している。なお、発見届に含まれていない遺構である水路側面に構築材として使用されていた礫のうち取り上げが可能であったものと第103図29の石造品塚柱

(24区で検出)は桐生市教育委員会が今後の活用のため保管している。

- 9 発掘調査及び本書の作成にあたっては下記の期間及び諸氏から協力、ご教示、ご指導をいただいた。ここに記して感謝いたします。

群馬県土木整備部、群馬県桐生土木事務所、群馬県地域創生部文化財保護課、群馬県教育委員会、桐生市、桐生市教育委員会、地元自治会

凡 例

- 1 本報告書に用いた座標・方位は、すべて世界測地系2000（平面直角座標第Ⅱ系）による。
- 2 調査区の名称は、発掘調査時に使用したものを踏襲している。
- 3 平面図・断面図に示した高さは、すべて標高値である。
- 4 本文中の平面図・断面図の縮尺は原則1/40である。なお、すべての図に縮尺は示している。
- 5 遺物の番号は、全種類の通し番号である。挿入番号は遺物観察表に記載し、本文中では割愛した。
- 6 平面図・断面図に使用しているトーンは、下記の例による。

アスファルト・路盤材・歩道アスファルト下  コンクリート・ブロック塀・点字ブロック 
緑石  攪乱  石の断面 

- 7 出土遺物への注記は下記のとおりである。

KSS（桐生新町水路の略称）+調査区NO. +ク（「区」を省略したもの）+取り上げNO.、または出土位置。
出土位置は下記のように略している。

攪乱(カク)、水路上層(上ソ)、水路下層(下ソ)、裏込め(ウラ)

- 8 本報告書で使用した地図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院1/200,000 地勢図(宇都宮)
 - 第2図 桐生市現況図1/2,500 桐生市教育委員会提供
 - 第4図 国土地理院1/25,000
 - 第5図 桐生市現況図1/2,500 桐生市教育委員会提供
- 9 遺物図の縮尺は各掲載頁に示してある。
- 10 遺物写真は、遺物図に近い縮尺率で掲載してある。

目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次・表目次・図版目次

第1章 発掘調査に至る経緯・経過	1	第3章 検出遺構と出土遺物	17
第1節 発掘調査に至る経緯	1	第1節 桐生新町水路跡の概要	17
第2節 発掘調査の経過	2	第2節 桐生新町水路跡の発掘調査	17
1 発掘調査に至る調整	2	第3節 検出した水路跡の遺構	26
2 発掘調査の経過	4	第4節 出土遺物	123
3 整理作業の経過と方法	5	1 石製品・石造品	123
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	6	2 金属製品・金属器	123
第1節 地理的環境	6	3 陶磁器・ガラス製品類	124
第2節 歴史的環境	6	第4章 まとめ	188
1 桐生地域の発掘調査	6	遺物観察表	192
2 旧石器時代	6	写真図版	
3 縄文時代	6	報告書抄録	
4 弥生時代～古墳時代	8		
5 奈良・平安時代	8		
6 中世	8		
7 近世	9		
8 近代	10		

挿図目次

第1図	道路位置図(国土地理院1/200,000地形図「宇都宮」を編集・加工)	1	第60図	22・2・23・42・3・24区道構樹(9)	80
第2図	調査区位置図(桐生市調査区を含む)	3	第61図	22・2・23・42・3・24区道構樹(10)	81
第3図	道路周辺地形分類図(国土地理院1/25,000地形図「大間々」「香場」「桐生」「足利北部」図幅を編集・加工)	7	第62図	22・2・23・42・3・24区道構樹(11)	82
第4図	周辺道路(国土地理院1/25,000地形図「大間々」「香場」「桐生」「足利北部」図幅を編集・加工)	11	第63図	22・2・23・42・3・24区道構樹(12)	83
第5図	国府市指定文化財(建造物)重要伝統的建造物群保存地区桐生新町重要伝統的建造物群保存地区	12	第64図	22・2・23・42・3・24区道構樹(13)	84
第6図	2018年度桐生市調査 道構樹	18	第65図	22・2・23・42・3・24区道構樹(14)	85
第7図	調査区位置図(1)	19	第66図	22・2・23・42・3・24区道構樹(15)	86
第8図	調査区位置図(2)	20	第67図	22・2・23・42・3・24区道構樹(16)	87
第9図	調査区位置図(3)	21	第68図	22・2・23・42・3・24区道構樹(17)	88
第10図	調査区位置図(4)	21	第69図	22・2・23・42・3・24区道構樹(18)	89
第11図	調査区位置図(5)	22	第70図	22・2・23・42・3・24区道構樹(19)	90
第12図	調査区位置図(6)	23	第71図	22・2・23・42・3・24区道構樹(20)	91
第13図	調査区位置図(7)	24	第72図	41区道構樹	93
第14図	調査区位置図(8)	25	第73図	40区道構樹	93
第15図	7区道構樹	28	第74図	25区道構樹	95
第16図	8区、49区道構樹	30	第75図	4区道構樹(1)	96
第17図	9区道構樹	31	第76図	4区道構樹(2)	97
第18図	10区道構樹(1)	33	第77図	5・39区道構樹(1)	98
第19図	10区道構樹(2)	34	第78図	5・39区道構樹(2)	99
第20図	11区道構樹(1)	35	第79図	6区道構樹(1)	100
第21図	11区道構樹(2)	36	第80図	6区道構樹(2)	101
第22図	12区、1・48区道構樹(1)	37	第81図	26区道構樹(1)	103
第23図	12区、1・48区道構樹(2)	38	第82図	26区道構樹(2)	104
第24図	12区、1・48区道構樹(3)	39	第83図	38・27区道構樹(1)	105
第25図	1・48区道構樹(4)	40	第84図	38・27区道構樹(2)	106
第26図	13区道構樹(1)	41	第85図	28区、29区道構樹(1)	108
第27図	13区道構樹(2)	42	第86図	28区、29区道構樹(2)	109
第28図	14・47区道構樹(1)	44	第87図	28区、29区道構樹(3)	110
第29図	14・47区道構樹(2)	45	第88図	30区道構樹(1)	111
第30図	15区、46区道構樹(1)	46	第89図	30区道構樹(2)	112
第31図	15区、46区道構樹(2)	47	第90図	31区道構樹	114
第32図	16区道構樹(1)	48	第91図	32区道構樹	115
第33図	16区道構樹(2)	49	第92図	37区道構樹	116
第34図	45・17区道構樹(1)	51	第93図	33・36区道構樹(1)	118
第35図	45・17区道構樹(2)	52	第94図	33・36区道構樹(2)	119
第36図	45区石積護柵本(1)	52	第95図	33・36区道構樹(3)	120
第37図	45区石積護柵本(2)	53	第96図	34区、35区道構樹	121
第38図	18・44区道構樹(1)	55	第97図	遺物類(1) 1. 石製品・石造品 礎石	132
第39図	18・44区道構樹(2)	56	第98図	遺物類(2) 1. 石製品・石造品 瓦	133
第40図	19区道構樹	57	第99図	遺物類(3) 1. 石製品・石造品 礎	134
第41図	20区道構樹	59	第100図	遺物類(4) 1. 石製品・石造品 石	135
第42図	43区道構樹	60	第101図	遺物類(5) 1. 石製品・石造品 石板	136
第43図	21区道構樹(1)	61	第102図	遺物類(6) 1. 石製品・石造品 石板・石重・板石	137
第44図	21区道構樹(2)	62	第103図	遺物類(7) 1. 石製品・石造品 屋根	138
第45図	21区道構樹(3)	63	第104図	遺物類(8) 1. 石製品・石造品 石柱	139
第46図	21区道構樹(4)	64	第105図	遺物類(9) 1. 石製品・石造品 不明品	140
第47図	21区道構樹(5)	65	第106図	遺物類(10) 1. 石製品・石造品 石礫	141
第48図	21区道構樹(6)	66	2. 金属製品・金属器 鏡	141	
第49図	21区道構樹(7)	67	第107図	遺物類(11) 2. 金属製品・金属器 鏡	142
第50図	21区道構樹(8)	68	第108図	遺物類(12) 2. 金属製品・金属器 鏡	143
第51図	22・2・23・42・3・24区位置図	71	第109図	遺物類(13) 2. 金属製品・金属器 鏡・棒・管	144
第52図	22・2・23・42・3・24区道構樹(1)	72	第110図	遺物類(14) 2. 金属製品・金属器 その他	145
第53図	22・2・23・42・3・24区道構樹(2)	73	第111図	遺物類(15) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	146
第54図	22・2・23・42・3・24区道構樹(3)	74	①ミニチュア玩具	146	
第55図	22・2・23・42・3・24区道構樹(4)	75	第112図	遺物類(16) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	147
第56図	22・2・23・42・3・24区道構樹(5)	76	②喫茶・飲酒器 小杯・小碗・湯飲み	147	
第57図	22・2・23・42・3・24区道構樹(6)	77	第113図	遺物類(17) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	148
第58図	22・2・23・42・3・24区道構樹(7)	78	②喫茶・飲酒器 小杯・小碗・湯飲み	148	
第59図	22・2・23・42・3・24区道構樹(8)	79	第114図	遺物類(18) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	149
			②喫茶・飲酒器 小杯・小碗・湯飲み	149	
			第115図	遺物類(19) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	150
			②喫茶・飲酒器 急須・土瓶・飲酒器	150	

第116図	遺物図(20)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②喫茶・飲酒器 飲酒器 ③食器 猪口・碗	151
第117図	遺物図(21)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 碗	152
第118図	遺物図(22)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 碗	153
第119図	遺物図(23)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 碗	154
第120図	遺物図(24)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 丼・小皿	155
第121図	遺物図(25)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿	156
第122図	遺物図(26)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿	157
第123図	遺物図(27)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿	158
第124図	遺物図(28)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿・中皿(和食器)	159
第125図	遺物図(29)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 中皿(和食器)	160
第126図	遺物図(30)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 中皿(洋食器)	161
第127図	遺物図(31)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 鉢	162
第128図	遺物図(32)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 鉢	163
第129図	遺物図(33)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 鉢 ④記念品・收藏品・粗品	164
第130図	遺物図(34)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑤業務用食器	165
第131図	遺物図(35)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑤業務用食器 ⑥容器・貯蔵具	166
第132図	遺物図(36)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑥容器・貯蔵具	167
第133図	遺物図(37)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具 調味料入れ・すり鉢・鍋	168
第134図	遺物図(38)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具 鍋・調味料入れ・穀物増加器・おろし器 鍋・すり鉢	169
第135図	遺物図(39)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具	

第136図	遺物図(40)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具 焙烙 ⑧神仏具等 非灯火器	170
第137図	遺物図(41)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑧灯火器 浄水器 非植木鉢	171
第138図	遺物図(42)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑧火具 目皿・熱板・燗灰おこし	172
第139図	遺物図(43)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑧火具 燗灰おこし・置輪	173
第140図	遺物図(44)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑧火具 置輪・火鉢類 ⑨科学工業陶器	174
第141図	遺物図(45)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨建築・建設関連具 戸車・タイル・屋根瓦	175
第142図	遺物図(46)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨建築・建設関連具 煉瓦	176
第143図	遺物図(47)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨建築・建設関連具 煉瓦	177
第144図	遺物図(48)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨建築・建設関連具 煉瓦・硝子・土管・陶管	178
第145図	遺物図(49)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨建築・建設関連具 土管・陶管	179
第146図	遺物図(50)3.	陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨その他	180
第147図	遺物図(51)3.	陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ①玩具類	181
第148図	遺物図(52)3.	陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ②文具類 インク瓶等・額瓶	182
第149図	遺物図(53)3.	陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ③酒瓶 ④調味料瓶 ⑤食品瓶	183
第150図	遺物図(54)3.	陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ⑦食品瓶 ⑧食器類 ⑨喫煙具 ⑩化粧瓶 化粧クリーム瓶・ボマード瓶	184
第151図	遺物図(55)3.	陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ⑩化粧瓶 化粧水・整髪料瓶 ⑪薬瓶 一般用薬瓶・医療用薬瓶	185
第152図	遺物図(56)3.	陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ⑫日常生活瓶 白髪・赤毛染瓶・鏡クリーム瓶 ⑬標記瓶 送附調剤器具 非用途不明瓶	186
第153図	樹生新町水路構築工程模式図		187

表 目 次

第1表	周辺遊跡一覧表	13
第2表	国領市指定文化財(建造物)一覧	14
第3表	樹生新町水路跡調査区一覧	122

第4表	石製品・石造品観察表	192
第5表	金属製品・金属器観察表	193
第6表	陶磁器・ガラス製品類観察表	195

写真図版目次

PL. 1	1 榎生本町 遠景 北東	5	11区 東側面1段目 南西
	2 天満宮付近上空より見た近年の本町一・二丁目町並み	6	11区 東側面1段目 南
	榎生市教育委員会提供 北	7	11区 土層断面A-A' 南
3	南西上方より見る天満宮境内の遠望	8	11区 土層断面B-B' 北
	榎生市教育委員会提供 西	9	11区 水路内遺物出土状態 南東
PL. 2	1 旧眞尾邸(本町一丁目) 榎生市中案内雙六(明治30)	2	11区 裏込め・石積み遺物出土状態 西
	榎生市教育委員会提供 南	3	11区 取り上げた杭
	2 本町一から天満宮を望む(大正4年)	4	12区 水路完備 東側面2段目 南
	榎生市教育委員会提供 南	5	12区 東側面石積み状態 西
	3 菅我邸(本町一丁目・昭和37年) 榎生市教育委員会提供 東	6	12区 掘り方 西
	4 書上商店2(本町二丁目・大正時代)	7	12区 胴木検出状態 西
	榎生市教育委員会提供 東	8	12区 東側面2段目下段 西
	5 矢野本店(本町二丁目)から南方向(大正4年)	10	1 12区 土層断面A-A' 南
	榎生市教育委員会提供 北	2	12区 土層断面B-B' 北
	6 本町二から三丁目を望む(大正4年)	3	12区 水路内遺物出土状態 東
	榎生市教育委員会提供 北	4	12区 水路内遺物出土状態 東
	7 近年の本町通と天満宮 榎生市教育委員会提供 南	5	1区 礎検出状態 北
	8 現在の榎生本町二丁目 本町通 南	6	1区 完備状態 東
PL. 3	1 7区 水路完備 東側面2段目 西	7	1区 胴木検出状態 北
	2 7区 水路完備 東側面2段目 北	8	1・48区 土層断面A-A' 南
	3 7区 東側面石積み状態 西	11	1 48区 水路完備 西側面2段目 東
	4 7区 掘り方 北	2	48区 水路完備 西側面2段目 北
	5 7区 東側面1段目 北	3	48区 掘り方 東
	6 7区 東側面1段目 西	4	48区 胴木検出状態 北
	7 7区 土層断面A-A' 北	5	48区 西側面1段目 東
	8 7区 裏込め・石積み遺物出土状態 西	6	1・48区 土層断面C-C' 南
PL. 4	1 8区 水路完備 東側面2段目 西	7	48区 陶管検出状態 東
	2 8区 水路完備 東側面2段目 南	8	13区 水路完備 東側面2段目 南
	3 8区 東側面石積み状態 南西	12	1 13区 東側面石積み状態 西
	4 8区 掘り方 西	2	13区 掘り方 胴木検出状態 南
	5 8区 東側面1段目 西	3	13区 胴木検出状態 西
	6 8区 東側面1段目 北西	4	13区 胴木 杭直検出状態 西
	7 8区 土層断面A-A' 北	5	13区 東側面1段目 西
	8 8区 裏込め上部遺物出土状態 北	6	13区 土層断面A-A' 南
PL. 5	1 49区 水路完備 西側面2段目 東	7	13区 土層断面B-B' 北
	2 49区 西側面石積み状態 東	8	13区 水路内遺物出土状態 西
	3 49区 土層断面A-A' 南	13	1 14区 水路完備 東側面2段目 南
	4 9区 水路完備 東側面2段目 南	2	14区 水路完備 東側面2段目 西
	5 9区 東側面石積み状態 西	3	14区 東側面石積み状態 西
	6 9区 掘り方 西	4	14区 掘り方 西
	7 9区 東側面1段目 西	5	14区 東側面1段目 西
	8 9区 東側面2段目下段 西	6	14・47区 土層断面A-A' 南
PL. 6	1 9区 土層断面A-A' 南	7	14区 裏込め遺物出土状態 西
	2 9区 土層断面B-B' 北	8	47区 西側面検出状態 東
	3 9区 水路内遺物出土状態 北	14	1 47区 裏込め側確認面 西
	4 10区 水路完備 東側面2段目 南	2	47区 西側面石積み状態 東
	5 10区 水路完備 東側面2段目 西	3	47区 掘り方 水路側 西
	6 10区 東側面石積み状態 西	4	47区 掘り方 裏込め側 東
	7 10区 掘り方 南	5	47区 西側面1段目 東
	8 10区 掘り方 西	6	14・47区 土層断面C-C' 北
PL. 7	1 10区 掘り方 西	7	15区 水路完備 東側面2段目 南
	2 10区 東側面1段目 西	8	15区 水路完備 東側面2段目 西
	3 10区 土層断面A-A' 南	15	1 15区 東側面石積み状態 南西
	4 10区 土層断面B-B' 北	2	15区 掘り方 胴木検出状態 東
	5 11区 水路完備 東側面2段目 南西	3	15区 胴木検出状態 東
	6 11区 東側面石積み状態 南西	4	15区 東側面1段目 南
	7 11区 東側面石積み状態 西	5	15区 土層断面A-A' 南
	8 11区 東側面石積み状態 西	6	15区 土層断面B-B' 北
PL. 8	1 11区 東側面石積み状態 西	7	15区 水路内遺物出土状態 東
	2 11区 胴木検出状態 南西	8	15区 水路内遺物出土状態 東
	3 11区 杭検出状態 南	16	1 46区 発掘調査前 南
	4 11区 杭検出状態 西	2	46区 水路完備 西側面検出状態 東
		3	46区 西側面2段目 東

	4	46区	土層断面 B-B' 北	
	5	16区	裏込め完備状態・東側面 2 段目(裏込め側から) 東	
	6	16区	裏込め完備状態・東側面 2 段目(裏込め側から) 南東	
	7	16区	土層断面 A-A' 北	
	8	16区	土層断面 B-B' 北	
PL.17	1	16区	裏込め遺物出土状態 東	
	2	16区	裏込め遺物出土状態 北東	
	3	45区	水路完備 西側面 東	
	4	45区	掘り方 東	
	5	45区	西側面 1 段目 東	
	6	45・17区	土層断面 A-A' 南	
	7	45・17区	土層断面 D-D' 北	
	8	45区	水路内遺物出土状態 東	
PL.18	1	17区	裏込め完備状態・東側面 2 段目 西	
	2	17区	裏込め完備状態・東側面 2 段目 南	
	3	17区	裏込め完備状態・東側面石積み状態(裏込め側から) 東	
	4	17区	裏込め状態・東側面石積み状態(裏込め側から) 東	
	5	45・17区	土層断面 B-B' 南	
	6	45・17区	土層断面 C-C' 北	
	7	18区北	裏込め完備状態・東側面 2 段目(裏込め側から) 東	
	8	18区北	裏込め完備状態・東側面 2 段目(裏込め側から) 北	
PL.19	1	18区北	東側面石積み状態(裏込め側から) 南	
	2	18区北	掘り方 東	
	3	18区北	東側面 1 段目(裏込め側から) 東	
	4	18区北	土層断面 A-A' 南	
	5	18区北	土層断面 B-B' 北	
	6	18区南	裏込め・東側面石積み状態(裏込め側から) 東	
	7	18区南	裏込め・東側面石積み状態(裏込め側から) 北	
	8	18区南	掘り方 東	
PL.20	1	18区南	東側面 1 段目(裏込め側から) 東	
	2	18区南	東側面 2 段目(裏込め側から) 東	
	3	18区南	裏込め・東側面石積み状態(裏込め側から) 東	
	4	44区	調査状況 東	
	5	44区	土層断面 C-C' 右手上に西側面最上面を検出 北	
	6	19区	水路完備 東側面 2 段目 南	
	7	19区	水路完備 東側面 2 段目 西	
	8	19区	東側面石積み状態 西	
PL.21	1	19区	掘り方 北	
	2	19区	脚本取換出状態 西	
	3	19区	杭取換出状態 西	
	4	19区	杭取換出状態 東	
	5	19区	東側面 1 段目 南	
	6	19区	東側面 1 段目 西	
	7	19区	東側面 2 段目下段 西	
	8	19区	土層断面 A-A' 南	
PL.22	1	19区	土層断面 B-B' 北	
	2	19区	水路内遺物出土状態 東	
	3	19区	水路内遺物出土状態 南	
	4	20区	水路完備 東側面 2 段目 南	
	5	20区	水路完備 東側面 2 段目 西	
	6	20区	東側面石積み状態 西	
	7	20区	掘り方 西	
	8	20区	東側面 1 段目 南	
PL.23	1	20区	東側面 1 段目 西	
	2	20区	東側面 2 段目下段 西	
	3	20区	土層断面 A-A' 南	
	4	20区	土層断面 B-B' 北	
	5	43区	西側面検出状態・裏込め検出状態 北	
	6	43区	裏込め 東	
	7	43区	西側面 1 段目 東	
	8	43区	土層断面 A-A' 南	
PL.24	1	21区	石積(溝蓋)検出状態 南	
	2	21区	石積(溝蓋)検出状態 近接 北	
	3	21区	水路完備・最上面 北	
	4	21区	水路完備・最上面 近接 北	

	5	21区	東側面石積み状態 北側 北西	
	6	21区	東側面石積み状態 南側 南	
	7	21区	東側面石積み状態 近接 北	
	8	21区	西側面石積み状態 北東	
PL.25	1	21区	西側面石積み状態 東	
	2	21区	掘り方 北	
	3	21区	掘り方 北	
	4	21区	脚本取換出状態 北	
	5	21区	脚本取換出状態 南	
	6	21区	脚本取換出状態 南西	
PL.26	1	21区	脚本検出状態 西	
	2	21区	脚本・杭検出状態 西	
	3	21区	杭断面 南	
	4	21区	東側面 1 段目 北	
	5	21区	東側面 2 段目 北	
	6	21区	土層断面 B-B' 北	
	7	21区	水路内遺物出土状態 南	
	8	21区	水路内遺物出土状態 南	
PL.27	1	21区	石積(溝蓋)	
	2	21区	取り上げ杭	
	3	22区北	東側面石積み上面検出状態 北	
	4	22区北	東側面石積み検出状態 北	
	5	22区北	水路完備 東側面最上面 北西	
	6	22区北	水路完備 東側面最上面 南	
	7	22区北	東側面石積み状態 西	
	8	22区北	掘り方 南	
PL.28	1	22区北	脚本検出状態 南	
	2	22区北	1 段目 北	
	3	22区北	脚本検出状態 近接 西	
	4	22区北	2 段目下段 南	
	5	22区北	2 段目上段 南	
PL.29	1	22区中	水路完備 東側面 2 段目 南	
	2	22区中	水路完備 東側面 2 段目 北	
	3	22区中	東側面石積み状態 調査区北側 西	
	4	22区中	東側面石積み状態 調査区南側 西	
	5	22区中	掘り方 南	
	6	22区中	掘り方 部分 西	
	7	22区中	掘り方 部分 西	
PL.30	1	22区中	東側面 1 段目 南	
	2	22区中	東側面 1 段目 部分 西	
	3	22区中	東側面 2 段目下段 南	
	4	22区中	東側面 2 段目下段 部分 西	
	5	22区中	東側面 2 段目中段 南	
	6	22区中	東側面 2 段目中段 部分 西	
	7	22区中	水路完備 東側面 1~2 段目 南	
PL.31	1	22区南	水路完備 東側面 1~2 段目 南	
	2	22区南	東側面石積み状態 西	
	3	22区南	東側面石積み状態 南	
	4	22区南	掘り方 陶管検出状態 南	
	5	2区	水路完備 東側面 2 段目 南	
	6	2区	水路完備 東側面 2 段目 西	
	7	2区	東側面石積み状態 南東	
	8	2区	掘り方 南	
PL.32	1	2区	東側面 1 段目 北西	
	2	23区	水路完備 東側面 2 段目 南	
	3	23区	水路完備 東側面 2 段目 北西	
	4	23区	東側面石積み状態 西	
	5	23区	東側面石積み状態 西	
	6	23区	掘り方 南	
	7	23区	脚本取換出状態 西	
PL.33	1	23区	脚本取換出状態 南	
	2	23区	脚本取換出状態 南	
	3	23区	東側面石積み 1 段目 西	
	4	23区	東側面石積み 1 段目 南	
	5	23区	東側面 2 段目下段 南西	
	6	23区	東側面 2 段目下段 北西	

PL-34	1	3区	調査開始前	南東	7	5・39区	土層断面A-A'	南			
	2	3区	覆検出状態(覆は再度埋め戻し)	北	8	5・39区	土層断面B-B'	北			
	3	3区	東側面裏込め土(右手の褐色土)	北	PL-43	1	39区	西側面最上面	南		
	4	42区	発掘調査開始前状況	南		2	39区	水路掘削	西側面最上面	東	
5	42区	アスファルト除去後	東	3		39区	掘り方	東			
6	42区	水路完掘	西側面2段目	南		4	39区	駒木・杭取	東		
PL-35	7	42区	水路完掘	西側面2段目	東	5	39区	西側面1段目	東		
	8	42区	掘り方	北	6	39区	西側面2段目	東			
	1	42区	西側面裏込め掘り方	東	7	5・39区	土層断面A-A'	南			
	2	42区	西側面1段目	東	8	5・39区	土層断面B-B'	北			
PL-36	3	24区北	水路完掘	東側面2段目	南西	PL-44	1	6区	東側面最上面(裏込め側から)	南東	
	4	24区北	水路完掘	東側面2段目	北		2	6区	水路掘削後・東側面最上面	西	
	5	24区南	水路完掘	東側面2段目	南		3	6区	水路掘削後・東側面最上面	西	
	6	24区南	水路完掘	東側面2段目	北		4	6区	東側面1段目	南	
PL-37	7	24区北	東側面石積み状態	西	5	6区	東側面2段目下段	北			
	8	24区北	東側面石積み状態	西	6	6区	東側面2段目上段	南			
	3	24区南	東側面石積み状態	西	7	6区	土層断面A-A'	南			
	4	24区南	東側面石積み状態	西	8	6区	裏込め遺物出土状態	東			
PL-38	5	24区北	掘り方	北	PL-45	1	26区	水路完掘・2段目	北		
	6	24区南	掘り方	北		2	26区	水路完掘・2段目	西		
	1	24区北	東側面1段目	北		3	26区	東側面石積み状態	西		
	2	24区南	東側面1段目	南		4	26区	掘り方	南東		
PL-39	3	24区北	東側面2段目	南西	5	26区	駒木検出状態	南西			
	4	24区南	東側面2段目	南西	6	26区	東側面1段目	南			
	5	24区北	渠検出状況	東	7	26区	東側面2段目下段	西			
	6	25区北	渠検出状況	北	8	26区	東側面2段目上段	南			
PL-40	7	24区北	渠床版石・水明き石	西	PL-46	1	26区	土層断面A-A'	南		
	8	25区北	渠床版石・水明き石	南東		2	26区	土層断面B-B'	北		
	1	22・2・23・3・42・24区	土層断面A-A'	南		3	26区	水路内遺物出土状態	南		
	2	22・2・23・3・42・24区	土層断面B-B'	北		4	26区	水路内遺物出土状態	西		
PL-41	3	22・2・23・3・42・24区	土層断面E-E'	南	5	27区	水路完掘・2段目(左側褐色土水道管敷設上)	南			
	4	22・2・23・3・42・24区	土層断面H-H'	北	6	27区	東側面石積み状態	西			
	5	22・2・23・3・42・24区	土層断面I-I'	東	7	27区	掘り方	北			
	6	22区中	水路内遺物出土状態(50天保通寶)	西	8	27区	駒木検出状態	北			
PL-42	7	22区中	掘り方遺物出土状態	南	PL-47	1	27区	東側面1段目	南		
	8	22区南	水路内遺物出土状態	西		2	27区	東側面2段目	南		
	1	22区	取り上げた駒木			3	38・27区	土層断面A-A'	南		
	2	22区	取り上げた杭			4	38・27区	土層断面B-B'	北		
PL-43	3	23区	水路内遺物出土状態	西	5	27区	水路内遺物出土状態	北西			
	4	24区	水路内遺物出土状態	西	6	27区	水路内遺物出土状態	北			
	5	24区	水路内遺物出土状態	西	7	38区	水路完掘・2段目	北			
	6	24区	水路内遺物出土状態	東	8	38区	水路完掘	西側面2段目	南東		
PL-44	7	41区	水路完掘	西側面	東	PL-48	1	38区	水路完掘	西側面石積み状態	東
	8	41区	水路埋没・堆積土状態	南	2		38区	掘り方	南		
	1	40区	水路完掘	西側面1段目	東		3	38区	駒木検出状態	南	
	2	40区	水路土層断面	北	4		38区	西側面1段目	南		
PL-45	3	25区	水路完掘	東側面2段目	北	5	38区	西側面2段目下段	北		
	4	25区	東側面石積み状態	西	6	38・27区	土層断面C-C'	北			
	5	25区	掘り方	北	7	38区	水路底面遺物出土状態	南			
	6	25区	駒木検出状態	北	8	28区	水路完掘	東側面2段目	南		
PL-46	7	25区	駒木検出状態	西	PL-49	1	28区	水路完掘	東側面2段目	近接	
	8	25区	東側面1段目	東		2	28区	東側面石積み状態	西		
	1	25区	取り上げた杭1			3	28区	掘り方	南		
	2	25区	取り上げた杭3			4	28区	東側面1段目	南		
PL-47	3	4区	東側面2段目・裏込め	南	5	28区	東側面2段目下段	南			
	4	4区	東側面1段目・裏込め	西	6	28区	土層断面A-A'	南			
	5	4区	土層断面A-A'	南西	7	28区	土層断面B-B'	北			
	6	4区	土層断面B-B'	北西	8	28区	水路内遺物出土状態	南			
PL-48	7	4区	裏込め遺物出土状態(39天保通寶)	北	PL-50	1	29区	水路完掘	東側面2段目	南	
	8	4区	裏込め遺物出土状態	東		2	29区	水路完掘	東側面2段目	西	
	1	5区	水路完掘	東側面2段目		東	3	29区	東側面石積み状態	南	
	2	5区	水路完掘	東側面2段目		北	4	29区	掘り方	駒木検出状態	南
PL-49	3	5区	東側面石積み状態(裏込め側から)	東	5	29区	駒木・杭取検出状態	南			
	4	5区	東側面石積み状態(覆除去後)	北西	6	29区	東側面1段目	西			
	5	5区	東側面1段目(裏込め側から)	東	7	29区	裏込め遺物出土状態	南			
	6	5区	東側面1段目	北	8	30区	水路完掘	東側面2段目	南		

	2	30区	水路完備	東側面2段目	北西	PL-60	1.石製品・石造品	砥石・硯
	3	30区	水路完備	東側面石積み状態	西	PL-61	1.石製品・石造品	硯・石板
	4	30区	掘り方	南		PL-62	1.石製品・石造品	石板
	5	30区	掘り方	榊木組・杭組輸出状態	西	PL-63	1.石製品・石造品	石板・石筆・硯石
	6	30区	東側面1段目	遺物出土状態	西	PL-64	1.石製品・石造品	塚柱・石礎
	7	30区	土層断面A-A'	南		PL-65	1.石製品・石造品	不明品・石礎
	8	30区	土層断面B-B'	北		PL-66	2.金属製品・金属器	銭貨
PL-52	1	31区	水路完備	東側面2段目	西	PL-67	2.金属製品・金属器	銭貨
	2	31区	水路完備	東側面2段目	西	PL-68	2.金属製品・金属器	銭貨・煙管・その他
	3	31区	掘り方	南		PL-69	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器類	①ミニチュア・玩具
	4	31区	榊木輸出状態	北			②喫茶・飲酒器	小杯・小碗・陶飲み
	5	31区	取り上げた榊木			PL-70	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	
	6	31区	東側面1段目	北			②喫茶・飲酒器	小杯・小碗・陶飲み・急須・土瓶
	7	31区	東側面2段目中段	西		PL-71	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	
	8	31区	土層断面A-A'	南			②喫茶・飲酒器	飲酒器
PL-53	1	31区	土層断面A-A'	北		PL-72	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	③食器
	2	31区	土層断面B-B'	北		PL-73	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	③食器
	3	31区	水路内遺物出土状態	北		PL-74	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	③食器
	4	31区	石積組	西		PL-75	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	③食器
	5	32区	水路掘削	東側面最上層	南		③食器	小皿・中皿(和食器)
	6	32区	水路掘削	東側面最上層	西	PL-76	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	
	7	32区	掘り方	南			③食器	中皿(和食器)・中皿(洋食器)
	8	32区	榊木・杭組輸出状態	南東		PL-77	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	③食器
PL-54	1	32区	東側面1段目	西		PL-78	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	③業務用食器
	2	32区	東側面2段目下段	西			④記念品・販食品・粗品	
	3	32区	東側面2段目中段	西		PL-79	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	④容器・貯蔵具
	4	32区	東側面2段目上段	西			⑦調味料入れ・調理用具	薪・調味料入れ・動物増加剤・おろし器
	5	32区	土層断面A-A'	南			※神仏具等	※灯火器
	6	32区	土層断面B-B'	北		PL-80	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	④花器
	7	32区	水路内遺物出土状態	南東			※植木鉢	
	8	32区	水路内に産された石橋	西		PL-81	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	④火具
PL-55	1	37区	水路完備	西側面最上層(右の1石)	東		④化学工業陶器	
	2	37区	水路完備	西側面最上層(手前の1石)	北	PL-82	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	※建築・建築関連具
	3	37区	西側面石積み状態	東			※建築・建築関連具	戸車・タイル・煉瓦
	4	37区	西側面1段目	東		PL-83	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	
	5	37区	西側面2段目下段	東		PL-84	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等	※建築・建築関連具
	6	37区	西側面2段目上段	東			土管・陶管	
	7	37区	土層断面A-A'	南			⑤その他	
	8	33区	水路完備	東側面最上層調査区北側	西		(2)ガラス製品	①玩具類
PL-56	1	33区	水路完備	東側面最上層	北	PL-85	3.陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品	
	2	33区	東側面石積み状態	西			②文具類	③文具類
	3	33区	東側面石積み状態	西		PL-86	3.陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品	④酒類
	4	33区	掘り方	西			⑤食品類	⑥調味料類
	5	33区	東側面1段目	南		PL-87	3.陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品	⑦喫煙具
	6	33区	榊木・杭組輸出状態	北			※化粧箱	化粧クリーム瓶・ボマー下瓶・化粧水・整髪料瓶
PL-57	1	33区	東側面2段目下段	西		PL-88	3.陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品	
	2	33区	東側面2段目下段	西			※化粧箱	化粧クリーム瓶・化粧水・整髪料瓶
	3	33区	東側面2段目上段	南			⑧化粧品類	化粧水・化粧用品
	4	33・35区	土層断面A-A'	南			⑨薬瓶	一般用薬瓶・医療用薬瓶
	5	33・35区	土層断面B-B'	北			⑩日常生活瓶	白髪・赤毛染瓶・鏡クリーム瓶
	6	33区	水路内遺物出土状態	南		PL-89	3.陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品	③建築類
	7	33区	水路内遺物出土状態	西			④用途不明瓶	
PL-58	1	36区	調査地点	(着工前)	南			
	2	36区	水路完備	西側面最上層	東			
	3	36区	西側面石積み状態	東				
	4	36区	掘り方	東				
	5	36区	西側面1段目	東				
	6	36区	西側面2段目下段	東				
	7	36区	西側面2段目上段	東				
	8	33区・36区	土層断面C-C'	南				
PL-59	1	34区・35区	調査地点	南東				
	2	34区	調査地点	南				
	3	34区	水道管敷設確認	東				
	4	34区	土層断面A-A'	北				
	5	35区	調査地点	北				
	6	35区	水道管敷設確認	東				
	7	35区	水道管敷設確認	東				
	8	35区	土層断面A-A'	北				

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業調査報告書 第726集 『桐生新町水路跡』正誤表

写真図版目次

頁	行	誤	正
x	PL37-6	25区北 塚検出状況 北	24区北 塚検出状況 北
x	PL37-8	25区北 塚床版石・水叩き石 西	24区北 塚床版石・水叩き石 西
xi	PL80	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ①木鉢 ③火具・目地・火鉢類	3.陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑩花器 ⑪榎木鉢 ⑫火具・目地・火鉢類

本文

頁	行	誤	正
5	左17	令和2年1月～3月	令和3年1月～3月
42	右8	なお、重複する14区では陶管敷設が確認されており、この区でも影響が見られた。	14区では陶管敷設が確認されており、この影響が側面石積みに見られた。
125	左5	型紙刷り	型紙摺り
125	左22	型紙刷り	型紙摺り
127	左21	465	475
129	右20	549	594

遺物観察表

頁	挿図・番号	誤	正
198	第116図203	型紙刷り	型紙摺り
198	第116図205	型紙刷り	型紙摺り
200	第118図259	型紙刷り	型紙摺り
200	第118図260	型紙刷り	型紙摺り
201	第119図273	型紙刷り	型紙摺り

写真図版

PL番号	コマ番号	誤	正
PL37	6	25区北 塚検出状況 北	24区北 塚検出状況 北
PL37	8	25区北 塚床版石・水叩き石 西	24区北 塚床版石・水叩き石 西

第1章 発掘調査に至る経緯

通り橋木県佐野市田沼町の田沼上町西交差点に至る道路である。

このうち、起点から若干北上した桐生市本町二丁目・一丁目は桐生新町重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。この指定地域では、平成28年度から令和5年度にかけて伝統的な建造物が並んだ街並みと調和した景観をつくりだすことなどを目的に共同溝敷設での電柱の地中化が計画された。共同溝敷設工事は、本町一丁目北の桐生天満宮前を起点に南へ進んだ本町二丁目の有隣堂付近までの540mが対象となり工事が進められている。

第2節 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る調整

平成29年度

平成29年以前に県土整備部から事業照会が、県教育委員会文化財保護課(以下県文化財保護課と略す)に行われ、平成29年1月12日に桐生土木事務所から、当該地における埋蔵文化財について試掘・確認調査依頼が出された。2月14～17日に文化財保護課による試掘・確認調査が行われ2月21日に文化財保護課の結果が桐生土木事務所へ通知された。

これを受けて桐生土木事務所は11月16日に文化財保護法第94条の通知を桐生市教育委員会に提出し、同日に桐生市教育委員会は県文化財保護課に進達した。これによって群馬県教育委員会教育長は群馬県知事宛に発掘調査を勧告した。

11月20日と12月8日及び28日に桐生市本町の伝建まちなか交流館で県文化財保護課、桐生市教育委員会文化財保護課(以下市文化財保護課)、桐生土木事務所と当事業団の4者は、当該遺跡の発掘調査について協議を行った。11月27日に桐生土木事務所から発掘調査の依頼を受けて、桐生土木事務所と当事業団は、11月30日付けで発掘調査の受委託契約を締結した。12月12日に桐生市本町で市文化財保護課と事業団はプレハブ用地の下見を行い、平成30年1月から発掘調査を開始した。

平成30年度

平成30年5月に県土整備部から事業照会が県文化財保護課に行われた。7月19日、10月11日、29日に桐生市本

町の伝建まちなか交流館で県文化財保護課、市文化財保護課、桐生土木事務所と当事業団の4者で協議を行い、29日は現地確認を行った。

これを受けて桐生土木事務所は、11月14日に県文化財保護法第94条の通知を桐生市教育委員会に提出し、同日に桐生市教育委員会は県文化財保護課に進達した。これによって群馬県教育委員会教育長は群馬県知事宛に遺構が破壊される一部について発掘調査を勧告し、それ以外の部分については慎重工事とした。

11月26日に桐生土木事務所から発掘調査の依頼を受けて、桐生土木事務所と当事業団は12月1日付けで発掘調査の受委託契約を締結し、平成31年1月から発掘調査を開始した。

令和元(平成31)年度

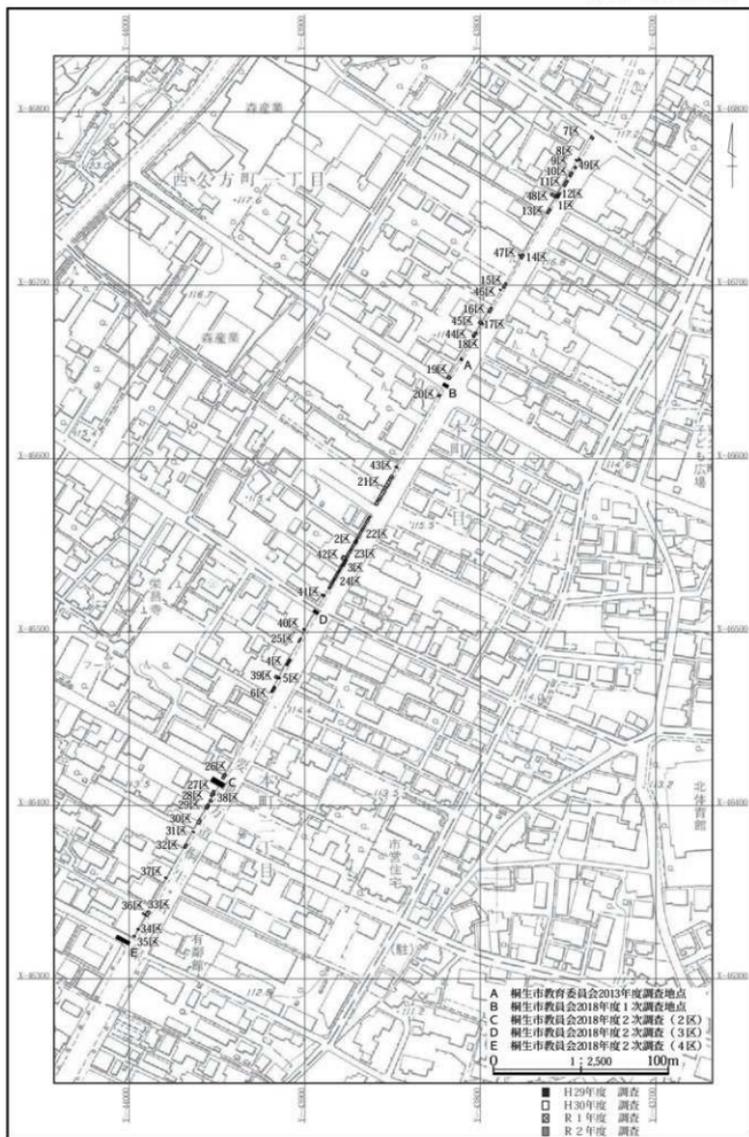
令和元年5月に県土整備部から事業照会が県文化財保護課に行われた。これを受けて桐生土木事務所は8月9日に文化財保護法第94条の通知を桐生市教育委員会に提出し、同日に桐生市教育委員会は県文化財保護課に進達した。これによって群馬県教育委員会教育長は群馬県知事宛に発掘調査を勧告した。

8月27日に桐生土木事務所から発掘調査の依頼を受けて、桐生土木事務所と当事業団は8月29日付けで発掘調査の受委託契約を締結した。27日に桐生市本町の伝建まちなか交流館で県文化財保護課、市文化財保護課、桐生土木事務所と当事業団の4者は協議を行い、8月9日の文化財保護法第94条の通知に追加する発掘事業地について協議した。これを受けて桐生土木事務所は9月9日に文化財保護法第94条の通知を桐生市教育委員会に提出し、同日に桐生市教育委員会は県文化財保護課に進達した。これによって群馬県教育委員会教育長は群馬県知事宛に発掘調査を勧告した。

令和元年9月10日に桐生土木事務所と当事業団は発掘調査の面積増を協議し、10月から発掘調査を開始した。

令和2年度

令和2年5月に県土整備部から事業照会が県文化財保護課に行われた。これを受けて桐生土木事務所は11月9日に文化財保護法第94条の通知を桐生市教育委員会に提出し、同日に桐生市教育委員会は県文化財保護課に進達した。これによって群馬県教育委員会教育長は群馬県知事宛に発掘調査を勧告した。



世界測地系(測地成果2011)(改系)

第2図 調査区位置図(桐生市調査区を含む)

第1章 発掘調査に至る経緯

11月20日に桐生土木事務所から発掘調査の依頼を受けて、桐生土木事務所と当事業団は12月1日付けで発掘調査の受委託契約を締結し、令和3年1月から発掘調査を開始した。

2 発掘調査の経過

発掘調査は、平成29年度から令和2年度にかけての4か年に各年度2か月から3か月の期間で実施した。

平成29年度は、平成30(2018)年1月～2月の2か月間にならって発掘調査を実施した。この年度は6カ所が調査対象になったが、1カ所の調査期間が長引くと隣接地の居住者の生活に支障が生じるため、1カ所の調査期間を月曜日から金曜日までの一週間で完了させる工程を組み実施した。

現地での発掘調査は諸準備を行った後、1月15日より1区の表土掘削より開始し、2月23日に6区の埋め直しを行い、2月28日まで遺構図や出土遺物などの基礎整理、諸作業を行って完了した。

調査は北側の対象地より進め、順次1区、2区、3区～6区と呼称した。各区の調査は1区が1月15日～19日、2区が1月22日～26日、3区が1月29日～2月1日、4区が2月5日～9日、5区が2月12日～16日、6区が2月19日～23日に実施した。

1区の調査を例にとると下位のような工程で実施している。2区から6区についてもほぼ同様である。

1月15日(月)アスファルト除去、水道管・ガス管などの埋設物に留意しながら水路内の掘削を実施。調査区の周囲は安全柵で囲んであるが、さらに安全対策のため足場板とコンパネで覆った。

1月16日(火)昨日検出した水路側面の礫を洗浄し写真撮影を行うとともに立面図、断面図、土層堆積図などの記録をとる。

1月17日(水)遺構図測量を継続するとともに出土遺物の取り上げを行い、底面の検出に努める。

1月18日(木)完掘状態の写真撮影、遺構図の残りを測量。

1月19日(金)埋め直し、アスファルト舗装による原状復旧を行い1区の調査を終了させる。

なお、1区では水路側面を構築していた石積みが崩壊した状態であったため、石積みの調査が省略されたが、石積みが残る調査区では上面より順次平面図測量を

行った。石積みは3段から4段に積み重ねられ、段ごとに平面図測量、取り上げを順次繰り返し行った。なお、水路側面を構築している礫については将来桐生市が復元を行うことができるように調査区ごとに番号を記入し、市文化財保護課へ引き渡した。なお、調査対象地外へ入り込むような礫は取り上げると埋め直しに支障が生じる可能性があるため現地に残してある。

平成30年度は、平成31年1月～2月の2か月間にわたって発掘調査を実施した。この年度は14カ所が調査対象になった。調査区は前年度から継続して番号を付与し、北から順次7区、8区、9区・・・20区とした。

平成30年度は2か月間で14カ所が調査対象となったため、隣接する複数の調査区を同時に進めることとしたが、各調査区の調査は前年度と同様に月曜日～金曜日の一週間で終了させる工程で行った。なお、諸事情により北からの調査ではなく、南寄りの17区・18区より調査を開始した。

現地での発掘調査は諸準備を行った後、1月14日より17区・18区の表土掘削より開始し、2月22日に19区の埋め直しを行い、2月28日にまで遺構図や出土遺物などの基礎整理、諸作業を行って完了した。

各区の調査は、17区・18区(1月15日～18日)、12区・13区・14区(1月21日～25日)、15区・16区(1月28日～2月1日)、10区・11区(2月4日～8日)、7区・8区・9区(2月11日～15日)、19区・20区(2月18日～22日、20区は20日に終了)に行った。水路側壁を構築している礫については前年度と同様に市文化財保護課へ引き渡している。

令和元年度は、令和元年10月～12月の3か月間にわたって発掘調査を実施した。この年度は15カ所が調査対象になった。調査区は前年度から継続して番号を付与し、21区から35区までを調査した。

なお、各区の調査期間は原則一週間を予定したが、この年度の21区・22区・23区・24区は、昨年度までの調査区が全長1～3mと短かったのに対して、11～19mと長いため2～3分割で調査を実施し、9日間から23日間と一週間を超える期間を要している。また、調査は北の調査区から順次開始したが、途中の26区から29区は調査の最終段階に実施した。

現地での発掘調査は諸準備を行った後、10月4日に21

区から35区全調査区の調査範囲に対してアスファルト切断を行った。各区の調査期間は次のとおりである。

21区が10月7日～11月1日の19日間、22区が10月18日～11月7日の23日間、なお、22区は北・中・南の3区画に分割して実施した。北が11月8日～21日、中が10月21日～11月1日、南が11月5日～7日、23区が11月5日～15日の9日間、24区が11月11日～21日の9日間、25区が11月18日～22日、30区・31区・32区が11月25日～29日、33区が12月2日～6日、34区・35区は33区と同日にアスファルトと表土を掘削したが、表土下で危険埋設物(光ケーブル)を確認したため調査を実施せず埋め戻した。27区・28区・29区が12月9日～13日、26区を12月16日～20日に実施したのち、12月28日まで遺構図や出土遺物などの基礎整理、諸作業を行って完了した。水路側壁を構築している礫と石橋については一昨年度、前年度と同様に市文化財保護課へ引き渡している。

令和2年度は、令和2年1月～3月の3か月間にわたって発掘調査を実施した。この年度は14カ所が調査対象になった。調査区は前年度から継続して番号を付与したが、調査が南側の対象地から開始するため南から順次36区、37区、38区・・・49区とした。

現地での発掘調査は諸準備を行った後、1月12日より36区・38区の表土掘削より開始し、3月9日に49区の埋め戻しを行い、3月31日にまで遺構図や出土遺物などの基礎整理、諸作業を行って完了した。

各区の調査は、最も南に位置する36区から開始し、順次北へ向けて進める予定であったが、諸事情により36区から42区の間は調査区を前後しての工程が組まれた。

なお、この年度の調査区は比較的狭小な箇所が多く一週間の予定での工程を組んだが2日から4日間で終了する箇所があり、全体として調査が短縮する結果となった。

3 整理作業の経過と方法

整理作業は、令和4年4月1日から令和5年3月31日に、延べ13か月間、群馬県桐生土木事務所の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。対象となった発掘調査時に作成した遺構図面及び遺構写真などの調査記録は膨大な量になり、出土遺物は収納コンテナ41箱に及んでいる。

まず、4か年にわたって発掘調査が実施されていたため各種記録類の確認を行い、漏れのないことを確認した。その後、出土遺物について基本的な分類・仕分け、登録、集計などの作業を実施した。特に今回の調査対象地は戦後まで使用されていた水路のため、現代のものが多く含まれており、こうしたものを選別する作業に時間を要した。分類、仕分けした遺物は石器・石製品と陶磁器類に分類し、陶磁器類は接合・復元を行った後に報告書に掲載する遺物の選別を行った。掲載遺物については写真撮影、図化、浄書作業を行った。なお、金属器や金属製品など保存処理を必要とする遺物については発掘調査時に持ち込まれた。今年度さらに腐食防止処理と分類、選別を行い、掲載遺物については陶磁器や石製品と同様に写真撮影と図化を進めている。図化した遺物については個々の遺物ごとに観察を行い、一覧表にして掲載した。遺構図については必要な遺構図を選別した後に確認・点検、修正後デジタルでの浄書を行った。

発掘調査に撮影した写真類は膨大な数量があるため、報告書に掲載した遺構図を基に選択して掲載した。

こうした一連の作業と平行して本文原稿等の執筆作業も進めた。

報告書に掲載するために選択した遺構図、遺物図及び遺構写真、遺物写真と本文原稿とをレイアウトした後、デジタル編集を行い、報告書の印刷を実施できる状態まで仕上げた。

なお、本報告書の印刷は令和5年度に実施している。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

桐生新町水路跡は、桐生市街地北部の桐生天満宮と県立桐生工業高等学校の境界から、主要地方道桐生田沼線の西縁を通り、本町二丁目と三丁目の境界付近、有鄰館の南西までほぼ直線状に所在する。水路の起源は桐生川であり、桐生市梅田町一丁目の県立桐生女子高等学校跡付近にある取水口から、かつては本町六丁目まで続き田新川に合流していた。本町通り沿いの桐生新町水路跡は廃絶したが、その他分岐した水路の大部分は現在でも活用されている。水路跡はかつて桐生新町の街並みの一部として桐生新町重要伝統的建造物群保存地区(平成24(2012)年選定)と一体となって存在、利用されていたが、昭和40(1965~79)年代には各地で埋め立てが進み、現在は主要地方道桐生田沼線の歩道下に埋没し、その面影は写真や古地図に痕跡を残すのみとなっている。

桐生市は群馬県の東部に位置し、人口比で県内5番目に大きな都市である。市の範囲は東側の旧桐生市とみどり市を挟み西側の旧新里村と旧黒保根村におおきく二分される。『令和3年度群馬県市町村要覧』によると、産業別人口構成は第一次産業が2.5%、第二次産業が36.0%、第三次産業が61.6%である。かつては「西の西陣、東の桐生」と呼ばれ織物業が盛んな地域であった。市街地には「ノコギリ屋根」と呼ばれる採光に工夫を凝らした織物工場建群や蔵、屋敷などの歴史的建造物が数多く残されている。

本遺跡が所在する桐生市街地は、足尾山地の南西縁に位置し、北西から南北方向に流れる渡良瀬川の段丘面と渡良瀬川に接する扇状地に立地し、これらは中部沖積地と呼ばれる。渡良瀬川の段丘は、JR桐生駅周辺の宮前町や元宿町に見られ、相生面に比定される。扇状地は桐生川扇状地と呼ばれ足尾山地の根本山(1199m)を水源とする桐生川により形成され、桐生川流域の最下位段丘面に連続している。扇状地上の段丘は渡良瀬川扇状地の2段の段丘面と現河床面の中間にある段丘、渡良瀬川河床との比高は7~10m、桐生川の河床面との比高は3~5mとされる⁽⁸¹⁾。

桐生川扇状地は、足尾山地起源の砂礫からなる河川堆積物を主とする砂礫層からなり、桐生市東久方町三丁目の桐生市北体育館で地下8.2m、JR桐生駅南東の駅南ハイツでは地下15.2mに達する。また相生面を構成する桐生市浜松町二丁目新川樋門付近では地下8.0mまで砂礫層がみられる。

第2節 歴史的環境

1 桐生地域の発掘調査

桐生地域では、昭和20年代前半(1945~49年)頃から、園田芳雄・周東隆一・相沢忠洋ら地元の考古学研究者による発掘調査が小規模ながら活発に行われていた。昭和45(1970)年頃までは、地元考古学研究者の指導の下、県立桐生高等学校・桐生女子高等学校(現県立桐生高等学校)、県立桐生南高等学校(現県立桐生清桜高等学校)などの生徒による発掘調査も行われていた。しかし、近年では市域での大規模開発に伴う発掘調査は行われておらず、小規模な発掘調査のみとなっている。

2 旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては、伊豆田遺跡(第4図60)・普門寺遺跡(第4図66)などの遺跡も早くからその存在を知られている。近隣地域で最も重要な遺跡は、みどり市(旧新田郡笠懸町)の史跡岩宿遺跡(第4図範囲外)以後図番号がないものは範囲外)である。相沢忠洋により昭和21(1946)年に発見され、明治大学により昭和24(1949)年発掘調査された史跡岩宿遺跡は、日本列島における旧石器時代の存在を証明した遺跡である。その出土遺物は重要文化財に指定されている。

3 縄文時代

縄文時代の遺跡としては、不動穴遺跡・岡平遺跡(第4図12)・金竜台遺跡(第4図14)・伊豆田遺跡(第4図60)・三島台遺跡・童子原遺跡などの遺跡も存在するが、考古学史上重要な遺跡は普門寺遺跡(第4図66)と千瀬谷



第3圖 道跡周辺地形分類圖(国土地理院 1/25,000地形圖「大間々」「香場」「桐生」「足利北部」圖幅を編集・加工)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

戸遺跡である。普門寺遺跡からは早期の押型文土器が出土している。この押型文土器は、現在、他地域の出土遺物から「桶沢式」と設定されているが、発掘調査と型式設定は「普門寺式」の方が早い。千瀬谷戸遺跡は、晩期千瀬式の標識遺跡である。十数次にわたる発掘調査で多量の土製耳飾が出土しており、その一部は重要文化財に指定されている。

4 弥生時代～古墳時代

弥生時代～古墳時代の遺跡は中里後遺跡(第4図101)・平井3遺跡(第4図26)などがあるが、明らかに縄文時代から遺跡数が減少している。しかも古墳は、旧桐生市内では43基、桐生新町周辺では6基と数少ない。今回の調査地に最も近い古墳は本町六丁目に存在する浄雲寺間山塚古墳である。この古墳は『群馬県古墳総覧』に円墳との記載があるが、詳細は不明とされている。

5 奈良・平安時代

律令制下において、群馬県域はほぼ上毛野国(和銅六(713)年に上野国と改称)にあたり、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐佐・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(和銅四(711)年に多胡郡設置で14郡)。本遺跡は山田郡に属する。山田郡には「山田・大野・箇田・真張」の4郷があり、本遺跡を含む桐生新町周辺は山田郷または大野郷に比定されている。なお、山田郡衙については以前「古水」地名が残る太田市緑町付近に想定されていたが、発掘調査の成果からは、やや東の東今泉町付近の太田市乗前遺跡、鹿島浦遺跡周辺に想定されている。この頃には式内社である美和神社(第4図38の南側隣接)・賀茂神社がすでに存在していたとみられる。

奈良・平安時代の遺跡数は古墳時代から増加している。代表的な集落遺跡としては、金竜台遺跡(第4図14)・芳ヶ入遺跡(第4図91)・三島台遺跡・童子原遺跡などがあり、童子原遺跡・清水西遺跡・大門遺跡(第4図67)・熊ノ沢遺跡(第4図64)では製鉄や鍛冶が盛んであったことが遺構や遺物からわかっている。また、菱町・堤町地域に奈良時代以降の須恵器生産を行った須恵器窯跡が多いこともこの時代の特徴である。須恵器窯としては上小友窯跡(第4図73)、山ノ越遺跡(第4図84)、宿鳥遺跡(第4図

88)などが知られている。このことは古墳時代に操業が始まった太田金山古窯群だけではなく山田郡、新田郡、邑楽郡への須恵器供給が不足するため、この地域での須恵器生産が始まったことが想定される。

6 中世

天仁元(1108)年の浅間山の噴火により上野国内の平野部に降下したAs-Bテフラによって耕地の荒廢が進んだとみられる。

この前後、上野国内の各地では荘園立荘の動きが活発になる。山田郡内においては久寿三(1156)年に現太田市毛里田地区に箇田御厨、建久三(1192)年頃に現桐生市川内地区に須永御厨、延文五(1360)年頃に現桐生市広沢地区に広沢御厨が立荘されている。また、保元二(1157)年立荘の太田市新田地区中心の新田荘には広沢郷も含まれている。

中世初頭には『平家物語』や『吾妻鏡』にその名が見える切字六郎(桐生六郎)ら桐生氏が桐生地域を支配したと考えられるが、寿永二(1183)年の六部謀殺後については詳細不明である。なお、『新居文書』(『群馬県史』資料編6所収)の貞和五(1349)年の文書に桐生又六法師行阿・桐生次郎三郎圓光、同じく『新居文書』(『桐生市史』上所収)の康正元(1455)年の文書に桐生次郎左衛門尉の名が見える。桐生氏は後述する桐生佐野氏の桐生入部により新居氏に改称したと考えられる。

享徳二(1453)年に藤原氏北家秀郷流の佐野氏の一族である又次郎(直綱、氏綱)が鎌倉方足利成氏から桐生郷を与えられ、桐生佐野氏が成立した。須藤聡によると、近世資料ではあるが、『桐生老談記』には桐生元義に子がないため、佐野圓綱の二男豊綱を養子とし、豊綱は永永九(1402)年に没したとあり、豊綱の実在性など疑問があるものの室町時代前期には桐生氏と佐野氏との密接な関係があり、桐生佐野氏の成立は佐野氏による桐生氏名跡の継承と考えられるという。

その桐生佐野氏は、天正元(1573)年に重綱(親綱)が由良(横瀬)成繁に敗れ桐生領¹³⁾は由良氏支配となるといえるが、元亀元(1570)年と推定される由良成繁宛足利家国書状に「佐野大炊助(桐生佐野重綱)一跡安堵之事」とあり(『群馬県史』資料編7)、桐生佐野氏没落と由良氏による桐生領支配は数年早い可能性がある。重綱の子の桐生又

次郎は寛永元(1624)年に甲府藩主徳川忠長に仕えるが、その後の動向は不明である。また、重綱の兄弟が綱は小弓公方足利頼淳の老老となり、子孫は喜連川藩士となった。

また、広沢郷では高階氏の流れを汲む彦部信勝が永禄三(1560)年に関白近衛前嗣に随従し京より下り、翌永禄四(1561)年に由良成業より広沢郷内千足の地を与えられ、居館を構えた。現在の重要文化財産部家住宅・群馬県指定史跡彦部氏屋敷は、のちに下広沢村名主となった彦部氏のものである。

中世の遺跡としては、桐生佐野氏および由良氏の居城であった桐生城跡(柄杓山城跡、第4図6)をはじめ、梅原館跡(第4図17)・小倉砦(第4図55)・細川内膳屋敷(内膳屋敷、第4図70)・愛宕山物見山(第4図28)・因幡屋敷(第4図46)・勘解由屋敷(第4図45)・今井宿の砦(第4図47)・新居屋敷・丸山砦などの城館が多く確認されている。

7 近世

本水路跡を含む桐生新町は、天正十八(1590)年の由良国繁の常陸国牛久保封後、徳川家康の代官大久保長安の手代大野八右衛門尊吉により翌天正十九(1591)年に久方村・荒戸村の一部を割き天満宮(第5図イ)を起点として創設されたという。当初は荒戸新町であったが、寛文十三(1673)年の「寛文十三年新町水帳」には「桐生領新町」とあり、この頃までには桐生(領)新町と呼ばれていた。桐生新町創設期の住民には桐生佐野氏や由良氏などの旧臣が帰農した者が多い。茂木(栗田)氏・山越(玉上)氏・飯塚氏・岩下氏・古木氏・新居氏・小林氏・書上氏などがこれにあたり、久方村(下久方村)の桐生佐野氏旧臣原原氏からはのちに初代桐生市長前原良太郎が出ている。

桐生新町は初め天領であったが、寛文元(1661)年に館林藩領(徳川綱吉)、天和二(1682)年に旗本領(神尾氏)、寛保二(1742)年に天領、宝暦十二(1762)年に旗本領(神尾氏)、安永八(1779)年に出羽松山藩領(酒井氏、陣屋は第4図5)となった。出羽松山藩は出羽庄内藩の分家であり、3代藩主酒井忠休が寺社奉行・若年寄等を務めた功により上州領5000石を増加されたものである。

桐生新町は在郷町として繊維産業を中心に栄え、享保七(1722)年には越後屋上州店(現三越桐生)も置かれるま

になった。なお、「西の西陣、東の桐生」と称される淵源となったのが、京都西陣からの高機技術の伝播は元文三〜四(1738〜39)年である。高機技術の導入により、それ以前から「新田山絹」と呼ばれ、特産品として知られていた桐生産絹織物は質・量とも発展し、延享元(1744)年には西陣高機織屋中より桐生紋紗綾織の移入差し止め願いが出され、移入が制限されるまでに至った。

桐生新町の繁栄を示すものとして、見立番付がある。見立番付「関東市町定日案内」では、上州桐生市は「市の方」大関にあり、以下、最上段(幕内相当)は関隘上州前橋市、小結上州大間々市、前頭筆頭野州宇都宮、同2枚目野州栃木市、同3枚目水戸太田市、同4枚目武州八王子市、同5枚目武州岩附市、同6枚目野州足利市、同7枚目上州館林市、同8枚目上州高寄市と続いている(このうち、大間々市との間には享保十六(1731)年の嗣村立替や宝暦四(1754)年の大間々々六郡市禁止、足利市との間には天保年間(1830〜44年)以降の足利出市一件などの問題が発生している)。別の見立番付「関八州田舎分限角力番附」では、最上段(幕内相当)「西の方」三人目(小結相当)に上州桐生佐野吉右工門、四人目(前頭筆頭相当)に野州足利石井五右工門(桐生新町買次商)の名が見え、豪商の繁栄ぶりが窺える。

町の繁栄を背景に各種興行も盛んであった。淨瑠璃や相撲などが頻繁に行われており、文政八(1825)年と文久三(1863)年にはカメル(駱駝)見世物が行われ、評判となっている。相撲興行では、慶応元(1865)年に江戸相撲の大関鬼面山谷五郎(のち横綱免許(13代))・不知火光右工門(横綱免許(11代))、関隘藩幕久五郎(のち横綱免許(12代))らを揃えた興行が行われていることが特筆される。

8 近代

戊辰戦争では出羽松山藩が奥羽越列藩同盟に加わったため、桐生陣屋の藩士は明治元(1868)年8月に謹慎・武器引渡し、9月に伊勢崎藩預けとなった。その後、桐生新町は岩鼻県、群馬県、栃木県と管轄が変わり、最終的に群馬県管轄となるのは明治九(1876)年である。明治二十二(1889)年には桐生新町・安楽土村・新宿村・下久方村・上久方村平井が合併し桐生町となり、大正十(1921)年には桐生市となった。その後、昭和八(1933)年には境

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

野村、昭和十二(1937)年に広沢村を合併している(現在までに梅田村・相生村・川内村・新里村・黒保根村・毛里田村大字吉沢字唐沢の一部・栃木県愛村・栃木県田沼町大字飛騨字入飛騨も合併)。

明治期以降も織物産業を中心に栄え、桐生は東毛地域の中心都市であった。明治二十九(1896)年には町立桐生織物学校(官立桐生高等染織学校・官立桐生高等工業学校・官立桐生工業専門学校などを経て現国立大学法人群馬大学理工学部)が設立され、人材の育成も図られている。官立桐生高等工業学校は、昭和十八(1943)年の官立前橋医学専門学校の設立まで群馬県内唯一の高等教育機関であった。

鉄道網も昭和初期までには整備されている。明治二十二(1889)年の両毛鉄道(日本鉄道・国鉄を経て現JR両毛線)を皮切りに、明治四十四(1911)年に足尾鉄道(国鉄足尾線を経て現わたらせ渓谷鐵道)、大正二(1913)年に東武鉄道、昭和三(1928)年に上毛電気鉄道(西桐生駅、第4図43・44)と次々に桐生町内に開業し、現在も群馬県内最多の4社線が営業している。また、この時期に造られた建造物の多くが、国の有形登録文化財に登録されている。

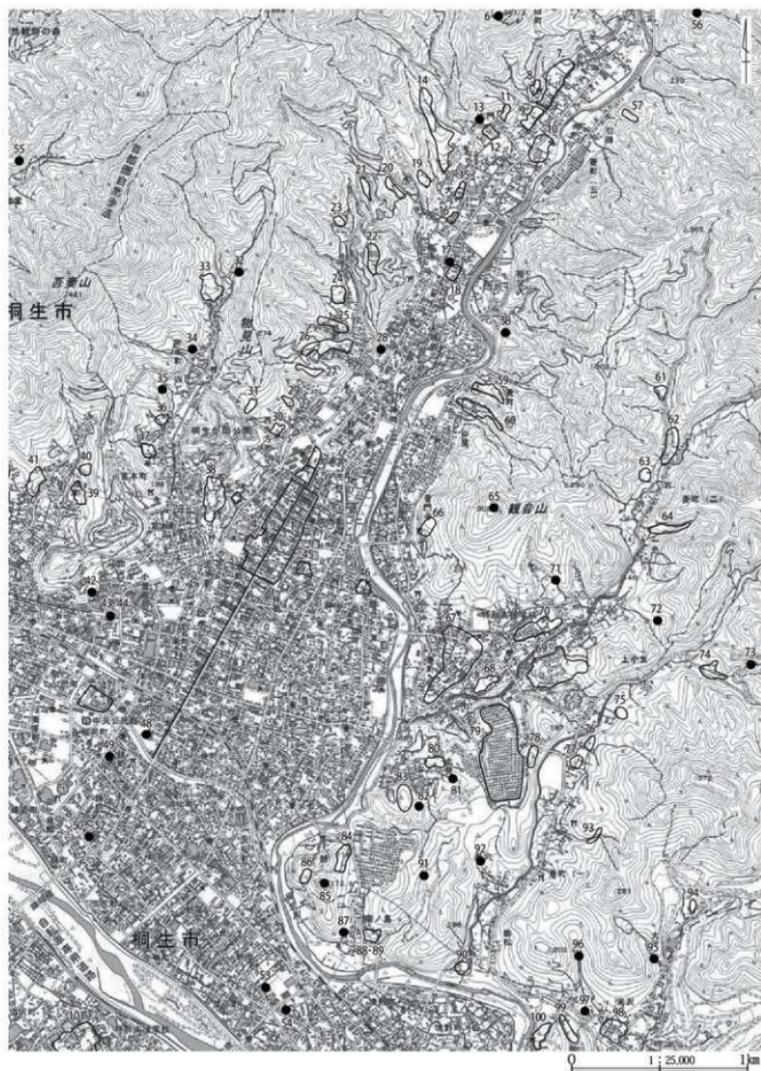
なお、桐生新町については、国立歴史民俗博物館が1993年度から1995年度にかけて実施した、共同研究「在郷町の成立と展開—桐生新町の分析—」が多角的な方面から現地及び文献についての調査・研究が実施され、2002年に『国立歴史民俗博物館研究報告』第95集として報告されている。

また、今回発掘調査の対象となった本町一丁目・二丁目と天神町一丁目の一部、約13.4haは「桐生新町重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、そのうち建築物180棟、工作物173件、環境物件(樹木)8本(令和4.7.11日現在)が保存対象とされ、35棟の建物が国登録有形文化財、1件の建物が県指定有形文化財、3件の建物が市指定有形文化財に登録及び指定されている。

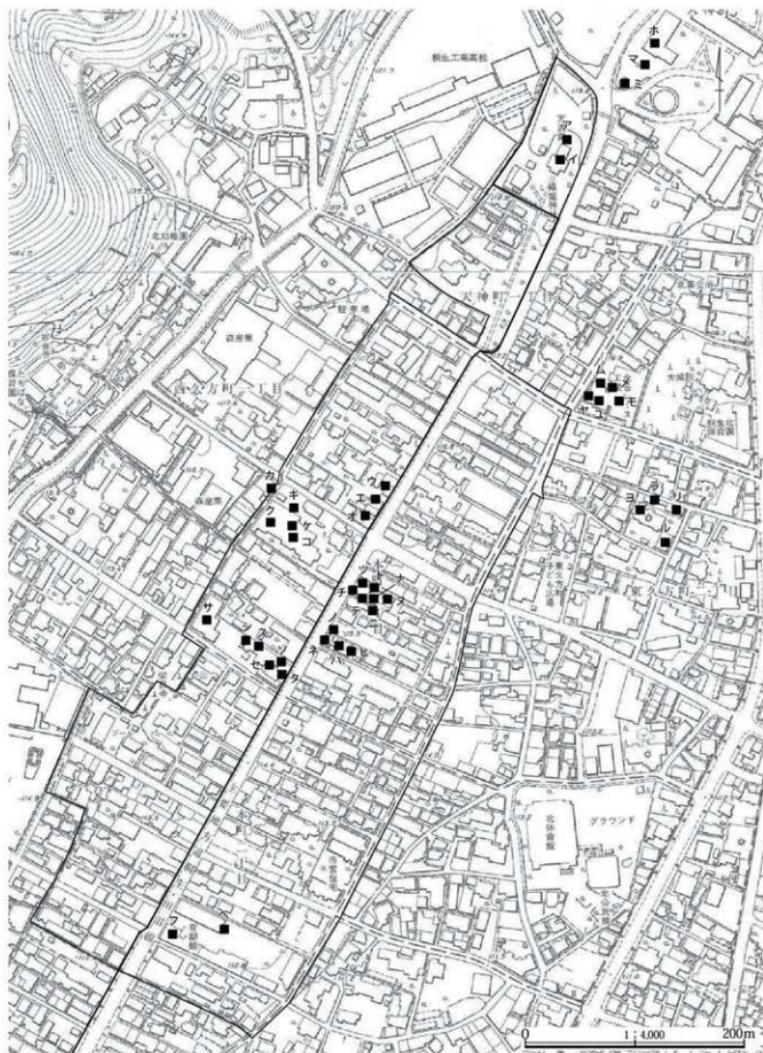
註

註1 従来桐生川流域とされてきた桐生市街地について、桐生市現町二丁目の旧丸山山下交番付近から東三丁目の桐生市立清流中学校の間は渡良瀬川の流路であった可能性が指摘されている(宮崎重雄ほか2020・2021・2022)。

註2 『桐生領』の初見は中世末の北条氏邦判物(年未詳)。近世桐生領54ヶ村は以下のとおり。山田郡桐生新町、荒戸今泉村(のち今泉村)、荒戸村松村(のち村松村)、荒戸堤村(のち堤村)、荒戸本宿村(のち本宿村)、新宿村、下久方村、上久方村、二渡村、浅沼村、高沢村、山地村、境野村、下広沢村、中広沢村、上広沢村、一本木村、東小倉村、西小倉村、下仁田山村、中仁田山村、上仁田山村、名久木村、高津戸村、如來堂村、天王宿村、下新田村、熊町村、勢多郡猿畑村、水沼村、下田沢村、上田沢村、楯沢村、八木原村、下野国梁田郡(のち足利郡)下菱村、上菱村、小友村(以上現桐生市)、山田郡上新田村(のち大間々村)、桐原村、二軒在家村、小平村、浅原村、長尾根村、塩原村、勢多郡塩沢村、下神梅村、上神梅村、萩原村、花輪村、小中村、神戸村、座間村、沢入村、小夜戸村(以上現みどり市)。現桐生市のうち旧勢多郡新里村、旧山田郡毛里田村大字吉沢字唐沢の一部、旧栃木県安藤郡田沼町大字飛騨字入飛騨は含まない。



第4図 周辺遺跡(国土地理院1/25,000地形図「大間々」「番場」「桐生」「足利北部」図幅を編集・加工)



第5図 国県市指定文化財(建造物)重要伝統的建造物群保存地区 槻生新町重要伝統的建造物群保存地区

第1表 周辺道跡一覧表

道 跡 名	所在地	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良	中 世	近 世	近 代	種 別	文 献
1 桐生新町水路跡	桐生市本町一丁目、二丁目								○	水路	本報告書・14・17~21・51
2 桐生新町水路跡北	桐生市天神一丁目								○	水路	51
3 桐生新町水路跡南	桐生市本町三丁目、四丁目、五丁目、六丁目								○	水路	51
4 桐生新町重要伝統的建造物群保存地区	桐生市天神町一丁目、本町一丁目、二丁目								○	建造物、工作物、環境物件	29~33・56
5 桐生陣屋	桐生市西久方町二丁目								○	城跡	53
6 桐生城跡(桐杓山城跡)	桐生市梅田町一丁目								○	城跡	53・54
7 御屋敷	桐生市梅田町一丁目								○	城跡	57
8 城ノ前道跡	桐生市梅田町一丁目		○						○	散布地、城跡	57
9 小谷道跡	桐生市梅田町一丁目								○	城跡	57
10 城石ノ道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地	57
11 南道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地、城跡	57
12 西平道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地、集落、城跡	10
13 基取寺山道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地、城跡	57
14 金堂台道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地、集落	35・36
15 下大門道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地	57
16 大浜道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地	57
17 梅原道跡	桐生市梅田町一丁目								○	散布地、集落、城跡	7・53・54
18 梅原道跡	桐生市梅田町一丁目								○	城跡	57
19 天神山道跡	桐生市梅田町一丁目									散布地	57
20 前沢道跡	桐生市梅田町一丁目									散布地	57
21 森農園1道跡	桐生市平井町								○	散布地、集落	42
22 森農園2道跡	桐生市平井町								○	散布地、集落	8
23 平井5道跡	桐生市平井町									散布地	57
24 平井1道跡	桐生市平井町								○	散布地	57
25 平井2道跡	桐生市平井町									散布地	57
26 平井3道跡	桐生市平井町								○	散布地、集落	22
27 平井4道跡	桐生市平井町								○	散布地	57
28 愛宕山物見山	桐生市平井町								○	城跡	53・54
29 法経寺裏道跡	桐生市西久方町一丁目									散布地	57
30 旧前原病院前道跡	桐生市西久方町一丁目									散布地	57
31 旧前原病院裏道跡	桐生市宮本町四丁目									散布地	57
32 奥村松2道跡	桐生市宮本町四丁目									生産	34
33 奥村松1道跡	桐生市宮本町四丁目								○	散布地、生産	34
34 奥村松3道跡	桐生市宮本町四丁目								○	生産	57
35 奥村松4道跡	桐生市宮本町四丁目								○	生産	57
36 養老院北道跡	桐生市宮本町四丁目									散布地	34
37 村松道跡	桐生市宮本町四丁目									生産	44
38 桐生が岡公園道跡	桐生市宮本町三丁目								○	散布地、集落	23・27・52
39 水道山裏1道跡	桐生市堤町一丁目									散布地	57
40 水道山裏2道跡	桐生市堤町一丁目									散布地	57
41 堤1道跡	桐生市堤町一丁目								○	散布地	57
42 水道山道跡	桐生市堤町一丁目								○	散布地	57
43 上毛電気鉄道西桐生駅駅舎	桐生市宮前町二丁目								○	建造物	56
44 上毛電気鉄道西桐生駅駅舎ホム一ム上屋	桐生市宮前町二丁目								○	建造物	56
45 助解山屋敷	桐生市東久方町三丁目								○	城跡	53・54
46 因幡屋敷	桐生市東町三丁目								○	城跡	53・54
47 今井谷の砦	桐生市巴町一丁目								○	城跡	53・54
48 浄蓮寺間山塚古墳	桐生市本町六丁目								○	古墳	55
49 十ヶ塚古墳(桐生市1号古墳・稲荷塚古墳)	桐生市御町一丁目									古墳	23・55
50 三ツ塚古墳	桐生市御町二丁目								○	古墳	23・55
51 三ツ塚古墳(桐生市2号古墳)	桐生市御町二丁目								○	古墳	23・55
52 三ツ塚古墳(桐生市3号古墳)	桐生市御町二丁目								○	古墳	23・55
53 稲荷塚古墳(桐生市4号古墳)	桐生市御町三丁目								○	古墳	9・11・23・55
54 戦争稲荷塚古墳(桐生市6号古墳)	桐生市新宮三丁目								○	古墳	23・55
55 小倉物	桐生市川内町一丁目								○	城跡	53・54
56 榎谷3道跡	桐生市堤町五丁目								○	城跡	57
57 引田道跡	桐生市堤町五丁目								○	散布地、集落	47
58 小丸山道跡	桐生市堤町五丁目								○	城跡	57
59 金鼻道跡	桐生市堤町四丁目								○	散布地	47
60 伊豆田道跡(東光台道跡)	桐生市堤町四丁目								○	散布地、集落	4・8・44・46・47
61 竹山道跡	桐生市堤町二丁目								○	生産	57
62 橋詰道跡	桐生市堤町二丁目								○	生産	37
63 小沢道跡	桐生市堤町二丁目								○	生産	57
64 熊ノ沢道跡	桐生市堤町二丁目								○	生産	57

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	種別	文献
65	雷電山遺跡	桐生市菱町三丁目									○	城跡	57
66	替門寺遺跡	桐生市菱町四丁目	○	○	○							散布地、集落	26・28・33・38・40・41・44・47・52
67	大門遺跡(上平遺跡)	桐生市菱町三丁目	○	○	○							集落、生産	1・3・5・6・8・9・39・45・47
68	上平遺跡	桐生市菱町三丁目	○	○	○							散布地	57
69	住吉遺跡(黒川遺跡)	桐生市菱町二丁目	○	○	○							集落、城跡、社寺、墓	43・44・47
70	福山内原屋敷(内原屋敷)	桐生市菱町二丁目								○		城跡	12・13・53・54
71	泉皇院前	桐生市菱町二丁目										生産	47
72	山分ノ遺跡	桐生市菱町二丁目										生産	47
73	上小友遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	24・25・47
74	小糸五郎遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
75	楯ノ入遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
76	中小友遺跡	桐生市菱町一丁目										散布地、生産	57
77	中 small 友2遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
78	八王子遺跡	桐生市菱町二丁目										散布地、集落	47
79	十貫山遺跡	桐生市菱町二丁目								○		散布地、その他	50
80	広見公園遺跡	桐生市菱町三丁目										散布地	57
81	小谷3遺跡	桐生市菱町四丁目										生産	57
82	小谷1遺跡	桐生市菱町三丁目										散布地、生産	57
83	小谷2遺跡	桐生市菱町三丁目										散布地	57
84	山ノ越遺跡(山腰遺跡)	桐生市菱町三丁目	○	○	○							散布地	47-49
85	浅間山宮	桐生市菱町一丁目								○		城跡	53・54
86	高山1遺跡	桐生市菱町一丁目									○	城跡	57
87	高山2遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
88	宿島遺跡(宿ノ島遺跡)	桐生市菱町一丁目										散布地、古墳	47-49
89	宿島古墳	桐生市菱町一丁目										古墳	55
90	曲花2遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
91	芳入遺跡	桐生市菱町一丁目										集落、生産	15
92	無敵遺跡	桐生市菱町一丁目	○	○	○							生産	47
93	曲花遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	47
94	米沢3遺跡	桐生市菱町一丁目										散布地	57
95	高沢遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
96	女沢1遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
97	女沢2遺跡	桐生市菱町一丁目										生産	57
98	米沢1遺跡	桐生市菱町一丁目										散布地	57
99	棚田1遺跡	桐生市菱町一丁目										散布地	44・47
100	棚田2遺跡	桐生市菱町一丁目										散布地	57
101	中半後遺跡	桐生市菱町一丁目										散布地、集落	9-12・16

第2表 国県市指定文化財(建造物)一覧

ア	名称	所在地	指定登録区分		文献
			重要伝統的建造物群保存地区	市指定	
ア	大瀧宮本社春日社	桐生市天神町一丁目		市指定	桐生市ホームページ
イ	大瀧宮社殿	桐生市天神町一丁目		県指定	群馬県2022「群馬県近世寺社総合調査報告書」神社編
ウ	森家住宅石蔵(旧納蔵)	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
エ	森合資会社事務所	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
オ	森合資会社石蔵	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
カ	無敵館長瓦葺一(但北川織物工場長瓦葺)	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
キ	無敵館長瓦葺二(但北川織物工場長瓦葺)	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ク	無敵館上原(但北川織物工場上原)	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ケ	無敵館蔵(但北川織物工場蔵)	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
コ	無敵館事務所(但北川織物工場事務所)	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
サ	旧曾我織物工場	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
シ	曾我家住宅新座敷	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ス	曾我家住宅土蔵	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
セ	曾我家住宅稲荷社	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ソ	曾我家住宅土庫	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
タ	曾我家住宅門	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
チ	中村家住宅門	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ツ	中村家住宅店舗	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
テ	中村家住宅浴場	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ト	中村家商店文庫蔵	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ナ	中村家商店新座敷	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ニ	中村家商店石蔵	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ノ	中村家住宅稲荷社	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ネ	平田家住宅日仏館	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース
ヌ	平田家住宅日仏蔵	桐生市本町一丁目		国登録	文化庁国指定文化財等データベース

名称	所在地	指定登録区分	文獻
ハ 半田家住宅主屋	桐生市本町一丁目	重要伝統的建造物群保存地区	国登録 文化庁国指定文化財等データベース
ヒ 半田家住宅土蔵	桐生市本町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
ニ 久野本仏堂及び石蔵	桐生市本町二丁目		市指定 桐生市ホームページ
ヘ 八坂野籠(有蓋館)	桐生市本町二丁目		市指定 桐生市ホームページ
ホ 群馬大学工学部同窓記念会館 (旧桐生高等染織学校本館・講堂)	桐生市天神町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
マ 旧桐生高等染織学校正門	桐生市天神町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
ミ 群馬大学工学部守衛所 (旧桐生高等染織学校門衛所)	桐生市天神町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
ム 旧金谷家住宅蔵	桐生市東久方町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
メ 旧株式会社金芳織物工場染色場	桐生市東久方町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
モ 旧株式会社金芳織物工場製履工場	桐生市東久方町一丁目		国登録 文化庁国指定文化財等データベース
ヤ 旧金谷家住宅主屋	桐生市東久方町一丁目	国登録 文化庁国指定文化財等データベース	
ユ 旧株式会社金芳織物工場事務所	桐生市東久方町一丁目	国登録 文化庁国指定文化財等データベース	
ヨ 金子家住宅蔵	桐生市東久方町二丁目	国登録 文化庁国指定文化財等データベース	
ヨ 金子家住宅倉庫及び石蔵	桐生市東久方町二丁目	国登録 文化庁国指定文化財等データベース	
リ 金子織物株式会社旧従業員宿舎	桐生市東久方町二丁目	国登録 文化庁国指定文化財等データベース	
ル 金子織物株式会社旧製履工場	桐生市東久方町二丁目	国登録 文化庁国指定文化財等データベース	

引用文献

- 1 桐生高校地歴部1961「大門遺跡調査報告書」
- 2 桐生高等学校地歴部1968「桐生市大門遺跡概観」桐生高等学校
- 3 桐生女子高校社会科学研究部1963「大門遺跡発掘調査報告書」
- 4 桐生女子高校社会科学研究部1964「伊豆田遺跡調査報告書」群馬県立桐生女子高等学校
- 5 桐生女子高校社会科学研究部1970「群馬県桐生市竜町大門遺跡調査概観」桐生女子高等学校
- 6 桐生市教育委員会1988「1 桐生市竜町大門遺跡87、7昭和62年度発掘調査報告書」桐生市文化財報告第10集
- 7 桐生市教育委員会1989「桐生市梅田町原跡発掘調査報告書」桐生市文化財調査報告第11集
- 8 桐生市教育委員会1997「平成7年度発掘調査報告書」桐生市文化財報告書第18集
- 9 桐生市教育委員会2002「平成12年度発掘調査概観」桐生市文化財調査報告書第21集
- 10 桐生市教育委員会2003「平成13年度発掘調査概観」桐生市文化財調査報告書第22集
- 11 桐生市教育委員会2004「平成14年度発掘調査概観」桐生市文化財調査報告書第23集
- 12 桐生市教育委員会2008「平成17・18年度発掘調査概観」桐生市文化財調査報告書第26集
- 13 桐生市教育委員会2012「桐生市内跡跡発掘調査報告書平成21・22年度」桐生市文化財調査報告書第30集
- 14 桐生市教育委員会2013「13本町一丁目水路橋試掘調査概観(森合社社前)」
- 15 桐生市教育委員会2013「万ヶ入遺跡」
- 16 桐生市教育委員会2016「桐生市内跡跡発掘調査報告書平成25・26年度調査」桐生市文化財調査報告書第36集
- 17 桐生市教育委員会2016「16東仁建地区内水路橋試掘調査概観(本町一丁目)」
- 18 桐生市教育委員会2017「17桐生新町水路跡発掘調査概観(本町二丁目)」
- 19 桐生市教育委員会2018「18桐生新町水路跡発掘調査概観」
- 20 桐生市教育委員会2018「18桐生新町水路跡2区(3区)発掘調査概観」
- 21 桐生市教育委員会2018「18桐生新町水路跡4区発掘調査概観」
- 22 桐生市教育委員会2018「桐生市内跡跡発掘調査報告書平成27・28年度調査」桐生市文化財報告第38集
- 23 桐生市史編纂委員会1958「桐生市史」上 桐生市史刊行委員会
- 24 清酒清酒1995「1関東・第3章主要窯跡と須恵器5群馬県」須恵器修正図録第4巻東日本編Ⅱ」雄山閣出版
- 25 坂島壽一1964「上野・上小友遺跡」上野大学文学部論叢32号
- 26 酒井伸男1948「栃木県普門寺遺跡(2)」日本考古学年報 昭和23年度1 日本考古学協会編纂
- 27 酒井伸男1948「群馬県桐生市万ヶ入公園内遺跡」日本考古学年報 昭和23年度1 日本考古学協会編纂
- 28 酒井伸男・渡辺仁1950「菱村普門寺遺跡発掘調査概観」
- 29 佐々木正誠2017「桐生の歴史的建造物 総集編」佐々木建築事務所
- 30 佐々木正誠2017「桐生の歴史的建造物の調査報告書 副屋工場編」佐々木建築事務所
- 31 佐々木正誠2017「桐生の歴史的建造物の調査報告書 1 住宅建築 織物関係」佐々木建築事務所
- 32 佐々木正誠2017「桐生の歴史的建造物の調査報告書 2 一般住宅・長屋編」佐々木建築事務所
- 33 岡本一也1967「群馬県桐生市普門寺遺跡」日本考古学年報 昭和37年度15 日本考古学協会編纂
- 34 周東隆一1950「桐生市に於ける二三の早期縄文遺跡」『向古文化文』2 両毛考古学会
- 35 周東隆一1958「群馬県桐生市金谷台遺跡」日本考古学年報 昭和29年度17 日本考古学協会編纂
- 36 周東隆一1965「桐生市梅田町金谷台遺跡の調査」『桐生史』4 桐生文化史談会
- 37 周東隆一1980「桐生地域の古代遺跡を求めて」『桐生史』19 桐生文化史談会
- 38 蘭田芳雄1948「栃木県普門寺遺跡(1)」日本考古学年報 昭和23年度1 日本考古学協会編纂
- 39 蘭田芳雄1948「栃木県菱村大門遺跡」日本考古学年報 昭和23年度1 日本考古学協会編纂
- 40 蘭田芳雄1949「普門寺観音山包含地遺跡調査概観」『向古文化文』1 両毛考古学会
- 41 蘭田芳雄1949「栃木県足利郡普門寺遺跡」日本考古学年報 昭和24年度2 日本考古学協会編纂
- 42 蘭田芳雄1950「群馬県桐生市森崎園内遺跡」日本考古学年報 昭和25年度3 日本考古学協会編纂
- 43 蘭田芳雄1959「栃木県足利郡川田遺跡」日本考古学年報 昭和30年度18 日本考古学協会編纂
- 44 蘭田芳雄1966「桐生市およびその周辺の原始式文化」両毛考古学会
- 45 蘭田芳雄1968「群馬県桐生市大門遺跡」日本考古学年報 昭和38年度16 日本考古学協会編纂
- 46 蘭田芳雄1969「群馬県桐生市伊豆田遺跡」日本考古学年報 昭和39年度17 日本考古学協会編纂

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

- 47 廣田芳雄1970『考古「姜の郷土史」』慶野郷土史編纂委員会
48 廣田芳雄1974『官の鳥道跡』山陽道跡『日本考古学年報 1972年度版』25 日本考古学協会編纂
49 廣田芳雄・阿久津義雄1979『山腰(包含地)および宿ノ島(京跡)遺跡発掘調査報告書(昭和47年発掘)』山陽発掘調査団
50 十真山道跡発掘調査会1983『十真山道跡発掘調査報告書』
51 長岡造形大学建築・環境デザイン学科 木料研究室監修2009『福生市天神町一丁目、本町一・二丁目地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』福生市総合政策部広報推進課
52 第5次臨三1950『福生市丘公園早期土器及曹門寺早期石器の一断片』『両毛古代文化』2 両毛考古古学会
53 山崎 一1971『群馬県古城築地の研究』上 群馬県文化事業振興会
54 群馬県教育委員会事務局文化財保護課1988『群馬県の中世城跡』群馬県教育委員会
55 群馬県教育委員会事務局文化財保護課2017『群馬県古墳総覧』群馬県教育委員会
56 文化庁国指定文化財等データベース
57 マッピングぐんま <http://www2.wagnap.jp/pref-gunma/Portal>

参考文献

- 岡部赤峰1928『福生地方史』歴史図書社
岩崎卓二編2002『在野町の成立と展開 福生新町の分析』国立歴史民俗博物館研究報告『第95集国立歴史民俗博物館
福生市教育委員会1994『福生市埋蔵文化財分佈地図・地名表』
福生市史編纂委員会1958『福生市史』上 福生市史行委員会
福生市文化史協会2007『福生佐野氏と戦国社会』岩田書店
久保田順一2021『戦国上野国衆』成光祥出版
黒田基樹1997『戦国大名と外様国衆』文獻出版社
群馬県1938『上毛古墳総覧』
群馬県教育委員会事務局文化財保護課1988『群馬県の中世城跡』群馬県教育委員会
群馬県教育委員会事務局文化財保護課2017『群馬県古墳総覧』群馬県教育委員会
群馬県史編さん委員会1981『群馬県史 資料編3 原始古代3 古墳』群馬県
群馬県史編さん委員会1984『群馬県史 資料編6 中世2』群馬県
群馬県史編さん委員会1986『群馬県史 資料編7 中世3』群馬県
群馬県史編さん委員会1986『群馬県史 資料編2 原始古代2 弥生・土師』群馬県
群馬県史編さん委員会1988『群馬県史 資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』群馬県
群馬県史編さん委員会1990『群馬県史 通史編1 原始古代』群馬県
群馬県総務部市町村課2021『群馬県市町村変遷令和3年度』
群馬県農政部土地改良課1997『土地分類基本調査令和3年度』
群馬県立歴史博物館2021『戦国一人一上州の150傑』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『石神遺跡』
廣田芳雄・大河内敏雄・木本政雄・青木繁太郎・大沢昌宏1970『姜の郷土史』慶野郷土史編纂委員会
堀越靖久2002『近世期の福生』国立歴史民俗博物館研究報告『第95集国立歴史民俗博物館
須藤隆1997『室町期東上野における佐野一族の活動—福生氏との関わりについて—』ぐんま史料研究』8 群馬県立図書館
巻島隆2016『福生新町の時代』群馬出版センター
宮崎重雄・青木修一・小野里一・金子恭三・木本富雄・増田 宏2020『福生市街地で見つかった渡良瀬川の旧流路跡(その1)』『福生史苑』59 福生文化史
議会
宮崎重雄・青木修一・小野里一・金子恭三・木本富雄・増田 宏2021『福生市街地で見つかった渡良瀬川の旧流路跡(その2)』『福生史苑』60 福生文化史
議会
宮崎重雄・青木修一・小野里一・金子恭三・木本富雄・増田 宏2022『福生市街地で見つかった渡良瀬川の旧流路跡(その3)』『福生史苑』61 福生文化史
議会
八木昌平1934『福生市略史』福生市役所
山崎 一1971『群馬県古城築地の研究』上 群馬県文化事業振興会
福生市ホームページ <http://www.city.kiryu.lg.jp>
群馬県建設技術センター・群馬県ポータルマップ <http://www2.gunma-heng1.or.jp/boxing/>
文化庁国指定文化財等データベース https://kumishitei.bunka.go.jp/bsys/categorylist/register_id-201
マッピングぐんま <http://www2.wagnap.jp/pref-gunma/Portal>
註 3の原本は確認できないが、福生市教育委員会文化財保護課編集1994『福生市の遺跡と調査に係る資料(付) 2.福生市における遺跡の調査史(昭和
22年~平成5年)』福生市埋蔵文化財分佈図・地名表に参考文献として掲載されている。

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 桐生新町水路跡の概要

桐生新町は、天正十八(1590)年に小田原北条氏滅亡後、関東に移封となった徳川家康が由良氏に替わって領有した地域である。この地域を治めたのは、徳川氏の代官頭大久保長安である。大久保長安は武蔵八王子の陣屋を拠点として、各地に出張陣屋をつくり手代を派遣して支配にあたらせていた。

天正十八年に大久保長安の命を受け、桐生領を支配するために派遣された手代は大野八右衛門であった。大野八右衛門は、由良氏の支配していたころの城下町が桐生領の拠点としては小規模手狭なため、荒戸原に新町をつくり町家を移す計画を立てた。

荒戸原は、桐生川の開析によって形成された扇状地上に位置していた。大野八右衛門は久保村の南端を基点に北は赤城の森までの直線状五町余りの用地を充てている。このころ、荒戸原が立地する扇状地に北から南へかけて通路が存在した。この通路は由良氏の支配の中で造られたものである。大野八右衛門は、久保村家(現寂光院境内)の丘陵を造成して陣屋を造り拠点としている。新町の町並は、荒戸原の通路を五間に広げ、両側を間口六間、奥行四十から四十四間に縄張りして短冊状一軒の屋敷としている。通路の西側には用水路を開削したとされている。これが桐生新町水路である。

桐生新町水路は、安永九(1780)年、明治九(1876)年、昭和五(1930)年の地図で町並の中央を通る通路の西側で確認できる。また、文献では、天明八(1788)年に書かれた『天正遺事』と享保十六(1731)年頃に書かれた『今泉見聞録』の記録などから、江戸初期の慶長十(1605)年に本町通の西側水路を下流無まで開削したとされているが、開削年代と記述の年代に開きがあるため確認には至っていないようである。

水路は、町並み形成に伴い灌漑用として現在の梅田一丁目付近の桐生川から取水し、南は新川に至るもので、「大堰用水」と呼ばれていたとされている。その灌漑地域は桐生新町を中心に広範囲に及んでいたようである。

この水路は、昭和40年頃から下水道が整備されたことにより廃止されている。現在、遺跡は天満宮付近でしか見ることができない。なお、桐生本町一丁目・二丁目では本町通西側の跡地は歩道として利用されている。

第2節 桐生新町水路跡の発掘調査

桐生新町水路跡は、前記のように大堰用水の一筋として天満宮境内を通り、本町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目の本町通西側を流れ新川に流れるものであるが、包蔵地としては重要伝統的建造物群保存地区の範囲のみ指定されている。そのため、発掘調査もこの地区での開発に伴う事業にて実施されている。

発掘調査は、今まで桐生市教育委員会文化財保護課によって実施されてきたが、本事業が県桐生土木事務所による事業であることから、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

桐生市による発掘調査は2013年度、2016年度、2017年度、2018年度に実施されている。

2013年度は、電線中化共同溝の工事の計画に伴う事前確認として桐生市重伝建まちづくり課からの要請により本町一丁目206-6付近(第2図A)森合資会社前、2.1㎡を対象に遺存状態確認の試掘調査として実施された。

調査概観によると、水路は近世以前と近代以降の2時期あることが確認されている。調査はこのうち、近代以降の遺構について実施され、東側側面でも2段の石積みを確認し、最上面の礫はすでに失われているとされ、水路底面幅0.90m、推定上面幅1.40mを測るとしている。出土遺物には明治から昭和にかけての遺物が遺物収納箱で1箱出土していると記載されている。

なお、この部分には石橋が掛けられており、その材が森合資会社内の敷地に敷石として利用されているとされ、この材の長さが1.66mほどであることから、上幅は1.40mよりやや狭いと推定している。

2016年度は、水道管新設工事に先行する遺構の有無を確認するための試掘調査と、試掘調査の結果から立合を

第3章 検出遺構と出土遺物

必要とした2時期の調査が実施されている。

試掘調査対象地は本町一丁目の歩道部分全長320m、幅0.8m、面積256㎡であった。発掘調査の結果、水路跡の遺存状態は西側面が河床円礫、若しくはコンクリート面で構築されていた。東側面は歩道工事によって最上面が壊されているものの、中段と下段は遺存しており、これには河床円礫、河床円礫を加工した切石状の石材が使用されていることが確認されている。また、石橋、木橋が天満宮南市道、買場石油北側交差点、大鳥会計事務所前、まちなか交流館・大風呂敷間交差点(第2図D)で確認されている。石橋はすべて御影石を利用しており、木橋は買場石油北側交差点で確認されているが、木質部は腐食が進み崩落した状態であったとされている。

なお、水道管理設では両側面を壊すことがないため、

確認調査にとどめている。

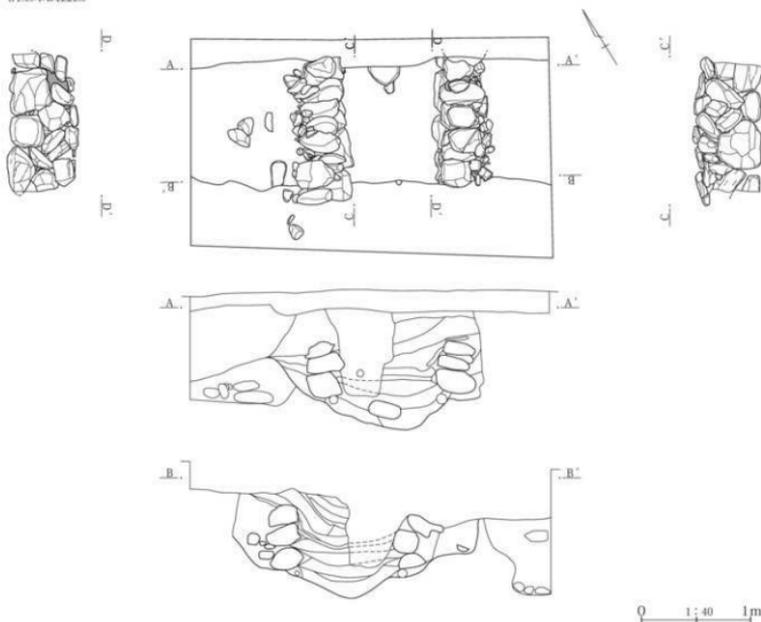
2017年度は、さらに試掘調査に基づき水道管理設工事の際に石橋・木橋が確認された4カ所について立会調査が実施されている。

2017年度は前年度に引き続き本町二丁目での水道管理設工事に伴う確認調査と立会調査が実施されている。

試掘調査対象地は本町二丁目の歩道部分全長233m、幅0.7m、面積163.1㎡であった。発掘調査の結果、(旧)書上商店前では、御影石積みみの側面を検出した。自然石から御影石への積み変えは明治30年以降大正期の間に行われているが、詳細は不明とされている。また、一部では鉄筋コンクリート製の溝蓋で覆われた箇所が存在するなど各町によって状況が異なることが確認されている。

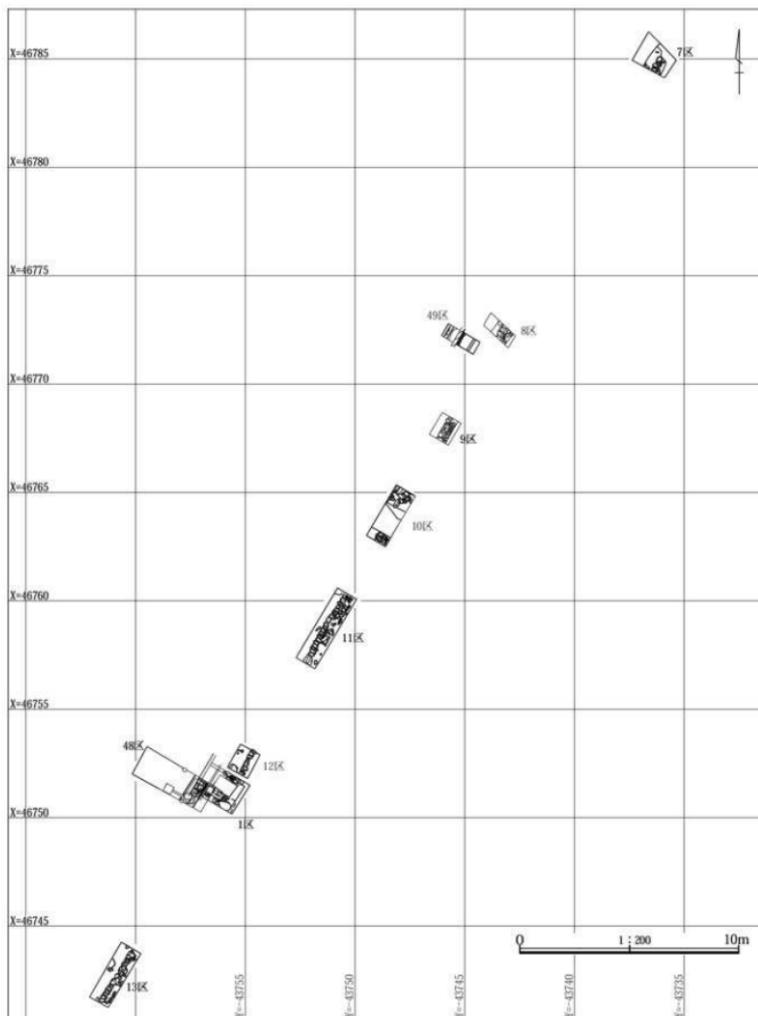
2018年度は4地点の調査を3次にわたって実施してい

槻生市調査区



第6図 2018年度槻生市調査 遺構図

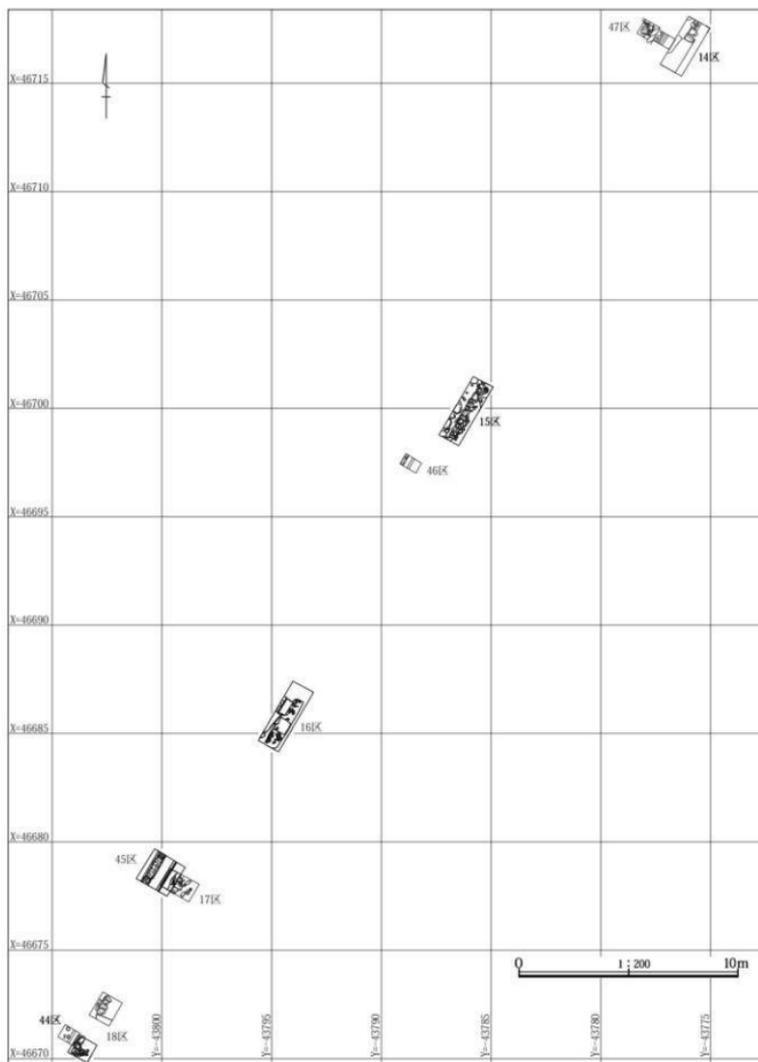
7・8・49・9・10・11・12・1・48・13区



第7図 調査区位置図(1)

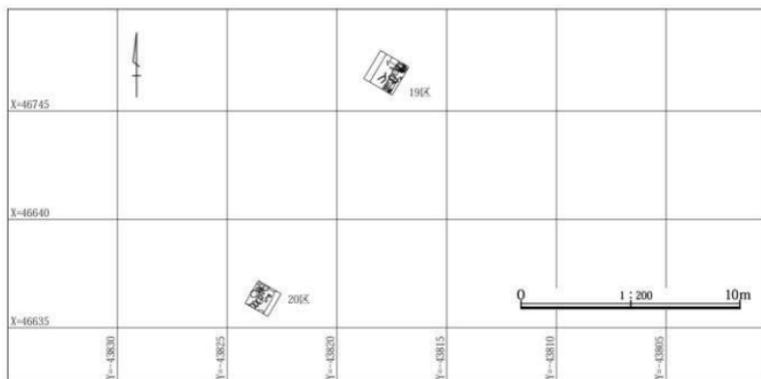
第3章 検出遺構と出土遺物

14・47・15・46・16・45・17・18・44区



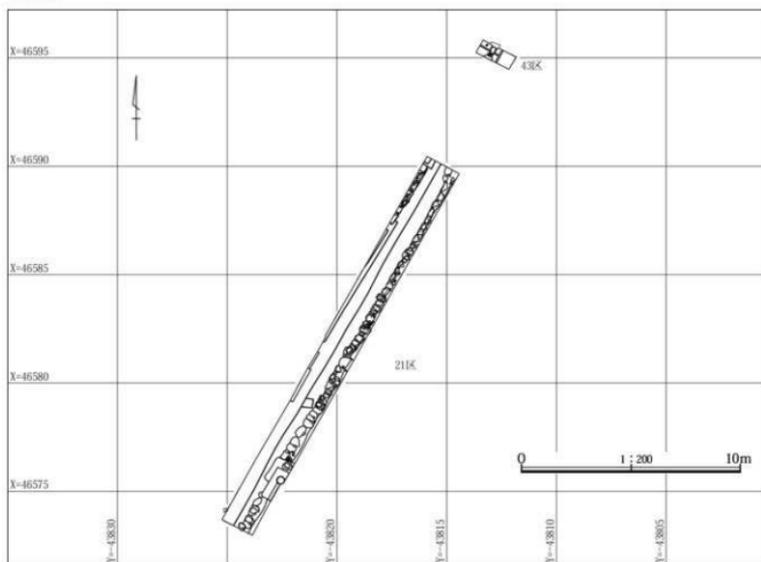
第8図 調査区位置図(2)

19・20区



第9図 調査区位置図(3)

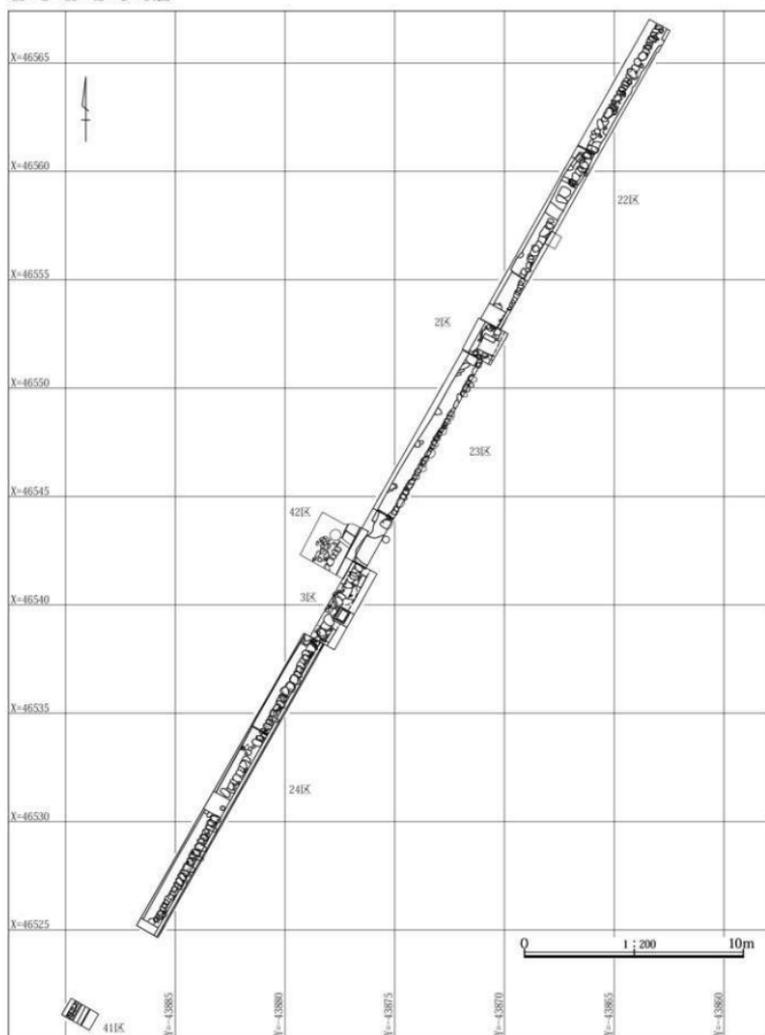
43・21区



第10図 調査区位置図(4)

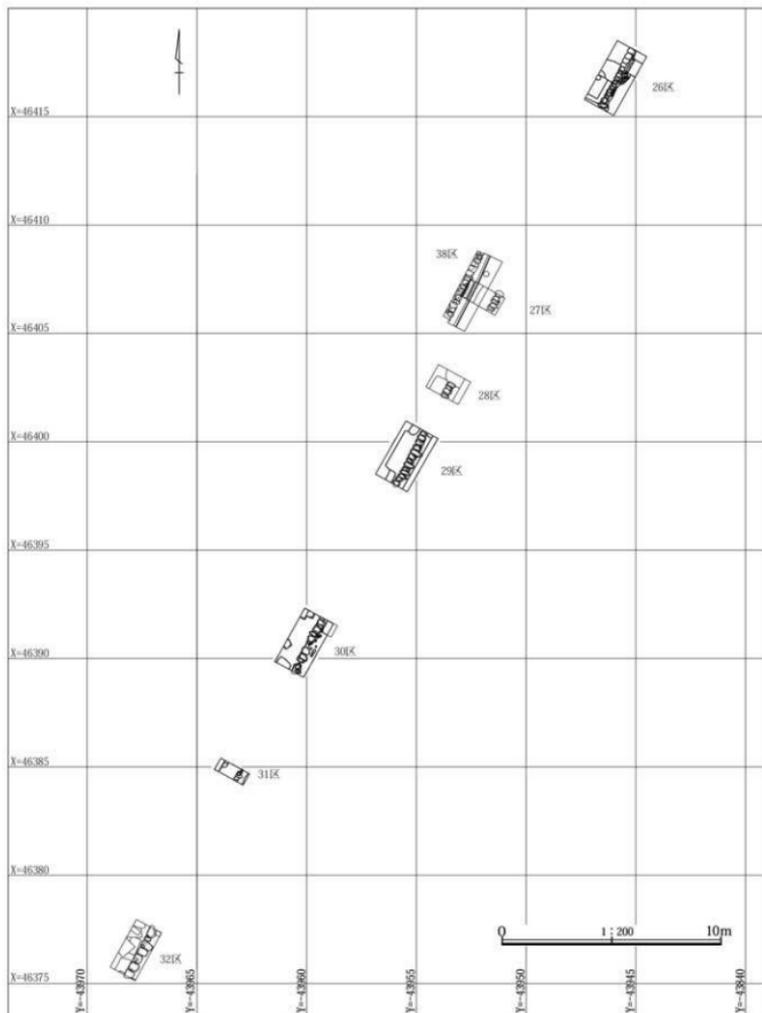
第3章 検出遺構と出土遺物

22・23・24区



第11図 調査区位置図(5)

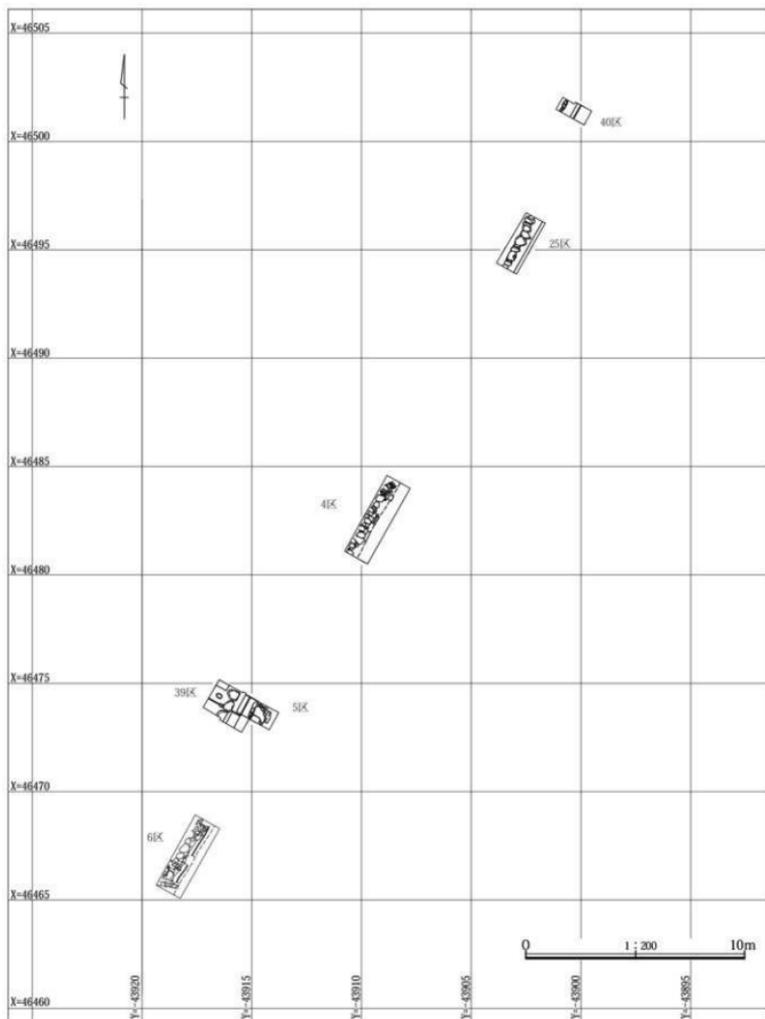
26・38・27・28・29・30・31・32区



第12図 調査区位置図(6)

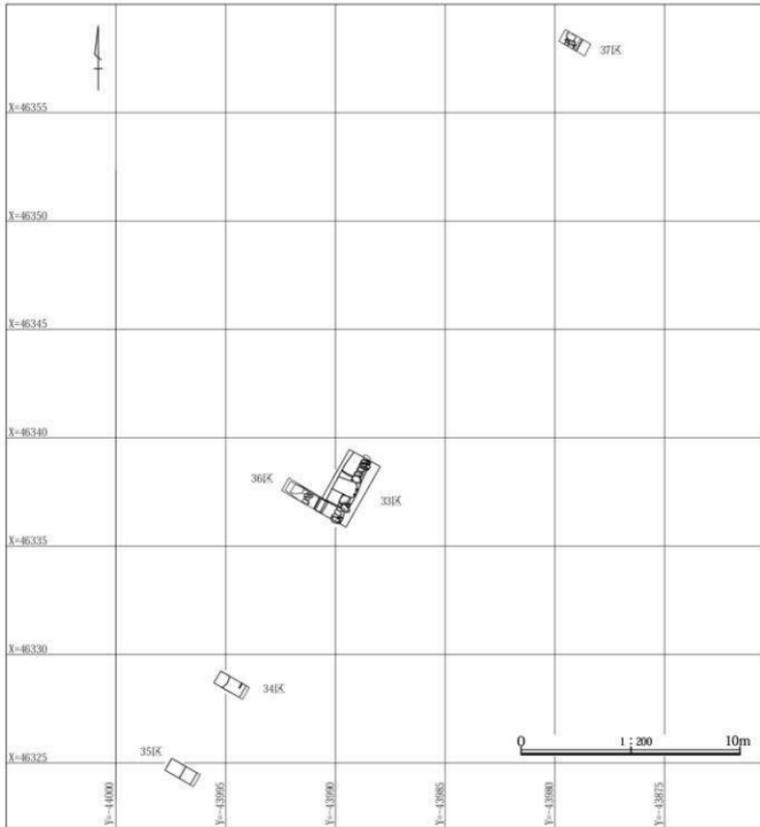
第3章 検出遺構と出土遺物

40・25・4・5・39・6区



第13図 調査区位置図(7)

37・33・36・34・35区



第14図 調査区位置図(8)

第3章 検出遺構と出土遺物

る。なお、発掘調査は水道管理設工事に伴う事前の記録保存である。1次の発掘調査は、2016年に一部を発掘調査している買場石油交差点を拡幅するかたちで実施されている(第2図B)。調査の結果、木橋の全貌が明らかにされ、さらに2次2区調査地点と同様に水路跡東西側面を通した数少ない調査であるが、当初段階の構築地点としては唯一の地点とみられる。調査は水路内側の調査にとどまらず、掘り方の調査にも及んでいる。掘り方の調査では側面に積み上げられた礫の下から胴木が検出され、水路の構築方法の一端が明らかにされている。なお、この調査区の水路上面での幅は1.20mで以前に調査した箇所より20cmほど狭いようである。2次2区(第2図D)は陶管が敷設されたために側面石積みの礫が一度取り外され、陶管を埋め戻した後に再度構築されたことが、確認されている。なお、3区(2図C)はガス管理設等により水路が掘削され消滅していた。3次4区は本町二丁目南端三丁目北端に所在する三越北側交差点(第2図E)を調査している。この区では、調査範囲内が水道管や東電、NTTなどによる配管によって攪乱が激しく、水路側面は東側面の1段目が検出されただけであった。出土遺物は近世とみられる陶磁器片が数点出土しているが、大部分は昭和以降の陶磁器、プラスチック、ガラス片などであったとされている。

引用文献

- 桐生市教育委員会文化財保護課2013『13本町一丁目水路跡遺構試掘調査外報(森合資会社編)』
- 桐生市教育委員会文化財保護課2016『16重伝建地区内水路遺構立会調査概報(本町一丁目)』
- 桐生市教育委員会文化財保護課2017『17桐生新町水路跡立会調査概報(本町二丁目)』
- 桐生市教育委員会文化財保護課2018『18桐生新町水路跡発掘調査概報』
- 桐生市教育委員会文化財保護課2018『18桐生新町水路跡2区(3区)発掘調査概報』
- 桐生市教育委員会文化財保護課2018『18桐生新町水路跡4区発掘調査概報』

第3節 検出した水路跡の遺構

検出した遺構は、桐生新町水路跡である。報告は調査順ではなく天満宮南交差点寄り交差点の北の区より順次行うこととした。発掘調査は、4年度にまたがって49地点(それぞれを区と呼称)を調査しているため、区が重なり合う箇所や、近距離に位置する区については、個別の記載と合わせた所見を、重複する調査区記載の最後に記載する。

なお、水路は全体を広く掘削し、側面に大小の河床礫を1段から4段ほど積み上げ、掘り方と積み上げた礫の間に粘性のある黒褐色土(暗褐色土)を充填して構築している。水路内部は底面に構築物を敷設することなく自然面をそのまま使用している。途中の施設としては24区に堰が設けられているが、堰柱石は取り上げることができたが、その下に敷設してある石は調査対象外に伸びるため取り上げていない。側面の礫積み上げや掘り方については発掘調査時に上位より1面、2面、3面、4面として記録しているが、桐生市教育委員会文化財保護課の発掘調査では下位より1段、2段、3段、4段とし、最上位を最上層と期している箇所もある。今回の報告では各調査区礫の積み上げ状態を共通した認識でとらえるため最下位の礫設置段を1段目と呼称した。その上位は1段～3段の複数通りの積み上げが確認できることから、最上層との間での石積みを2段目として取り扱うことにした。そして最も上位、当時の地表面に露出した石積みを最上層として統一した呼称で報告することとした。なお、使用している礫の大半は自然石をそのまま積み上げているが、一部に割石、立方体に加工した切石がある。石材はチャート、安山岩、花崗岩、緑泥片岩、玄武岩が発掘調査担当者によって確認され、その中ではチャートが最も多くを占めているが、石材が判断できないものも、多くあったため、正確な比率は不明である。この水路を構築している礫については取り上げられたものは例言に記したように桐生市教育委員会が保管している。規模については、両側面を調査できた箇所が少ないため、水路幅について計測できた箇所は僅かである。水路の深さについても最上層が残存している区が少ないため残存の深さで示してある。

水路は文献などから江戸時代前期に構築され、昭和37年ごろには使用されなくなり埋め戻されたとされている。その後県道の歩道としてアスファルト舗装が行われ、地下に埋没した状態である。しかし、2017年度に桐生市教育委員会が水道管敷設に伴う立会調査では、石橋によって暗渠化した箇所を確認しており、この箇所では完全に埋没しておらず、調査報告書図版写真から見ると、2段目の中位から上位までの埋没であったことがわかる。また、発掘調査では堆積状態は攪乱されていない限り水平堆積が確認されている。しかし、その堆積量は概ね同様な状態であるが、一部の区は異なる状態が観察されている。こうした状況から全体をおよびの観察が必要とみられる。

遺物については詳細を第4節として記載する。掲載した遺物は原則、昭和20年代前半までを対象としている。なお、20年代後半以後の出土品(プラスチック、包装紙等を含む)は掲載していないが、遺物として群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

7区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、最も北側の調査区、天満宮南交差点の南側。

調査範囲 東辺1.00m、西辺1.54m、北辺1.80m、南辺1.70mの台形状の範囲、2.159㎡を調査した。

検出状態 水路東寄り内部と東側面の石積み、東側面石積み裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路内部は東側面より40cmほど西側が水道管敷設、裏込め上部はガス管敷設によって失われている。また、最上層と2段目の多くの礫が失われ、水路内に落とされた状態で検出した。出土した礫の形状や大きさなどから2段目、最上層で使用された礫とみられるが、どこに使用された礫であるかまでは判明できなかった。

規模 最上層は当初の状態を保っているか判然としませんが、水路底面までの深さは0.90m、石積み底面までは0.95mを測る。

掘り方 底面はほぼ平坦である。東側面の裏込め側はガス管埋設のため確認できていない。水路底面の標高は115.84～115.85mを測る。

側面状態 1段目には長さ76cm、幅21cm、厚さ14cmほどの角柱状に加工された礫が置かれている。この礫は詳細

な時期が不明であるが、明治以降に河床礫から積み替えられたとみられる。なお、角柱状の礫は上面にノミ痕が残り、他の面は滑明、上面には、10～11cmのほぼ等間隔に非貫通の径3.0cm、深さ6cm前後の小孔が穿たれており、別の用途で使用されたものが転用されたものとみられる。

2段目は、2段に自然礫が積まれている。下段には3石が残るが上段は南側に1石が残るだけであった。下段では礫を横長にして積み上げている。

最上層は調査区南端で、2段目上段の自然礫が残る上に、小礫を詰め込んだその上に1石が残存するだけであったが、この礫が本来の位置を保っているものか否かは判然としにくい。

裏込め 上部にガス管が敷設されているためほとんど調査を行えなかったが、1段目の礫を置く部分は礫の大きさだけを底面より5cmほど掘削している。側面を構築していた1段目角柱礫上半から上位の裏側には小礫を含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した51・53・54半銭硬貨、294磁器弁、水路下層などから出土した52半銭硬貨、57一銭硬貨、67二銭硬貨、75金属製品煙管、131肥前磁器碗、129・140・390瀬戸・美濃磁器小碗、165・173陶器湯飲み、272磁器丸碗、371磁器小鉢、293陶器弁、611・588ガラス製玩具・606・607文具瓶、650化粧瓶を図化して掲載した。

所見 他の区と異なり、1段目に角柱状の礫が据えられていることから構築当時の状態となく、積み替えが行われていたものと判断できる。その時期については裏込めから明治18年発行とみられる半銭硬貨が出土していることからこれ以降と考えられる。

8区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、7区の南、49区北、天満宮南交差点より14.7mほどの地点。

調査範囲 東辺0.65m、西辺0.67m、北辺1.53m、南辺1.52mの菱形の四角形の範囲、0.98㎡を調査した。

検出状態 水路東寄り内部と東側面の石積み、東側面石積み裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路内部は東側面より20cmほど西側が水道管

敷設、裏込めの西半はガス管敷設によって失われている。また、最上面を構築する礫は残存していなかった。

規模 最上面が残存していないため、2段目上面から水路底面までの深さは0.70m、石積み底面までの深さが0.66mを測る。

掘り方 底面はほぼ平坦で、下位は箱型に掘り込まれているようであるが、1段目の礫上半より逆台形状、斜めに広がるように掘削されている。底面の標高は115.73～115.70mを測る。

側面状態 1段目は底面より20cmほどに高さ35～40cmほどの大型の自然礫を縦長に置いている。この礫の下には根石として小型の礫を据え置き、水路底面側に大型の礫がずり落ちないように置かれたようである。

2段目は1段目よりやや小型の自然礫が1段目と同様に縦長に積み上げている。

最上面は残存していなかった。

裏込め 上半はガス管敷設のため不明であるが、1段目上半から2段目にかけては2～5cm大の礫を含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち水路下層などから出土した11石製品硯、201磁器徳利、260・256磁器平碗、458在地系土器焙烙、665ガラス製染料瓶を図化して掲載した。

所見 水路底面と1段目の礫を据えている箇所の間には、多くの区で確認されている胴木ではなく、小礫を根石として補っているなど構築状態が異なっていた。

49区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、8区の南、天満宮南交差点より16.5mほどの地点。

調査範囲 東辺0.63m、西辺0.63m、北辺1.69m、南辺1.69mの長方形の範囲、1.0649㎡を調査した。なお、調査対象範囲の西側は一部民地に及んでいる。

検出状態 水路西寄りの内部と西側面の石積み、西側面石積み裏込めの一部を検出した。

残存状態 西側面から40cmほど東側に水道管が敷設されており、水路内部の調査は壁石積み側の一部にとどまっている。壁面の中央部が民地との境界のため、そこに掘がけられていた。塀基礎はコンクリートで固められ、

調査時点では除去することはできない状態であった。こうした状況のため、壁面の礫や裏込めの調査にも至っていない。

規模 最上面上面から水路底面までの深さは0.74mを測る。石積み底面までの深さは、塀基礎が存在するため計測できない。

掘り方 水路底面はほぼ平坦で、壁面下は8cmほど高い段状に掘り込まれている。水路底面の標高は115.83～115.84mを測る。

側面状態 1段目は高さ30cm、幅40cmとやや大型の自然礫を横長に据え置いている。

2段目は長さ25～32cm、幅12～15cmの自然礫を斜めから縦長の状態で積み上げ、間に小型の礫を充填している。

最上面は2段目よりやや小型の自然礫を、斜めから横長に積み上げている。

裏込め 民地側の塀基礎を除去できないため不明である。なお、民地側の調査範囲が裏込めに相当する箇所であると想定できるが、確定には至っていない。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、煉瓦、瓦、ガラスが出土しているが、図化できるものは出土していない。

所見 調査対象地内に塀基礎など除去できない箇所があり全貌は判然としない。

9区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、49区の南、天満宮南交差点より16.5mほどの地点。

調査範囲 東辺1.17m、西辺1.17m、北辺1.00m、南辺1.00mの長方形の範囲、1.17㎡を調査した。

検出状態 水路東寄り内部と東側面の石積み、東側面石積み裏込めの一部を検出した。

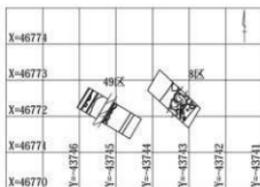
残存状態 水路内部は東側面より上部が水道管敷設、裏込め上部はガス管敷設によって失われている。また、最上面の礫は表土下では失われているが、北辺側断面では残存が確認できた。

最上面が残存していないため、2段目上面から水路底面までの深さは0.80m、石積み底面までは0.68mを測る。

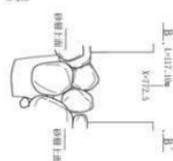
掘り方 水路底面はほぼ平坦で、側面を造る1段目の礫を配置する幅まで一体で掘り込まれていた。1段目の礫

第3章 検出遺構と出土遺物

8区、49区



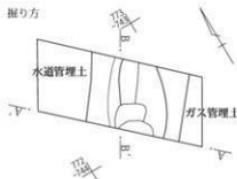
8区



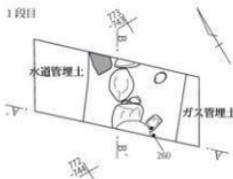
最上面



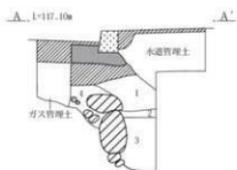
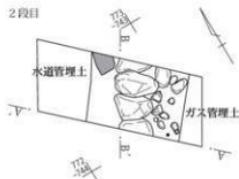
掘り方



1段目



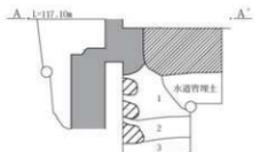
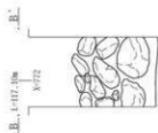
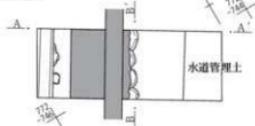
2段目



- 1 に深い黄褐色砂礫 埋上, コンクリート片を多く含む。
- 2 灰色砂 水路堆積上, 径1~2mmの砂を主体とする。ビニールを多く含む。
- 3 褐色砂礫 水路堆積上, 径2~5mmの礫を主体とし, 径2~3cmの礫を少量含む。
上部に鉄分・マンガンの沈着著しい。
- 4 黒褐色土 裏込め, 径1~2cmの礫を含み, 径5~20cmの礫を多く含む。

49区

最上面



- 1 黒褐色土 埋上, コンクリート片, 礫等を含む。
- 2 黒褐色土 水路堆積上, 径1~2cmの砂, 径1~3cmの礫を多量に含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路堆積上, 径1~5cmの礫を多量に含む。

0 1:40 1m

第16図 8区、49区道構図

第3章 検出遺構と出土遺物

上半からは緩やかな角度で斜めに掘り込まれている。水路底面は115.74～115.80mを測る。

側面状態 1段目はやや大きめの礫を横長にしておいているが、多くの礫は15～20cmと奥行き短い扁平なものを据え置いている。

2段目は1段目よりやや小ぶりを斜めに積み上げ、その間により小さな礫を充填している。

最上面は残存していなかった。

裏込め 1段目は小礫を含まない黒褐色土が充填された状態であるが、2段目以上は上位ほど小礫を多く含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、印籠が出土している。このうち、裏込めから出土した414瀬戸・美濃陶器、376製作地不詳磁器鉢などと水路下層などから出土した217瀬戸・美濃磁器端反碗、363肥前磁器鉢、278・370・363・166磁器碗・小鉢・鉢・湯飲みなどを図化して掲載した。

所見 1段目の礫は比較的扁平な礫が使用されているのが特徴的であった。

10区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、9区の南、天満宮南交差点より23.7mほどの地点。

調査範囲 東辺2.69m、西辺2.68m、北辺1.00m、南辺1.03mの長方形の範囲、1.7136㎡を調査した。

検出状態 水路東寄り内部と東側面石積み、裏込めを検出した。

残存状態 陶管敷設、ガス管敷設、水道管敷設など数回に及ぶ地下埋設物に伴う工事のため、水路と側面の多くを欠いた状態であった。また、北側では水路内に礫が散乱した状態で、埋設物敷設の時に最上面の礫が崩落してそのまま残存していたとみられる。側面石積みは原位置を保つものは調査対象地両端の1段目と2段目の一部だけであった。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.70m、石積み底面までは0.68mを測る。

掘り方 水路底面はほぼ平坦、1段目の礫を据える箇所は底面より段状に掘り残され、2段目以上は斜めに広がるように掘られている。水路底面の標高は115.76mを測

る。

側面状態 1段目は調査区の内端に河床礫3石が残されているだけであった。

2段目も1段目とほぼ同様な状態であった。

最上面は残存していなかった。

裏込め 1段目から裏込めが広く掘り込まれ、2段目の高さではさらに広く掘り込まれた状態が窺えた。また、裏込めは小礫を多く含む黒褐色土によって充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した111肥前磁器丸碗、水路下層などから出土した80の金属製品、133瀬戸・美濃磁器湯飲み、443・198・158磁器蓋・盃・湯飲みを図化し掲載した。80の金属製品は皮製品を加工時に使用するコンパスの一部とみられる。

所見 地下埋設物敷設によって不明点が多いが、他の区と異なり側面1段目に据えられた礫の裏側が広く掘り込まれていた。

11区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、10区の南、天満宮南交差点より29.2mほどの地点。

調査範囲 東辺3.73m、西辺3.73m、北辺1.01m、南辺1.00mの長方形の範囲、3.7673㎡を調査した。

検出状態 水路東寄り内部、東側面1段目と2段目、裏込めの西半分ほどと東側面石積み下から胴木と胴木を固定する杭を検出した。

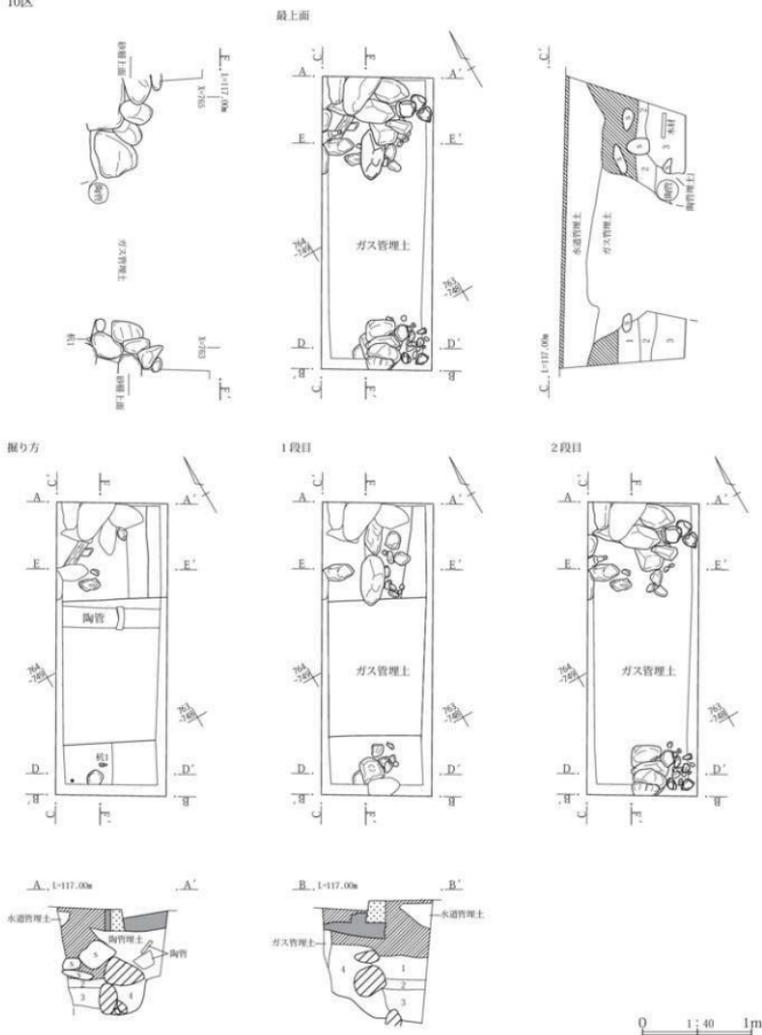
残存状態 最上面は調査時には失われていたが、1段目と2段目は比較的良好な状態であったが、2段目は中ほどの礫が一部失われていた。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.70～0.76m、石積み底面までは0.70m前後を測る。

掘り方 水路底面から1段目礫の中ほどまで、ほぼ平坦に掘削され、そこから側面は段を造るよう掘削されていた。水路底面の標高は115.81～115.75mを測る。

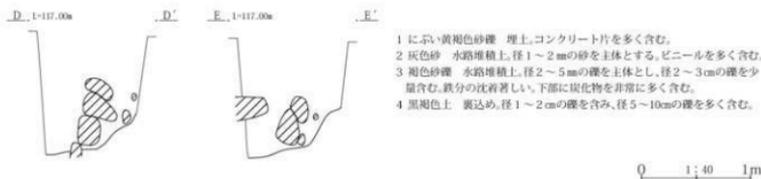
側面状態 1段目は高さ25～30cm、幅40～50cm、奥行き25～40cmのやや大型の自然礫が横長に据え置かれていた。なお、南端に据えられた礫は高さ65cmと使用されて

10区



第18図 10区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物



第19図 10区遺構図(2)

いる礫の中でも最も大型の河床礫であった。

2段目は径15～25cmの自然礫が、1段目北端の礫に合わせるように2段～3段に積み上げられていた。なお、この区では1段目に7石、2段目下段に19石以上が配置されていた。

最上層は残存していなかった。

裏込め 1段目礫下には径8.0～10.0cmの胴木が据え置かれている。胴木は北から1mほどの地点で切断面が確認できることから2本が確認された。胴木の水路側には胴木が動かないように固定する杭が打ち込まれていた。杭は径5cmほどで、北側の胴木では5～10センチ間隔に4本、南側の胴木では1.10～1.20m間隔に3本と北側の杭には並ぶようにもう1本が撃ち込まれていた。なお、胴木は石積み底面ではなく水路端部に設置されている。

1段目、2段目の礫の裏込めとしては小礫を多く含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、銭貨、10円玉硬貨、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した37新寛永通寶、44寛永通寶四文銭、82金属製品茶托、384磁器盃、水路下層などから出土した38・43寛永通寶、110・303・215・420・314・311肥前磁器端反碗・小皿・碗蓋・段重・皿、557磁器緒玉、137瀬戸・美濃磁器小杯、518磁器製戸車、583・589ガラス製玩具、621・617・627・674・660ガラス製ニッキ水瓶、ビール瓶、食品瓶、化粧瓶、薬瓶を図化して掲載した。

所見 水路掘削、側面構築の際に据え付けた礫が水路側から裏込め側に傾くように据え置かれ、上位に積み上げた礫が水路内に崩落するのを防ぐための胴木を置き、さらに胴木を固定させるための杭が良好な状態で検出されている。なお、裏込めから明治神宮参拝記念の茶托が

- 1 濃い黄褐色砂礫 埋土、コンクリート片を多く含む。
- 2 灰色砂 水路堆積土、径1～2mmの砂を主体とする。ビニールを多く含む。
- 3 褐色砂礫 水路堆積土、径2～5mmの礫を主体とし、径2～3cmの礫を少量含む。鉄分の沈着著しい。下部に炭化物を非常に多く含む。
- 4 黒褐色土 裏込め、径1～2cmの礫を含み、径5～10cmの礫を多く含む。

出土しており、明治神宮創建の大正9(1920)年以降に製造されたものであることから、側面を積み直した可能性が想定される。しかし、詳細な出土位置が不明のため、断定には至らなかった。

12区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、11区の南、天満宮交差点より37.5mほどの地点。南側で平成28年度調査の1区と隣接する。
調査範囲 東辺1.23m、西辺1.22m、北辺1.02m、南辺1.05mの長方形の範囲、1.2566㎡を調査した。

検出状態 水路東寄り内部、東側面1段目と2段目、裏込めの西半分ほどと1段目礫下から胴木を検出した。

残存状態 最上層は調査時には舗装工事などによって失われていたが、1段目と2段目が比較的良好な状態で残存する。

規模 最上層が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.72～0.80m、石積み底面までは0.70mを測る。

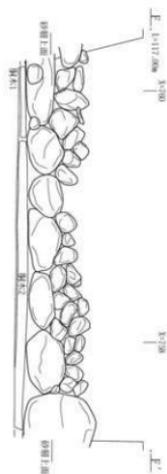
掘り方 水路底面から1段目礫の奥まで弧状に掘削され、そこから45°程の角度で掘り込まれているが、その東側は調査区外のため不明である。水路底面の標高は115.69～115.72mを測る。

1段目礫下からは胴木を検出したが、胴木は腐食が激しく長さ25cm前後に分断され、径も4cm前後と細くなった状態であった。なお、胴木を固定するための杭は検出していない。

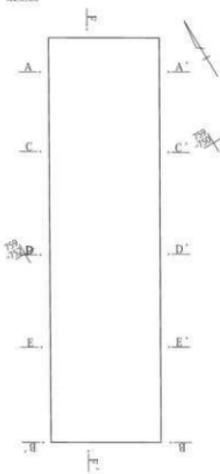
側面状態 1段目は40cm前後のやや大型の自然礫を配しているが、南から2石目の礫は高さ40cm、幅15cm、奥行き40cmの扁平な礫を縦長に大型礫の間を詰めるように据え置いている。

2段目は高さ10～15cm、幅20cm前後の自然礫を斜めま

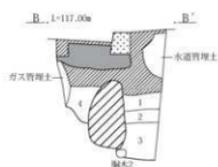
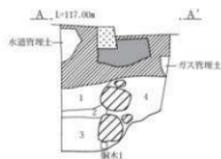
11区



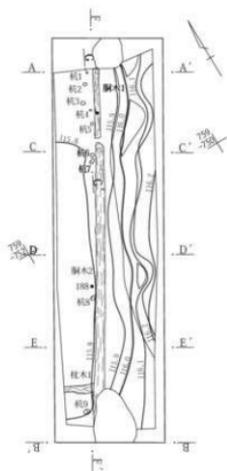
最上面



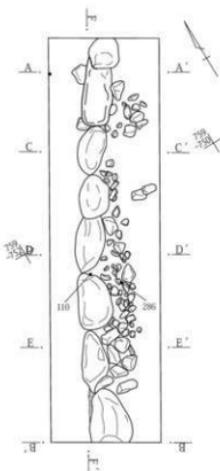
第3節 検出した水路の道構



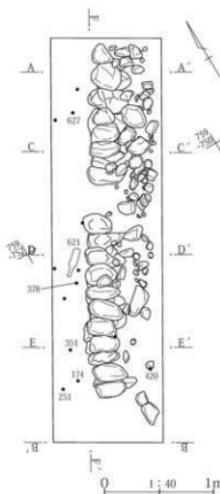
断面面



1段目

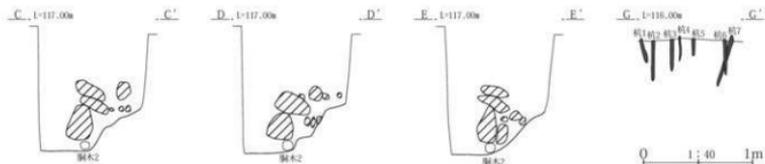


2段目



第20図 11区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物



- 1 に近い黄褐色砂礫 埋土、コンクリート片を多く含む。
- 2 灰色砂 水路堆積土、径1～2mmの砂を主体とする、ビニールを多く含む。
- 3 褐色粘土質土 水路堆積土、径2～5mmの礫を主体とし、径2～3cmの礫を上部は多く含む。鉄分の沈着著しい、下部に炭化物を非常に多く含む。
- 4 褐色砂礫 裏込め、径1～2cmの礫を含み、径5～10cmの礫を多く含む。

第21図 11区遺構図(2)

たは横長に配しているが、やや不規則な積み方である。

最上面は残存していなかった。

裏込め 1段目礫の裏込めには径10cmほどの中型の礫を含む黒褐色土、その上位2段目礫の裏込めは5cm前後の小礫を含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、昭和34年発行の100円玉硬貨、昭和44年発行の10円玉硬貨、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した423磁器合子蓋、463磁器仏飯器、112肥前磁器碗、436搬入系土器焼塩壺、水路から出土した411肥前磁器合子蓋、481・477瀬戸・美濃陶器灯火受皿・灯火皿、603・599ガラス製文具瓶、633食器皿、638化粧瓶、666日常生活靴クリーム瓶を図化して掲載した。

所見 水路内の堆積では下層が水平堆積であるが、上層は三角堆積に近い堆積状態が観察され、他の区と異なる堆積状態であった。

1区(平成29年度調査)

位置 本町一丁目、12区の南に隣接、天満宮南交差点より38.7mほどの地点。南西の一部は令和2年度調査の48区と重複する。

調査範囲 東辺1.50m、西辺1.58m、北辺2.03m、南辺1.99mの長方形の範囲、3.0954㎡を調査した。

検出状態 水路側面を構築していた礫と、東西の側面1段目下に相当する位置から胴木を検出した。

残存状態 水道管敷設やガス管敷設に伴う工事による攪乱が激しい状態であった。礫は出土しているが、原位置

を保っているかの確認はできなかった。なお、中央部の攪乱は1区調査時には確認できなかったが、48区の調査で陶管敷設によるものと判明している。

規模 残存状態が不良のため計測できる箇所がない。

掘り方 水路底面から1段目裏込めにかけて検出できたが、底面の標高は115.65mを測るが、1段目の礫を配した箇所はそこから10cmほど段をもたせていることが、胴木の標高が115.74mであることから想定される。

1段目下に据え置かれる胴木を東西両側で検出した。ともに腐食により径3cmほどと細くなっている状態である。なお、東側面石積み下胴木は平面で検出できたが、西側面石積み下胴木は断面のみの検出であった。なお、この胴木の延長線は48区で検出した。

側面状態 1段目、2段目、最上面とも失われているが、調査区の南北両端で側面の構築に使用されたとみられる礫が出土していた。

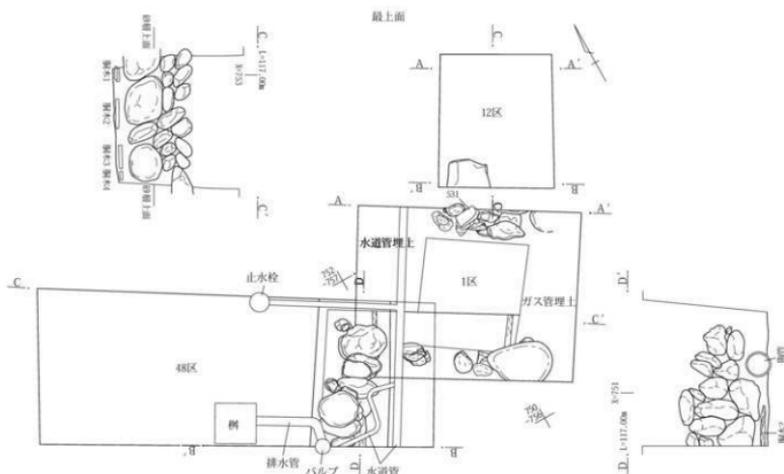
裏込め 攪乱により不明である。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、煉瓦、ガラス、おはじき、貝殻が出土している。このうち、水路下層などから出土した584・587ガラス製玩具、601文具瓶、652化粧瓶、654薬瓶などを図化して掲載した。

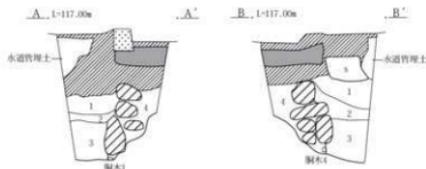
48区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、12区の南、天満宮南交差点より40.0mほどの地点。南西の一部は平成29年度調査の1区北東角と重複する。

12区、1・48区



12区



- 1 濃い黄褐色の砂 理上、コンクリート片を多く含む。
- 2 灰色砂 水路堆積上、径1～2mmの砂を主体とする。
- 3 褐色色の砂 水路堆積上、上部付近に鉄分凝集、径1～2cmの礫を主体とし、径3～5cmの礫を多く含む。下部に鉄分・マンガンが凝集し硬く固結する。
- 4 黒褐色土 裏込め、径2～15cmの礫を多く含む。

0 1:40 1m

第22図 12区、1・48区遺構図(1)

調査範囲 東辺1.32m、西辺1.43m、北辺3.63m、南辺3.62mの長方形の範囲、4.9775㎡を調査した。なお、調査区の西側2.5mほどは民地である。

検出状態 水路西寄り内部と西側面1段目、2段目の石積み、1段目礫下の胴木を検出した。なお、調査対象地の中には陶管が敷設されていた。調査区西側では水路に伴う遺構を検出することはできなかった。

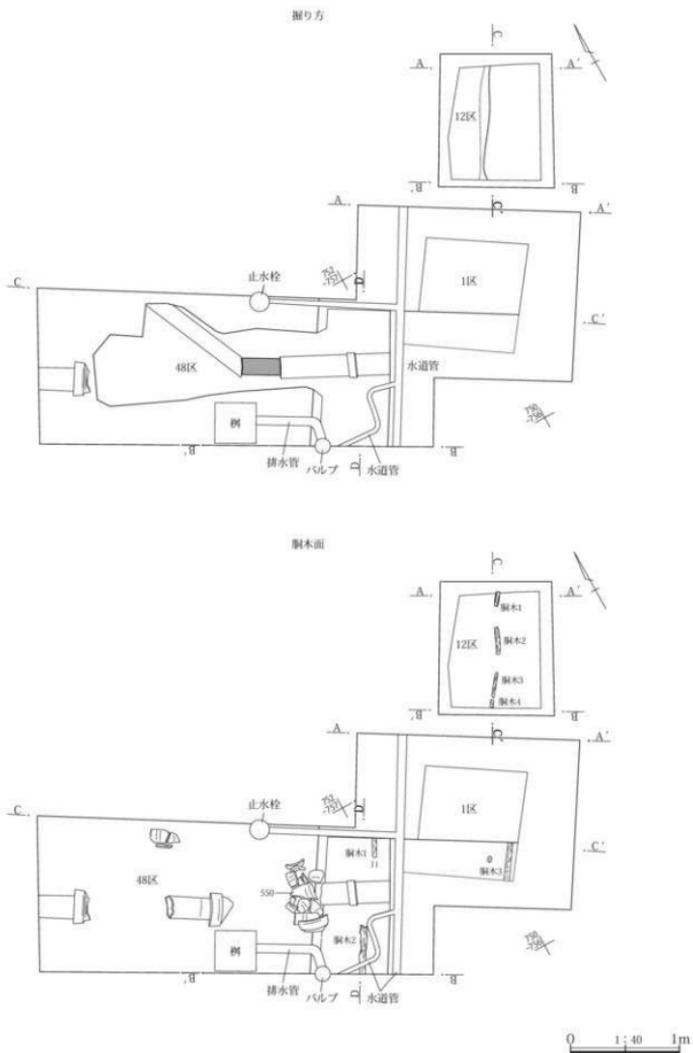
残存状態 調査対象地の南寄り、側面礫下胴木が残存していることから、その上位の側面礫も構築当時の状態を保っていると思われるが、南から2石目より北側は、

陶管敷設によって積み直しが行われたとみられる。

規模 最上面が残存していないため2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.78m、石積み底面までは0.68mを測る。

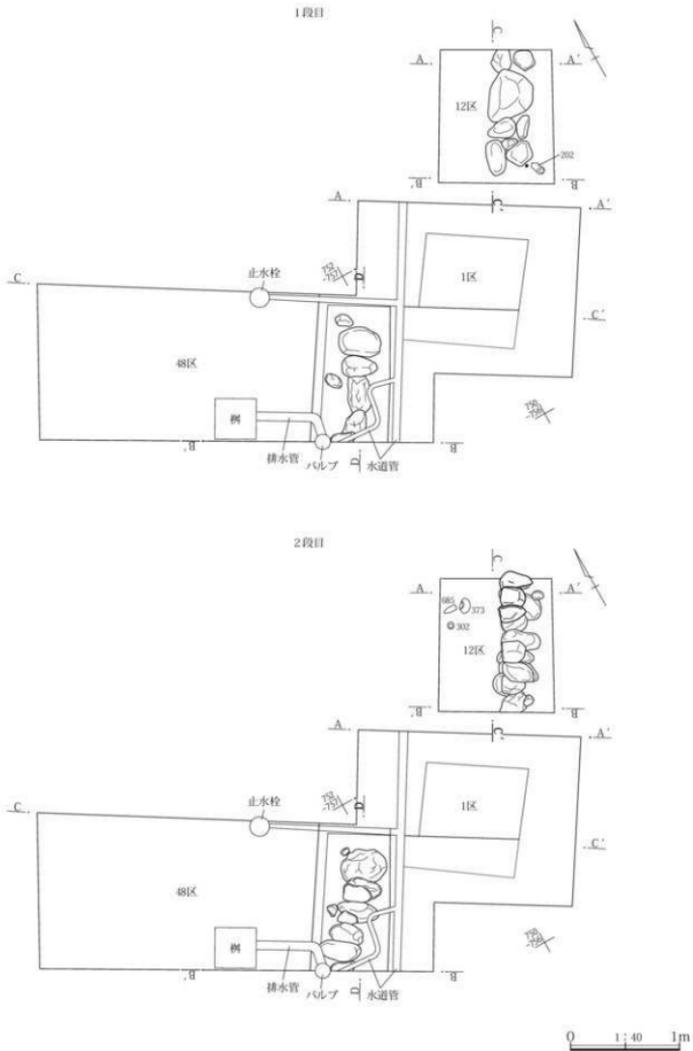
掘り方 土層断面の観察で裏込め土を確認できたが、攪乱が激しく底面の確認ができなかったため、明確な掘り方を確認できなかった。また、側面石積み礫下では胴木を検出したが、腐食が進み残存状態が悪かったが、胴木は径4cm、残長40cmほどであった。

側面状態 1段目は南寄りで自然礫2石を確認できた



第23図 12区、1・48区遺構図(2)

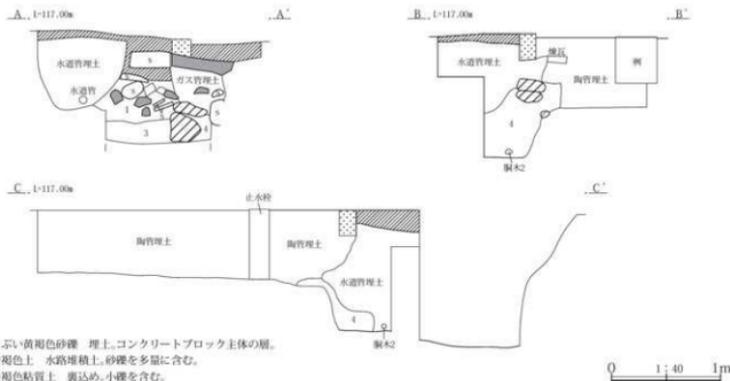
第3節 検出した水路の道構



第24図 12区、1・48区道構図(3)

第3章 検出遺構と出土遺物

1・48区



- 1 にふい・黄褐色砂礫 埋土、コンクリートブロック主体の層。
 3 暗褐色土 水路堆積土、砂礫を多量に含む。
 4 暗褐色粘質土 裏込め、小礫を含む。

第25図 1・48区遺構図(4)

が、北側の礫は陶管敷設後に積み戻されたものである。なお、南側の1石下からは駒木を検出したことから水路構築当初に据え置かれたものと想定される。

2段目は自然礫を縦長に積み上げており、陶管敷設後の積み直しによる可能性が高い。

最上層は残存していなかった。

裏込め 小礫を含み、粘性のある黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石器、石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、550の陶管と攪乱からの出土であるが32の石斧を図化して掲載した。

所見 1区、48区は地下埋設物による攪乱が激しいが、両側面礫下では駒木を検出した。東西の駒木間は1.20mを測ることから、底面幅は1m前後と推定できる。

13区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、48区の南、天満宮南交差点より48.0mほどの地点。

調査範囲 東辺2.89m、西辺2.92m、北辺1.03m、南辺0.98mの長方形の範囲、2,929㎡を調査した。なお、調査区の西側2.5mほどは民地である。

検出状態 水路東寄り内部の一部と東側面石積み1段目、2段目と側面1段目礫下から駒木と駒木を固定する杭を検出した。

残存状態 最上層は失われていたが、1段目、2段目、裏込めは良好な状態であった。

規模 最上層が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.68m、石積み底面までは0.63mを測る。

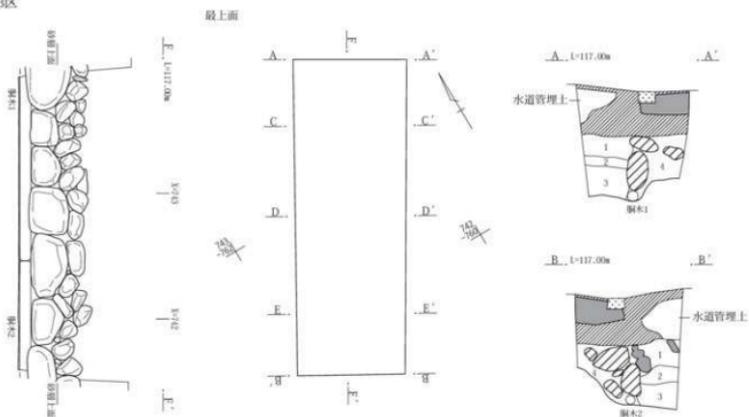
掘り方 底面から側面1段目下まではほぼ平坦掘り込み、1段目に配置した礫の奥から45°程の角度で立ち上げていく。底面の標高は115.79~115.78mを測る。

側面石積み下に駒木が置かれていた。駒木は南北に並べられた状態で2本検出した。駒木は径10~12cm、残存長は北側が1.8m以上、南側が1.1m以上である。北側の駒木は南端にホゾが作られており、建築部材を転用したとみられる。

側面状態 1段目は高さ25~35cm、幅30~50cm、奥行き20~30cmの比較的扁平な自然礫を横長に立てるように据え置いている。

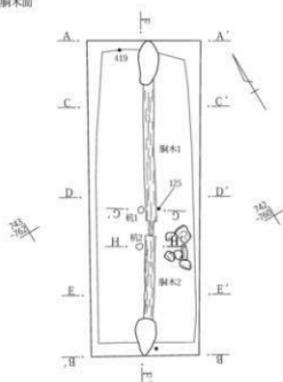
2段目は高さ10~15cm、幅20~30cmの自然礫を不規則に配している。他の調査区の様相から2段目はさらに1段の積み上げがあったことが想定できる。

13区

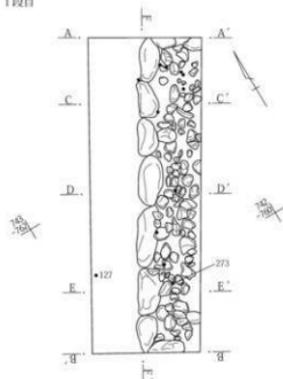


- 1 濃い黄褐色砂礫 埋土、コンクリート片を多く含む。
- 2 灰色砂 水路増積土、径1~2mmの砂を主体とする。
- 3 暗褐色砂礫 水路増積土、径1~2cmの礫を主体とし、径3~5cmの礫を多く含む。上部付近に鉄分凝集、下部に鉄分・マンガン凝集し硬く固結する。
- 4 黒褐色土 裏込め、径5~20cmの礫を非常に多く含む。

断面面



1段目

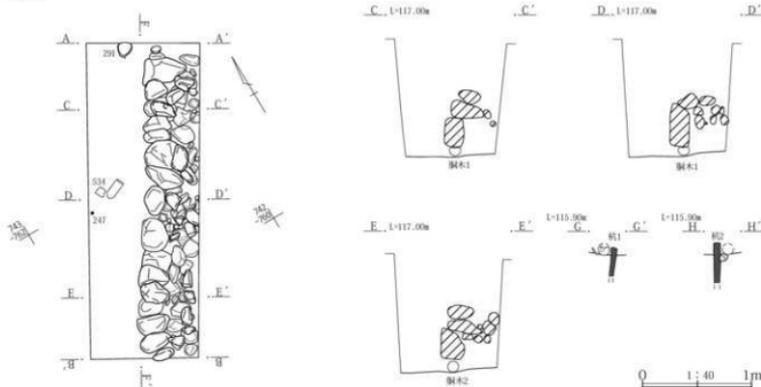


0 1:40 1m

第26図 13区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

2段目



第27図 13区道横図(2)

最上面は残存していなかった。

裏込め 石積みの裏込めは1段目下半にはあまり礫の含まれない黒褐色土、その上位には径5～15cmと比較的大きな礫を含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、土製品、ガラス、ビール瓶が出土している。このうち、裏込めから出土した242磁器端反碗、318瀬戸・美濃陶器染付皿、656ガラス製薬瓶、水路下層などから出土した135磁器小杯、460・121・127・221・312肥前磁器仏飯器・筒形碗・小碗・広東碗・皿などや613ガラス製菓子型、642化粧瓶、攪乱から出土した48文久永寶、213・肥前磁器端反碗蓋、322磁器皿、391瀬戸・美濃磁器碗、96磁器製玩具人形を図化して掲載した。

所見 13区は2段目上段から上が欠落していたが、掘り方から2段目下段までは良好な残存状態であった。また、裏込めの上半にやや大きな礫が含まれていた。

14区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、13区の南、天満宮南交差点より78.2mほどの地点。調査対象地西側中ほどで令和2年度調査の47区と重複する。

調査範囲 東辺2.57m、西辺2.57m、北辺1.12m、南辺

1.12mの長方形の範囲、2.8784㎡を調査した。

検出状態 調査区北寄りで、水路東寄りの一部と、東側壁の1段目石積み2石と、2段目の一部を検出したが、礫の下に陶管が敷設されており、構築当時の状態を保っていないとみられる。

残存状態 調査区の大部分が、近年の攪乱と陶管敷設による工事で水路の大半が消失し、東側面1段目がわずかに残る状態であった。なお、重複する14区では陶管敷設が確認されており、この区でも影響が見られた。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.95m、石積み底面までは0.60mを測る。

掘り方 攪乱と陶管敷設時の攪乱により不明。

側面状態 1段目の自然礫は存在していたが、陶管敷設後に再度積み直された可能性が高い。

2段目も1段目と同様である。

最上面は残存していなかった。

裏込め 側面状態で記したように積み直された可能性がみられることから、新たに充填されたとみられる。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち水路下層などから出土した230肥前磁器碗、206瀬戸・美濃磁器猪口

を図化して掲載した。

所見 側面1段目の礫が一部残存していたが、陶管敷設後に積み直されたものとみられる。

47区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、14区の南、天満宮南交差点より79.5mほどの地点。平成30年度調査の14区と重複する。

調査範囲 東辺0.56m、西辺0.65m、北辺1.67m、南辺1.65mの細長い鍵形の範囲、0.996㎡を調査した。なお、調査区の西側0.8mほどは民地である。

検出状態 水路西寄り的一部と西側面、裏込めの一部を検出した。

残存状態 側面を構築する礫の上部は民地になるため塀が建設されており、側面の礫を取り上げることができない状態であった。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.50m、石積み底面までは0.70mを測る。

掘り方 水路内部はほぼ平坦に掘り込まれている。1段目の礫を配する箇所は底面より段を残し、15cmほど高い位置になる。底面の標高は115.73mを測る。

側面状態 1段目は大型の自然礫と小型の自然礫が混在しており、陶管敷設後に積み直された可能性がみられる。

2段目は小型の礫で構築されているが、1段目の状態から積み直しによるものか。

最上面は残存していなかった。

裏込め 側面の礫に積み直しの可能性があることから、本来の状態ではないとみられる。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した399陶器湯飲み、444磁器殺物増加器、水路下層から出土した573ガラス製玩具を図化して掲載した。

15区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、14区の南、天満宮南交差点より97.5mほどの地点。

調査範囲 東辺3.12m、西辺3.12m、北辺1.02m、南辺1.03mの長方形の範囲、3.1824㎡を調査した。

検出状態 水路東側一部と東側面の1段目石積み、2段目石積みの一部、裏込めの一部を検出したが、北から1.35

～1.75mにかけて礫の下で埋設物と埋設物に伴う溝状の掘削跡が確認され、この上に位置する礫は原位置を保っていないと判断される。また、水路内には1段目と同等か、やや大きな礫が出土したが、どこに使用した礫かは不明であった。水路底面の標高は115.46～115.41mを測る。

残存状態 最上面と2段目上半または一部の礫は失われている。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.68m、石積み底面までは0.64mを測る。

掘り方 水路底面はほぼ平坦に掘られているが、裏込めは緩やかな傾斜で立ち上がっている。なお、1段目礫下からは胴木の一部と、胴木を据え置いた跡跡が溝状に残った状態を検出した。なお、胴木は径10cm前後であったとみられる。その中で胴木自体が埋設物の上位でわずかに残存していた。この状態は埋設物敷設の際に、胴木を取り除かないで胴木の下を掘削して埋設物を設置したとみられる。

側面状態 1段目は高さ20～30cm、幅25～45cm、奥行き30～40cmの自然礫を横長に据え置いている。

2段目は1段目よりやや小型の自然礫を斜めや縦長に積み上げている。なお、埋設物上では積み直しが行われたとみられるが、ほぼ同じ積み上げ方のためか積み直した範囲は不明である。

最上面は残存していなかった。

裏込め わずかに小礫を含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、プラスチック製玩具、菓子包装袋が出土している。このうち、側面石積みの中から出土した6石製品碗、裏込めから出土した147・475瀬戸・美濃磁器青磁染付碗・灯火皿、417陶器蓋、水路から出土した254九谷磁器平碗、452益子・笠間陶器すり鉢をはじめとする陶器、640ガラス製化粧瓶を図化して掲載した。

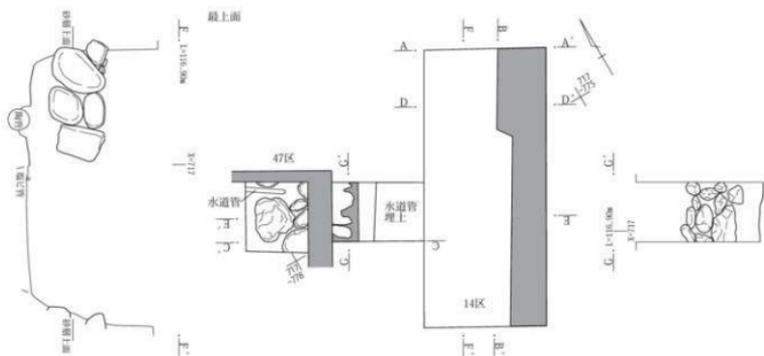
46区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、15区の南、天満宮南交差点より103.7mほどの地点。

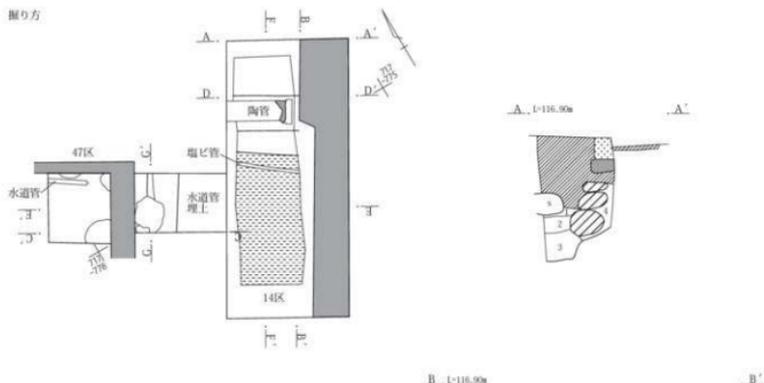
調査範囲 東辺0.53m、西辺0.56m、北辺0.83m、南辺

第3章 検出遺構と出土遺物

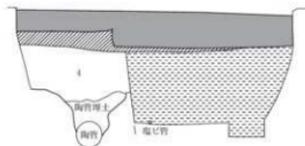
14・47区



掘り方

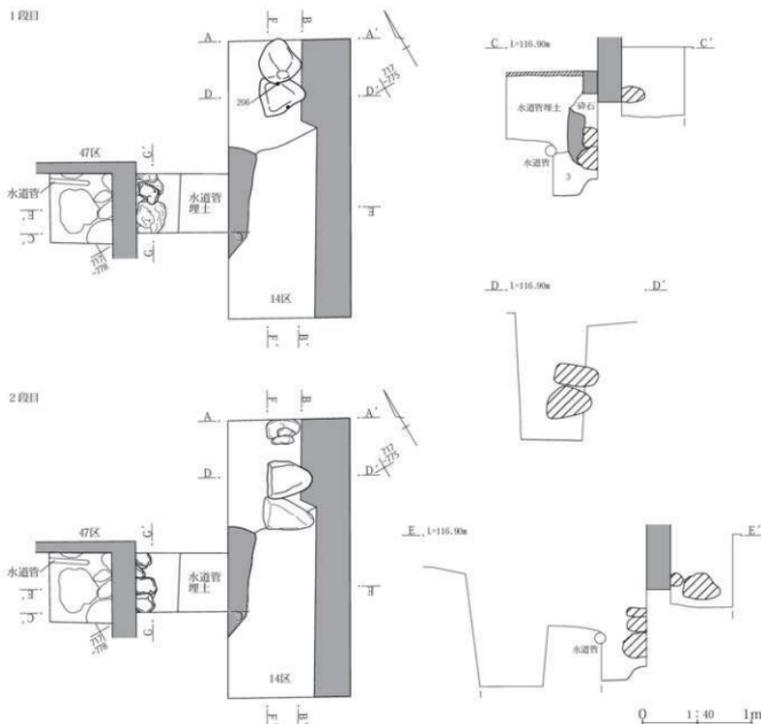


- 1 ぶい・黄褐色砂礫 埋上、コンクリート片を多く含む。
- 2 灰色砂 水路堆積上、径1～2mmの砂を主体とする。
- 3 暗褐色砂礫 水路堆積上、径1～2cmの礫を主体とし、径3～5cmの礫を多く含む。上部付近に鉄分凝集。
- 4 暗褐色土 裏込め、やや砂質、径5～15cmの礫をやや多く含む。



0 1:40 1m

第28図 14・47区遺構図(1)



第29図 14・47区道構図(2)

0.86mの東西方向の長方形の範囲、0.4605m²を調査した。

検出状態 水路西側、西側壁の石積みを検出した。調査区の西端から0.5mほどは水道管敷設によって調査できなかった。また、側面に使用されている礫の一部は民地にかかり、境界には塀が構築されているため、側面の礫を取り外しての調査には至っていない。

残存状態 水道管が現地表面(アスファルト舗装)より0.6mほどの深さに敷設されていたが、その下部は残存していた。側面は水路構築当初の河床礫から御影石によるものに造り替えられていた。

規模 側面石積み上方面から底面までの深さは1.10m、石

積み底面までの深さは1.00mである。

掘り方 水路底面はほぼ平坦であった。側面礫下は調査ができなかったため不明である。水路底面の標高は115.32~115.33mを測る。

側面状態 角柱状に加工された御影石が交互に3段積み上げられていた。御影石は高さ30cm、幅40cm以上、奥行き15cm以上のものである。

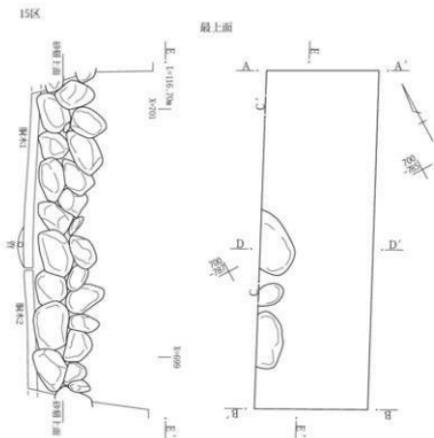
裏込め 石積みを取り外すことができないため調査に至っていない。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土しているが、図化できるものは

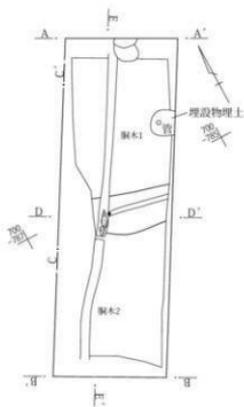
第3章 検出遺構と出土遺物

15区、46区

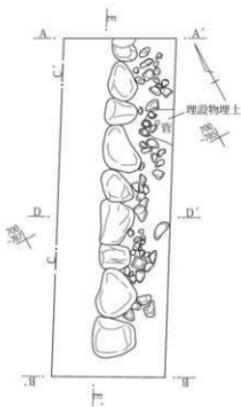
X-46701									
X-46700									
X-46699									
X-46698									
X-46697									
X-46696									
X-46695									
	Y-43780	Y-43788	Y-43797	Y-43796	Y-43785	Y-43794	Y-43783		



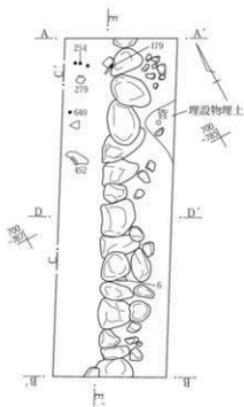
断面面



1段目



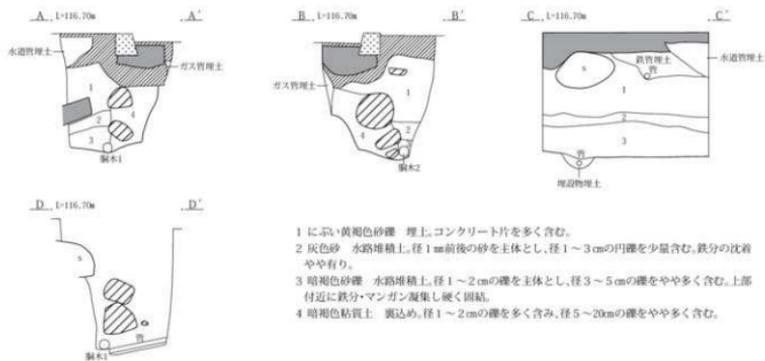
2段目



0 1:40 1m

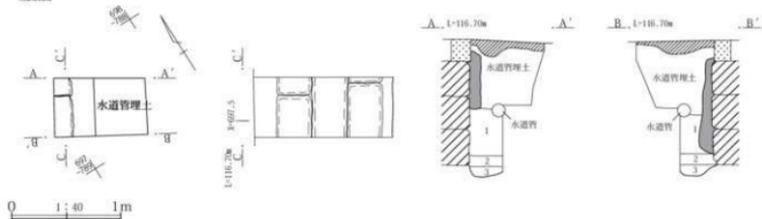
第30图 15区、46区遺構图(1)

第3節 検出した水路の道構



46区

最上面



第31図 15区、46区道構図(2)

出土していない。

所見 側面の造り替えは桐生市教育委員会の発掘調査の見解では大正期とされており、御影石の加工技術とも一致する。

16区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、46区の南、天満宮南交差点より113.6mほどの地点。

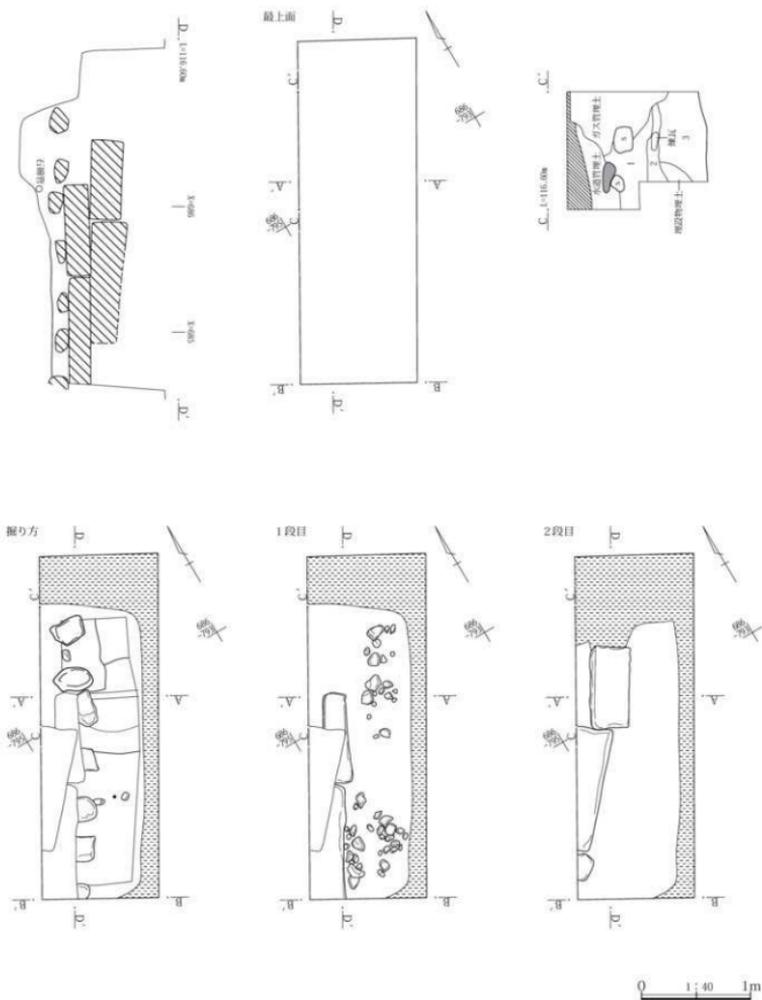
調査範囲 東辺3.17m、西辺3.17m、北辺1.09m、南辺

1.06mの長方形の範囲、3.3602㎡を調査した。

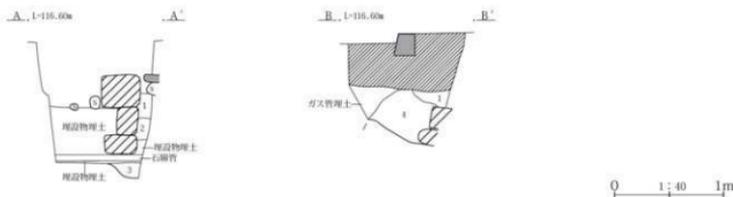
検出状態 東側面と側面裏込めを検出、水路内部は一部で側面深さ10cmほどを調査したが、底面下位に埋設物が敷設されており、水路内部の堆積状態をそのまま反映しているか判断としていない。

残存状態 調査区の3割以上は攪乱を受けており、その部分は調査を実施していない。側面は水路構築当初の河床礫から御影石によるものに造り替えられていた。側面を構築している礫は造り替えの状態ではなく、水路側に

16区



第32図 16区遺構図(1)



A-A' B-B'

1 に近い黄褐色砂礫 埋土。コンクリート片を多く含む。

2 灰色砂 水路堆積土。径1mm前後の砂を主体とし、径1～3cmの円礫を少量含む。鉄分の沈着やや有り。

3 褐色砂礫 水路堆積土。径3～10cmの礫を非常に多く含む。下部に鉄分・マンガンを凝集する。

4 暗褐色粘質土 裏込め。径5～10cmの礫をやや多く含む。

C-C'

1 に近い黄褐色砂礫 埋土。コンクリート片を多く含む。

2 灰色砂 水路堆積土。径1mmの砂を主体とし、径1～10cmの円礫を含む。鉄分の沈着やや有り。下部に鉄分・マンガンを凝集する。

3 暗褐色砂礫 水路堆積土。上部付近に鉄分凝集。径1～2cmの礫を主体とし、径3～5cmの礫をやや多く含む。

第33図 16区遺構図(2)

押し、原位置を保っていない。

規模 側面石積み上面から底面までの深さは0.97m、石積み底面までの深さは0.80mである。

掘り方 側面礫下はごく緩やかな傾斜であるが、礫の裏から30°ほどの傾斜で立ち上がる。

側面状態 46区と同様に加工された御影石に造り替えられているが、東側面での積み直しを確認したのはこの区だけであった。

1 段目は当初の河床礫を10～20cmほど間隔をあけて高さ10cm、幅20cm前後の自然礫を据え置いている。

2 段目は高さ各20cm、幅85cmと105cm以上、奥行き各20cmの加工された御影石を2石積み上げている。

最上面は高さ各30cm、幅80cmと105cm、奥行き各30cmの加工された御影石を2石積み上げている。このうち、北側のものは造り替え時とほぼ同じ位置を保っていたため、取り上げが可能であったが、南側のものは水路側に押された状態であったため、一部が調査区外に存在しており、取り上げることはできなかった。

裏込め 側面の礫の積み直しが行われているため、本来の裏込め土が残るか不明であったが、径5～10cmの礫を含む暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土していたが、図化できるものは出土していない。

45区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、46区の南、天満宮南交差点より123.5mほどの地点。東側中央では平成30年度調査の17区の西側1/4が重複する。

調査範囲 東辺1.57m、西辺1.62m、北辺1.63m、南辺1.63mの方形に近い範囲、2.608m²を調査した。

検出状態 水路西側面寄り、西側面も石積みとその裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路は調査区の東側0.6mほどは水道管敷設のため調査できなかったが、西側面寄り下部は、水路堆積土が残存していた。西側面は近代に角柱状に加工された御影石に積み替えられた状態が残っていたが、水路側は15cmほどコンクリートで固められていた。

規模 側面石積み上面から底面までの深さは1.01m、石積み底面までの深さは0.97mである。

掘り方 調査区内では水路底面から裏込めまでほぼ平坦に掘削されていた。水路底面の標高は115.25mを測る。

側面状態 1段目から2段目、最上面まで一辺30cm、長さ100cmほどの角柱状に加工された御影石を横長、交互に積み上げている。なお、2段目北側の礫は他の礫に比べ幅が25cmと狭い。なお、側面を構築する御影石については発掘調査時に1段目中、2段目、最上面のものについて採掘を行っているので第36・37図に掲載した。

裏込め 調査区外に延びるため詳細は不明であるが、調

第3章 検出遺構と出土遺物

査区内では平坦に掘削され、側面石積みの裏込めとして大きな礫を含む暗褐色粘質土が充填されていた。45区では側面礫を自然礫から御影石に積み替えられた際、裏込め土に自然礫の一部を混ぜたとみられる。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、煉瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した313肥前磁器皿、136磁器小杯、水路下層から出土した267磁器平碗、447陶器蓋、538ノップ罌子、495在地系土器植木鉢、620ガラス製洋酒瓶、攪乱より出土した31用途が明確にできなかった大型石製品を図化して掲載した。この大型石製品は石桶(溝蓋)の一部との想定もできるが、裏面端部にホソ穴状の加工が施されていることから他の用途に使用されていたとみられる。なお、加工の状態から近代のものだと判断され、側面が自然石から御影石に積み替えられたとき、持ち込まれたとみられる。

所見 側面は御影石によって構築されていることから大正期に積み替えが行われたとみられる。

17区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、46区の南、天満宮南交差点より124.0mほどの地点。東側中央では令和2年度調査の45区と水路中ほどが重複する。

調査範囲 東辺0.95m、西辺0.90m、北辺1.50m、南辺1.50mの東西方向の長方形の範囲、1.3875㎡を調査した。

検出状態 水路東側面側20cm、東側面の石積みとその裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路は西側を水道管敷設、東側面石積みは最上面が残存していなかった。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.85m、石積み底面までは0.80mを測る。

掘り方 水路底面は緩やかな弧状、裏込めは50cmほどの段を造る。

側面状態 1段目は高さ40cm前後、幅30～50cmの奥行き30cm前後の大型の礫を据え置いている。

2段目は1段目より小規模な礫を不規則に積み上げている。

最上面は水路埋め立てから、歩道設置の舗装の際に取

り除かれたとみられる。最上面取り除きの際に2段目の礫も水路側に若干動いている。

裏込め 径3～5cmほどの小礫を含む暗褐色粘質土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土しているが、図化できるものは出土していない。

所見 45区と17区は調査区が重複していることから、水路幅の復元が可能であった。図面上からは水路幅1.00mと相生市教育委員会による調査結果より幅が狭いが、これは西側面が河床礫から御影石に積み替えられたことによるとみられる。

18区北(平成30年度)

位置 本町一丁目、17区の南、天満宮南交差点より130.3mほどの地点。18区は1mほどの間隔をあけて調査区が存在する。近接する調査地点のため、別な区にせず北・南に細分した。

調査範囲 東辺1.23m、西辺1.23m、北辺1.00m、南辺1.04mの南北方向の長方形の範囲、1.2546㎡を調査した。

検出状態 水路内部は東側面寄り20cm、区中央で東側面石積み1段目と2段目下半、区東寄りで裏込めと裏込め掘り方を検出した。

残存状態 区西側は攪乱によって東側面石積みは残存していなかった。また、中央も2段目上半より上位は水路埋め戻しによって攪乱されている。水路内部も同様な状態とみられるが、下層は水路堆積土が残存していた。裏込めは上半が攪乱を受けていたが、下半は残存していた。

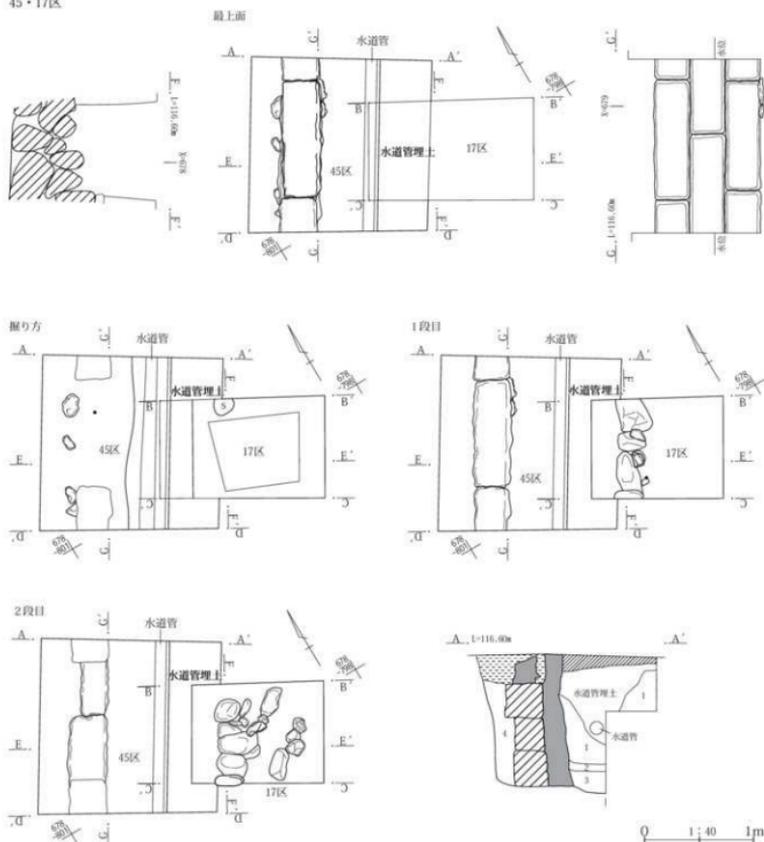
規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.50m、石積み底面を検出していないため計測できない。

掘り方 水路底面は緩い弧状、裏込めは50cmほどの段を造るとみられるが、不鮮明であった。

側面状態 1段目は0.9mほどの長さ、側面を造る自然礫が2石と小礫が数個残存していた。中央は水路底面まで掘削が及ばなかったため、礫の高さは計測できないが、幅は40cm、奥行き30cmほどであった。

2段目は1段目より残存状態が良好で1.0mほど残存していた。このため当初からの石積みであるか判然とし

45・17区



A-A' D-D'

1 にふい・黄褐色砂礫 埋土,コンクリートを含む。

2 黒褐色砂 水路埋積土,径1~2mmの砂を主体とし,径2cm前後の円礫を少量含む,鉄分の沈着やや有り。

3 暗褐色砂礫 水路埋積土,径1~5mmの礫,砂礫を多量に含む。

4 暗褐色粘質土 裏込め,径10~30mmの礫を多量に含む。

B-B' C-C'

1 にふい・黄褐色砂礫 埋土,コンクリート片を多く含む。

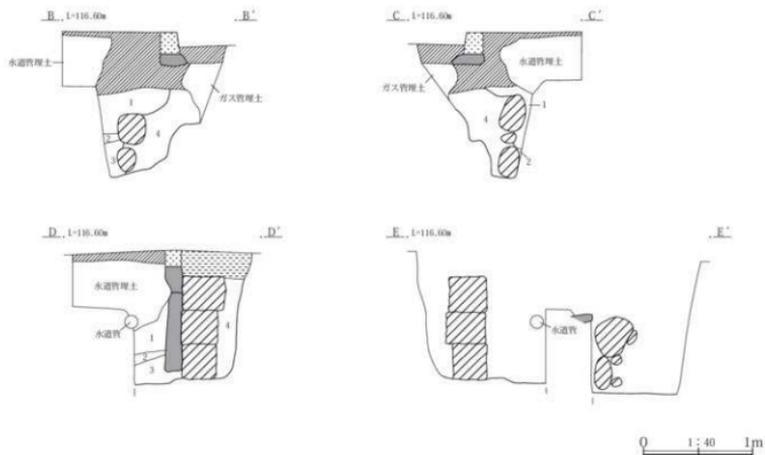
2 黒褐色砂 水路埋積土,径1~2mmの砂を主体とし,径2cm前後の円礫を少量含む,鉄分の沈着やや有り。

3 暗褐色砂礫 水路埋積土,径3~5mmの礫を主体とし,径2~3cm前後の円礫を少量含む,鉄分の沈着強い。

4 暗褐色粘質土 裏込め,径3~5mmの円礫をやや多く含む。

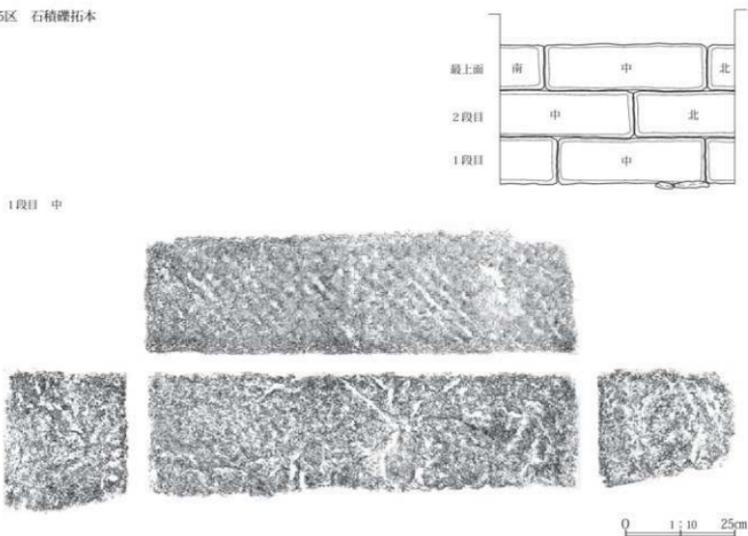
第34図 45・17区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物



第35図 45・17区道構図(2)

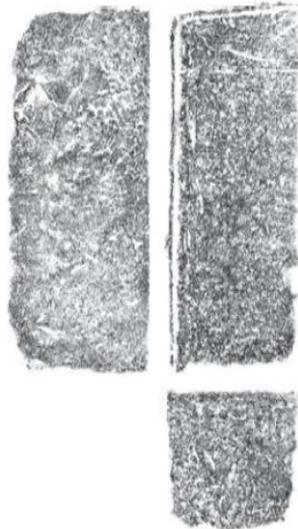
45区 石積礎拓本



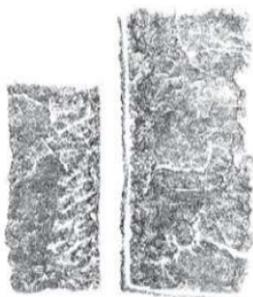
第36図 45区石積礎拓本(1)

2 PRT

中

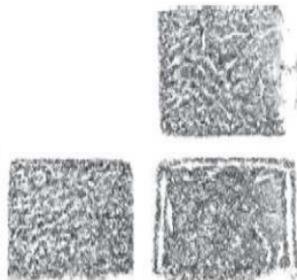


北

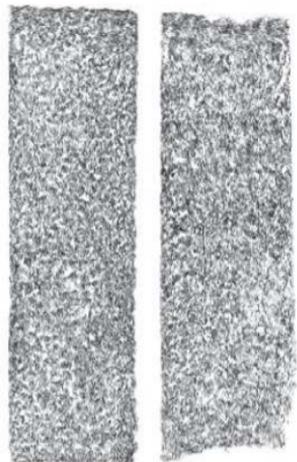


最上面

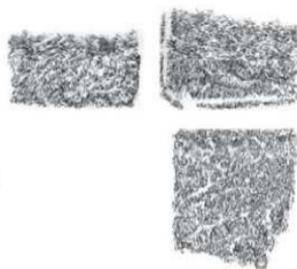
南



中



北



第3節 検出した水路の道構

0 1:10 25mm

第377図 45区右横断拓本(2)

第3章 検出遺構と出土遺物

ない。自然礫は1段目よりやや小ぶりなもので4石が確認されている。

最上面は残存していなかった。

裏込め 下半が残る程度で、径3～5cmほどの小礫を含む暗褐色粘質土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土している307・214・229・362肥前磁器皿・広東碗蓋・碗・青磁染付鉢を図化して掲載した。

18区南(平成30年度)

位置 本町一丁目、18区北の南、天満宮南交差点より132.7mほどの地点。北西部では令和2年度調査の44区と水路内部中ほど重複する。

調査範囲 東辺0.94m、西辺0.94m、北辺0.98m、南辺1.02mの方形に近い範囲、0.94㎡を調査した。

検出状態 水路内部は東側面寄り20cm、東側面石積み1段目と2段目下半、区東寄りで裏込めと裏込め掘り方を検出した。

残存状態 東側面石積みは最上面と2段目を欠くが、1段目は比較的良好な状態であったが、南端は石積みの礫が抜け、水路埋め戻し土が流れ込んでいた。

規模 最上面が残存していなかったため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.48m、石積み底面までは0.60mを測る。

掘り方 裏込め掘り方は急傾斜で立ち上がるため、掘り方面まで達していないとみられる。水路底面の標高は115.06mを測る。

側面状態 1段目は7区と同様な積み方をしているとみられるが、基礎に置かれた加工された礫は高さ20cm、幅40cm、奥行き15cmと小ぶりである。その上位に角状に打ち欠かれた礫4石を据え置いている。北に置かれた礫がやや大きく高さ30cm、幅40cm、奥行き25cm、その南側2石は高さ30cm、幅30cm、奥行き25cmである。

2段目は残存していなかった。

最上面は残存していなかった。

裏込め 径3～5cmほどの小礫を含む暗褐色粘質土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、攪乱から

の出土であるが、224肥前磁器碗を図化して掲載した。

所見 礫の積み方から、埋設物を敷設後再度積み直したとみられるが、調査区が狭いため下位の調査に至らず、断定できていない。

44区(令和2年度)

位置 本町一丁目、18区北の南、天満宮南交差点より132.6mほどの地点。南東部では平成30年度調査の18区南と水路内部中ほど重複する。

調査範囲 東辺0.65m、西辺0.67m、北辺0.82m、南辺0.82mの東西方向の長方形の範囲、0.5412㎡を調査した。

検出状態 水路内部、下層と西側面最上面の御影石を確認した。

残存状態 水路内部は上部を水道管の敷設によって攪乱を受けていたが、下部は水路堆積土を確認した。側面は当初、検出できなかったが、調査を進めるなか、調査区西壁で石積み最上面に付着していた土砂がはがれ、最上面の礫を確認することができた。

規模 最上面から水路底面までの深さは1.18mを測る。

掘り方 水路平面はほぼ平坦である。水路底面の標高は115.05～115.07mを測る。

側面状態 1段目及び2段目は検出には至らなかった。最上面は調査区境で高さ25cm、幅60cmの角柱状に加工された御影石を確認した。

裏込め 検出には至らなかった。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路上層から出土した604ガラス製文具インク瓶、681ガラス製瓶を図化して掲載した。

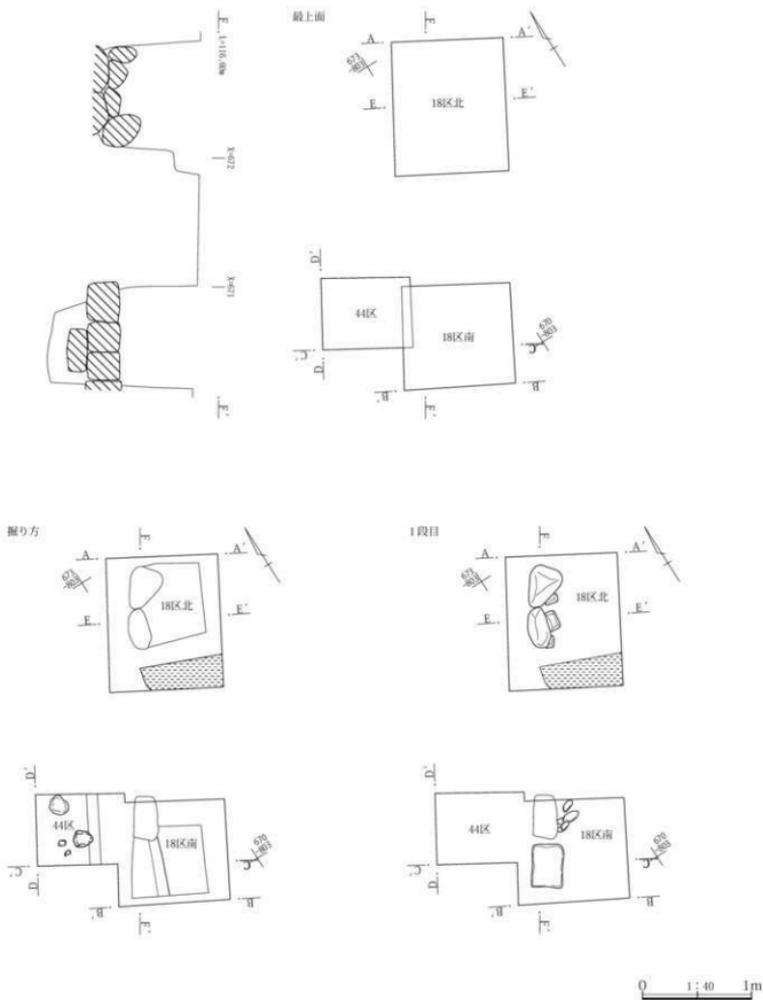
所見 西側面の石積みは御影石であることから、公道と民地境に柵を構築するために46区や47区と同様に積み直しを行ったとみられる。

なお、18区と44区では相対する東西側面を検出したが、ここでの水路幅は0.90mと、桐生市調査で検出した両側面間1.20mより狭い。これは18区南、44区の側面とも積み直しが行われていることから、積み直しの際に幅が狭くなったとみられる。

19区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、18区南の南、天満宮南交差点より

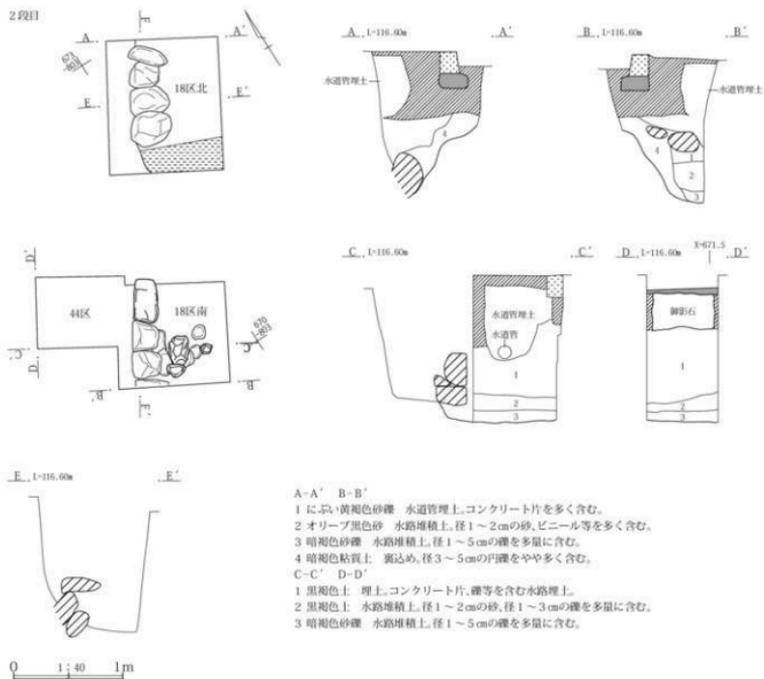
18・44区



第38図 18・44区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

2段目



A-A' B-B'

- 1 濃い黄褐色砂礫 水道管埋土、コンクリート片を多く含む。
- 2 オリーブ黒色砂 水路堆積土、径1～2cmの砂、ビニール等を多く含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路堆積土、径1～5cmの礫を多量に含む。
- 4 暗褐色粘質土 裏込め、径3～5cmの円礫をやや多く含む。

C-C' D-D'

- 1 黒褐色土 埋土、コンクリート片、礫等を含む水路埋土。
- 2 黒褐色土 水路堆積土、径1～2cmの砂、径1～3cmの礫を多量に含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路堆積土、径1～5cmの礫を多量に含む。

第39図 18・44区道構図(2)

160.1mほどの地点。

調査範囲 東辺1.50m、西辺1.50m、北辺1.50m、南辺1.50mの方形の範囲、2.25mを調査した。

検出状態 水路内部は東側面寄り60cm、区東寄りで東側面石積み1段目と2段目、裏込めと裏込め掘り方の一部を検出した。

残存状態 区西寄りは水道管敷設、区東端はガス管敷設により攪乱を受けている。最上面の礫は取り除かれた状態であった。

規模 最上面が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.42m、石積み底面までは0.64mを測る。

掘り方 水路底面は側面底面より30cmほど掘り込まれており、標高は114.92～114.96mを測る。側面底面から裏込めが残存している範囲の底部はほぼ平坦である。側面礫下では駒木痕を空洞状態で検出した。駒木痕は断面が四角形を呈し、一辺7～8cmを測る。駒木痕の西側では駒木を固定するために撃ち込まれた杭を4本検出したが、その間隔は不均等で3・4とした杭はほぼ隣り合った状態であった。杭は径8cm前後、残存長15～20cmである。

側面状態 1段目高さ15～20cm、幅20～30cm、奥行き30～40cmの河床礫を4石据え置いている。

2段目は1段目より扁平で小ぶりな自然礫を縦長が斜

第3章 検出遺構と出土遺物

めに積み上げている。

最上層は残存していなかった。

裏込め 径3～5cmほどの小礫を含む暗褐色粘質土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した56・60・62—錢硬貨、664ガラス製日常生活瓶、181相馬陶器湯飲み、422・333・431・493磁器瓶・小皿・段重・植木鉢、505在土器練炭おこし、520磁器製戸車、595ガラス製玩具を図化して掲載した。掲載していないものの中に、水路埋め戻し土上位より、清涼飲料水や牛乳の空瓶が出土している。

所見 19区の胴木には、他の区と異なり角材が使用されていた。

20区(平成30年度調査)

位置 本町一丁目、19区の南、天満宮南交差点より172.0mほどの地点。

調査範囲 東辺1.18m、西辺1.18m、北辺1.20m、南辺1.20mのほぼ方形に近い範囲、1.416㎡を調査した。

検出状態 水路内部は東側面寄り30cm幅の範囲、東側面石積み1段目と2段目の一部、裏込めと裏込め掘り方の一部を検出した。

残存状態 側面の石積みは北側半分が壊され、水路内に構築材の礫が散乱した状態であった。

規模 最上層が残存していないため、2段目残存部上面から水路底面までの深さは0.70m前後、石積み底面までは0.60mを測る。

掘り方 水路底面は側面掘り方より7～8cmほど掘り込まれており、標高は114.90mを測る。側面の礫でも平坦に掘り込まれているが、胴木の痕跡は確認できなかった。しかし、南北両端の断面では北側で19区と同様な角材の痕跡、南側では丸太材の痕跡が確認できた。なお、角材は一辺8cm、丸太材は径7cmであった。

側面状態 側面は北側が壊された状態で、1段目は1石が残存するだけであった。

2段目は南端に残る礫は当初のものと思われるが、調査区内のものは南寄りのもの以外はすでに移動している可能性が窺えた。

最上層は残存してしていなかった。

裏込め 大部分をガス管敷設で攪乱されているが、残存範囲では径3～5cmほどの小礫を含む暗褐色粘質土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した239瀬戸・美濃磁器碗、238磁器碗、水路下層から出土している145瀬戸・美濃陶器碗、149陶器碗、590・591ガラス製玩具を図化して掲載した。

43区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、20区の南、天満宮南交差点より220.1mほどの地点。

調査範囲 東辺0.66m、西辺0.66m、北辺1.68m、南辺1.68mの東西方向に長い長方形の範囲、1.1088㎡を調査した。

検出状態 高さ36cm、幅35cm、奥行き28cmと高さ30cm、幅15cm、奥行き15cmの礫と小礫1石を検出したが、下記のような状態のため側面を構築していた礫が再び戻されたとみられる。

残存状態 上部を水道管敷設による攪乱、西側面石積み下も礫を取り上げた下から直交する方向でガス管を確認したことから、水路・側面石積みはすべて攪乱によって残存していないことが確認できた。

規模 計測できる箇所が存在していなかった。

側面状態 埋設物敷設により側面石積みは取り除かれ、埋め戻しに一部の礫が使用されたとみられる。

出土遺物 調査区はすべて攪乱と判断される。陶磁器などが出土しているが、図化できるものはなかった。

所見 調査区内は水道管、ガス管の敷設による攪乱で水路遺構は残存していない。

21区(令和元年度調査)

位置 本町一丁目、43区の南、天満宮南交差点より226.0mほどの地点。

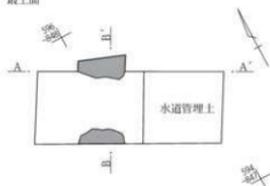
調査範囲 東辺19.08m、西辺19.17m、北辺1.68m、南辺1.55mと細長い矩形の範囲、30.7832㎡を調査した。両側面を同時に調査した唯一の調査区である。

検出状態 両側面を同時に調査した唯一の調査区である。水路内部と東側面石積み、調査区北端から0.4～3.5mの範囲で西側面石積み、北端から5.5～9.6mの範囲で水

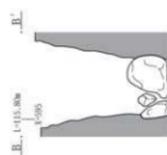
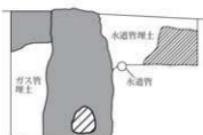
第3章 検出遺構と出土遺物

43区

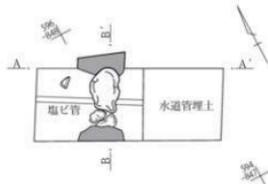
最上面



A. L=115.80m



1段目



0 1:40 1m

第42図 43区道橋図

路上面に掛けられた石橋(溝蓋)を検出した。西側面石積みは水道管保護のため、2段目中段までの深さの掘削に留めた。

石橋は4.1mの間に9枚の礫が水路上に掛けられていた。このうち北から7枚目はコンクリート製のものに替えられていたが、残りは花崗岩を加工したもので、長さ150~155cm、幅35~53cm、厚さ17~20cmであった。

残存状態 水路内部は西半を水道管敷設による攪乱、西側面には残存する石積みの南側から13m付近までは、西側面にコンクリートを吹き付けられているか、コンクリート製に造り替えられたため取り除かれているとみられる。東側面も北端から17mに電柱が建てられていた。また、石橋南側から電柱間は最上面が取り除かれ、電柱南側は2段目上段も取り除かれた状態であった。

規模 両側面を検出した間での水路幅は北側で1.0m、南側で1.10mを測る。最上面が残存する範囲での、石積み上面から水路底面までは87~89cmを測る。水路底面の標高は114.47~114.36mを測る。

掘り方 水路底面から石積み裏面まで、平坦な箇所と石積み中ほどで段を造る箇所、石積み下で斜めに立ち上がる箇所とさまざまであった。石積み下では北端から電柱までの間で胴木、胴木痕を残存している。また、胴木を

固定する杭痕も8カ所で検出した。胴木は自然木の枝を払って丸太を利用している。胴木の径は5cm前後、残存する長さは1.2~1.8mほどであった。

側面状態 1段目高さ30~40cm、幅40~50cm、奥行き30~50cmの大ぶりな河床礫が主に使われていたが、北から10m付近より南は小ぶりな礫を使用し、2段目に大ぶりな礫を積み上げている。

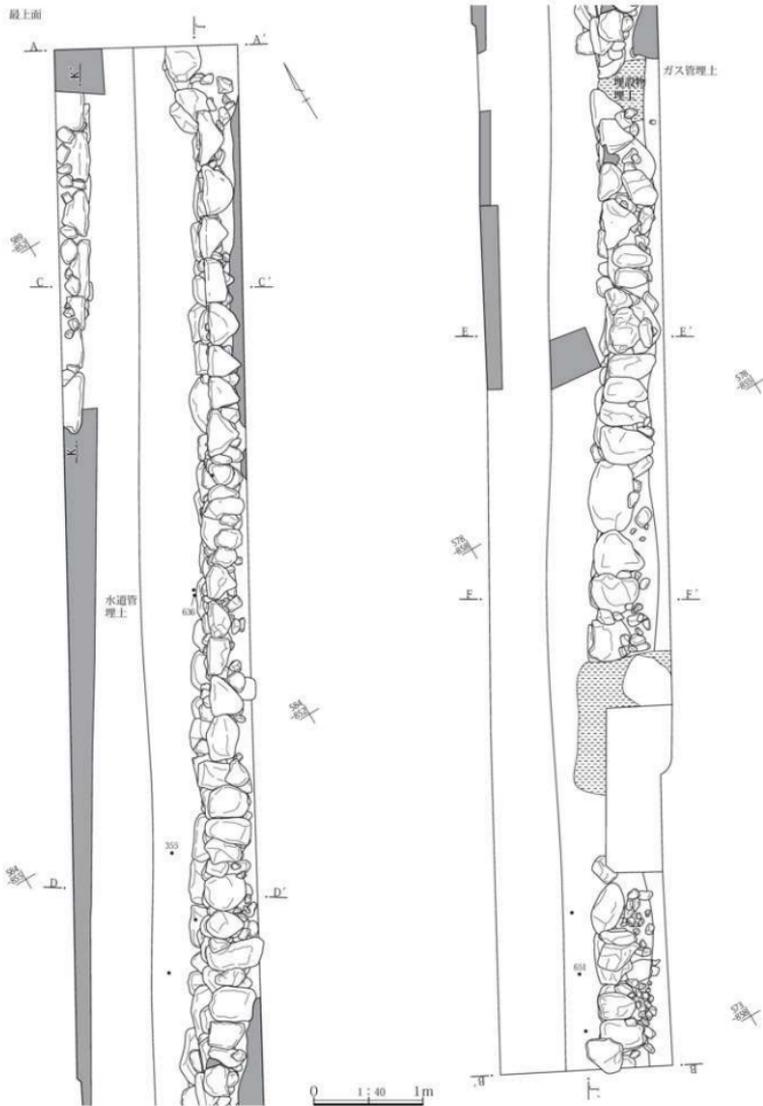
2段目は北から5m付近までは小ぶりな礫が主であるが、それより南は1段目より大ぶりな礫を積み上げている。また、北から5m付近は1段の積み上げに対し、それより南では2段の積み上げになる。

最上面が良好に残る数少ない調査区である。残存する範囲は北端0.6mから石橋が残存するまでの間である。ここに使用されている礫は高さ25~40cm、幅30~50cm、奥行き30~50cmのものである。これらの礫は上面を平坦にするためや、側面側を整えるためか垂角礫や割られたものが多くみられる。

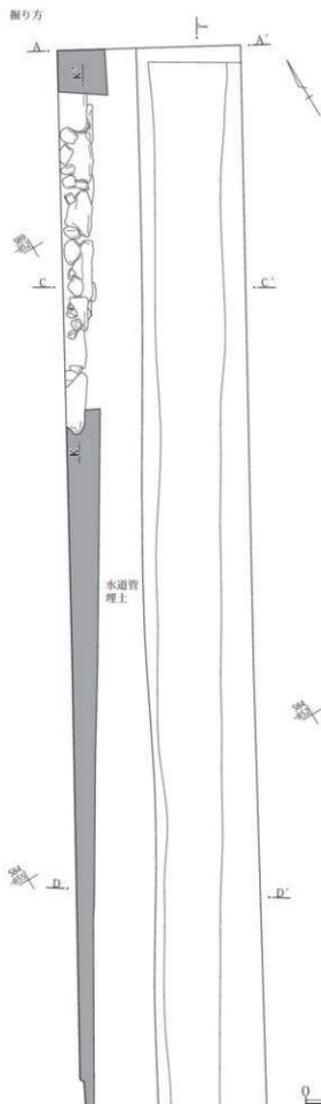
裏込め 調査には至っていないが、側面石積みの礫を取り上げた後の様子を見ると、径5~10cmの礫を多く含んだ黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、袋塚の袋が出土している。このうち、

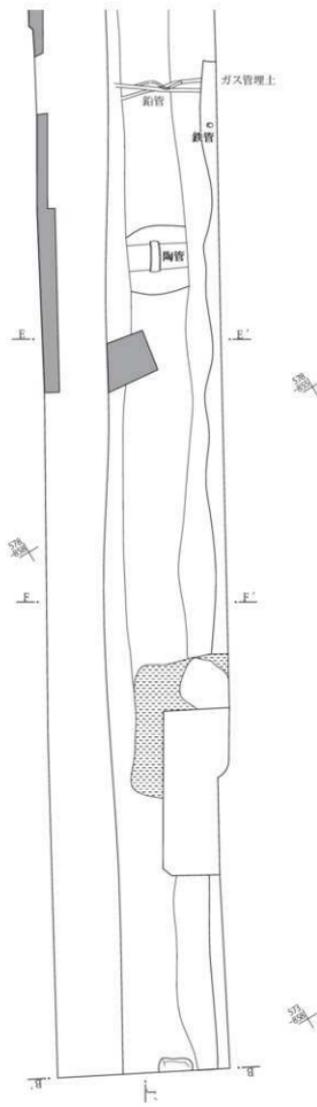
第3章 検出道構と出土遺物



第44図 21区道構図(2)



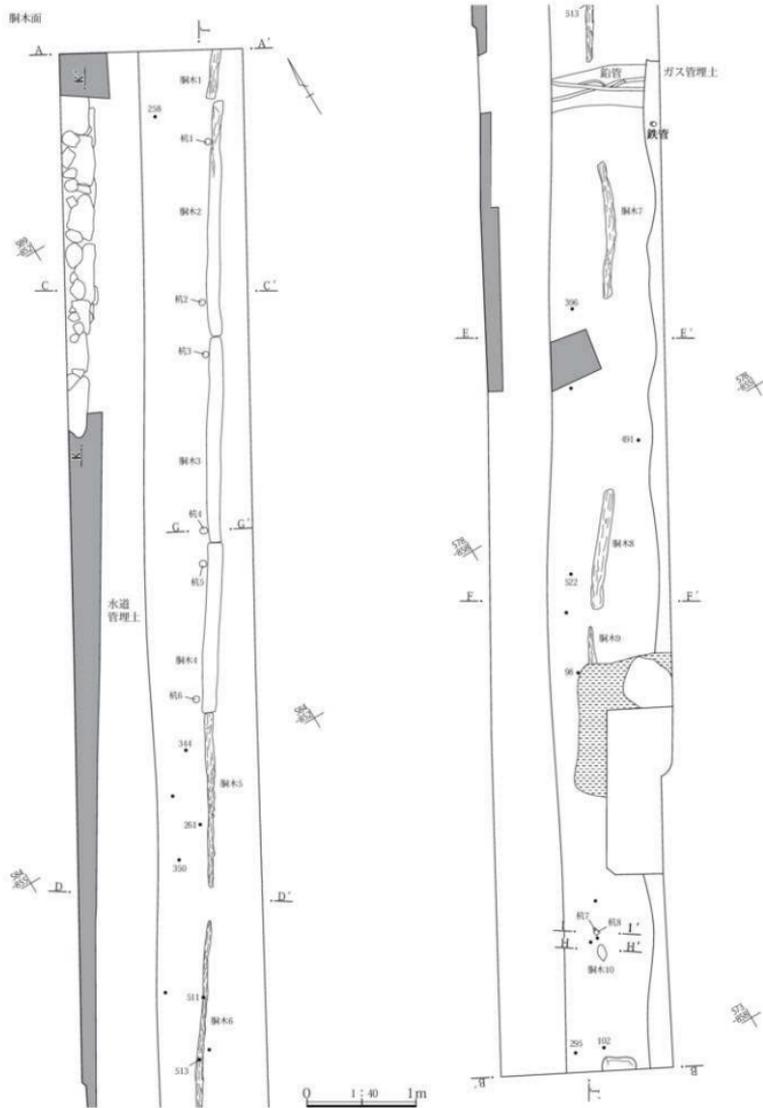
第3節 検出した水路の道構



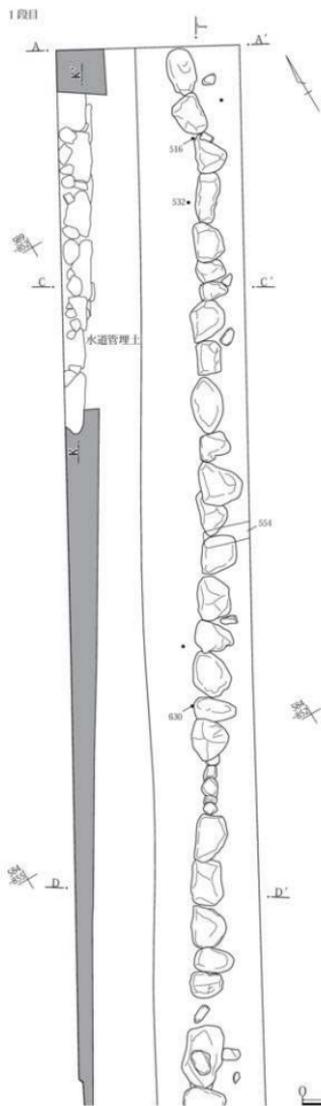
0 1:40 1m

第45図 21区道構図(3)

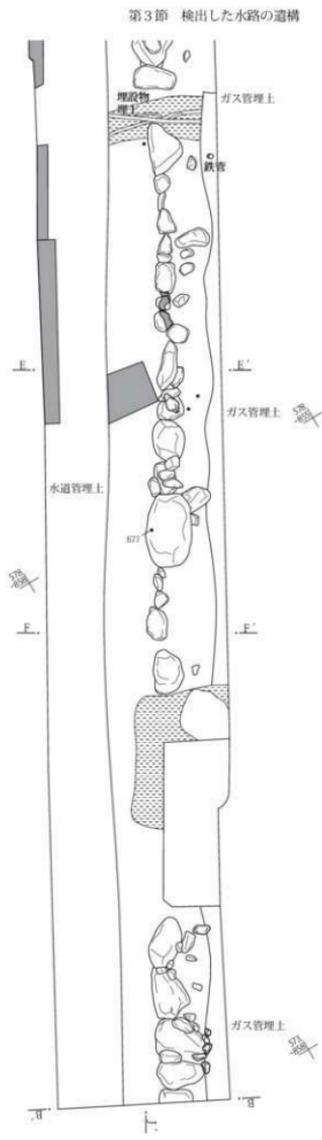
第3章 検出道構と出土遺物



第46図 21区道構図(4)

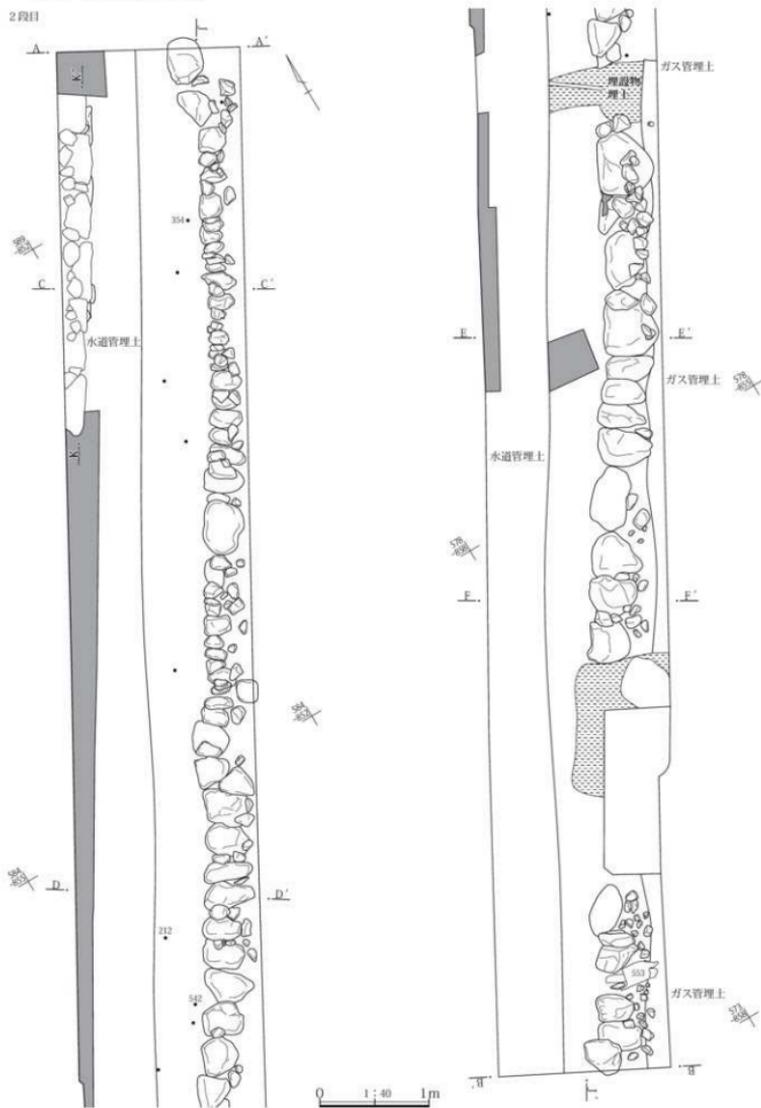


第47図 21区道構図(5)



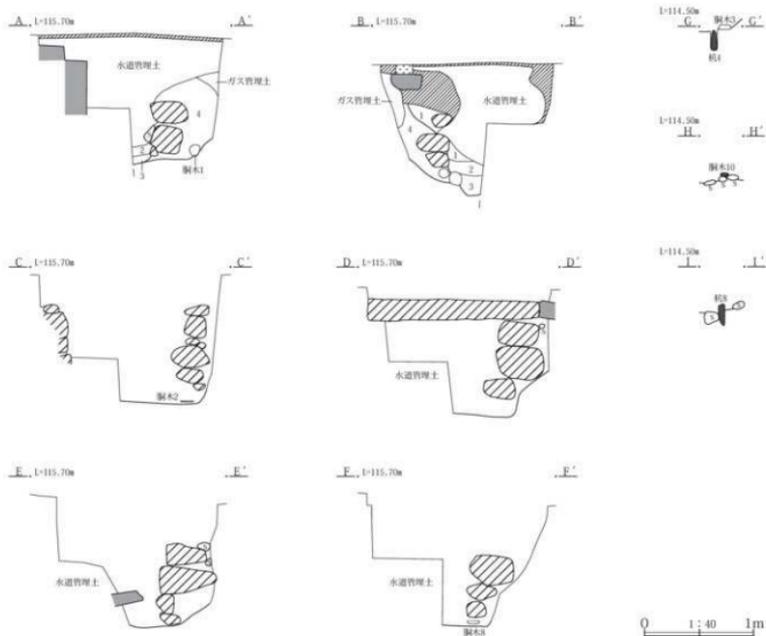
第3章 検出道構と出土遺物

2段目



第48図 21区道構図(6)

第3節 検出した水路の道構



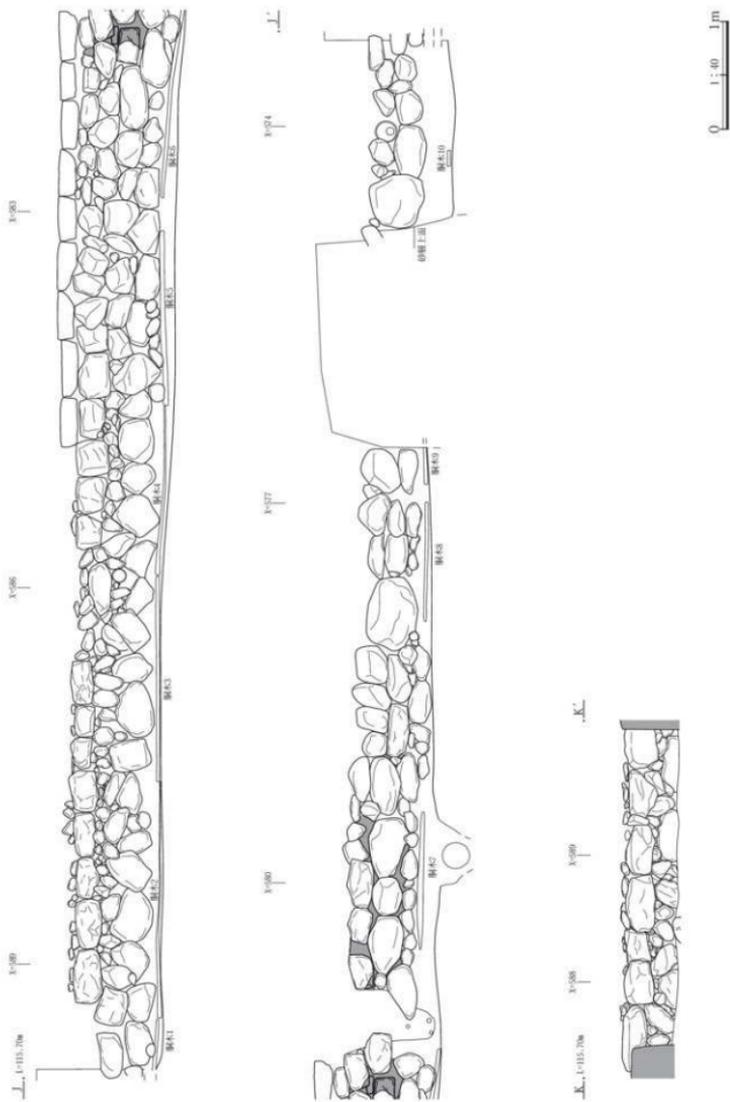
- 1 黒褐色土 埋土、コンクリート片を多く含む。
- 2 褐色砂 水路堆積土、礫をほとんど含まない。
- 3 褐色砂礫 水路堆積土、鉄分の沈着著しい、径3~10cmの礫を多く含む。
- 4 暗褐色土 裏込め、径5~15cmの礫を非常に多く含む、空隙あり。

第49図 21区道構図(7)

裏込めから出土した1石製品砥石、103・122・113肥前磁器小丸碗・筒形碗・碗、434眼平陶器合子身、182大塚相馬陶器湯飲み、水路下層から出土した18石板、42寛永通寶、58・61・65一銭硬貨、146・234瀬戸・美濃磁器青磁染付碗・端反碗、476瀬戸・美濃陶器灯火皿をはじめとする陶器、在地系土器、水路上層から出土した85金属製品ボタン、548土管、663ガラス製日常生活瓶、水路か

ら出土した522陶器タイル、554陶管をはじめ多くの陶器・ガラス製瓶を図化して掲載した。

所見 東西両側面の石積みや石橋が残存する唯一の調査区である。こうしたことから最上面の礫使用状態を観察することができ、他の調査区において最上面が残存するか否かの基準となっている。



22区(令和元年度調査)

位置 本町一丁目、21区の南、天満宮南交差点より252.4mほどの地点。調査区南端で2区北端と僅かに重複する。22区は調査区が店舗前に該当するため南・中・北の三分割で調査を実施している。

調査範囲 東辺15.76m、西辺15.73m、北辺11.03m、南辺11.08mと細長い矩形の範囲、16.527㎡を調査した。

検出状態 水路内部は東側面石積み寄り、東側面石積み、裏込めの一部を検出した。

残存状態 北端、北から8.3m地点、南端には陶管が敷設されており、北端と南端は陶管の上に再び石積みの礫が戻されているが、構築当初の積み方ではない。また、中ほどの陶管敷設箇所では石積みの礫は取り除かれたままであった。その他、北から10mの箇所ではガス管敷設による攪乱を受けていた。残存する東側面石積みは最上面が取り除かれ、1段目と2段目が残るだけであった。2段目も中ほどの陶管敷設箇所より南側では、上半の礫が取り除かれた状態であった。中ほどの陶管敷設とガス管敷設箇所の間は石積みの礫が残存するが、両側の掘り方底面より低い位置に礫が存在するため、陶管またはガス管敷設時に掘削が行われ、ここに投棄された状態とみられる。

規模 最も石積みの残存が良好な地点での、上面から水路底面までは80～90cmを測る。水路底面の標高は113.90m前後を測る。

掘り方 水路底面の状態は不明であるが、側面石積み下の水路側に10cmほどの段を造り、裏込め側に向かった緩やかな傾斜で立ち上がるとみられる。また、側面石積み下では胴木を検出した箇所がある。胴木は自然木の枝を払ったもので径5～12cmのものを使用していた。胴木を固定するための杭は北から7.5m地点で1カ所検出した。

側面状態 1段目は水路構築当初の状態を保っているのは、胴木が残存する北端から1.5mから5.0mまでと、6.0mから7.0mまで、10.5mから12.0mまでの間とみられる。なお、北端の陶管上には胴木が残存するが、石積みそのままにして陶管を敷設するのは不可能であることから、胴木も再度戻されたか、胴木だけ残して敷設したとみられる。ここでは他の区と異なり2段目に使用されている礫のほうが大きい傾向がみられる。

2段目は2段から3段に積み上げられているが、下段

に大ぶりの河床礫、上段に小ぶりの河床礫を使用している。また、部分的に欠落している。

最上面は21区の状態から残存していないと判断できる。

裏込め 詳細は不明であるが、径5～15cmの礫を多量に含む暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、ガラス瓶、プラスチック製水菓容器が出土している。このうち、裏込めから464肥前磁器神酒徳利、107・155瀬戸・美濃磁器小碗・湯飲み、292・537磁器丼・碁子、水路下層から出土した2・3の石製品砥石、83の金属製品ポスト銘板、50天保通寶、46文久永寶、74十銭硬貨、222・123肥前磁器広東碗・筒形碗、387・388磁器盃、159・162・283・372瀬戸・美濃磁器湯飲み・碗・鉢、472・470・471瀬戸・美濃陶器灯火受皿・灯火皿をはじめとする陶磁器・在地系土器、626・629ガラス製食品瓶、639・641・645・646ガラス製化粧瓶、なお645と646は蓋と身のセットとみられる。水路上層から出土した40寛永通寶、66一銭硬貨、218肥前磁器端碗、392瀬戸・美濃磁器湯飲みをはじめとする磁器・在地系土器など、635・608・622・612ガラス製喫煙具・文具糊瓶・食品瓶・調味料瓶など、攪乱からの出土ではあるが8の石製品硯を図化して掲載した。なお、429陶器蓋は29区から出土した破片と接合している。

所見 今までの調査区では短い長さでしか側面を検出できていないため、側面は直線的に構築されていると想定していたが、21区から南では比較的長い区間の調査に至った。これにより、22区の国家座標X=46560から南側の東側面では僅かながら蛇行して構築されていることが分かった。

2区(平成29年度調査)

位置 本町一丁目、22区の南、天満宮南交差点より228.3mほどの地点。調査区北端で22区、南端で23区と僅かに重複する。

調査範囲 東辺1.66m、西辺1.66m、北辺1.53m、南辺1.57mの長方形の範囲、2.573㎡を調査した。

検出状態 水路内部は東側面寄り、東側面石積み、裏込めのごく一部を検出した。

残存状態 水路内部西半は水道管敷設による攪乱、裏込

第3章 検出遺構と出土遺物

め側もガス管敷設による攪乱を受けている。南端側は陶管を敷設するため石積みを一度取り除き、陶管敷設後その上部にだけ礫を戻しているようである。

規模 側面石積み上面から水路底面までは85cm前後を測る。水路底面の標高は113.95mを測る。

掘り方 水道管敷設によりごく一部しか調査に至っていない。水路底面と側面石積み下の間には段が造られているが、詳細は不明である。

側面状態 1段目は主に高さ30～45cm、幅25～35cm、奥行き20～30cmと大ぶりの河床礫を縦長に3石据え置いている。なお、南端のやや小ぶりの礫は下に小礫を栗石状に置き、上部の高さを揃えているとみられる。

2段目は1段目の1/2ほどの礫を1段から2段積み上げている。

最上面はやや不明瞭であるが、北端に積み上げられている礫の形状が、21区最上面の礫と同様であることから、この段が最上面であると判断した。

裏込め 小礫や瓦片を含み粘性ある暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した105・225肥前磁器小碗・碗、269磁器丸碗、詳細な出土位置は不明であるが517硫酸瓶蓋を図化して掲載した。

所見 裏込めから近現代とみられる瓦片が出土しているが、出土位置が明確でないことから混入した時期については不明である。

23区(令和元年度調査)

位置 本町一丁目、2区の南、天満宮南交差点より269.7mほどの地点。調査区北端で2区、南端の一部が3区と僅かに重複し、南端の西側で42区と接する。

調査範囲 東辺11.00m、西辺10.92m、北辺1.02m、南辺1.08mと細長い矩形的範囲、11.6176㎡を調査した。ただし、南端から0.7～2mほどは電柱保護のため調査に至っていない。

検出状態 水路内部は東側面寄りの幅0.5～0.6mと、東側面石積み1段目から2段目を検出した。また、掘り方面では側面石積み礫下で胴木痕を検出した。

残存状態 調査区西寄り20～30cmは水道管理設による攪

乱、南端から2～3mほどの間の側面石積み礫の裏込め側はコンクリートで固められていた。南端から0.7mの間も塩ビ管敷設による攪乱を受けていた。

規模 残存する側面石積み礫上面から水路底面までは、60cm前後を測る。水路底面の標高は114.14～114.00mを測る。

掘り方 水路底面はほぼ平坦である。側面石積み礫下では、北端から6.5mまでの間で胴木痕を検出した。胴木痕は北端から3.3m地点に食い違いが確認できることから、2本据え置かれていたことが分かる。胴木痕の幅は10～15cm、深さ5～7cmを測る。

側面状態 1段目は高さ30～50cm、幅50～70cm、奥行き50cm前後の大ぶりの河床礫が横長に据え置いていた。その中で、北端から2石目の礫は角状のものを縦長に置いているのが特徴的である。

2段目は本来上下2段に積み上げられていたとみられるが、下段の礫だけが残存するとみられる。使用されている礫は1段目と同様か、小ぶりを礫を横長または斜めに積み上げられており、こうした状態から上段の礫が取り除かれる時の影響を受け、変化したとみられる。

最上面は残存していない。

裏込め 側面石積みの礫を取り除いた状態を見ると、径5～20cmの礫を多く含む暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、プラスチック製玩具、おはじき、ビー玉が出土している。このうち、裏込めから出土した412・117肥前磁器蓋・碗、331瀬戸・美濃磁器小皿、185・266磁器急須蓋・平碗、水路下層から出土した535磁器罇子、624・668・673・672・675ガラス製調味料瓶・塗料瓶・用途不明瓶、水路上層から出土した334磁器小皿、詳細な出土位置は不明であるが、280・408・405磁器碗・皿・丼、529煉瓦、514練炭火鉢、667ガラス製化粧瓶を図化して掲載した。

42区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目、23区南の南、天満宮南交差点より279.4mほどの地点。調査区東辺が23区の南端西辺、3区北端西辺と接する。

調査範囲 東辺2.47m、西辺2.22m、北辺2.30m、南辺2.27mの長方形の範囲、5.3466㎡を調査した。

検出状態 調査区の位置からみると、水路内部西寄り、西側面石積みとその裏込めに相当するが、マンホール設置工事によって攪乱を受けているとみられる。そうした中で水路内部下層の西半1段目の礫の一部が残存し、裏込めと掘り方を検出した。

残存状態 上半部はマンホール設置により壊され、礫が散乱した状態であった。下半部は1段目の礫が残存しているが、全て残っている状態ではなかった。

規模 計測できる箇所は存在しないが、底面の標高は113.82～113.80mを測る。

掘り方 水路底面は緩い弧状を呈し、石積み礫下で10～20cmの段を造る。裏込め側は石積み礫のすぐ裏側で70°～80°の角度で立ち上がり、0.5mほど奥で垂直に近い角度で立ち上がる。石積み下に造られた段下では胴木や胴木痕は検出していないが、胴木を固定する杭痕を検出した。また、段上では石積み礫が据えられ、窪み化した様子が確認できた。

側面状態 1段目は間隔をあけて2石が残存している。北側の礫は高さ40cm、幅55cm、奥行き50cm、南側の礫は高さ30cm、幅55cm、奥行き45cmの河床礫が使われている。この2石は間隔があくことから間にもう1石が据え置かれていたとみられる。

2段目 残存していない。

最上面 残存していない。

裏込め 径2～30cmの礫を多く含む粘質のある黒褐色土が充填されていた。裏込めの立ち上がりには径20～30cmの礫が貼り付けられるように積み上げられている箇所がみられた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、石積みに転用されていたとみられる30石樋を図化して掲載した。

3区(平成29年度調査)

位置 本町一丁目、42区の南、天満宮南交差点より280.7mほどの地点。調査区北側で23区、南端で24区と重複する。

調査範囲 東辺4.00m、西辺4.00m、北辺1.27m、南辺1.27mの長方形の範囲、5.08mを調査した。

検出状態 調査区の位置からみると、水路内部東寄り、

東側面石積みとその裏込めに相当するが、集水側設置工事によって攪乱を受けているとみられる。

残存状態 東側面石積みは集水側設置工事の際、取り外されたものが、再度埋め戻されたとみられる。

規模 計測可能な箇所は存在しない。

掘り方 調査に至っていない。

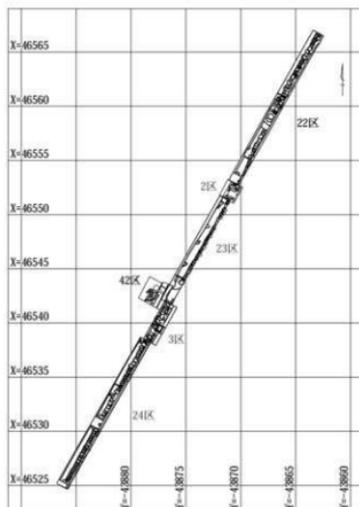
側面状態 調査区内の礫検出状態は大小の礫が不規則な状態にあることが確認された。こうした状況から残存状態に記したことが確認できた。

裏込め 調査に至っていない。

出土遺物 水路内部や裏込めから陶磁器、瓦が出土している。このうち、裏込めから出土した270瀬戸・美濃磁器丸碗、水路上層から出土した109肥前磁器小碗、246磁器平碗、出土位置不明の528煉瓦を図化して掲載した。

24区(令和元年度調査)

位置 本町一丁目、3区の南、天満宮南交差点より284.7mほどの地点。調査区北端で3区と僅かに重複す

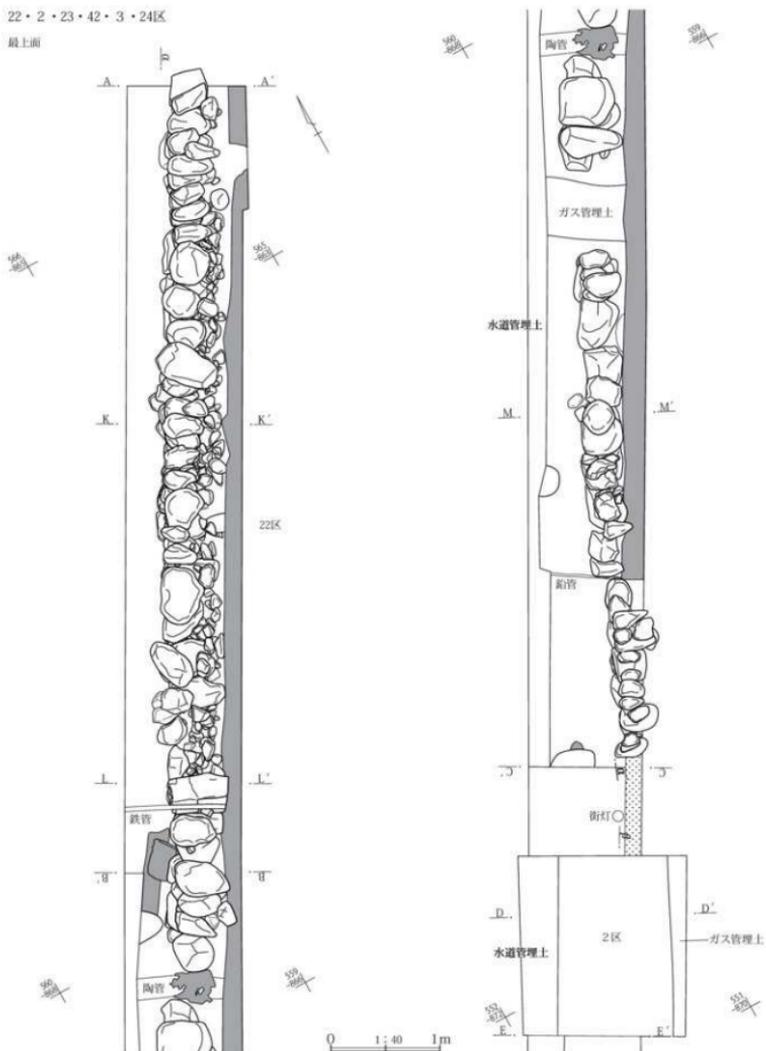


第51図 22・23・24区位置図

第3章 検出遺構と出土遺物

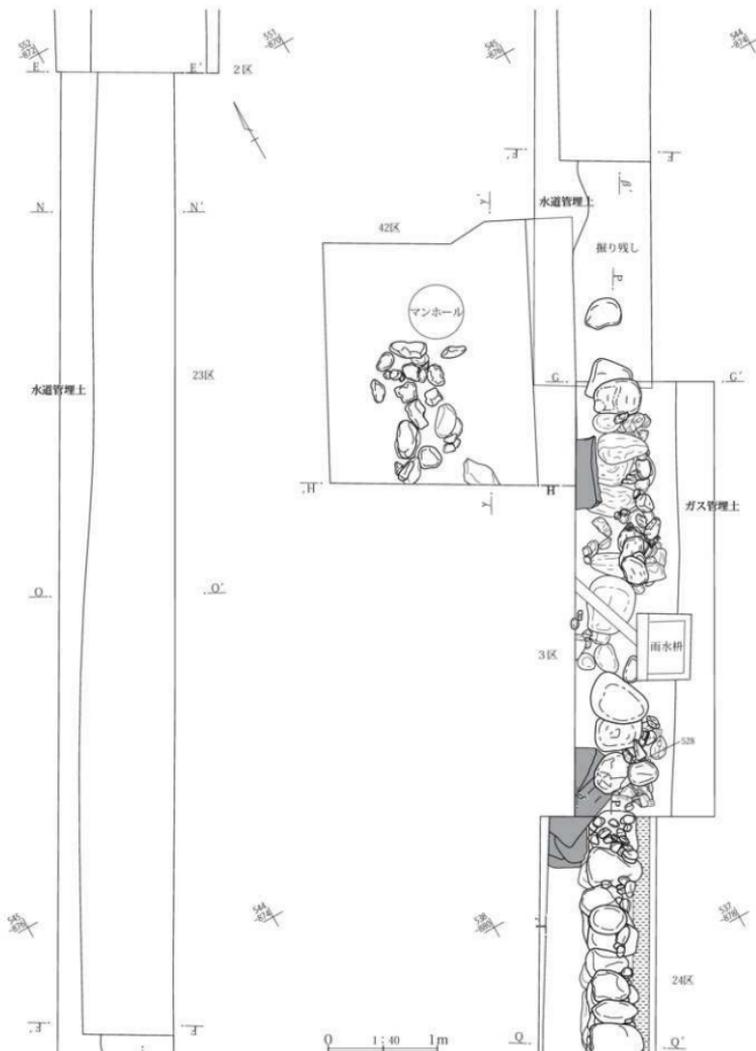
22・2・23・42・3・24区

最上面

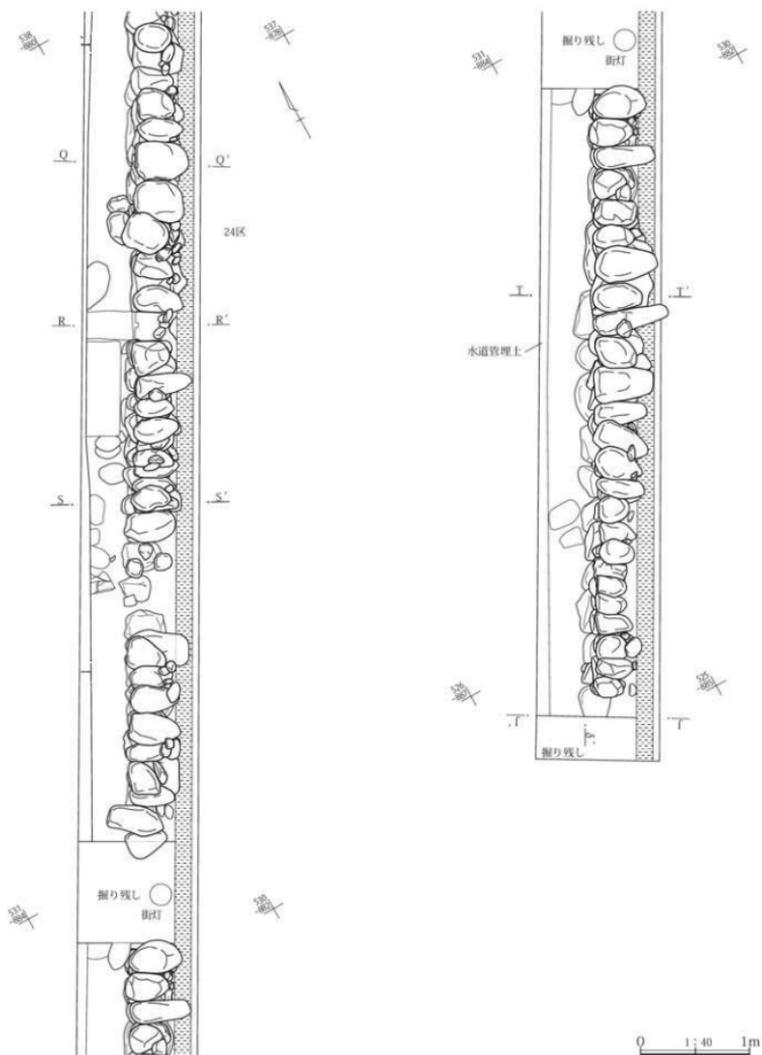


第52図 22・2・23・42・3・24区道横断図(1)

第3節 検出した水路の道構

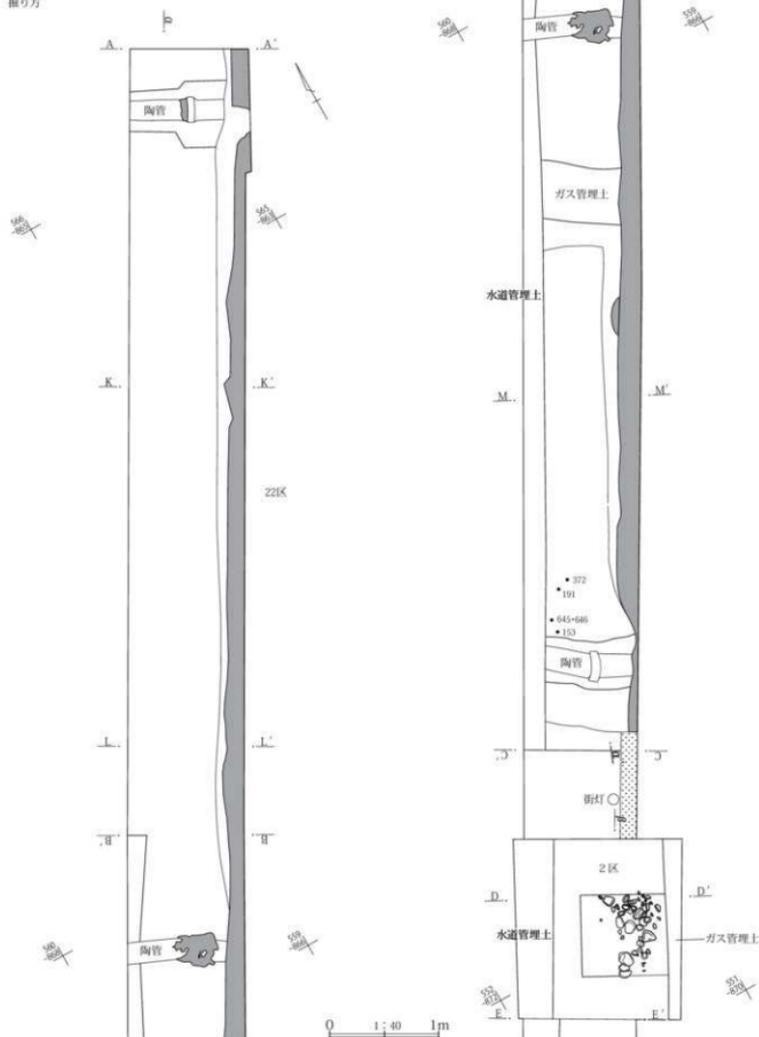


第53図 22・2・23・42・3・24区道構図(2)

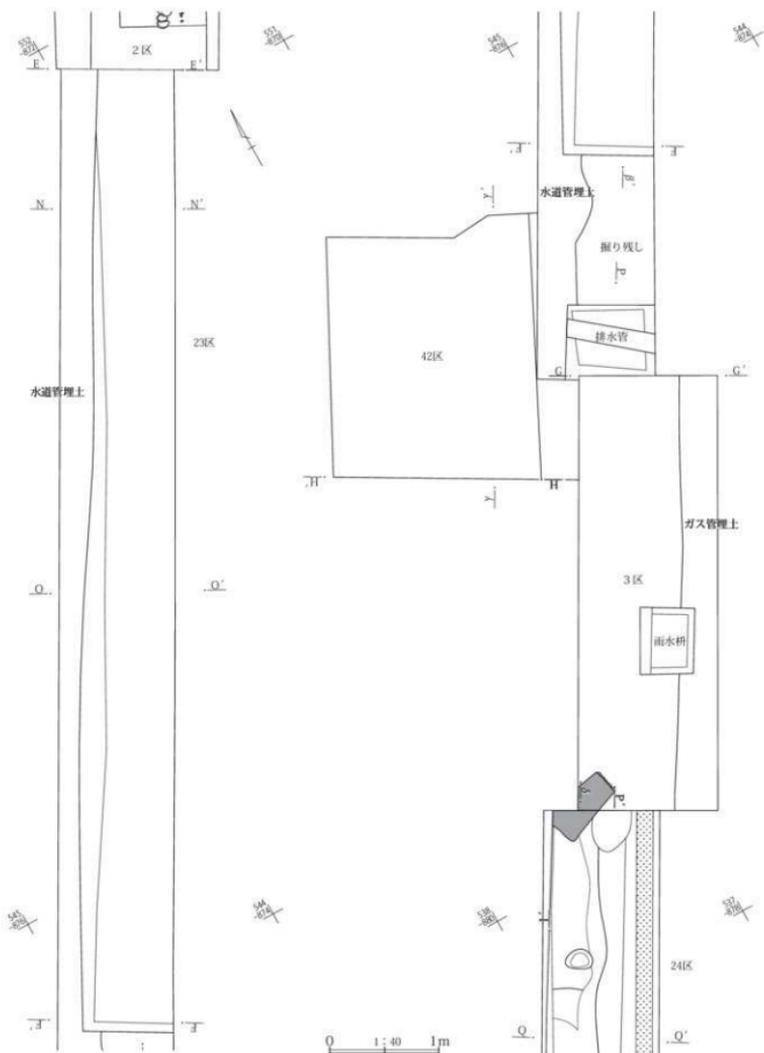


第54図 22・2・23・42・3・24区道構図(3)

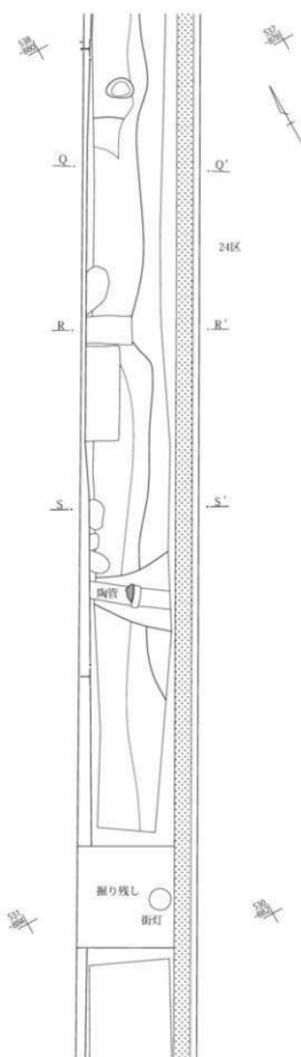
掘り方



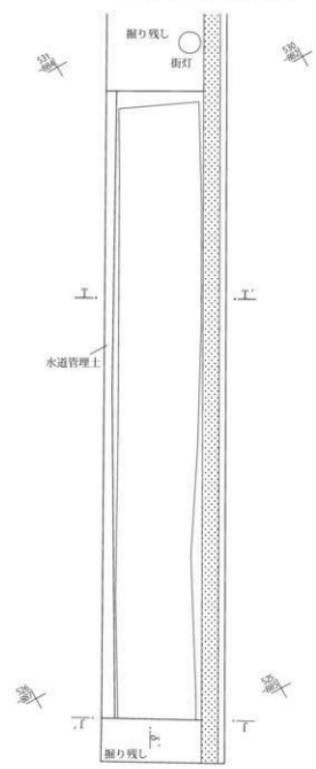
第3章 検出道構と出土遺物



第56図 22・2・23・42・3・24区道構図(5)



第3節 検出した水路の道構

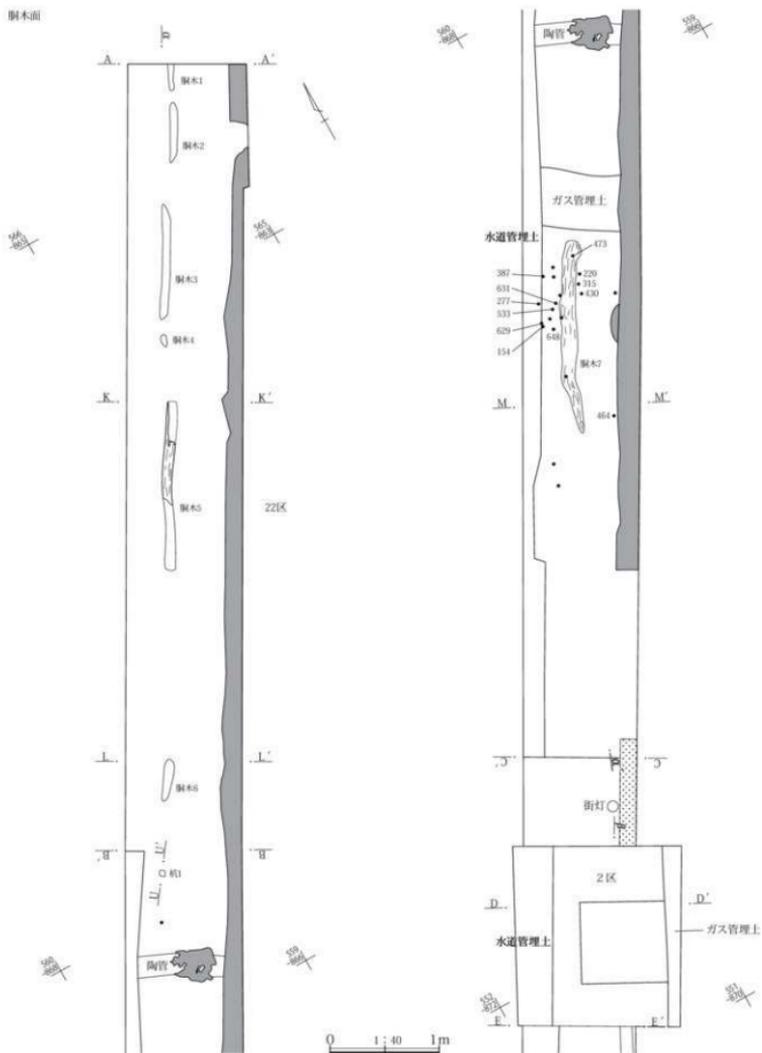


0 1:40 1m

第57図 22・2・23・42・3・24区道構図(6)

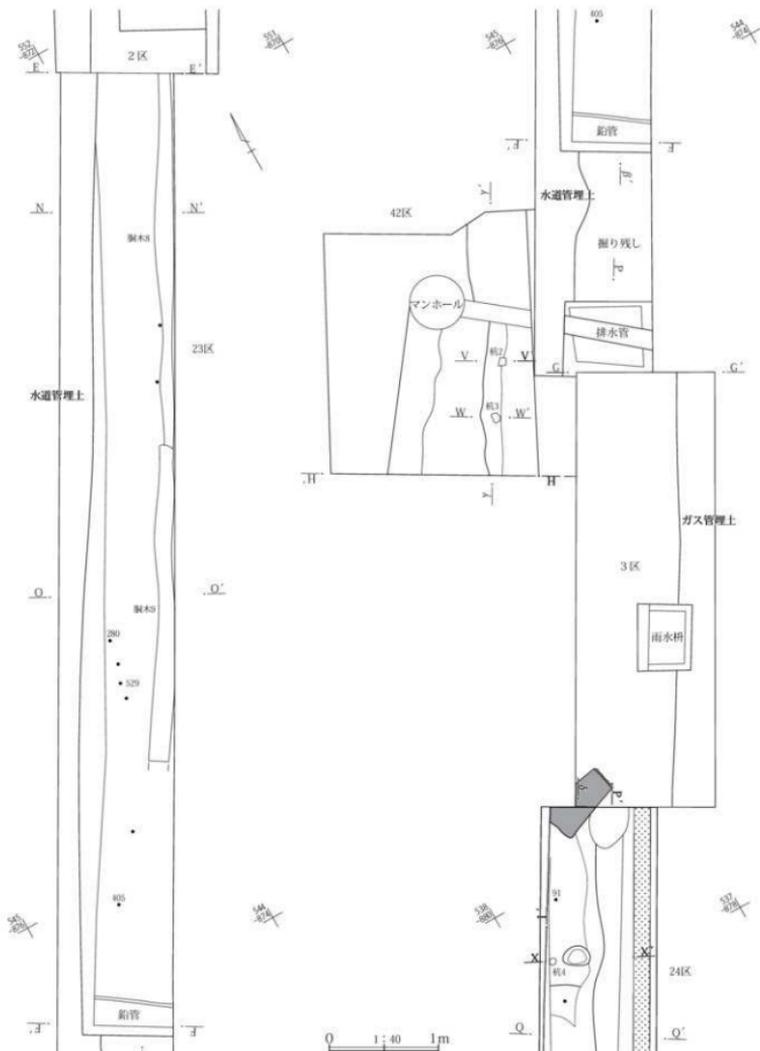
第3章 検出遺構と出土遺物

銅木面



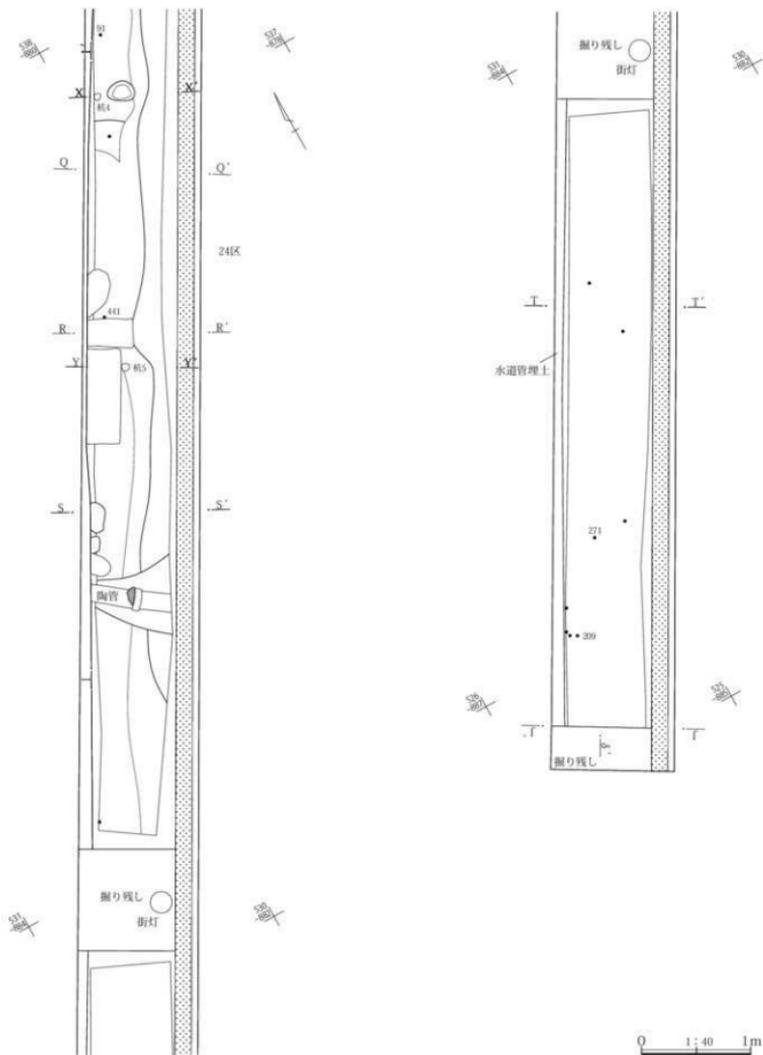
第58図 22・2・23・42・3・24区道横断(7)

第3節 検出した水路の道構



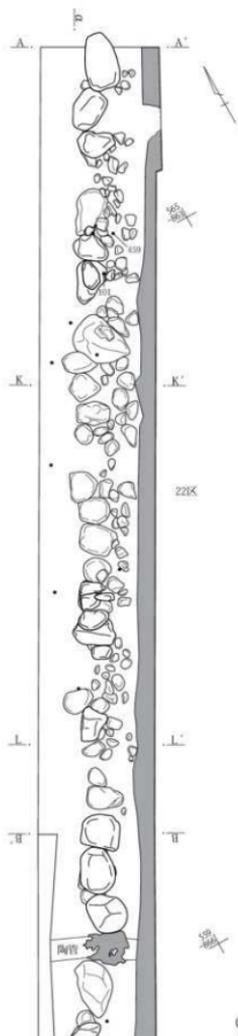
第59図 22・2・23・42・3・24区道構図(8)

第3章 検出遺構と出土遺物

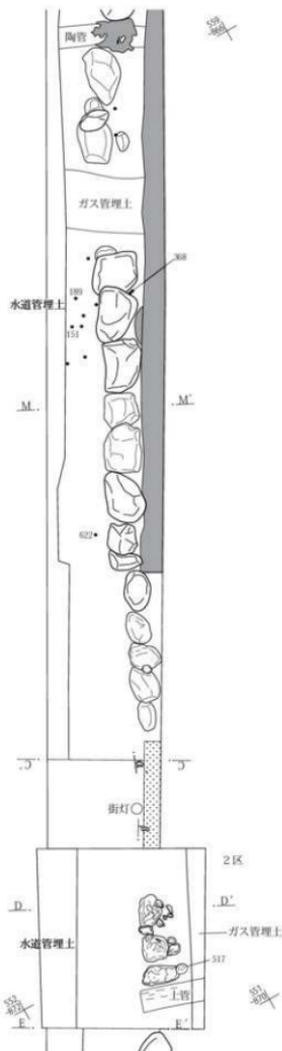


第60図 22・2・23・42・3・24区道横図(9)

1段目

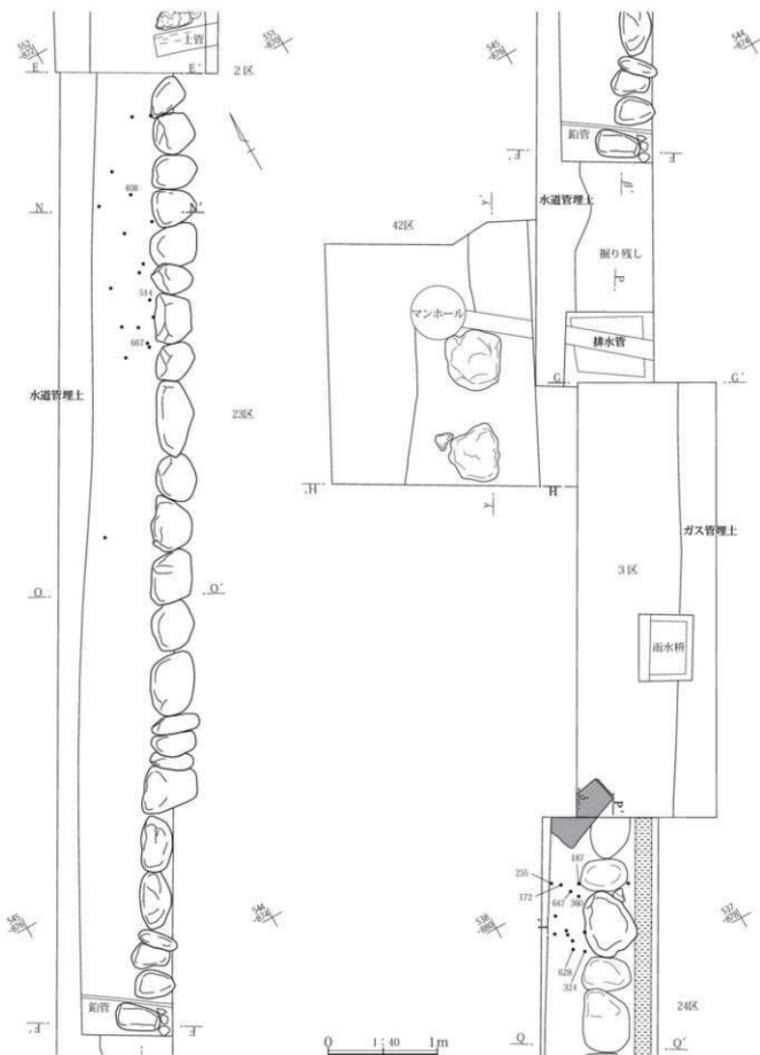


第3節 検出した水路の道構

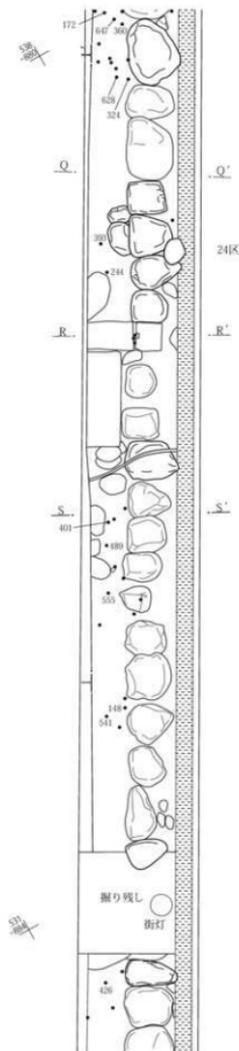


第61図 22・23・42・3・24区道構図(10)

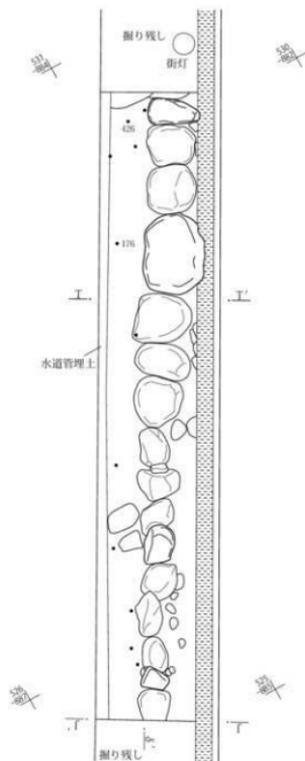
第3章 検出道構と出土遺物



第62図 22・23・42・3・24区道構図(11)



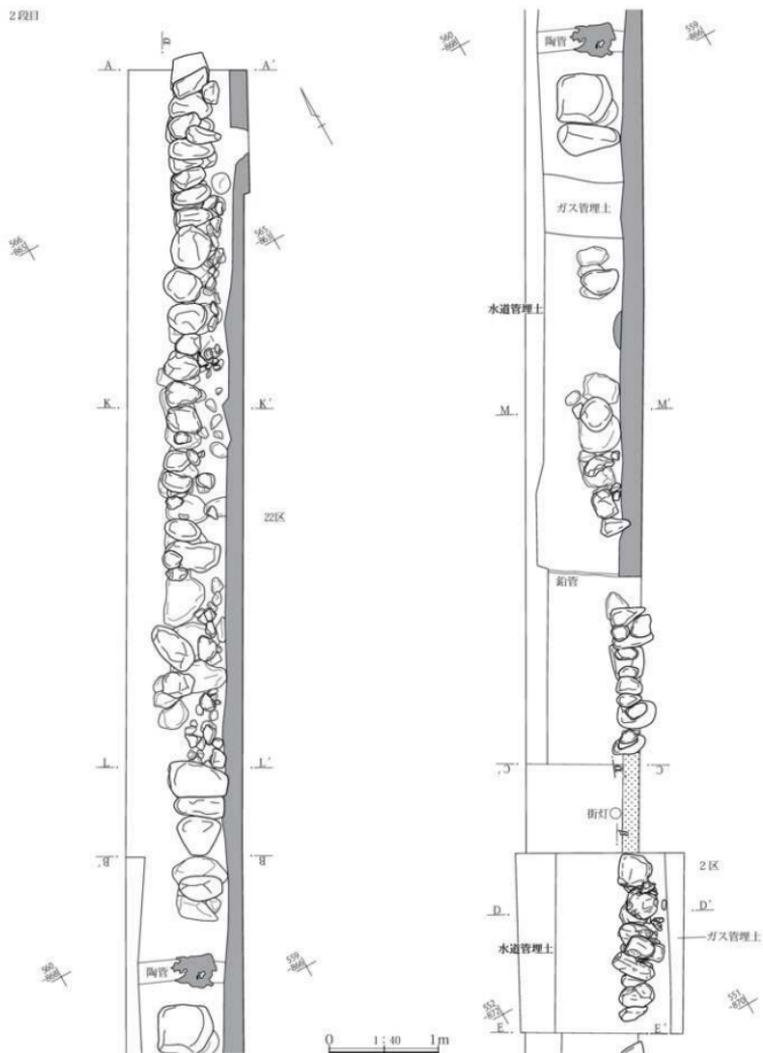
第3節 検出した水路の道構



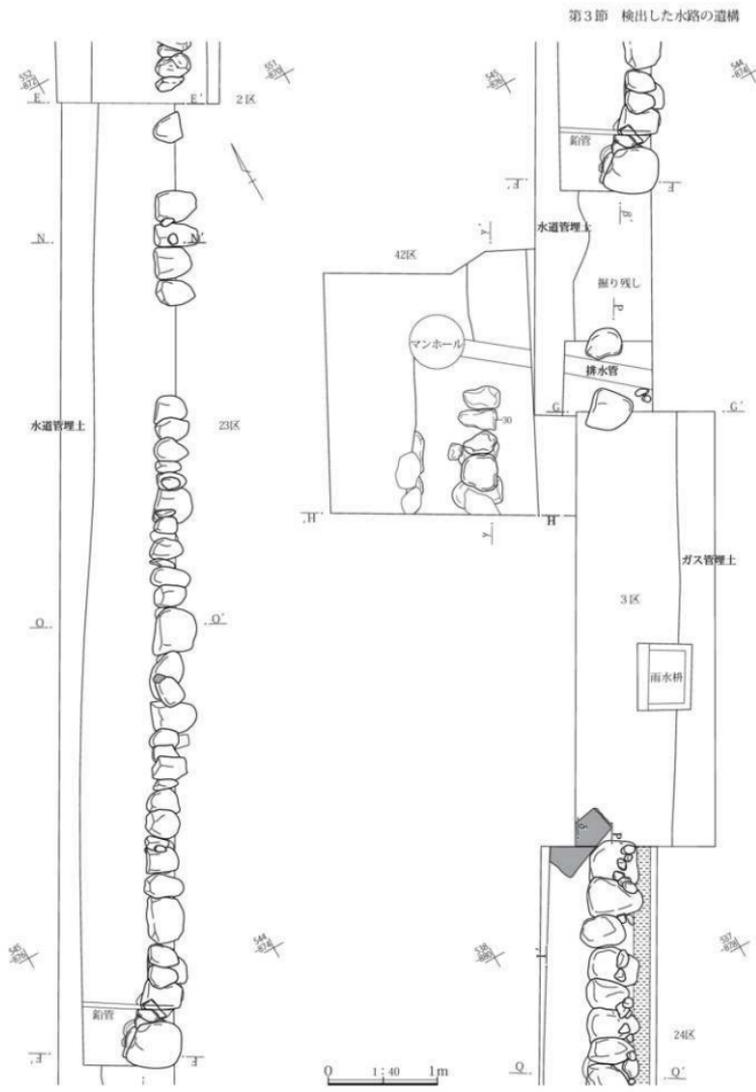
0 1:40 1m

第63図 22・23・42・3・24区道構図(12)

2段目

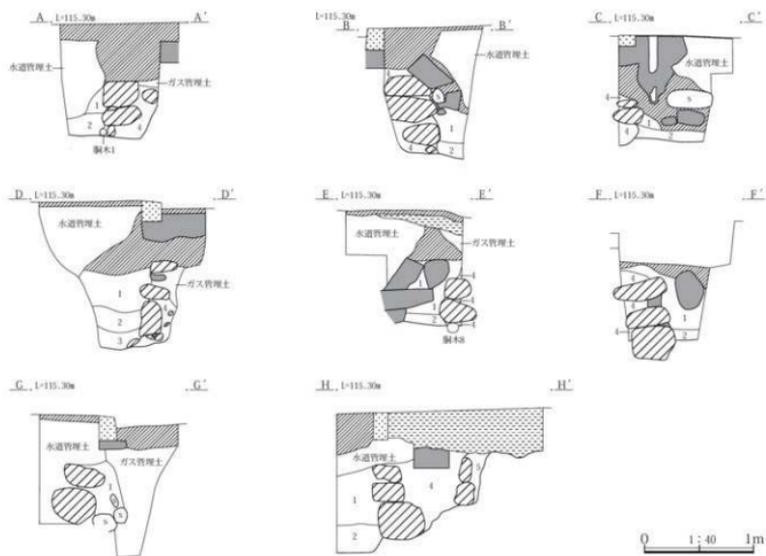


第64図 22・2・23・42・3・24区遺構図(13)



第65図 22・23・42・3・24区道構図(14)

第3節 検出した水路の道構



A-A' B-B' C-C'

- 1 黒褐色土 埋土, コンクリート片を多く含む。
- 2 褐色砂礫 水路堆積土, 径1~2mmの砂を主体とし径1~5cmの礫を少量含む。ビニール, ガラス, 陶磁器等を多く含む。
- 4 暗褐色土 裏込め, 径5~15cmの礫を非常に多く含む。

D-D'

- 1 黄褐色土 埋土, 黄土色粘質土ブロックとコンクリート片を含む。(昭和30年代以降の水路埋土)
- 2 暗褐色土 水路堆積土, 砂礫主体。
- 3 暗褐色土 水路堆積土, 砂礫主体(明治以降)
- 4 暗褐色粘質土 裏込め, 小礫・瓦片を含む。

E-E' F-F'

- 1 黒褐色土 埋土, コンクリート片を多く含む。
- 2 褐色砂礫 水路堆積土, 径1~2mmの砂を主体とし径1~5cmの礫を少量含む。ビニール, ガラス, 陶磁器等を多く含む。
- 4 暗褐色土 裏込め, 径5~15cmの礫を非常に多く含む。空隙あり。

G-G'

- 1 粘質土 埋土, 砂礫と小礫を含む。

H-H'

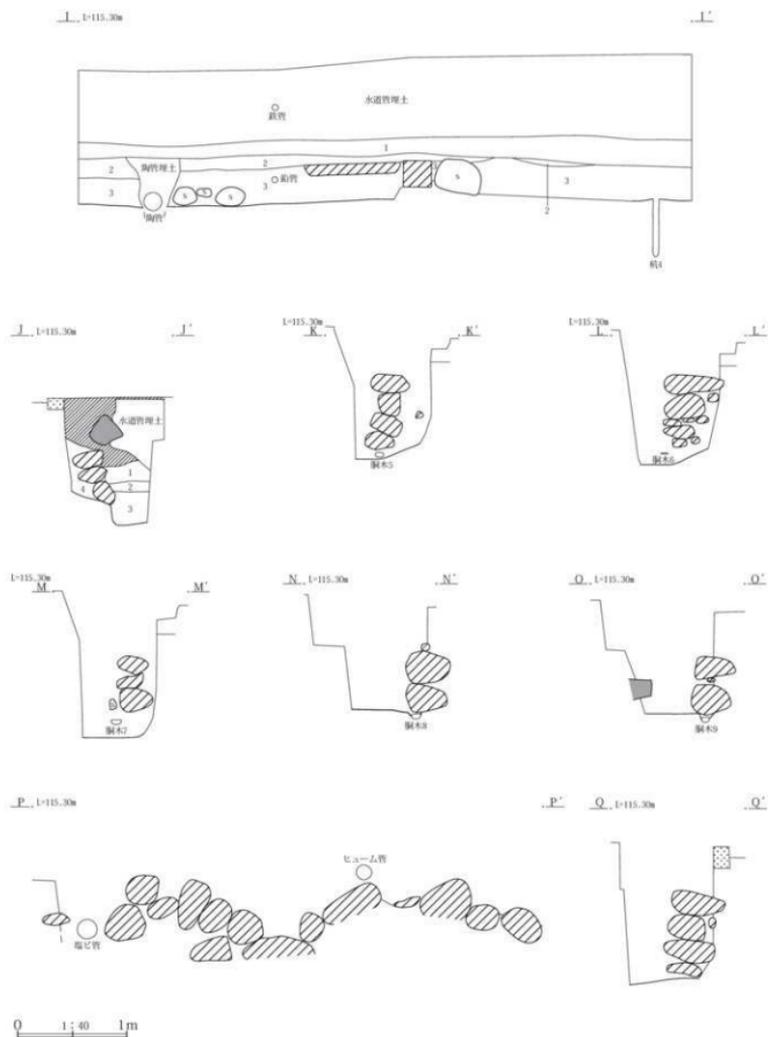
- 1 に深い黄褐色砂礫 埋土, コンクリートを含む。
- 2 褐色砂礫 水路堆積土, ビニール, ガラス, 陶磁器等を多く含む。
- 4 黒褐色粘質土 裏込め, 径10cm前後の礫を多量に含む。
- 5 暗褐色砂礫 裏込め, 径1~5cmの礫を多量に含む。

I-I' J-J'

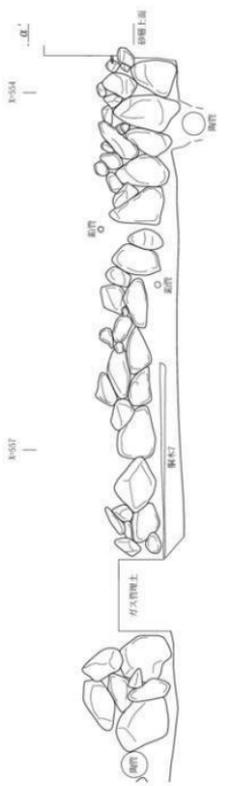
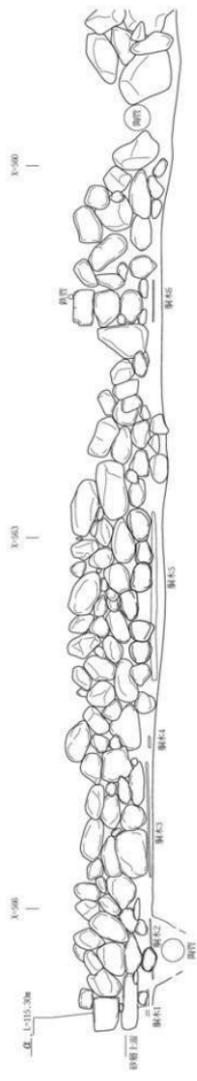
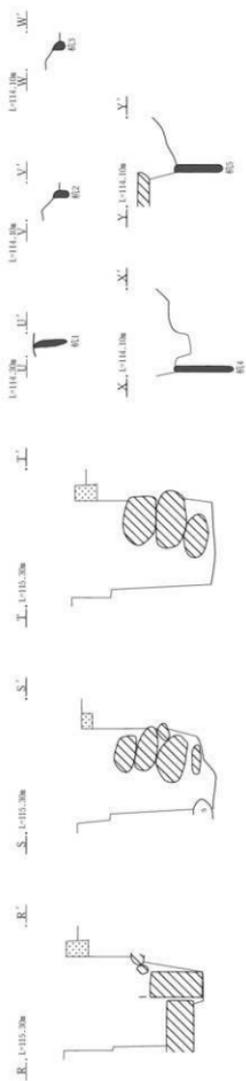
- 1 黒褐色土 埋土, コンクリート片を多く含む。
- 2 褐色砂礫 水路堆積土, ビニール, ガラス, 陶磁器等を多く含む。
- 3 褐色砂礫 水路堆積土, 鉄分の比若しい。径3~10mmの礫を多く含む。
- 4 黒褐色土 裏込め, 径5~30cm程度の礫を非常に多く含む。空隙あり。

第67図 22・2・23・42・3・24区道構図(16)

第3章 検出遺構と出土遺物



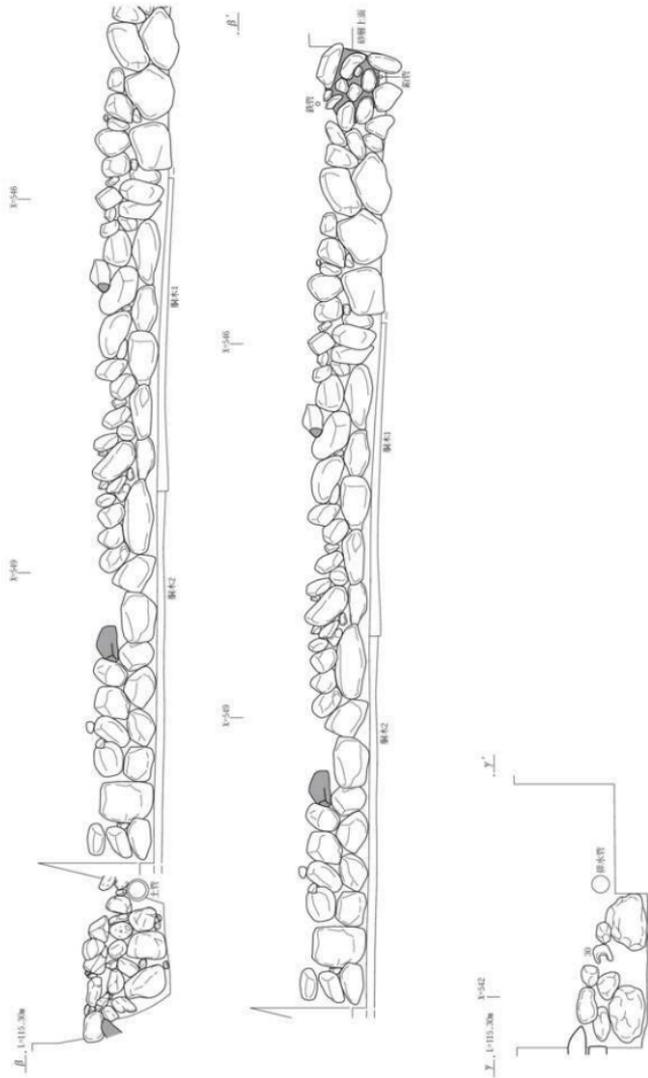
第68図 22・2・23・42・3・24区道構図(17)



第3節 検出した水路の道構

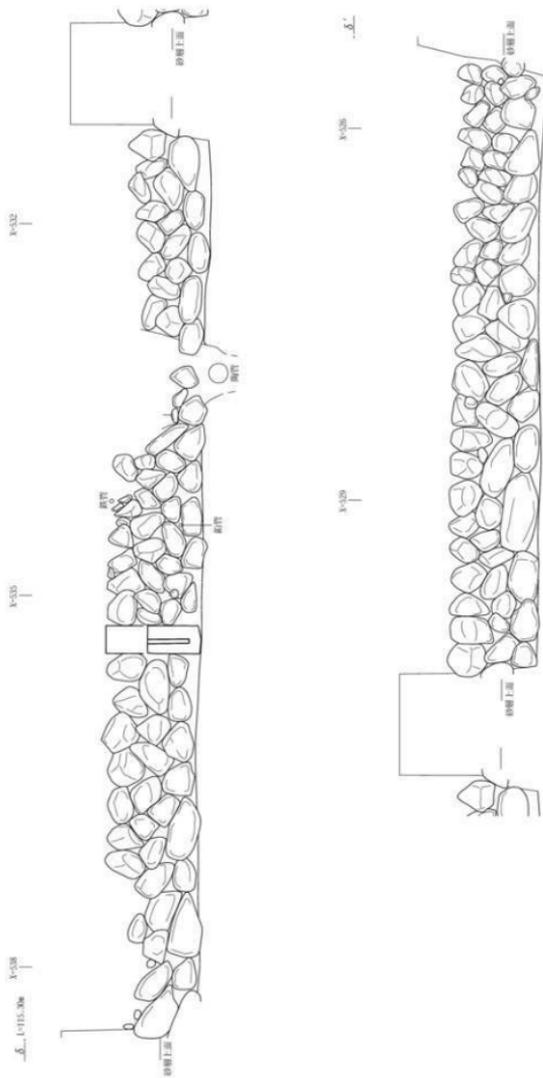
第69図 22・2・23・42・3・24区道構図(18)

0 1:40 1m



第70図 22・2・23・42・3・24区遺構図(19)

第3節 検出した水路の道構



第71図 22・2・23・42・3・24区道構図(20)

0 1:40 1m

第3章 検出遺構と出土遺物

る。24区は調査区が15mと長いため南・北の二分割で調査を実施している。

調査範囲 東辺15.38m、西辺15.43m、北辺1.05m、南辺1.13mと細長い矩形の範囲、16.786㎡を調査した。ただし、北端から8.4～9.3mほどの間は電柱保護のため調査に至っていない。

検出状態 水路内部は東側面寄り幅40cm前後、東側面石積みを検出した。24区では堰が設置されていた。堰を検出した調査区は、37区とともに24区の2例だけであるが、37区は側面石積みの前にコンクリートによって作られているのに対して、24区では側面石積みの間に設置されている。

残存状態 水路内部は調査区西側を水道管敷設による攪乱、北端から5.7～6.5m地点は陶管敷設によって側面石積みの礫を取り除かれ、敷設後に戻されていない状態であった。なお、側面石積みは最上面の礫が全て取り除かれていた。

規模 側面石積み礫上面から水路底面までは85～100cmを測る。水路底面の標高は113.59～113.54mを測る。

掘り方 水路底面はほぼ平坦か、緩い弧状に掘り込まれ、石積み下から裏込め側にかけて緩やかな傾斜で立ち上がる。24区では刷木や刷木痕は検出していないが、北端1.5m地点の水路底面と堰水叩き石の脇で杭痕を検出した。この2カ所の杭についてはどのような用途であるか判断としない。なお、杭痕の径は5cmと8cm、撃ち込まれた深さは52cmと45cmである。

側面状態 1段目は高さ25～32cm、幅30～70cm、奥行き30～55cmの河床礫を横長に据え置いている。

2段目は1段目と同等かやや小ぶりの礫を斜めから縦長に2段積み上げている。

最上面は残存していない。

堰 北端から3.5m地点に堰が設けられていた。堰柱石の詳細は出土遺物に記載してあるのでそちらを参照していただきたい。堰柱石は側面礫の間に水路底面より20cmほど埋め込まれて立てられていた。西側面に設置された堰柱石の間には、水路を横断するように幅25cm、厚さ10cmの床版石が水路面に置かれていた。床版石の南には幅90cm、厚さ10cmの水叩き石が置かれていた。なお、堰柱石はその加工の状態から近代に作られたものとみられ、水路構築当初には設置されていなかったとみられる。

このため堰柱の南側石積みは、小ぶりの礫で堰設置のため積み直しが行われたことが窺える。

裏込め 側面石積み裏は調査対象地外のため、裏込めの状態は不明であるが、石積み礫を取り上げ後の断面を観察すると、径5～20cmの垂角礫を大量に含め暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、昭和30年発行の10円玉硬貨、陶磁器、煉瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから81金属製品ビン、328瀬戸・美濃磁器青磁小皿、274瀬戸・美濃磁器丸碗、143磁器小椀、609ガラス製菓子容器、水路下層から出土した14・15・19石製品石板、79金属製品煙管、41寛永通寶、55一銭硬貨、69五銭硬貨、141瀬戸・美濃磁器小椀、268瀬戸・美濃磁器平碗、89磁器ミニチュア碗をはじめとする磁器、527・530煉瓦、577・581・594・598・616・655・ガラス製玩具・清涼飲料水瓶・薬瓶、詳細な出土位置は不明であるが陶器・陶管を図化して掲載した。なお、図化・掲載していない10円玉硬貨も水路下層からの出土である。

所見 24区では37区とともに堰が設置されていたが、24区の堰は、堰柱の加工状態から、近代に設置されたと思定できる。なお、一般的な水路では堰の上流側に昇降用の階段を造るものが多いことから、民地側の西側面に造られていたとみられる。

41区(令和2年度調査)

位置 本町一丁目24区の南、天満宮南交差点より304.7mほどの地点。41区は本町一丁目の南端にあたる。

調査範囲 東辺0.85m、西辺0.87m、北辺1.45m、南辺1.45mの長方形の範囲、1.247㎡を調査した。

検出状態 水路内部は西側面寄り35～40cmと西側面石積みを検出した。

残存状態 水路も調査区東端から60～70cm幅が水道管敷設で攪乱されている。

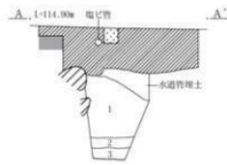
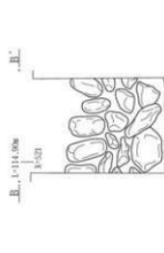
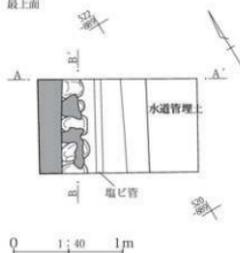
規模 舗装面から水路底面までは128cmを測る。

掘り方 水路底面はほぼ平坦であった。

側面状態 3～4段の石積みを検出したが、裏込め側はコンクリートが流し込まれて固定されていた。石積みの積み方も粗雑で、公道と民地の境に塀を建設する際に一度取り上げられ、再度戻された可能性がある。

第3節 検出した水路の道構

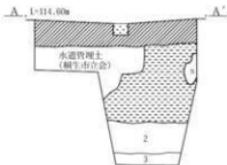
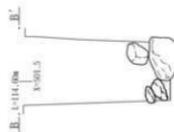
41区
最上面



- 1 灰黄褐色 理上、径30cm前後の礫、コンクリート等を多量に含む砂礫層。
- 2 黒褐色土 水路増積土、径1～2cmの砂、径1～3cmの礫を多量に含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路増積土、径1～5cmの礫を多量に含む。

第72図 41区道構図

40区
最上面



- 2 黒褐色土 水路増積土、径1～2cmの砂、径1～3cmの礫を多量に含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路増積土、径1～5cmの礫を多量に含む。

1段目



2段目



0 1:40 1m

第73図 40区道構図

裏込め 調査には至っていない。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、煉瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した297在地系土器皿、492・494在地系土器植木鉢を図化して掲載した。

その他 隣接する民地に水路石橋が保管されている。

40区(令和2年度調査)

位置 本町二丁目、41区の南、天満宮南交差点より327.1mほどの地点。40区は本町二丁目北端にあたる。

調査範囲 東辺0.73m、西辺0.66m、北辺1.44m、南辺1.48mの鍵ノ手状の範囲、1.022mを調査した

検出状態 水路内部は西側面寄り40cmと西側面石積みの1段目を検出した。

第3章 検出遺構と出土遺物

残存状態 側面石積み の2段目と最上面は、建物建設時に失われている。水路も調査区東端から75cm幅が水道管敷設で攪乱されている。

規模 舗装面から水路底面までは135cmを測る。

掘り方 調査には至っていない。

側面状態 1段目は大小の礫が据え置かれている。

2段目は残存していなかった。

最上面も残存していなかった。

裏込め 調査には至っていない。

出土遺物 水路内部から石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した20石製品石板169陶器湯飲み、水路上層から出土した379・184・449磁器鉢・須急蓋・瀬戸・美濃陶器鍋を図化して掲載した。

25区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、40区の南、天満宮南交差点より334.7mほどの地点。

調査範囲 東辺2.70m、西辺2.69m、北辺1.00m、南辺1.04mの長方形の範囲、2,748㎡を調査した。

検出状態 調査区南2/3ほどで東側面寄りの水路内部、側面石積み、裏込めの一部を検出した。

残存状態 調査区北寄りに陶管が敷設されており、その上部の石積みは陶管敷設後に一部を戻したものである。ここでの陶管は6区と同様に2段目中位に敷設されているが、6区とは異なり陶管下部の礫は取り除かれていない。

規模 残存する石積み最上面から水路底面までは85cmを測る。

掘り方 水路底面は、石積み側のわずかな範囲しか調査に至らなかったため形状は不明であるが、残存部の底面から石積みにかけては平坦に掘り込まれ、石積み奥で20cmほどの段を造り、裏込め側に移行する。裏込めは45°前後の角度で立ち上がるが、調査区内ではわずかな箇所しか調査できなかったため詳細は不明である。

石積み下では刷木を検出した。刷木は径14cmの自然木を利用してしている。また、刷木を固定する杭も3カ所で検出した。杭はこれも自然木の片方を斜めに裁断したものである。杭は径3～5cm、長さ50～68cmである。

側面状態 1段目は高さ25～30cm、幅25～38cm、奥行き

25～30cmほどの扁平な河床礫を横長に据え置いている。25区の1段目に使用されている礫は他の調査区に比べると小ぶりである。

2段目は2段に積み上げている。下段は1段目より大ぶりの礫を横長に、上段は不規則な積み上げ状態である。

最上面は1段目よりやや大ぶりの礫を横長に積み上げ、上面が平坦になるようにしているが、調査区南端は取り除かれている。

裏込め 調査範囲が僅かなため詳細は不明であるが、径3～10cmの礫を多く含む粘性のある暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した119・120・410肥前磁器青磁染付筒形碗・筒形碗・蓋、240瀬戸・美濃磁器碗蓋、349瀬戸・美濃陶器皿、453益子・空閑陶器控鉢、水路下層から出土した223肥前磁器碗、488・487・480瀬戸・美濃磁器・陶器花瓶・灯火受皿をはじめとする陶磁器、580・578・610・653ガラス玩具・菓子容器・化粧瓶、水路上層から出土した21石製品石板、231肥前磁器碗、249磁器平碗、644ガラス製化粧瓶などを図化して掲載した。

4区(平成29年度調査)

位置 本町二丁目、25区の南、天満宮南交差点より346.3mほどの地点。

調査範囲 東辺3.98m、西辺3.98m、北辺1.22m、南辺1.22mの長方形の範囲、4,856㎡を調査した。

検出状態 東側面石積み の1段目と2段目の下段を検出したとみられる。

残存状態 水路内部は水道管敷設、裏込めはガス管敷設による掘削で残存していない。側面石積みもガス管敷設時に最上面と2段目上段を取り除かれたとみられる。

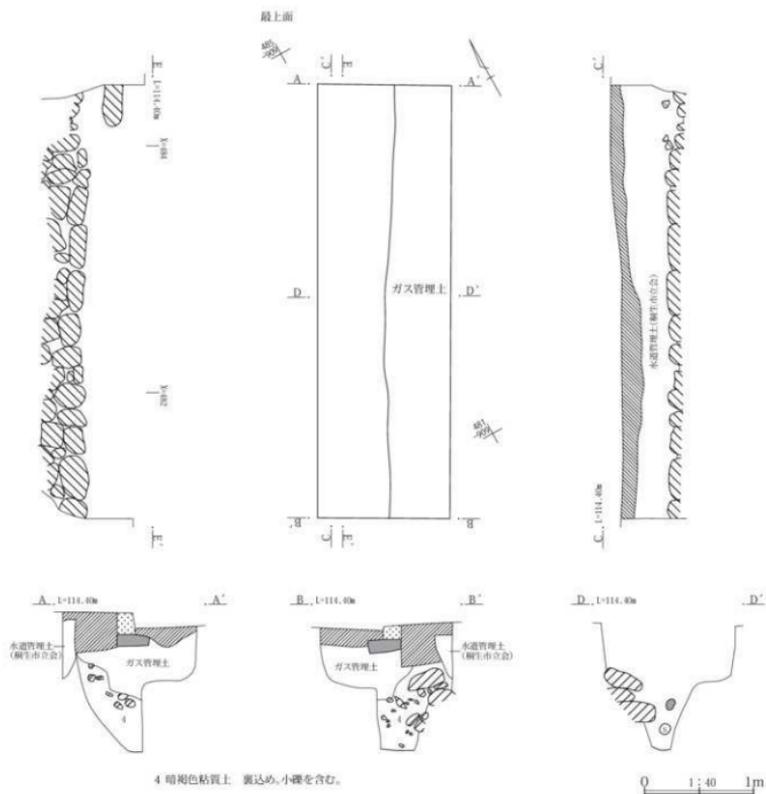
規模 水路の深さなど計測できる箇所は存在しない。

掘り方 水道管やガス管保護のため調査に至っていない。

側面状態 1段目は水路側の調査ができなかったため詳細は不明であるが、他の調査区と比較するとやや小ぶりの礫を据え置いている。

2段目は他の調査区では縦長に礫を積み上げているが、ここでは横長の状態で積み上げられていることから、

4区



4 暗褐色粘質土 裏込め、小礫を含む。

第75図 4区遺構図(1)

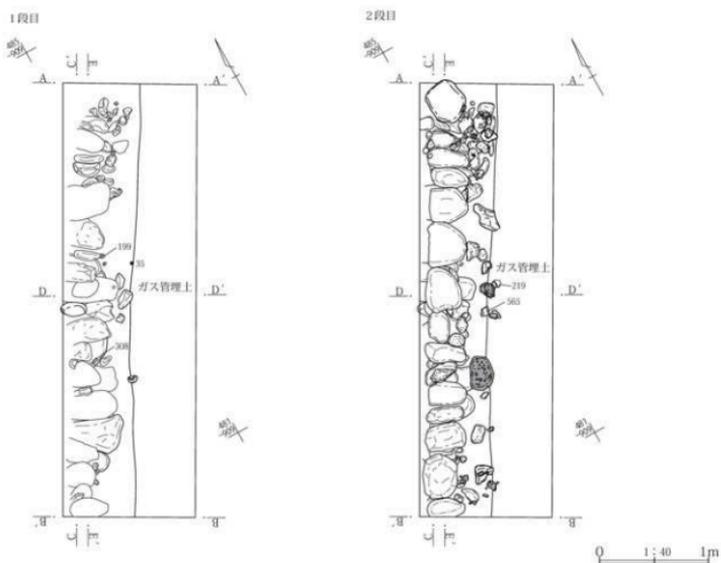
上段の礫を取り除いたときに倒れたとみられる。

最上層は残存していなかった。

裏込め ガス管敷設によって存在していない。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めか

ら出土した39寛永通寶、106・306・305肥前磁器小碗・皿、167磁器湯飲み、486陶器灯火受台、454在地系土器焙烙、526十能瓦、水路下層から出土した35寛永通寶、水路上層などから出土した219・308肥前磁器広東碗・皿、199瀬戸・美濃磁器碗などを図化して掲載した。



第76図 4区道横断図(2)

5区(平成29年度調査)

位置 本町二丁目、4区の南、天満宮南交差点より358.3mほどの地点。西側0.66mは令和2年度調査の39区と重複する。

調査範囲 東辺0.91m、西辺0.88m、北辺1.71m、南辺1.71mの長方形の範囲、1.53045㎡を調査した。

検出状態 水路内部の東側面寄り、東側面石積みと裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路内部と裏込めは大部分が水道管敷設、ガス管敷設による攪乱を受けている。なお、側面は上面が39区側面上面とほぼ同じ高さであることから、最上面まで残存しているとみられるが、確認は得られていない。

規模 水道管保護のため深さなどの計測はできなかった。

掘り方 調査には至っていない。

側面状態 1段目は高さ30cm、幅70cm以上、奥行き60cmほどの大きな河床礫を1区検出した。各調査区1段目の

中でも最も大きな礫である。

2段目は30cm前後の河床礫を1段、部分的に2段積み上げている。

最上面 大小の河床礫を上面が平坦になるように配している。

裏込め ガス管敷設のため側面石積みの裏側ごく一部しか残存していなかったが、結實の暗褐色土が充填されていた。裏込め土からは近代・現代の遺物が出土しているが、これらはガス管敷設時に混入したとみられる。

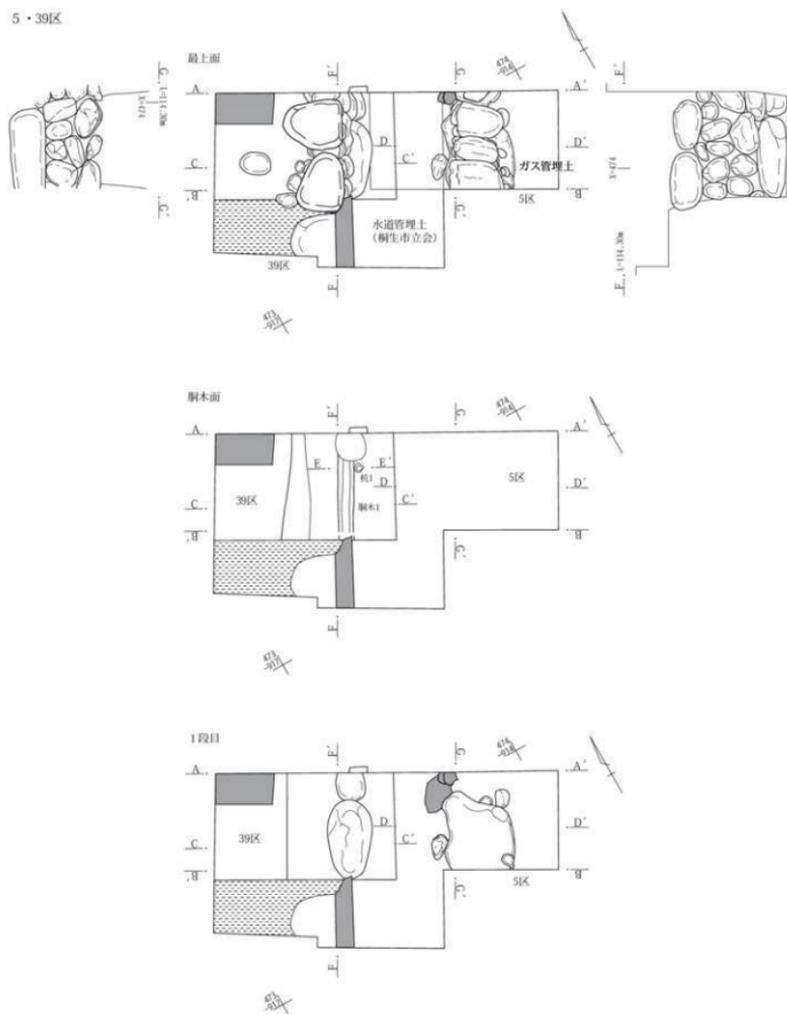
出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した45文久永寶を図化して掲載した。

39区(令和2年度調査)

位置 本町二丁目、5区の南、天満宮南交差点より358.3mほどの地点。調査区北東角で平成29年度調査の5区と重複する。

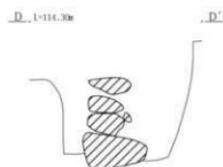
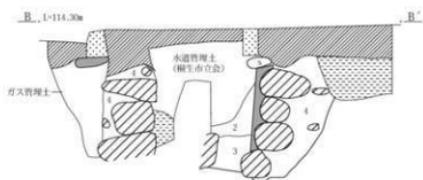
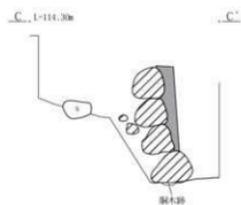
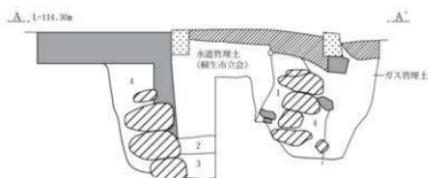
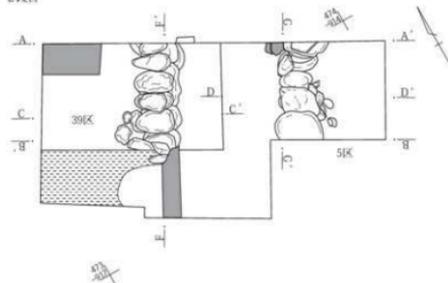
第3章 検出遺構と出土遺物

5・39区



第77図 5・39区遺構図(1)

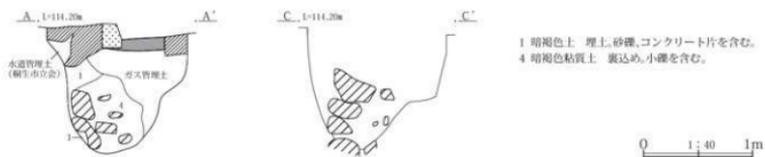
2段目



- 1 黒褐色土: 埋土, コンクリート塊・ガラス片・バラスが混じる。
- 2 黒褐色土: 水路堆積土, 径1~2cmの砂, 径1~3cmの礫を多量に含む。
- 3 暗褐色砂礫: 水路堆積土, 径1~5cmの礫を多量に含む。
- 4 暗褐色粘質土: 裏込め, 径5~10cmの礫を含む, ただし, 5区側にはガラス片・磁器片が混入している。

0 1:40 1m

第78図 5・39区道構図(2)



第80図 6区道構図(2)

調査範囲 東辺1.62m、西辺1.48m、北辺2.07m、南辺2.10mの長方形の範囲、4.32mを調査した。発掘調査は当初、南北0.9mほどを予定していたが、舗装を取り除き、最上面を検出した段階で、水路内部側を南側に0.7mほど拡張した。

検出状態 水路内部の西側面寄り、西側面石積みと裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路内部は水道管敷設による攪乱、西側面石積み水路側面はコンクリートによって固められた状態であった。裏込めは北端では良好な状態であったが、中ほどは上半に攪乱を受けている。

規模 側面石積み上面から底面までは107cmを測る。

掘り方 側面石積み下から裏込め側にかけて検出した。石積み下は平坦に掘り込まれ、1段目礫中ほどで胴木痕を検出した。胴木痕は角材状、板状を呈している。裏込めは石積みの裏側から60°ほどの角度で立ち上がる。

側面状態 1段目は5区1段目と同様に高さ30cm、幅70cm、奥行き40cmと大きな河床礫を据え置いている。

2段目は20～30cmと小ぶりの礫を縦長に2段に積み上げている。

最上面は高さ25～30cm、幅45～50cm、奥行き40～55cmの礫を上面が平坦になるように積み上げている。

裏込め 裏込めの奥行きは他の区に比べやや短い状態である。径5～10cmの礫を含む黒褐色の粘質土で充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、407磁器上絵井、108・467肥前磁器小碗・青磁火入、142瀬戸・美濃磁器小椀、200瀬戸・美濃陶器徳利、438堺・明石陶器すり鉢などを図示して掲載した。なお、407磁器上絵井は南に65mほど離れた38区から出土した破片と接合し

ている。

所見 5区、39区では両側の側面を検出できていることから水路幅を測定できた。水路幅は図上の計測ではあるが上面で0.90m、底面は0.75mを測る。この水路幅は桐生市が調査した箇所比べてだいぶ狭い状態であった。

6区(平成29年度調査)

位置 本町二丁目、5・39区の南、天満宮南交差点より364.3mほどの地点。

調査範囲 東辺3.67m、西辺3.68m、北辺1.27m、南辺1.25mの長方形の範囲、4.624mを調査した。

検出状態 水路内部の東側面寄り、東側面石積みと裏込めの一部を検出した。

残存状態 調査区東端はガス管敷設によって攪乱されている。ガス管保護のため側面石積み1段目下半と掘り方の調査には至っていない。南端には東西方向に水路を横断して陶管が敷設されており、側面石積みは残存していなかった。ここでの陶管は25区と同様に石積み中位の敷設ではあるが、陶管下位の石積みも取り除かれている。

規模 ガス管保護のため深さなどの計測はできなかった。

掘り方 調査には至っていない。

側面状態 1段目は配置されている礫の下半が調査できないため詳細は不明であるが、大きさの異なる河床礫を据え置いている。

2段目は1段目より小ぶりの礫を2段から3段に積み上げているが、その積み上げ方は不規則である。

最上面は残存していなかった。

6区の側面石積みには他の区と異なり亜角礫を使用しているのが特徴的であった。

裏込め 礫を含む暗褐色土が充填されていた。

第3章 検出遺構と出土遺物

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した556陶管、水路内から出土した428陶器蓋を図化して掲載した。

26区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、6区の南、天満宮南交差点より416.6mほどの地点。

調査範囲 東辺3.09m、西辺3.09m、北辺1.53m、南辺1.53mの長方形の範囲、4.7177㎡を調査した。

検出状態 北西角寄りで水路内部の東側面寄り、東側面石積み、裏込めの一部を検出した。

残存状態 調査区南西部では水道に伴う制水弁などの施設、北東部では集水桝などが構築されている。そのため比較的広い調査区ではあるが、水路内部や裏込めの調査はあまりできていない。東側面石積みも積み方にムラが目立ち、北寄りでは1段目に配されていたと想定される大型の礫が2段目に存在するなど、集水桝を構築する際に一次取り外され、再度積み直されたとみられる。そうした中で、本来の石積みは南半では残存しているとみられる。

規模 残存する石積み最上から底面までの深さは、水路内部を下層の途中までしか掘削ができなかったため、計測できない。底面の標高も同様である。

掘り方 水路内部や石積み下、裏込めについては構造物により掘り方まで掘削ができなかったため、状態は不明である。しかし、石積み下から胴木を検出した。胴木は中ほどでは残存していたが、両側は痕跡だけであった。胴木は径6～8cmの丸太材が使用されていた。また、胴木を固定する杭・杭痕も8カ所検出し、そのうち1本の杭は胴木より高い位置まで残存していた。

側面状態 1段目は北寄りで積み直しが行われたとみられるが、南よりでは大型の河床礫を横に据え置いている。

2段目は1段目よりやや小ぶりな礫を縦長に2段積み上げている。

最上層は2段目の状態から残存していないとみられる。

裏込め 構造物の攪乱で明確ではないが、径3～15cmの礫を多く含む暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、発

行年不明の10円玉硬貨、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した10石製品礫、361肥前磁器鉢、水路下層から出土した27石製品類石、70・71五銭硬貨、115・104・216・461・369肥前磁器碗・小丸碗・小碗・仏飯器・青磁染付鉢、484・485・474・瀬戸・美濃陶器灯火受皿・ひょうそくをははじめとする陶器、571・570・582・592・618ガラス製玩具・菓子容器、水路上層から出土した4石製品礫、水路内から出土した265瀬戸・美濃磁器平碗などを図化して掲載した。

27区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、26区の南、天満宮南交差点より434.4mほどの地点。令和2年度調査の38区と重複する。

調査範囲 東辺0.91m、西辺0.91m、北辺1.81m、南辺1.81mの長方形の範囲、1.6471㎡を調査した。

検出状態 38区で西側面を検出し両側面を検出・調査した結果となった数少ない調査区である。水路内部と東側面石積み、その裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路内部は西側面寄りで水道管理設による攪乱を受けている。両側面とも最上面に相当する礫は取り除かれた状態とみられる。

規模 水路幅は残存する側面上で1.26～1.27mを測る。残存する東側面石積み上位から底面までは103cmを測る。底面の標高は112.05mを測る。

掘り方 27区では両側面を検出したが、西側面下の掘り方調査には至っていない。水路はごく緩い弧を描くように側面石積み下まで掘り込まれ、石積み礫奥で5cmほどの段を造る。裏込めは調査区内ではほぼ平坦に掘り込まれている。掘り方面では胴木そのものは検出されていないが、胴木を据えた痕跡を検出した。また、胴木を固定するための杭も水路側で2カ所検出した。

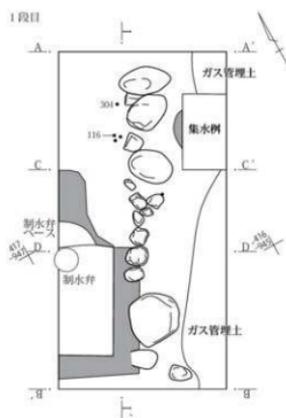
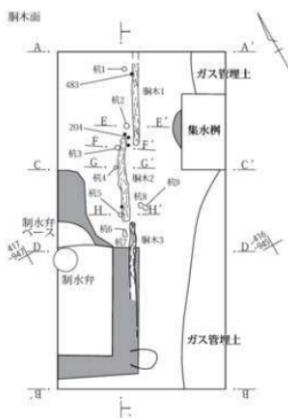
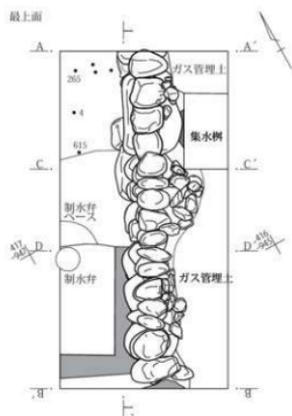
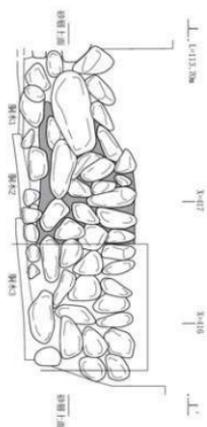
側面状態 1段目は高さ35～40cm、幅30cm前後、奥行き40～45cmの河床礫が据え置いている。

2段目も1段目と同様やや小ぶりな礫を3段目に積み上げている。積み上げ方は縦長に置かれたものが圧倒的に多い。

最上層は2段目上位の礫がやや大ぶりな礫であることから、ここが最上面とみられるが、上面の凹凸が激しいためさらに最上面を積み上げてあったとみられる。

裏込め 径3～15cmほどの礫を多く含む暗褐色土で充填

26区

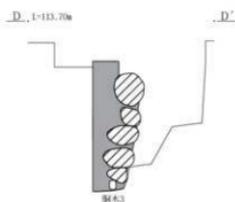
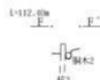
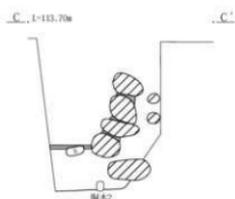
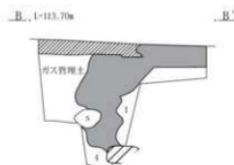
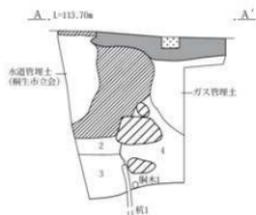
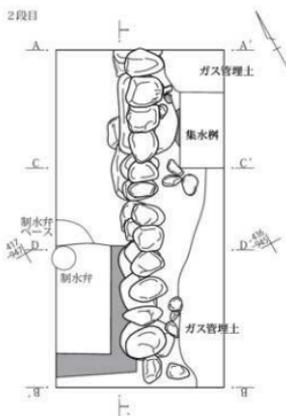


0 1:40 1m

第81図 26区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

2段目

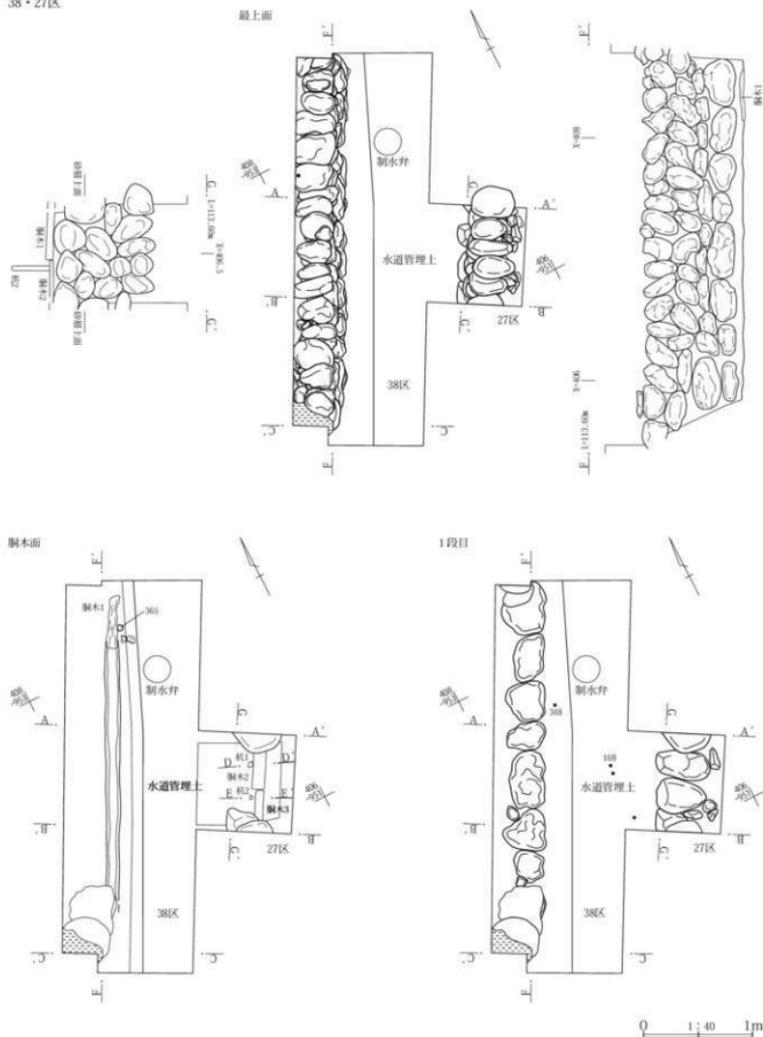


- 1 黒褐色土 埋土、コンクリート片を多く含む。
- 2 黒褐色砂 水路増積土、径1～2mmの砂を主体とする、径1～3cmの礫をやや多く含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路増積土、径1～5cmの礫を多く含む、鉄分の沈着著しい。
- 4 暗褐色粘質土 裏込め、径3～15cmの礫をやや多く含む。

0 1:40 1m

第82図 26区道構図(2)

38・27区



第83図 38・27区遺構図(1)

る。

規模 残存する西側面礫の上位から水路底面までは80～95cmほどである。

掘り方 水道管敷設部分の掘削はできないため掘り方面の掘削幅は狭くなり、水路や裏込め掘り方の状態は不明であるが、側面石積み下では礫を配した中ほどで15cmほどの段を造る。刷木自体は北側寄りで50cmほどしか残存していなかったが、その南側で痕跡を検出した。なお、刷木を固定するための杭、杭痕は検出できなかった。

側面状態 1段目は下段に高さ15～30cm、幅30～50cm、奥行き30～50cmのやや大ぶりの礫、上段に高さ12～20cm、幅20～38cm、奥行き30cmほどのやや小ぶりの河床礫を横長に据え置いている。

2段目は1段目と同様か、やや小ぶりの河床礫を縦長に2段積み上げている。

最上面は2段目上面の状態から残存していないとみられる。

裏込め 38区ではほとんど調査できていないが、礫を含む黒褐色土で充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した7石製品、407磁器上絵丹、465かわらけ、507・512・501在地系土器釜輪・搬入系土器置輪・在地系土器練炭おこし、523軒先瓦を図化して掲載した。なお、407磁器丹は北に65mほど離れた39区から出土した破片と接合している。

28区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、38区の南、天満宮南交差点より438.4mほどの地点。

調査範囲 東辺1.18m、西辺1.18m、北辺1.67m、南辺1.67mの長方形の範囲、1.9706㎡を調査した。

検出状態 水路内部東半、東側面石積み、裏込めの一部を検出した。

残存状態 水路内部は東側面から0.6～0.7mは残るが、その西側は水道管理設によって攪乱されている。側面石積みは残存する上面の凹凸がやや激しいことから最上面は取り除かれた可能性が高い。また、調査区北側0.5mほどは水道管理設や攪乱によって残存していない。

規模 残存する石積み最上面から底面までは75～80cmを

測る。底面の標高は112.04mを測る。

掘り方 水路底面は緩い弧状に掘り込まれている。側面石積み下で10cmほどの段を造り、裏込めへ移行する。調査区内の裏込め底面は調査範囲が狭いため明確ではないが、東に向けて高くなるごく緩い傾斜で掘り込まれているようである。

側面状態 1段目は調査区北端の礫が高さ28cm、幅48cm、奥行き35cmの扁平な河床礫を横長に配しているが、その南側はやや小ぶりの礫を斜めに据え置いている。

2段目は1段目とはほぼ同様な礫を下位から横、横と斜め、斜めに積み上げている。

最上面は2段目がやや大ぶりの礫を3段に積み上げていることから、2段目上位の礫が最上面を構成するようにもみられるが、上面の凹凸が激しいことから取り除かれていていると見られる。

裏込め 径10～20cmの礫を多く含む暗褐色土で充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した374磁器鉢、水路下層から出土した76金属製品煙管雁首、水路内から出土した152・377磁器湯飲み・鉢、634ガラス製食器を図化して掲載した。

29区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、28区の南、天満宮南交差点より441.4mほどの地点。

調査範囲 東辺2.82m、西辺2.82m、北辺1.66m、南辺1.68mの長方形の範囲、4.7094㎡を調査した。

検出状態 水路内部東半、東側面石積み、裏込めの一部を検出した。

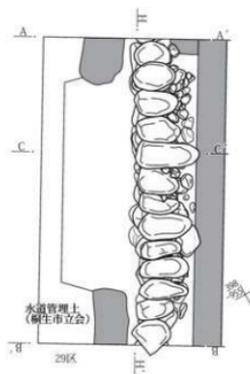
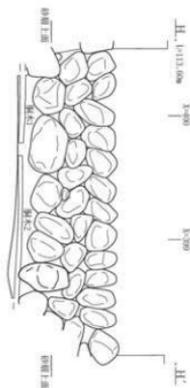
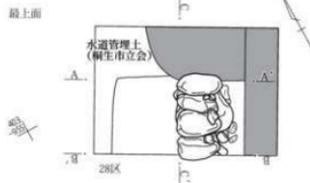
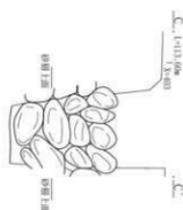
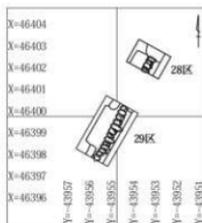
残存状態 水路内部は東側面から0.6～0.7mは残るが、その西側は水道管理設によって攪乱されている。側面石積みは残存する上面の凹凸がやや激しいことから、最上面は取り除かれた可能性が高い。

規模 残存する石積み最上面から底面までは92～100cmを測る。底面の標高は112.06mを測る。

掘り方 北側断面では水路底面は緩い弧状に掘り込まれ、側面石積み下で10cmほどの段を造り、裏込めへ移行しているが、南側では若干の高低差があるもののほぼ平坦に掘り込まれている。側面石積み下の掘り方面では徑

第3章 検出遺構と出土遺物

28区、29区



0 1:40 1m

第85図 28区、29区遺構図(1)

10cmほどの丸太材による胴木を検出した。胴木は中ほどで継ぎ足されており、南北に2本検出した。全長は不明であるが北側0.6m、南側1.3mを測る。また、胴木を固定するための杭痕も検出した。

側面状態 1段目は高さ30～45cm、幅27～55cm、奥行き30～55cmの礫を据え置いている。その間は南半が縦長、北半が横長に使用している。

2段目は1段目よりやや小ぶりの礫を2段に積み上げている。下段は斜め、上段は縦長に積んでいる。

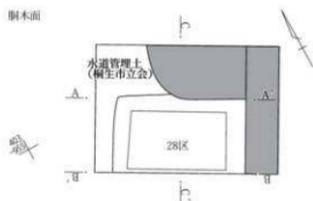
最上面は前記のように残存していないと判断できる。

裏込め 径10～20cmの礫を多く含む暗褐色土で充填されていた。

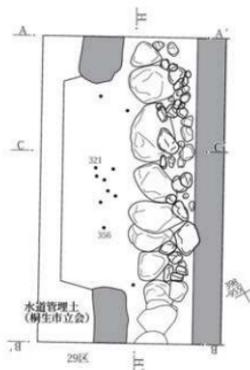
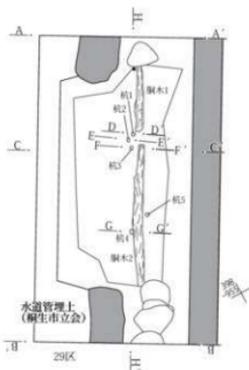
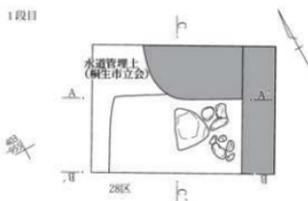
出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した25石製品石筆、235・236瀬戸・美濃磁器端反碗、347取平陶器小皿、207・290・203・磁器そば猪口、井、徳利、683ガラス製用途不明瓶、水路上層から出土した510在地系土器釜輪、497・87搬入系土器目皿・土製品などを図化して掲載した。

第3節 検出した水路の道構

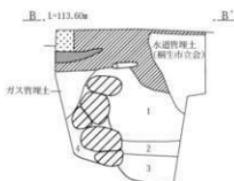
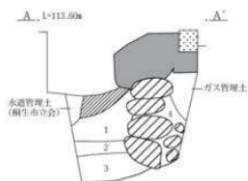
樹木面



1段目



28区



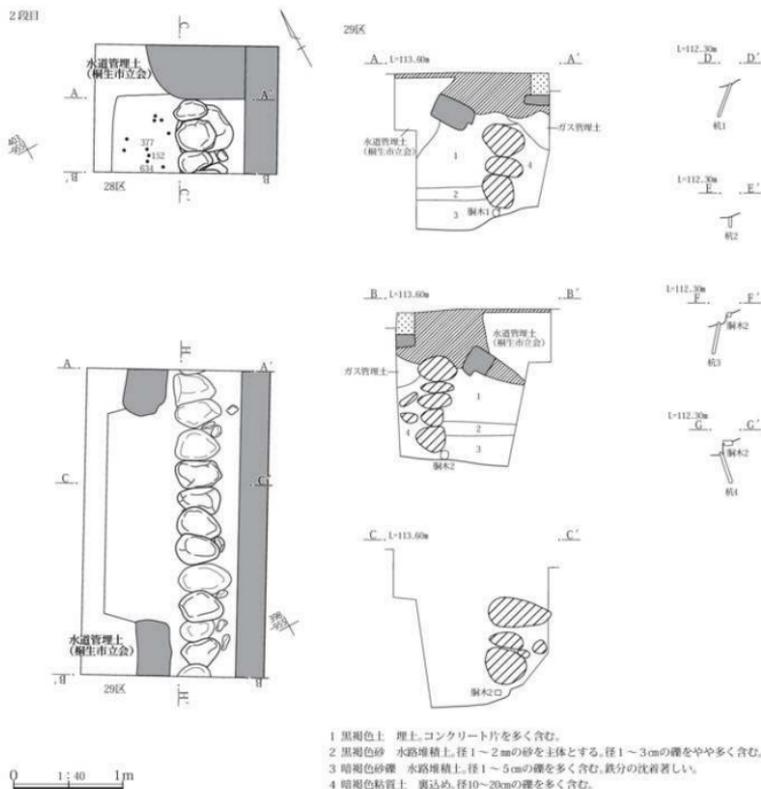
- 1 黒褐色土 理土。コンクリート片を多く含む。
- 2 黒褐色砂 水路堆積土。径1～2mmの砂を主体とする。径1～3cmの礫をやや多く含む。
- 3 暗褐色砂礫 水路堆積土。径1～5cmの礫を多く含む。鉄分の沈着が強い。
- 4 暗褐色粘質土 裏込め。径10～20cmの礫を多く含む。

0 1:40 1m

第86図 28区、29区道構図(2)

第3章 検出遺構と出土遺物

2段目



第87図 28区、29区遺構図(3)

30区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、29区の南、天満宮南交差点より451.2mほどの地点。

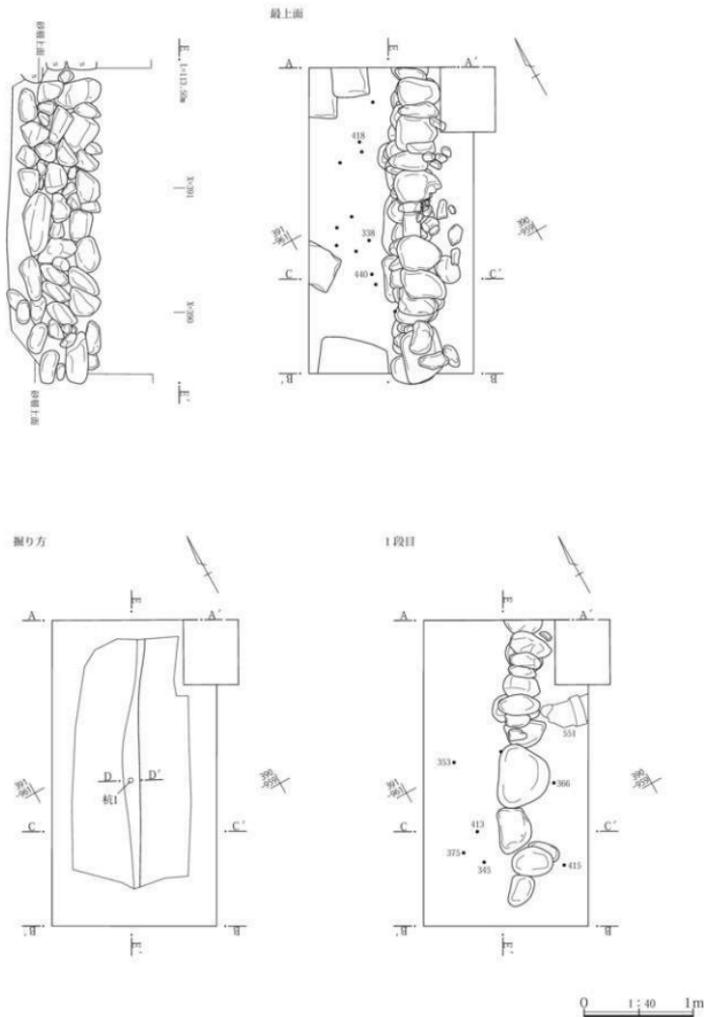
調査範囲 東辺2.81m、西辺2.81m、北辺1.50m、南辺1.50mの長方形の範囲、4.215㎡を調査した。

検出状態 水路内部の東寄り、東側面石積み、裏込めの一部を検出した。水路内部は水路上に掛けられていた石橋(溝蓋)が水路を埋めるときに内部に落とし込まれてお

り、この石橋は調査区外に延びるため取り上げることができなかった。

残存状態 残存する東側面最上上面は礫の凹凸が激しく、本来の最上面を構成する礫は抜き取られたとみられる。裏込め北東角には集水樹が設置され、裏込めの一部は攪乱されている。また、同じく集水樹のやや南でも陶管が残ることから裏込めの北側1/3は攪乱を受けているとみられる。調査区南端側でも側面石積みの礫が乱れた

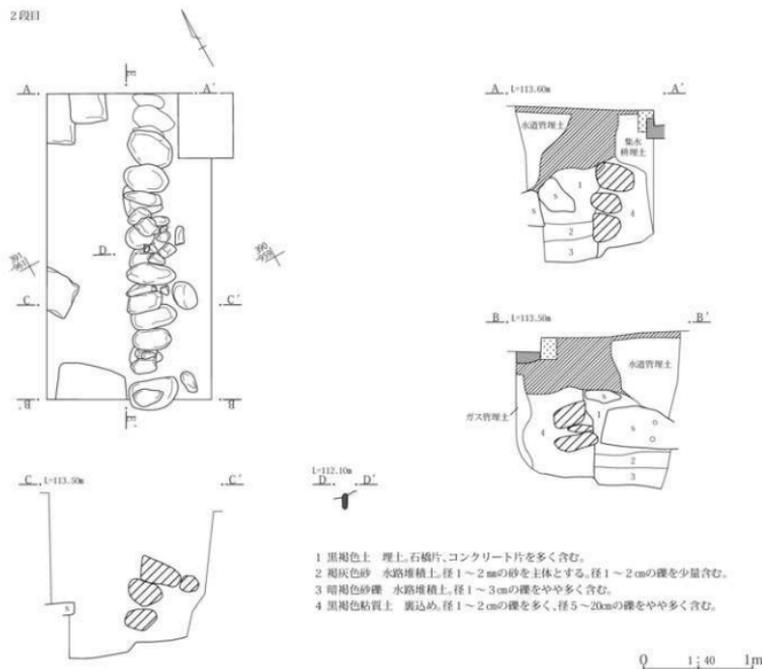
30区



第88図 30区道構図(1)

第3章 検出遺構と出土土物

2段目



第89図 30区遺構図(2)

状態であった。こうしたことから本来の状態がどのくらい残存しているか判断としない。しかし、水路内部は水平堆積が観察できることから、こちらは本来の状態が残ると判断できる。

規模 側面石積み最上層から水路底面までの深さは93cm前後を測る。水路底面の標高は、111.99～111.96mを測る。

掘り方 水路底面は緩い弧状に掘り込まれている。側面石積み下で10cmほどの段を造り、裏込めへ移行する。調査区内の裏込めは東が高くなる、ごく緩い傾斜で掘り込まれていた。腐木は確認されなかったが、中央付近で杭痕を1カ所検出した。

側面状態 1段目は残存状態でも記したように積み替えや崩落などによって本来の状態を保っていないとみら

るが、中央の高さ25cm、幅60cm、奥行き45cmの礫とその南側は本来の状態を保っているとみられる。

2段目は調査区両端側と中ほどで積み方がことなるが、1段目の様相から1段目で本来の状態が保たれている上位の礫は、1段目と同様に本来の状態を保っていると判断できる。

最上層は残存状態で記したように残存していないとみられる。

裏込め 径1～2cmと径5～20cmの礫を多く含む黒褐色土が充填されていた。30区北側では陶管が埋設されているが、断面では裏込めに使用されている土砂に多くの礫が含まれているためか、その掘削痕が確認できない。

出土土物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶

磁器、瓦、煉瓦、ガラス、プラスチック製水菓容器が出土している。このうち、裏込めから出土した33・36寛永通寶、84金属製品蓋札、126・228・232・432・364肥前磁器小碗・碗・段重・鉢、316三田青磁皿か鉢、132・285瀬戸・美濃磁器碗、482陶器灯火受皿、437搬入系土器焼塩壺、499・457・456在地系土器目皿・焙烙、水路下層から出土した128・243肥前磁器小碗・端反碗、196・332・161瀬戸・美濃磁器盃・小皿・湯飲み、341・208磁器小皿・猪口、450陶器鍋、508在地系土器釜輪、524十能瓦、水路上層から13・16・17石製品石板、64一銭硬貨、77金属製品煙管、320・367肥前磁器小皿・鉢、170・156・157瀬戸・美濃磁器湯飲み、478瀬戸・美濃陶器火打受皿、424・402磁器蓋・碗、358・560陶器洋食器皿・化粧瓶、455在地系土器焙烙、602・632ガラス製文具インク瓶・食品瓶、水路内から出土した413・366肥前磁器蓋・鉢、415瀬戸・美濃陶器水費をはじめとする陶磁器などを図化して掲載した。

31区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、30区の南、天満宮南交差点より459.5mほどの地点。

調査範囲 東辺0.60m、西辺0.60m、北辺1.50m、南辺1.50mの長方形の範囲、0.90mを調査した。

検出状態 水路内部の東半、東側面石積み、裏込めの一部を検出した。また、31区では石橋(溝蓋)を掛けた痕跡も検出した。この石橋痕は幅57cm以上であったことが分かる。なお、痕跡の南端では隣に並べて置いた痕跡が確認されなかったことから、ここに置かれた石が石橋の南端であったとみられる。

残存状態 水路東側面より西0.75m以上は水道管理設、裏込めも調査区東端がガス管理設によって攪乱されているが、水路東半や東側面石積みは比較的良好な残存状態であった。

規模 最上面から水路底面までは103cmを測る。水路底面の標高は111.90~111.92mを測る。

掘り方 水路底面は緩い弧状に掘り込まれている。側面石積み下で15cmほどの段を造り、裏込めへ移行する。調査区内の裏込めは東が高くなる緩い傾斜で掘り込まれていた。側面石積み下胴木が設置されているが、調査区中ほどで切れていることから2本設置されたと思われる。

この胴木は幅20cm、厚さは北側が2cm、南側が6cmの板状のもので他の区では見られないものであった。

側面状態 1段目は高さ30cm前後、幅30~45cm。奥行き30cmほどのやや大ぶりな河床礫を据え置いている。

2段目は1段目上に10cm前後の小ぶりな河床礫を置き、その上に20~30cmほどの河床礫を2段から3段積み上げている。

最上面は調査区北端に1石が残るだけである。この礫は高さ10cm、幅20cm、奥行き10cmの扁平な礫である。北側には高さ、幅とも20cm前後の礫が抜き取られた痕跡がみられる。

裏込め 径1~2cmと径5~20cmの礫を多く含む黒褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、昭和35年から39年に製造された東和酒造シルバークイスキー瓶が出土している。このうち、裏込めから出土した23石製品石筆、水路下層から出土した34寛永通寶、211肥前磁器端反碗蓋、160瀬戸・美濃磁器湯飲み、442陶器行平鍋、585・586ガラス製玩具、水路内から出土した342磁器小皿、427陶器蓋を図化して掲載した。

所見 裏込めから近代遺物が出土しているが、裏込めの土層は攪乱を受けた様子が見られないことから上位に混入したものと想定される。

32区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、31区の南、天満宮南交差点より467.9mほどの地点。

調査範囲 東辺2.49m、西辺2.49m、北辺1.30m、南辺1.30mの長方形の範囲、3.237mを調査した。

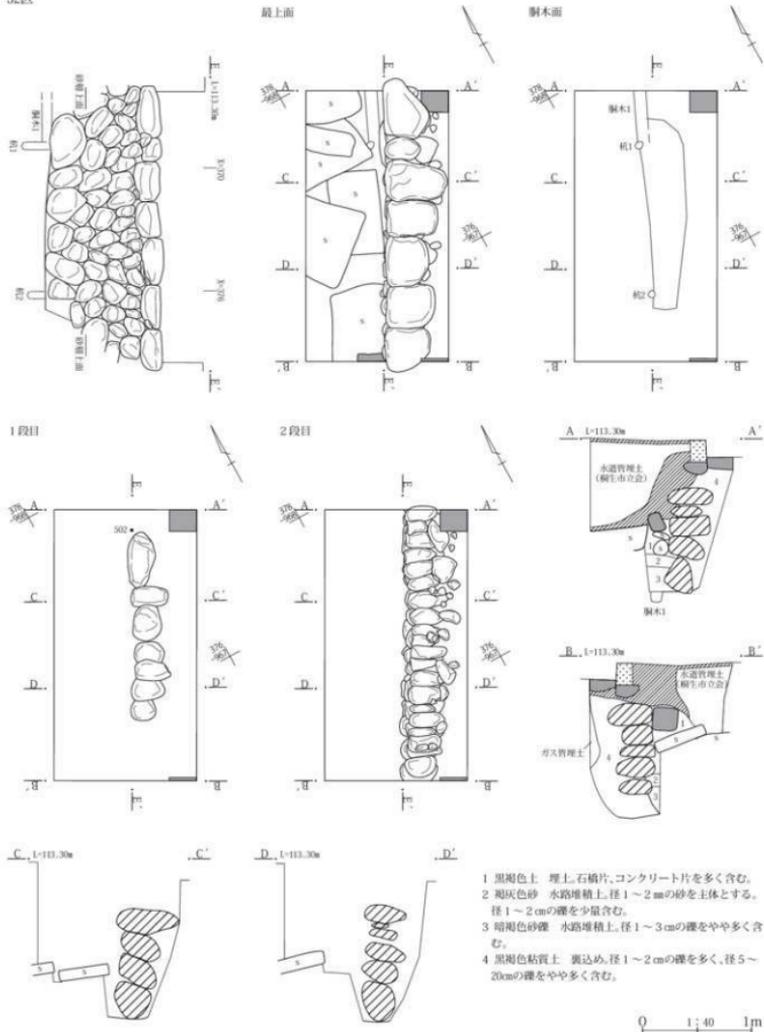
検出状態 水路内部の東寄り、東側面石積み、裏込めのごく一部を検出した。水路内部は水路上に掛けられていた石橋(溝蓋)が水路を埋めるときに内部に落とし込まれており、この石橋は調査区外に延びるため取り上げることができなかった。このため水路自体は上半の検出に留まっている。

残存状態 水路下半は上記のような状態のため調査に至らなかったが、側面石積みは埋設物の敷設もなく良好な状態であった。

規模 水路内に落とし込まれた石橋のため水路底面まで

第3節 検出した水路の遺構

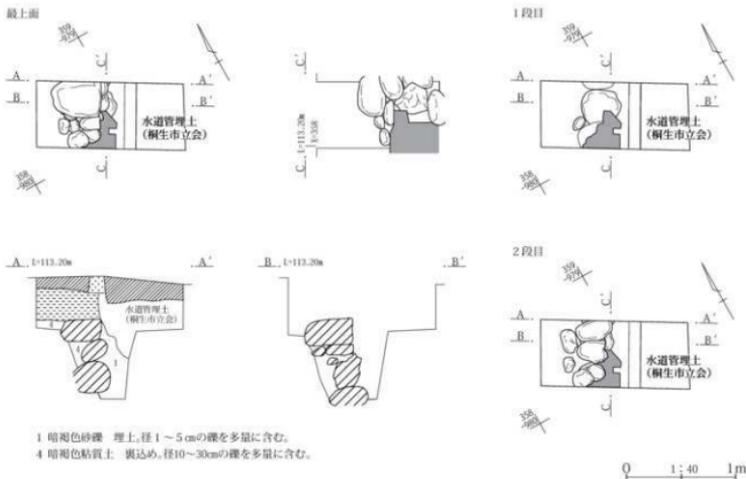
32区



第91図 32区遺構図

第3章 検出遺構と出土遺物

37区



第92図 37区道構図

褐色土で充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、裏込めから出土した63一銭硬貨、276肥前磁器碗、205磁器猪口、439陶器行平鍋蓋、509在地系土器釜輪、669ガラス製照明具である電灯傘、水路下層から出土した197瀬戸・美濃磁器蓋、416白磁蓋、水路上層などから出土した190磁器急須、502在地系土器縄灰おこしを図化して掲載した。

裏込めから出土した63樹一銭青銅銭は大正12(1923)年発行のものであるが、出土位置が2段目上面と同じ高さであることから裏込めでも上位から上面に近い位置である。

所見 32区は裏込め上位は近代に掘削が行われた可能性が窺えたが、中位から下位は水路構築当時の状態を良好に残す数少ない箇所の一つである。

37区(令和2年度調査)

位置 本町2丁目、32区の南、天満宮南交差点より490.3mほどの地点。

調査範囲 東辺0.63m、西辺0.64m、北辺1.34m、南辺1.36mの長方形の範囲、0.8505mを調査した。

検出状態 水路西寄り内部と西側面石積み、裏込めの一部を検出した。石積みの手前、水路内にはコンクリート製の堰が構築され、水を堰き止め水位を上げる板を差し込む溝が作られていた。このコンクリートによる構造物は調査区南側に延びている。

残存状態 水路内部は調査区東端より45cmほどが水道管理施設のため調査には至っていない。

規模 底面までの深さは最も上位の礫から0.75mを測る。しかし、1段目の礫を取り上げることができないため底面の確認ができず確認を得られた値ではない。

掘り方 ごく狭い調査区のため調査には至っていない。

側面状態 1段目は高さ15cm前後、幅30cm、奥行き35cmの扁平な礫をはじめとするものを据え置いている。なお堰接する礫は堰を取り外すことができなかったため、詳細は不明である。

2段目は高さ・幅・奥行きとも30cm前後の大きな礫と小ぶりな礫を組み合わせて、1段から2段に積み上げ

であった。

最上層は高さ35cm、幅35cm、奥行き45cmと大ぶりの礫が1石残るだけであった。

裏込め 石積み側を調査したためか、径10～30cm大の礫を多く含む暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や攪乱から石製品、金属製品、陶磁器、瓦、かわかけ、ガラスが出土しているが、図化できるものは出土していない。

所見 37区は側面を構築している礫の積み上げにやや不自然な点が見られることから、調査区の両側に埋設物が存在するとみられる。

33区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、37区の南、天満宮南交差点より512.0mほどの地点。調査対象地南端で令和2年度調査の36区と重複する。

調査範囲 東辺3.20m、西辺3.19m、北辺1.60m、南辺1.62mの長方形の範囲、5.1359㎡を調査した。

検出状態 水路東寄りの内部と東側面石積み、裏込めの一部を検出した。中央で確認した攪乱の南側には陶管が敷設され、攪乱北側では側面石積みの内部を通る鉛管、南側の側面石積み上部では鉄管が敷設されていた。

残存状態 調査区の南北の中間では幅0.70m、深さ1.20m以上を攪乱によって欠く。陶管の敷設では側面の礫は積み替えられているが、胴木は取り除かれずに残存していた。

規模 水路は東側面から0.6mほどで水道管理設坑の埋設土になる。側面石積み最上層から底面までの深さは97～107cmである。

掘り方 水路側は弧状に掘り込まれ、側面石積み下は緩い傾斜、裏込め部分は調査範囲では平坦に近い状態であった。側面礫下では丸太材を胴木に使用していた。胴木の径は5cm前後を測る。また、胴木を固定する杭の痕跡が5カ所検出し、最も北側では胴木の両側に杭痕が検出した。杭は径3cm前後で深さ30～50cmほど撃ち込まれている。底面の標高は111.96～111.98mを測る。なお、北側より南側が高い値を示していた。

側面状態 1段目は高さ20～25cm、幅28～50cmの扁平な河床礫を据え置いている。

2段目は下位に小ぶりの礫を上面が平坦になるように

積み、その上位には攪乱の北側で30～40cm大の、やや大きな礫を斜めに積み上げているが、北側では横長に積み、その上に縦長に積み上げている。

最上層は2段目と同じ大きさの礫を横長に配置しているが、調査範囲南端から0.6mほどは残存していない。

裏込め 径1～2cmの礫を多く含む暗褐色土が充填されていた。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラス、昭和25年～40年に発行された5円玉、10円玉硬貨が出土している。なお、五円硬貨、十円硬貨とも水路下層からの出土である。このうち、裏込めから出土した310・227肥前磁器皿・碗、330磁器小皿、水路下層から出土した5石製品碗、22石板、24・26石筆、59一錢硬貨、100・284肥前磁器小杯・碗、340磁器小皿、425珉平陶器蓋、543磁器製引留罫子、92陶製玩具、574・576・579・596・605・614・619・659ガラス製玩具、文具インク消し液瓶・菓子型・清涼飲料水瓶・薬瓶、水路上層などから出土した259・462磁器平碗・仏飯器、661・649・678ガラス製薬瓶・化粧瓶・用途不明瓶などを図化して掲載した。

36区(令和2年度調査)

位置 本町二丁目、33区の南端の西側、天満宮南交差点より514.6mほどの地点。調査区東側では令和元年度調査の33区と重複する。なお、調査対象範囲の西側は一部民地に及んでいる。

調査範囲 東辺0.62m、西辺0.66m、北辺2.10m、南辺2.10mの長方形の範囲、1.344㎡を調査した。

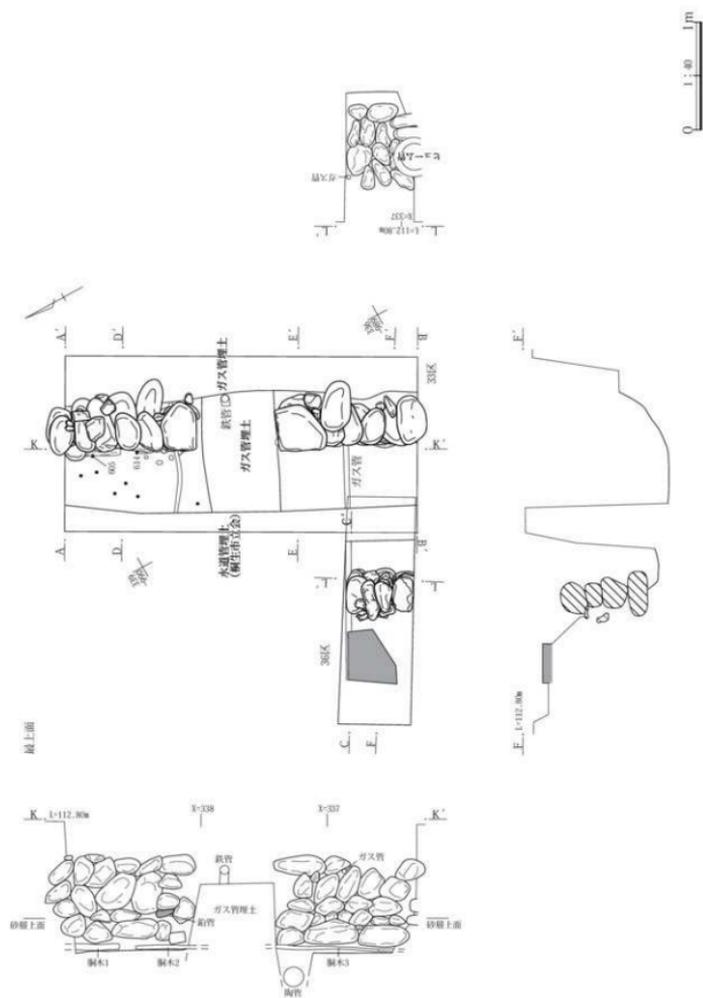
検出状態 水路西寄り内部と西側面石積みを検出した。

残存状態 水路内部は調査区東端より40cmほどが水道管理設のため調査には至っていない。西側面石積みは、南端最上面礫下に直径35cmほどのヒューム管が埋設されているため、2段目礫の一部と調査区北端の最上面礫は、ガス管理設のため残存していない。

規模 底面までの深さは最も上位の礫から0.80mを測る。しかし、1段目の礫を取り上げることができないため、底面の確認ができず確認を得られなかった。

掘り方 ごく狭い調査区のため調査には至っていない。

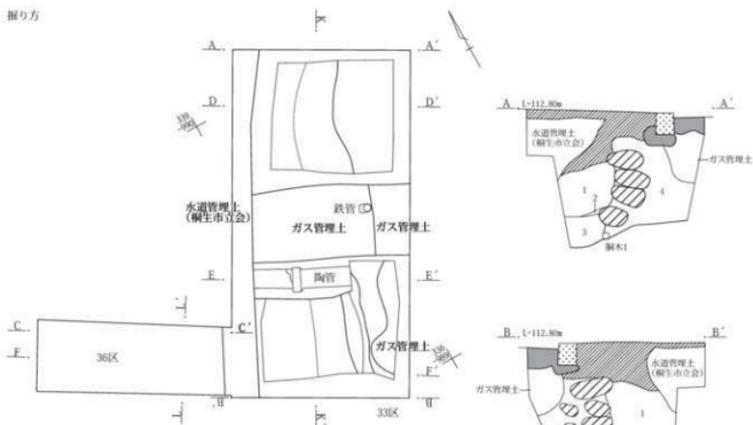
側面状態 1段目は高さ15cm前後、幅25cm前後、奥行き40cm前後の河床礫を据え置いている。



第33図 33・36区遺構図(1)

第3節 検出した水路の道構

掘り方



掘断面



A-A' B-B'

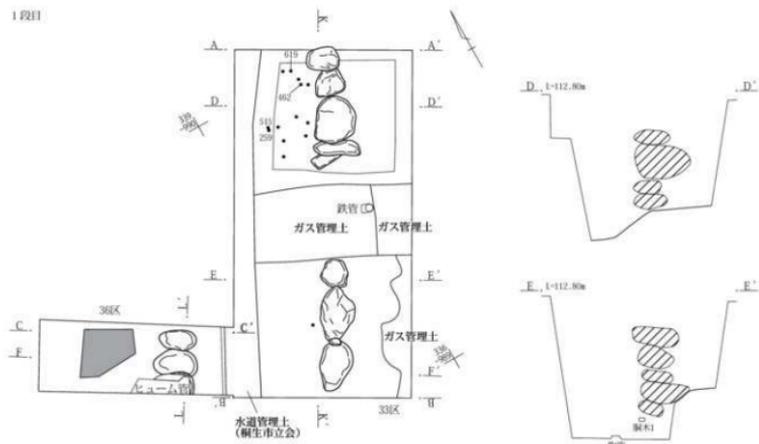
- 1 黒褐色土 埋土、石礫片、コンクリート片を多く含む。
 - 2 暗灰色砂 水路増植土。径1～2mmの砂を主体とする。径1～2cmの礫を少量含む。
 - 3 黄褐色砂礫 水路増植土。径1～5cmの礫を多く含む。鉄分沈着著しい。
 - 4 暗褐色粘質土 裏込め。径1～2cmの礫を多く、径5～10cmの礫をやや多く含む。
- C-C'
- 2 暗灰色砂 水路増植土。径1～2mmの砂を主体とする。径1～2cmの礫を少量含む。
 - 3 暗褐色土 水路増植土。径5cm前後の礫を含む。

0 1:40 1m

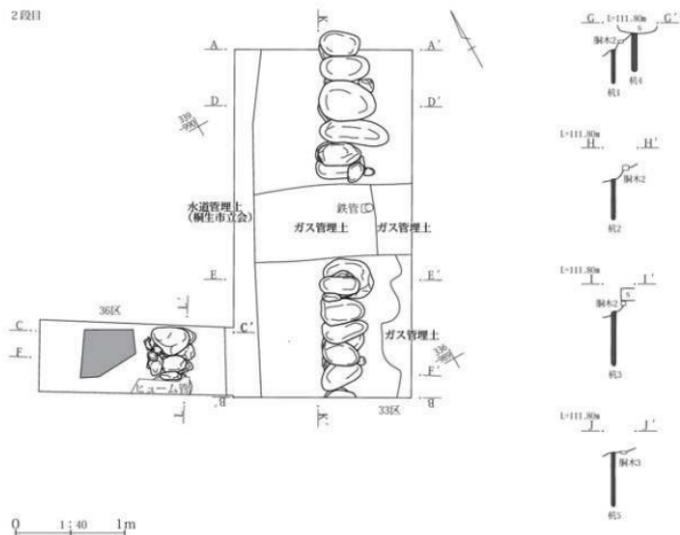
第94図 33・36区道構図(2)

第3章 検出遺構と出土遺物

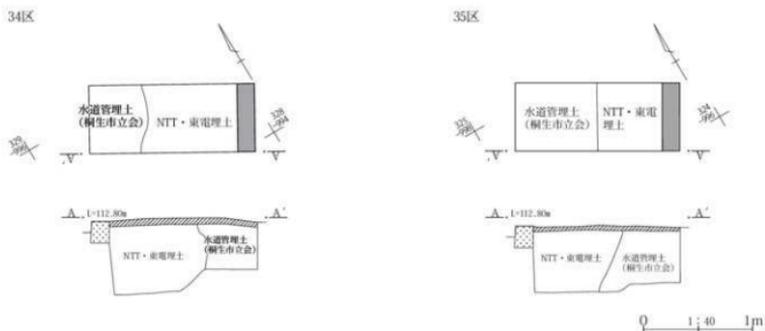
1段目



2段目



第95図 33・36区道構図(3)



第96図 34区、35区遺構図

2段目は1段目よりやや小ぶりの礫を縦長に2段に積み上げているが、他区の側面と石積みの状態が異なるため、最上面ヒューム管理設時に一度取り除かれたものが再度戻された可能性が窺えた。

最上面も石積みにも不自然な様子が見られることからヒューム管理設時に一度取り除かれたものが再度戻された可能性が窺えた。

裏込め 50×50cm大のコンクリートによる基礎が残存しているため調査には至っていない。

出土遺物 水路内部や裏込めから石製品、金属製品、陶磁器、瓦、ガラスが出土している。このうち、水路下層から出土した479瀬戸・美濃陶器灯火受皿、382取平陶器壺、329磁器小皿を図化して掲載した。

所見 33区と36区は調査区が重複していることから、水路幅が図上で計測可能である。図上から側面石積み上端では幅1.16mを測る。

34区(令和元年度調査)

位置 本町一丁目、36区の南、天満宮南交差点より533.9mほどの地点。

調査範囲 東辺0.63m、西辺0.63m、北辺1.51m、南辺1.51mの長方形の範囲、0.9513㎡を調査した。

検出状態 水路跡の検出には至っていない。

残存状態 調査区の東側0.60m、幅では現地表面から50cmほど掘りこんだところ、NTT・東京電力のケーブル埋設の標識を確認した。残り西側では60cm掘りこんだところで水道管理設による埋め戻し土を検出した。こうした埋設物の存在を確認したためこれより下位の掘削は行わなかった。

出土遺物 34区からは遺物が出土していない。

35区(令和元年度調査)

位置 本町二丁目、34区の南、天満宮南交差点より538.5mほど、今回の発掘調査における最南端地点。

調査範囲 東辺0.64m、西辺0.64m、北辺1.50m、南辺1.50mの長方形の範囲、0.96㎡を調査した。

検出状態 水路跡の検出には至っていない。

残存状態 調査区の東側0.60m、幅では現地表面から50cmほど掘りこんだところ、NTT・東京電力のケーブル埋設の標識を確認した。残り西側では70cm掘りこんだところで水道管理設による埋め戻し土を検出した。こうした埋設物の存在を確認したためこれより下位の掘削は行わなかった。

出土遺物 35区からは遺物が出土していない。

第3章 検出遺構と出土遺物

第3表 樹生新町水路調査区一覽

調査区	グリッド		調査 方位	全長 (m)	幅 (m)	水路底面標高		樹木(m)			杭 (本)	石積み残存			石橋	積み 直し	
	X	Y				北面	南側	本数	径	長さ		1段目	2段目	最上面			
7	46784	-43735	東	1.51	1.68	115.84	115.85	-	-	-	-	○	○	△	-	□	
8	46771	-43742	東	0.67	1.54	115.73	115.70	-	-	-	-	○	○	×	-	-	
49	46771	-43744	西	0.64	1.70	(115.83)	(115.84)	-	-	-	-	○	○	×	-	-	
9	46767	-43745	東	1.17	1.00	115.74	115.80	-	-	-	-	○	○	×	-	-	
10	46762	-43747	東	2.70	1.02	115.76	115.76	-	-	-	-	1	△	△	×	-	
11	46757	-43750	東	3.72	1.01	115.81	115.75	2	0.05~0.10	(0.64~2.62)	-	9	○	△	×	-	
12	46752	-43754	東	1.24	1.06	115.69	115.72	4	0.03~0.04	(0.08~0.25)	-	○	○	×	-	-	
1	46750	-43755	-	1.58	2.04	-	115.65	2	0.04~0.05	(0.16~0.36)	-	×	×	×	-	-	
48	46750	-43756	西	1.44	3.65	115.71	115.74	1	0.07	(0.46)	-	△	△	×	-	○	
13	46741	-43760	東	2.92	1.04	115.79	115.78	2	0.08~0.10	(0.77~1.44)	2	○	○	×	-	-	
14	46715	-43775	東	2.57	1.12	115.54	-	-	-	-	-	-	△	△	×	-	
47	46716	-43777	西	0.64	1.67	115.53	115.53	-	-	-	-	○	○	×	-	○	
15	46698	-43785	東	3.12	1.04	115.46	115.41	2	(0.07~0.09)	(1.10~1.67)	-	○	○	×	-	-	
46	46697	-43788	東	0.35	0.86	155.32	155.33	-	-	-	-	○	○	○	-	■	
16	46684	-43793	東	3.16	1.08	-	-	-	-	-	-	○	○	×	-	□	
17	46677	-43798	東	0.95	1.51	-	-	-	-	-	-	○	○	×	-	-	
45	46677	-43799	西	1.63	1.05	115.26	115.25	-	-	-	-	○	○	○	-	■	
18北	46671	-43802	東	1.23	1.04	-	-	-	-	-	-	○	○	×	-	-	
18南	46669	-43803	東	0.95	1.02	115.08	115.06	-	-	-	-	△	○	×	-	-	
44	46670	-43804	-	0.67	0.84	115.05	115.07	-	-	-	-	×	×	×	-	-	
19	46646	-43817	東	1.50	1.51	114.92	114.96	1	(0.09)	(1.26)	4	○	○	×	-	-	
20	46635	-43822	東	1.20	1.20	114.90	114.90	(1)	-	-	-	△	△	×	-	-	
43	46594	-43847	西	0.68	1.70	114.47	114.43	-	-	-	-	△	×	×	-	-	
21東	46573	-43849	東	19.18	1.67	114.40	114.31	10	0.05~0.13	0.15~2.17	8	○	○	△	○	△	
21西	-	-	西	-	-	-	-	-	-	-	-	?	○	○	-	-	
22	46553	-43865	東	15.82	1.08	114.24	113.96	7	0.05~0.15	0.12~1.78	1	○	○	△	-	△	
2	46551	-43870	東	1.67	1.54	113.96	113.95	-	-	-	-	○	○	△	-	-	
23	46542	-43871	東	11.00	1.07	114.13	113.99	2	0.08~0.19	(2.92~3.49)	-	○	○	△	-	-	
3	46538	-43876	東	4.00	1.27	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
42	46541	-73876	西	2.50	2.28	113.82	113.80	-	-	-	-	2	△	△	×	-	○
24	46525	-43878	東	15.50	1.13	113.59	113.54	-	-	-	-	○	○	△	-	△	
41	46520	-43888	西	0.87	1.46	113.53	113.61	-	-	-	-	○	○	○	-	○	
40	46501	-43899	西	0.74	1.49	113.23	113.23	-	-	-	-	○	×	×	-	-	
25	46494	-43902	東	2.69	1.05	113.05	112.98	1	0.09~0.11	(1.55)	3	○	○	○	-	○	
4	46480	-43908	東	4.00	1.22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
5	46473	-43914	東	0.91	1.72	-	-	-	-	-	-	○	○	○	-	-	
39	46473	-43915	西	1.63	2.12	112.94	112.94	1	(0.13~0.15)	(0.67)	1	○	○	○	-	-	
6	46465	-43916	東	3.70	1.28	-	-	-	-	-	-	○	○	○	-	-	
26	46415	-43944	東	3.11	1.53	111.94	111.94	3	0.05~0.09	(0.77~0.96)	9	○	○	△	-	△	
27	46406	-43951	東	0.92	1.81	112.05	112.05	2	0.08~0.11	(0.28~0.34)	2	○	○	△	-	-	
38	46405	-43951	西	3.64	1.27	112.18	112.18	1	0.07~0.10	(2.80)	-	○	○	○	-	-	
28	46402	-43953	東	1.18	1.67	112.04	112.04	-	-	-	-	○	○	○	-	-	
29	46398	-43954	東	2.83	1.67	112.06	112.06	2	0.05~0.09	(0.60~1.30)	5	○	○	○	-	-	
30	46389	-43959	東	2.83	1.50	111.99	111.99	-	-	-	-	1	○	○	○	-	△
31	46384	-43963	東	0.60	1.50	111.90	111.92	2	0.11	(0.24~0.32)	-	○	○	○	○	-	
32	46375	-43967	東	2.50	1.30	111.84	111.79	1	0.09~0.11	(0.37)	2	○	○	○	-	-	
37	46358	-43978	西	0.62	1.37	111.98	111.98	-	-	-	-	△	△	△	-	△	
33	46336	-43988	東	3.21	1.62	111.59	111.56	3	0.05~0.07	(0.39~1.16)	5	○	○	△	-	-	
36	46336	-43990	西	0.63	2.11	111.57	111.57	-	-	-	-	○	○	△	-	△	
34	46328	-43994	-	0.63	1.51	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
35	46324	-43996	-	0.63	1.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

凡例 石積み ○ 調査区内残存、△ 一部残存、× 残存なし
積み直し ○ 全面、△ 一部、■ 影影石に変更、□ 一部影影石に変更

第4節 出土遺物

桐生新町水路跡は江戸時代に構築され、昭和30年代まで使用されていた近世・近代の遺構であることから、石製品・石器、金属器・金属製品、陶磁器・陶製品・ガラス製品など一般的な遺物の他に、プラスチック製や紙など現代のものも出土した。今回の整理では太平洋戦争前後までの遺物を整理対象にしたため戦後の昭和20年代から30年代にかけての遺物は図化、掲載していない。なお、これらの遺物も今後の昭和史研究の素材として活用されることも見込まれるため保管してある。

また、水路構築時期は文献では、安永九(1780)年の古地図に描かれているものが最も古い。町自体は天正十九(1591)年から慶長十一(1606)年に新しくつくられた町である。こうしたことから成立当初から水路が構築されたとは想定できないが、200年近くの間、水確保の問題をそのまま放置することはできなかったと想定され、水路構築の時期を探る遺物の出土が期待された。近世遺物としては銭貨や陶磁器が出土していたが、正確な年代を示すものは存在しておらず、安永九(1780)年をさかのぼることはできなかった。

しかし、出土遺物からは近世から昭和30年代の庶民生活の風習を知る遺物が多く出土しており、今後の活用が期待される。

1 石製品・石造品

32点を選択し、図化して掲載した。石製品31点で内訳は砥石3点、硯8点、石板11点、石筆4点、蝋石2点、塚柱・石樋・不用品各1点、剥片石器の石鎌1点である。製作および使用された年代は多くのものが近代以降とみられる。

出土遺物の中では文房具類が多く見られた。文房具は墨を摺るための硯、紙の代用に使用された石板(石盤とも表記する)とその筆記具に使用した石筆と蝋石がある。蝋石としたものは石筆と同様な用途とみられる。なお、石板は残存率が悪いため全貌を知ることができないが、一部には端部に加工時の痕跡が残るものがある。石板は明治以降にドイツ、アメリカなどから筆記具として鉛筆が輸入されたが、一般には鉛筆は高価であったことから

学習用の筆記具として用いられることは少なかった。その代用として学習用の筆記具には、低年齢の子どもに石板と石筆が利用されていたとされている。なお、高学年は筆・墨・硯が使用されている。石筆には径6.4mmの「太丸」、径50mmの「細丸」、幅13×厚5mmの「厚平」、幅9×厚4mmの「平」の4種類があるとされるが、23・25が細丸、24・26が太丸に該当するとみられる。27・28の蝋石はともに幅が18mm、23mmで規格に合わない。こうした点から石筆に分類していない。

30の石樋は、他で使用されていたものを側面石積みの一部に転用したものである。表裏には粗いノミ痕が残る。側面石積みには基本的に河床礫を使用しており、転用されたものはこれだけである。

29塚柱は、24区の東側面に設置されていたものである。塚柱は一对で使用されるものであるが、西側面のものは調査対象外に存在するため検出されなかった。製品としては上端を欠くが各面は丁寧な加工が施されていた。塚に伴う床版石と水叩き石も確認しているが、大半が調査対象外に存在するため取り上げることができなかった。塚の存在はこの場で野菜や道具などの洗浄が行われたことが窺えるが、加工の状態で近代以降に設置されたものとみられる。

31は用途不明な石製品であるが、その加工などから近代のものとして想定できる。

32の石鎌は、弥生時代のもものとみられるが、周囲に同時代の集落が確認できないことやそれほど磨滅していないことから、食糧採集などでこの地に来た弥生人が残したものとみられる。

2 金属製品・金属器

53点を選択し、図化して掲載した。内訳は江戸時代の銭貨18枚、近代の銭貨24枚、煙管5点、その他6点である。江戸時代の銭貨は寛永通寶12枚、文久永寶4点、天保通寶1枚、不明(孔が矩形を呈していることから判断)1枚である。

寛永通寶には、1659(万治九年)以前に鑄造された古寛永通寶(33)が1枚含まれていた。34～44は1668(寛文八)年以降に鑄造された新寛永通寶である。天保通寶は1830～1844の天保年間に鑄造された銭貨であるが、その使用は1891(明治二十四)年まで続いたとされている。文久永

第3章 検出遺構と出土遺物

寶(1863(文久3)年~1867(慶応3)年に鑄造された銭貨である。近代銭貨の発行年は明治から大正期のものがある。75~79煙管には、雁首2点、吸口3点があり、全てに羅字の残存が確認できる。こうしたことから江戸期のものではなく近代のものと判断できる。80~85はすべて近代のものである。80は皮製品を加工する際に使用したコンパスの一部と想定されるが、残存が一部であるため判然としない。

寛永通寶の出土位置は、裏込めと水路下層からであることから、相生新町水路跡の構築が近世江戸時代に行われたことの傍証となるが、年代の絞り込みができないため、詳細な時期を確定するには至っていない。

3 陶磁器・ガラス製品類

遺物の選択に関しては近代以前(第二次世界大戦終結以前)を原則としたが、ガラス瓶や陶磁器類の一部を除いて近代と現代の区分が判明する例は少なく、厳密なものではない。また、掲載に関しては江戸時代の遺物が町の成立過程把握に必要と考え、優先的に選択し、近代遺物に関しては残存率の良いものを選択した。

江戸時代の陶磁器は、用途を特定することが困難であり、近代製品についても特定困難な資料が存在する。しかし、本遺跡の場合、極めて狭小な調査区が断続的に続くため、調査区毎の記載では出土遺物の傾向を把握することが不可能と考え、用途別に分類⁽¹⁾して記載する必要性から行った。

掲載したガラス製品に地元産業にかかわる資料はなく、一般的な消費生活で認められる資料であった。一方、陶磁器類では明治時代に遡る可能性が高い硫酸瓶蓋が認められ、染色に関連する可能性が高く、注目される資料である。他に地元産業である燃糸を中心に使用する静輪などが出土する可能性があったが、破片すら認められなかった。

(1)陶磁器等

① ミニチュア、玩具類

ミニチュアは上絵磁器碗(89)、無軸陶器土瓶(91)、軟質施軸陶器蓋(88)の3点を図示した。玩具類とした93は土製の面模か泥面子であろう。92は型作りの無軸陶器で各面に水鳥とジャンゲンのゲーを隔別している。遊び方は不明であるが、玩具に含めた。95は鑄込み成形の人形。

96は型作りの磁器製親子犬に上絵を施している。上絵は口の赤が残る。99は型作りの磁器製鳥形水笛、ハードホイッスルである。なお、片面の押印文字は小さいため図示しなかった。97は鑄込み成形軸下彩の猫である。94は小型の土人形と考えられるが、詳細不明である。98は欠損のため用途不明であるが、鑄込み成形製品で壺をかたどった可能性がある。いずれも近代の製品と考えられる。

② 喫茶、飲酒器

小杯、小碗、湯飲み

コーヒー・ティーカップに掲載する資料はなく、喫茶具は湯呑と急須、土瓶といった和食器である。なお、江戸時代の喫茶具を特定することは困難であるが、小碗類や筒形碗、拳骨茶碗と称される碗をここに含めた。

100、101、105、106は飲酒器の可能性もある小型の碗・杯類である。江戸時代の主な小碗は肥前磁器染付丸小碗(103、104、111、112、113、115、116)や肥前磁器染付筒形碗(119、120、121、122、123)が主体を占め、瀬戸・美濃陶器の踏茶碗(124)は1点のみである。瀬戸・美濃陶器は少なく、他は125の拳骨茶碗程度である。

近代では煎茶で使用されるような杯類(134、135、136)や湯飲みサイズの端反碗(160、161、146、147)、丸形の「湯飲み」と称される小碗(151、152、153、154、158等)と円筒形の湯飲み(164、168、169、176、181等)がある。166は洋食器メーカーの湯飲みであろう。また、180の湯飲み蓋も同様に洋食器メーカーの手によるものかもしれない。

急須、土瓶

急須や土瓶の体部は小片が多数を占め、掲載可能なものは蓋が多い結果となった。187は小型土瓶の蓋であろう。191の土瓶は火にかけた痕跡が認められる。急須で確実に江戸時代に遡る製品は認められない。なお、急須には萬古焼風製品が認められたが、いずれも細片のため図示し得なかった。

飲酒器

江戸時代の小碗を飲酒器と特定することは困難であり、ここでは江戸時代末以降に認められる薄手の製品を盃とした。195は白磁。193は高台部分のみ染付があるが、杯部は無文である。194、196は上絵製品、192は軸下彩、197は銅板転写の下絵製品である。193と194は卵形手と呼ばれる器壁が薄い盃であり、江戸時代末から明治前期

の可能性がある。他は近代であろう。

蓋以外では徳利があるが、燵徳利以外実際用途は不明な場合があるが、ここでは酒器として掲載した。200は江戸時代の瀬戸・美濃陶器徳利であろう。201と203は磁器の燵徳利で、201はクロム青磁、203は型紙刷り染付である。202は大型の徳利である。201、202、203は近代の製品であろう。

③ 食器

江戸時代の碗や近代以降の「飯碗」といわれる碗類や井を食器とした。また、皿類のうち小皿はお茶請けに使用される場合も想定されるが、すべて食器とした。

猪口

204は「そば猪口」といわれる江戸時代の肥前磁器である。他は205と206がそば猪口形であるが、205は小型で飲酒器としたほうが良いかもしれない。207と208もここに含めたが、喫茶に使用された可能性もある。

碗

江戸時代では、簡略化した雪輪樹文を描く波佐見諸窯の製品(223、226、230、231等)や広東碗(214、219、220、222等)、端反碗(211、212、213、217、218等)が主体を占め、本遺跡の年代を示す資料といえよう。

近代の碗では手描きの端反碗(242)や型紙刷りの碗(259、261、273等)、銅版転写の碗蓋(240)、ゴム印判の碗(252、267)が認められる。碗全体では、19世紀前半から20世紀の製品が認められる。

井

掲載した8点すべてが近代の製品である。287は破片が小さく器形不詳であり、井の蓋ではない可能性がある。他は残存率が比較的良好な井は蓋付きのようである。288、291は外面に似た文様を描くが揃いではない。

小皿・皿

小皿と中皿は概ね口径18cmを境に区分し、更になます皿と言われる深い皿は小皿に、浅い皿は中皿に分類した。

土器皿(かわらけ)は飲酒器や灯火皿としても使用された可能性がある。灯火皿として使用された場合の灯芯痕は認められないが、水路跡出土ということもあって器表の状態が不良で比定はできない状態である。江戸時代の小皿は肥前磁器が主体を占め、波佐見諸窯(305、306、308、311)や志田諸窯(314、319、320)製品が目立つ。瀬戸・美濃製品は少なく、317と318の陶器皿程度である。なお、

327の寿文皿は瀬戸・美濃磁器の可能性もある。

近代の製品には手描きや軸下彩、銅板転写といった施文技法が認められ、碗と同様に19世紀前半から20世紀の製品が認められる。

中皿(和食器)

江戸時代の中皿は肥前磁器(348)と瀬戸・美濃陶器(349)の各1点でいずれも19世紀の製品である。近代の中皿は5点である。

中皿(洋食器)

洋皿は磁器製品(355、356)と硬質陶器製品(357、358、359、360)に大別され、前者は和様である。355は体部の屈曲と内面にラスターが認められることから洋皿とした。356は形状と高台内の細い2条の凸線から洋皿に含めた。後者は文様やリムの存在から洋皿と判断した。製造元が判明する資料は認められない。

鉢

江戸時代では口縁部から体部が8角形を呈する鉢(363、364、366)や365の円形の深鉢が多い。他には青磁染付(362、368、369)などが認められる。近代の鉢は多様であり、珉平焼(380、381、382、383)と考えられる小型品が認められる。なお、383は碗の可能性もある。377は蓋が伴わない小型品であることから鉢に含めた。382は口縁部から体部にかけて深い決りが認められ、日常食器ではないと考えられる。

④ 記念品、販促品、粗品

商店名などが記された喫茶・飲酒器を販促品、粗品とした。

384は卵殻手と称される薄手の盃で、高台外面に染付、高台内に不明銘を有する。杯部内面には「越後屋」、山の下に「加」の屋号等を瑠璃色の上絵具で描く。江戸時代末から近代の製品であろう。386は猪口で外面に「古門堂」の染付がある。385は「うまい酒 勇躍」の文字を記した猪口である。393は湯呑に近い器形・大きさであるが、底部内面の桜文面に「書上醸造 好友」の文字が染付されている。いずれも近代の製品であろう。

盃は江戸時代末以降、記念品としての用途もあり、388と387の2点を掲載した。388は体部内面に金液で「除隊記念 京都野砲二二」と記されており、京都で編成された陸軍野砲兵第22連隊を指すものと考えられる。387も金液で底部内面に大砲、体部内面に「満州派遣」と記さ

れた記念盃である。

飲酒器以外は湯飲みで、「石炭 練炭」(397)、「丸半練炭」(395)と記されたものや「矢野茶店」(392)、「吉田クリング」(396)、「島田靴店」(400)「星野薬店」(399)といった店名が記された湯飲みが出土している。また、398は外面に「本町二 マスヤ」と小さく記されており、住所と店名の記載であろう。

他に縦書きで「上毛桐生」と記された碗が2点(389、394)存在し、この2点と文様が類似する2点(390、391)も同種として選択した。「上毛桐生」と縦書きされた碗も高台境の圓縁の有無や器形も異なり、揃い物ではないと判断される。店名が判明するのは「高村呉服」(391)1点のみである。394を除き、日の丸状の文様を口縁部外面から内面にかけて1カ所の施文が確認できる。用途としては喫茶用と考えられる。近代から現代の製品であろう。

⑤ 業務用食器

業務用食器の可能性が高い陶磁器は蕎麦屋の薬味用小皿(401)1点である。1点のみであるため、出前時等の遺失品か破損品と推測される。近代から現代の製品である。404は駅弁のやなぎ丼蓋^(注2)と胎土・焼成・輪調が近似し、駅弁用弁の身と判断した。成形は機械輪轆で内面に鉄軸系の軸を薄く刷毛塗りするが、底部内面は蛇の目状に無施軸とする。外面は無軸である。粗製、安価な製品で、日常食器とは考えにくい。近代から現代の製品。

業務用か否か不明であるが、双喜文を施す皿と口縁部内面に雷文帯を施す丼は、中華料理店やラーメン店等で使用された可能性がある。前者(408、499)は内面に龍、外面に蝙蝠の上絵付けがなされる皿で同形・同文と考えられる。丼は405、406、407の3点でいずれも口縁部内面に雷文帯を巡らせ、体部外面に鳳凰を上絵付けしている。外面の鳳凰文は406と407が同文様であるが、高台が異なる。同様な破片は非実測資料中にも多く認められる。

業務用には工場や病院の食堂で使用された器も含めた。国民食器とも称される口縁部外面グリーン2重線の飲食器が2点出土している。いずれも使用場所名の記載がないか欠損するため使用場所は不明である。403は湯飲みで器壁が厚い。402は碗でグリーン線下に上絵が施される。

⑥ 容器、貯蔵具

容器、貯蔵具は蓋物を中心に一部壺形等の製品を含めた。410、416、417、424は器種不明の蓋である。423と411は合子の蓋で後者は江戸時代の製品である。432は江戸時代の段重、412と413は江戸時代の蓋物。419は水注か壺類の蓋で江戸時代。414は水注の可能性があり。415は江戸時代の水甕と称されるものであるが、実際の用途は不明である。

近代の製品で421、422は瓶の機械栓で金属部分は欠失している。429は甕の蓋であろう。他の蓋類は貯蔵具の蓋と推定したが、銅の蓋が含まれる可能性がある。

⑦ 調味料入れ、調理用具

調味料入れ

436と437の2点は輪轆成形の焼塩壺底部で、18世紀後半から19世紀中葉頃の製品であろう。443は身がなく不明であるが、形状からソースや醬油入れ等の蓋と推定した。近代の製品であろう。

おろし器

同形で同軸の製品であるが、445はおろし目の刺突が単独。446は櫛歯状でやや粗いおろし目である。台所用具としてはやや小型である。

穀物増加器

2/3が欠損するが、外面に「実用新案」、「穀物増」の文字が確認できる(444)。筆者蔵の同型品から、文字は「実用新案出願中」、「穀物増加器」であることが確認できた。なお、文字はゴム印染付である。第二次世界大戦中の国家策動に開発された器具の一つであろう。

鍋

鍋は片手の行平鍋と両手鍋の2種がある。行平鍋のうち441は小型で、442はやや大型である。448も鍋としたが、貯蔵具の可能性もある。439と440は上面の飛泡と施軸位置から行平鍋の蓋とした。両手鍋のうち450は19世紀前半頃から地方窯でも生産される器種である。449はエンボスで「岐955」の生産者番号が記され、陶磁器代用品とされる鍋である。行平鍋は江戸時代から近代の製品である。

すり鉢

438と451は堺・明石陶器のすり鉢底部である。江戸時代から近代の製品である。452は益子・笠間陶器のすり鉢で近・現代の製品であろう。

鉢鉢

図示可能な鉢鉢は1点のみで口縁部は欠損している。地方窯の可能性が高く、江戸時代末から近代の製品であろう。

焙烙

土器製品の調理用具として代表的なものに焙烙がある。焙烙の量は少なく、残存率も低いが、中でも良好な6点を掲載した。確実に江戸時代とされる資料は認められない。すべて口縁部の高さが低く丸底である。

⑧ 神仏具等

469は型作りの土人形で達磨大師であろうか。仏飯器は4点を図示し、460と461が江戸時代、462、463が近代の製品であろう。香炉の出土点数は少なく、図示し得たのは青磁香炉の底部片1点(466)のみである。19世紀の製品であろう。他にはお神酒徳利と称される小型の徳利形染付(464)、稲荷狐(468)、「かわらけ」と推定される無釉陶器製の皿(465)がある。なお、土器製の皿(かわらけ)は小皿に含めた。

⑨ 灯火器

灯火皿はすべて錆軸を施した瀬戸・美濃陶器で、470、471、465、476、477の5点を掲載した。灯火受皿は錆軸を施した瀬戸・美濃陶器が8点(472、478、479、480、481、483、484、485)と主体を占め、478と479は小型品である。473と482は製作地不詳の灰釉製品である。瀬戸・美濃製品については18世紀末頃から19世紀中葉であろう。灰釉製品については近代の可能性もある。ひょうそくは瀬戸・美濃陶器で1点(474)図示したが、口縁部が欠損しており、全体形状は不明である。江戸時代末から近代の製品であろう。灯火受台(486)は益子・笠間陶器の可能性のある灰釉製品で、近代の製品であろう。

⑩ 花器

花器は花瓶4点を掲載した。487は江戸時代の可能性のある瀬戸・美濃陶器である。488は双耳の花瓶で上絵剥離痕が認められず白磁と考えられる。仏壇や神棚で使用された可能性もある。490は駒込み成形で方形の双耳花瓶、489は竹をかたどった駒込み成形のクロム青磁花瓶である。487を除き近代の製品である。

⑪ 植木鉢

植木鉢は土器、陶器、磁器の3種が出土しているが、土器製品の496は厚手で輪軸整形、同じく輪軸整形の494

は焼し焼成の植木鉢である。495は口縁部外面に塗彩があり、近代製品の可能性がある。磁器製品の493は吹き墨による下絵付けがあり、近代製品の可能性が高い。492は軟質施釉陶の小型植木鉢である。492と493は輪軸であろうか。491は瀬戸・美濃陶器の可能性のある植木鉢で掲載遺物中では最大である。491を除き江戸時代に遡る製品はないであろう。

⑫ 火具**目皿**

コンロ、七輪内に置く目皿は出土点数が少なく、図示し得たのは497、498、499の3点のみである。499は底面に回転糸切痕が残る、他の2点に比して古い時期の製品と推定される。コンロや七輪本体は出土数が少ないうえに小片で図示し得る資料は皆無である。

熱板

電熱器の使用を示す丸型熱板を1点掲載した(500)。中央部と端部に各1カ所小孔があり、大きさから考えても使用コイル数1線で、500w以下の電熱器用であろう。

練炭おこし

練炭おこしは全体形状を知りうる個体は皆無であり、取っ手から皿部が判明する個体と皿部で残存率が高い1個体の計6点を図示した。取っ手は輪軸目が残り、橙色系を呈する501、502、503の3点と型作りの可能性が高い灰白色の胎土を有する504、505の2点に分類できる。503は取っ手端部が開き、内面を面取り状に薄くすることから、急須の取っ手に似た形状を呈している。内外面に輪軸目が残る。501と502は端部が開かないが、内外面に輪軸目が残る。いずれも端部から見て輪軸は左回転である。これらは在地系の可能性もある。504と505には輪軸目が認められず、太さ、厚さ共に均一である。これらは搬入された製品であろう。年代は特定し得ないが、前者が古く、後者が新しいものと推定される。なお、506の皿部分は胎土から前者に属すると考えられる。近代から現代の製品である。

置輪

置輪は釜輪とも呼ばれ、主に應に置る器高の低いタイプと七輪やコンロに置かれる器高が高く穴の開いた置輪の2種が出土している。いずれも土器で残存率が低い。前者は507、508、509、510、511の5点を図示した。後者は出土点数が少なく図示し得たのは1点のみ(512)で

第3章 検出遺構と出土遺物

ある。江戸時代から近代の製品であろう。

火鉢類

火鉢類は少なく、図示し得たのは在地系土器1点(513)と施釉陶器の練炭火鉢1点(514)の計2点のみである。513は手焙りとも言われる小型品である。練炭火鉢は2点抽出したが、同一個体の可能性が高く復元実測(514)で提示した。内部に入れる珪藻土製コンロは細片のため掲載していない。

⑬ 化学工業陶器

硫酸瓶

化学工業用陶器は硫酸瓶のみである。硫酸瓶本体は細片のため、残存状態が良好な蓋のみ図示した。517は一般的に認められるねじ栓で、暗赤褐色の釉を施している。516はねじ切りがなく、中空の突起を落とし込むタイプの蓋である。515は低い円筒状の突起を落とし込むタイプであろうか。515と516は共に無釉である。年代は、落とし込むタイプが明治初期から20年代、517のねじ切りタイプは明治26年以降とされている^(33, 4)。この地で明治期から硫酸を使用する産業としては織物が挙げられる。桐生市の後藤織物に残る『伊勢神宮参拝道中日記(明治16年)』には大阪道幣局で硫酸や硝酸鉄を買いたった旨が記されており⁽³⁵⁾、ねじ切りのない硫酸瓶蓋の存在は、こうした動向と関連するものと考えられる。スクリュウ栓でない硫酸瓶蓋は県内では希少例であり、調査地や近隣の織物産業を示す遺物の可能性が高く注目される。

⑭ 建築、建設関連具

戸車

戸車は磁器製で、サイズは1寸(518、519、520)と2寸弱(521)の2種が存在する。江戸時代末頃から近代の製品であろう。

タイル

タイルは水回りを中心として使用されるためであろうか、出土数が少なく1点のみの掲載(522)となった。乾式タイルと考えられ、裏面に☆マーク内にSTを組み合わせたマークが陽刻されている。

屋根瓦

屋根瓦は小片のみで全体形状が把握可能な個体は皆無である。このため、軒先瓦で文様がある程度判明する個体と地域性を加味して十能瓦を優先的に選択した。その結果、軒先瓦1点(523)と十能瓦3点(524、525、526)を

掲載した。十能瓦は東毛と呼ばれる群馬県東部を中心に江戸時代後期から昭和にかけて使用された瓦で、現在の太泉町で生産されていた。この瓦は同じ形の瓦を1列おきに凸面と凹面を上面として使用する独特の軟質瓦である。桐生市域でもかつては葺かれた状態の建物を見かけたが、現在はかなり減少して知る人も少ない状態となっている。

普通煉瓦

いわゆる赤煉瓦で耐火煉瓦は出土していない。8点を図示し、527と530の2点が桐文の押印から桐生産煉瓦と判明した。他に生産地が特定できる煉瓦は528で、上敷免の日本煉瓦製である。534は押印があるが不明。531、532、533、529は押印がなく不明である。下野煉化製造会社製や富永金吉製の煉瓦は認められなかった。

土管・陶管

土管はソケット部分が受け口を呈し、断面の色調がサンドイッチ状を呈する549とソケット部外面に成形時の皺状痕が認められる548の2点を図示し、現代製品と区別できない土管は掲載しなかった。陶管については、塩釉製品で真空土練機を使用したと推定される製品は掲載しなかった。

磚子

低圧線の引き込みに使用する低圧引留磚子(543、544)と磚子引き屋内配線に使用するノップ磚子(535、536、537、538)、2線クリート(539、540)、磚管(545、546、547)、シーリングローゼット(541、542)、といった磁器製品が出土している。また、ガラス製品では電傘(669)が出土しており、引き込みから電灯までの配線具が認められる。なお、引留磚子の規格は穴幅18mm、溝幅25mm、高さ65mmであり、543は青色で上面に呉須で「ウ」の文字が記されている。544は白色で上面には薄く不鮮明であるが、「K O」の下絵文字が認められる。

⑮ その他

用途不明品や樹脂製品、数の少ない製品をその他として扱う。557は磁器製で飾り玉であろう。樹脂製品では電柱等に取り付ける「本町一丁目」の地名表示板(569)がある。衛生用品では樹脂製歯ブラシ(567)と骨製の可能性がある「ライオン歯ブラシ1號形」(568)が出土している。衛生陶器は出土していない。

562は白磁の衣服等を掛けるフックである。558と559

は絵画用品と推定されるが詳細不明である。558の裏面には「西酒屋製」印が押される。563は用途不明品。560はバビリオクレームの陶器製瓶であろう。564は在地系土器の釜形製品であるが用途不明。明治初期頃の製品に類品があり、同時期と考えられる⁽¹⁶⁾。565の土製品は用途不明である。

おわりに

用途、器種別に概要を記載したが、全体としてすり鉢や焙烙、在地系土器の鍋といった調理用具の出土量が少なく、小碗や湯呑は多い点を指摘しよう。この理由として、調査場所が玄関先に限られており、調理を行う場所から離れている点があげられよう。年代では江戸時代の陶磁器が出土しているものの、磁器では小丸碗や筒形碗、広東碗、端反碗が主体を占めることから、概ね19世紀前半以降の年代が考えられる。この点は、群馬県内において、天明3年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流で埋もれた遺跡でも多く出土する尾呂茶碗や陶胎染付碗が認められないことから肯定できる。加えて、志野丸皿や肥前陶器の兵器手碗、内野山窯の青緑軸皿といった県内で多く認められる18世紀前半以前の陶磁器も図示可能な破片が存在しない。

次に使用場所であるが、出土場所が水路であること、カワラケや焙烙、置き輪といった土器類の割れ口に摩滅が認められること、少量ではあるが調査区間接合が認められることから、距離的には近いものの、異地性の遺物が含まれると言える。

最後に注目される遺物をあげておく。江戸時代では県内において希少例の三田青磁(316)が出土している。近代では地元産業とのかかわりが推定される硫酸瓶(蓋)の出土があげられる。出土した硫酸瓶蓋(515、516)は明治前期と推定され、繊維の染色との関連が推定される。使用地は不明であるが、3点の硫酸瓶蓋には時期差が認められ、一定期間使用されていたことが判明し、織物産業との関係で注目される。

第二次世界大戦中の資料では「殺物増加器」が注目される。コレクションとしては見る機会が多いが、出土例が少なく共に実際に使用されていた可能性を物語る資料である。「実用新案出願中」のため詳細は不明であるが、見た目の「焚き増え」⁽¹⁷⁾を行うための製品と考えられる。

(2) ガラス製品

① 玩具類

おはじき、ビー玉、石蹴り等を玩具類とした。おはじきは3点でいずれも楕円形を呈する。571と573は透明で、後者は中にオレンジ色の色ガラスを入れている。572は白色不透明で片面に水色ガラスの線を入れる。なお、570は透明で裏面に「糸」の浮き文字を入れる製品で用途不明であるが、形状から玩具に含めた。

ビー玉は大小10点を図示した。575・578は暗緑色透明、574・579・581は緑灰色透明である。582は気泡が多く、やや歪な青色透明である。576・577は透明ガラス内に断面星形のガラスを封入したもので、その色は576が黄色、577が赤色である。580は白色と赤色のマーブル模様、583は白色不透明ガラスに細い赤線を入れている。

下面が平坦で上面が盛り上がった直径3.5cmから6.5cm程の円盤状ガラスを石蹴りとして15点を図示した。無文(584)や中央を円形に窪ませるのみのタイプ(587、590)窪み内にエンボスで文様を施すタイプ(588、589、595)がある。また、中央の形状そのままにエンボスで文様を施すもの(593・549・596・598)等複数のタイプが存在する。「三勇士」は「爆彈三勇士」を示すものと推測され、当時の世相を表した製品であろう。また、「妖刀?」「村正」は現存品が多いようで、かなり流行したようである。

② 文具瓶

筆記用具瓶

603は底部に○「M」のエンボスがあり、丸善ワンダーインキ瓶であろう⁽¹⁸⁾。605はロイドインキ株式会社製のインク瓶であろう。

インク瓶

5点をインク瓶としたが、明確なのはパイロットインク604と篠崎インキ社製インク600、601の3点である。篠崎インキ社製のインク瓶は、形状が異なるがコルク栓で底部には「S I M C O」のエンボスがある。2オンス瓶であろう⁽¹⁹⁾。599と602は形状からインク瓶とした。なお、602はねじ口で底部には菱形内に「S K」のエンボスがある。

糊瓶

606、607、608の3点を糊瓶とした。606は体部に右から「ヤマト糊」、底部に縦書きで「ヤマト」の文字をエンボスで記している。607にエンボスは認められないが、同

色・同形のため翻瓶としてここに含めた。また、608は大型であるが、色調と形状が近似しているため、大型翻瓶の可能性が考えられる。

③ 菓子容器

609、610、611、612は通称「べろべろ」といわれる舐め菓子のガラス製容器とされる製品である⁽¹⁰⁰⁾。

613、614は菓子の型とされているガラス製品であるが、ここに含めた。

④ 清涼飲料瓶

615、616、617、618はニッキ水の瓶とされる容器である。615、616はひょうたん形、617はラムネ瓶形、618は高射砲を模しているようで、「高射砲」のエンボス文字がある。619は商品名等の表記が認められないが、清涼飲料の瓶であろう。

⑤ 酒瓶

酒瓶はウイスキー瓶とビール瓶の2点を掲載した。620は大黒葡萄酒株式会社のオーシャンウイスキー角形瓶であり、底部に「DAIKOKU」のエンボスがある。瓶の四周には葡萄をモチーフにしたデザインが施されている。621は大日本麦酒株式会社製のビール瓶である。

⑥ 調味料瓶

確実な製品は623の化学調味料瓶と622の調味料瓶の2点のみである。623は底部に「味の素」、「o」のエンボスがある。622は「日本専売公社」のエンボスがあり、反対側には定量線と思われる線がエンボスで引かれている。食塩の瓶であろう。624と625は大きさや形状からここに含めたが、食品瓶の可能性もある。後者はねじ口である。

⑦ 食品瓶

商品名やメーカー名から食品瓶と判明する例はないが、形態から7点を食品瓶とした。632は体部横断面菱形の透明瓶で、大きさに比して広口の透明瓶である。629は緑色透明で体部横断面八角形で口に向かい細くなる。627、628、630、631は緑色透明から薄緑色透明の円筒形と多角形筒形の広口瓶で、佃煮等を入れた可能性がある瓶と考えられている。金属製の被せ蓋であろう。626は透明なねじ口瓶で、体部は八角形である。

⑧ 食器類

633と634はプレスガラスの皿で、633は方形か長方形、634は円形と推定される。

⑨ 喫煙具

637はプレスガラスの灰皿で、底部外面に花文を施している。635と636はライターオイル瓶とされる同型製品で表面にラベル貼付箇所があり、背面下部に「27304」のエンボスがある。また、底部に「・」のエンボスを3カ所に配置している⁽¹⁰⁰⁾。

⑩ 化粧瓶

化粧クリーム瓶・ボマード瓶

確実な化粧クリーム瓶は、底部にエンボスの資生堂マークがある646の白色不透明瓶である。645は646に伴う共蓋である。コールドクリーム瓶の可能性もある。643は底部に「共栄會特製品」、「ボンネットクリーム」のエンボスがある。また、644の底部には「1」、「メヌマ」のエンボスがあり、メヌマボマードの瓶であろう。いずれもねじ口である。641、642は小型でクリーム瓶によく認められるデザインである。白色不透明でねじ口である。639は白色不透明でエンボス模様のないタイプである。640は大型でエンボス模様のない白色不透明瓶である。いかり肩であるため、髯クリームではなく、化粧クリーム瓶に含めた。638は茶色透明瓶で中に乾燥したクリーム状物質が残っている。化粧品か否かは不明であるが、形状からここに含めた。

化粧水・整髪料瓶

ラベルやエンボス文字がなく詳細不明の瓶があるため、化粧水と整髪料瓶を一括して扱った。647はレートフードのエンボス文字があり、平尾貫平商店の乳白美容料である。649は両面下部に「月の友」のエンボス文字があり、株式会社月の友化粧園の「月の友五百番香水」小瓶の可能性もある⁽¹⁰¹⁾。652はすりガラス状のねじ口瓶で、底部に資生堂花椿に似たエンボスマークがあるが、椿が蕾状となっている。653は薄紫透明瓶で、底部に「Hime ・」のエンボスがある。651は形状から化粧水瓶とした。650は整髪料の可能性のある瓶である。648はラベル貼付部分以外に凹凸をつけている。

⑪ 薬瓶

一般用薬瓶

654と655は扁平なイチジク形を呈する小さい丸薬のコルク栓瓶である。658は小型のコルク栓瓶で商品名等が見当たらないが、形状から薬瓶に含めた。657は琥珀色

透明のコルク栓瓶で、体部に「タムシトリ」のエンボスがある。656と657は形状から兼瓶とした。659の「櫻香本舗 守田謹製」については現段階で不明である。

660は白色半透明のクリーム瓶形でねじ口。底部に「MENTHOLATUM REG TRADE MARK」のエンボスがあり、メンソレータムの軟膏瓶であることがわかる。

医療用薬瓶

661と662の2点である。662はコルク栓でパーティンラインは明瞭である。661は小型のねじ口瓶で、パーティンラインは不明瞭である。体部の器壁は前者が薄い。

⑫ 日常生活瓶

白髪・赤毛染め瓶

663は瑠璃色透明で断面は面取りした長方形を呈するコルク栓瓶である。片面に「志らが赤毛染 ナイス」のエンボスがある。664と665は「元禄」の染料瓶で、664はコルク栓で体部に「げんろく」、「ノコジ定量」のエンボスがある。665はねじ口で体部に「元禄」、「定量」のエンボスがある。

靴クリーム瓶

667は体部に「☆コロンブス」のエンボスがあるクリーム瓶。1948年創業の株式会社コロンブスの製品であろう。666はエンボス文字やラベルがなく不明であるが、形状が靴クリーム瓶に近似するためここに含めた。

⑬ 塗料瓶

668はねじ口で体部に「マメラッカー 姉妹品」のエンボスがあり、模型に使用されたラッカーの瓶である。

⑭ 照明具

669は乳白色の電傘である。小片であるが、ソケットに取り付ける部分と傘の一部が残る。

⑮ 用途不明瓶

用途が確定・推定できない瓶である。商標等が認められる瓶もあり、今後の調査によって確定できる瓶も含まれる。673と674は細く、体部が円筒形を呈した小型瓶である。674の体部にはホタルと「ホタル印」のエンボスがある。670、671はエンボス等のない小型瓶である。672も同様な小型瓶であるが、底部に「K 14」のエンボスがある。675は底部の花文内に「花」のエンボスを有する。678は三ツ輪状文内に「K」のエンボスがある小瓶。679

は体部横断面長方形の透明瓶。677は中型瓶で底部に「A 70 S 4」のエンボスがある。680、681、682はクリーム瓶と同形態であるが、種類が限定できないため不明とした。676は白色半透明のねじ口瓶で、底部に「K 4」のエンボスがある。683はフラスコ形の瓶である。684は化粧瓶とすべきかもしれないが、共蓋のため不明瓶に含めた。底部には「T・」のエンボスがある。685はやや大型の瓶で王冠蓋、口元外面に反転した「2」と思われる低いエンボスが認められる。

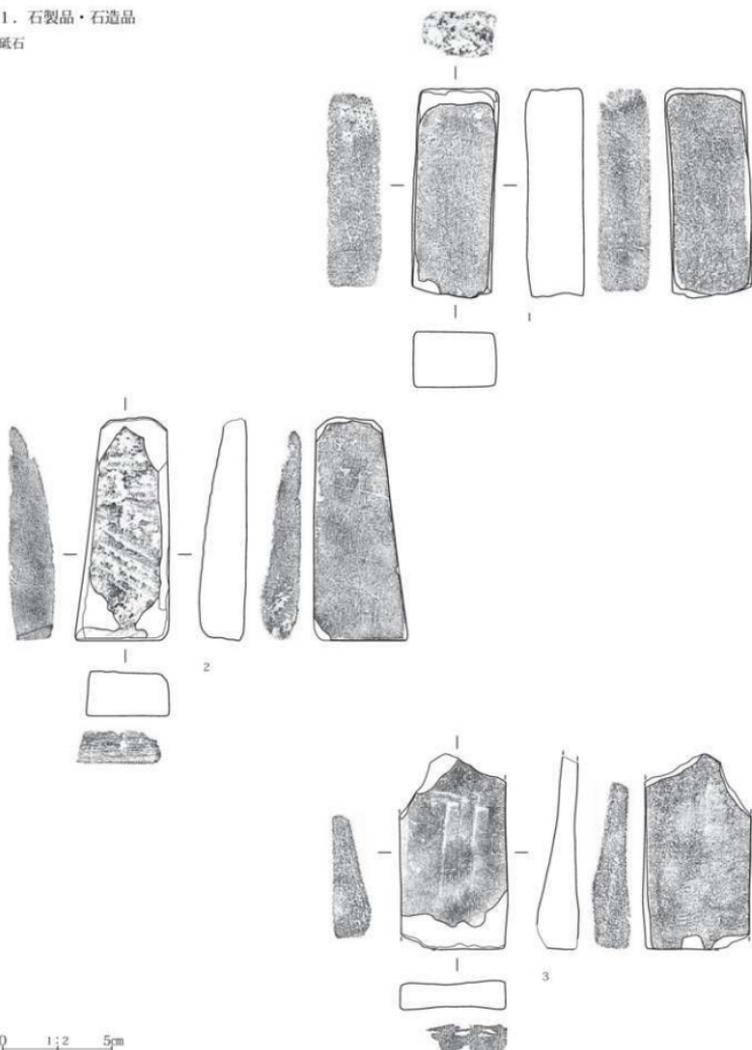
注・参考文献

- 1 ガラス瓶の分類は板井2019を参考とした。板井準也2019「増補ガラス瓶の考古学」六一書房
- 2 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021「高崎競馬場遺跡(2)-古代・中近世編」第358図197、2009の蓋に似ている。粗製品であり日常的な使用法は考えにくい。
- 3 大阪文化財研究所2018「中之島蔵検校発掘調査報告書」2018
- 4 小田本富慈美2021「硫黄瓶 近代化学工業を支えた耐酸陶器」『中近世陶磁器の考古学第十四巻』雄山閣
- 5 桐生市ホームページ「国登録文化財」。「後継織物 全1種」(<https://www.city.kiryu.lg.jp/kankou/bunkazai/1010700/kunitouroku/1007533.htm>)
- 6 大西雅広2016「群馬県内における明治前期の陶磁器-石神遺跡「撒丸」出土資料」『研究紀要34』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 7 斎藤美奈子2002「戦下のレシピ 太平洋戦争下の食を知る」岩波書店
- 8 Webマガジン「文具のとびら」内「文具百年#29」。「謎のマーキングペン」(<https://www.buntobi.com/articles/entry/series/taimichi/012568/>)
- 9 筆者蔵の箱入りインク瓶資料による。
- 10 平成ポトル倶楽部2017「日本のレトロびん 明治初期から平成までのレアコレクション」クラフティ社
- 11 日本紙業会1951「日本紙業」第25号 通巻第2460号pp18

第3章 検出遺構と出土遺物

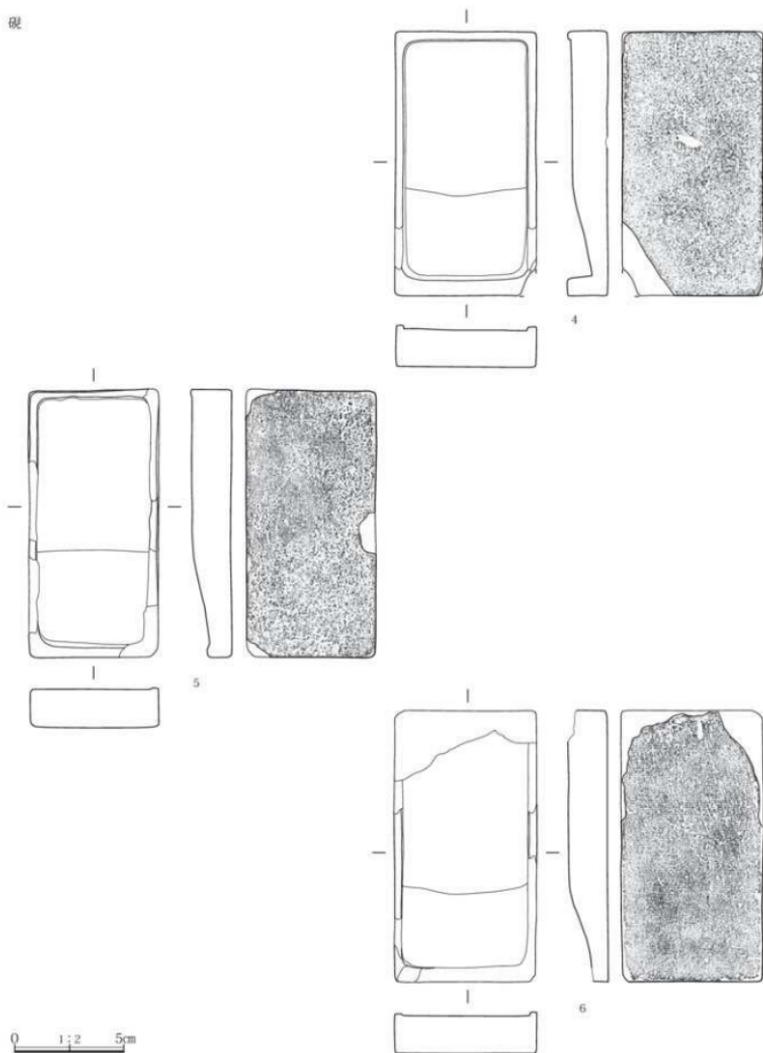
1. 石製品・石造品

砥石



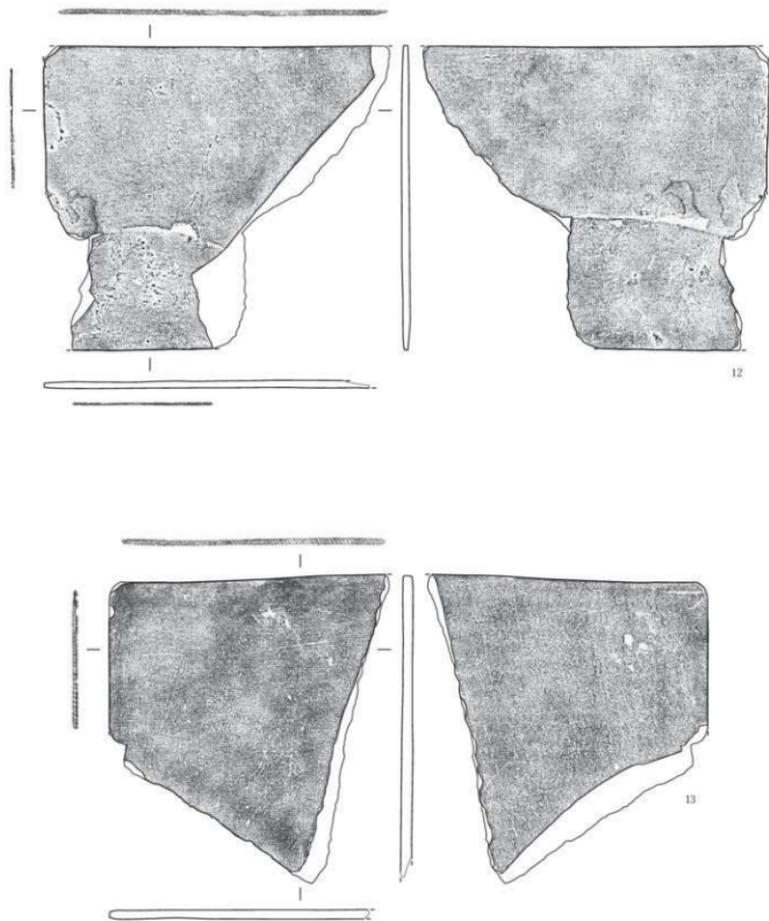
第97図 遺物図(1)1. 石製品・石造品 砥石

硯



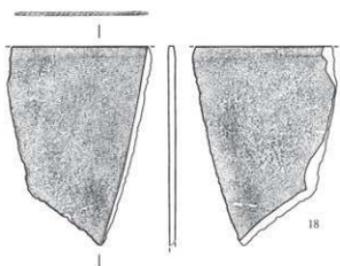
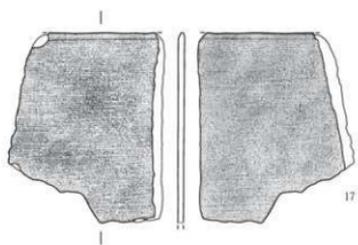
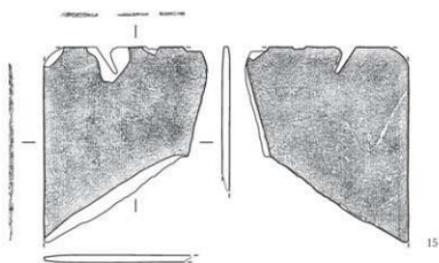
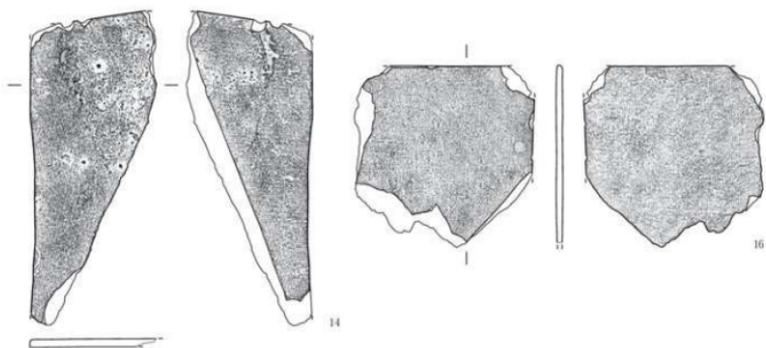
第98圖 遺物圖(2)1. 石製品・石造品 硯

石板



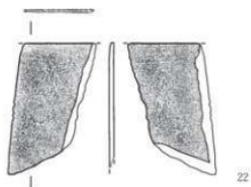
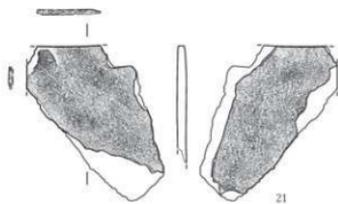
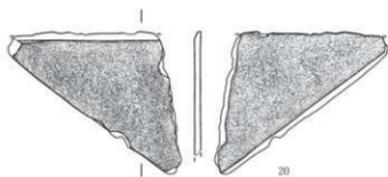
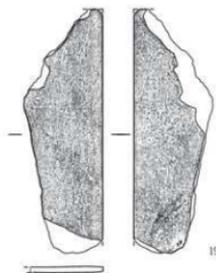
第100圖 遺物圖(4)1. 石製品・石造品 石板

第3章 検出遺構と出土遺物

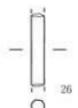
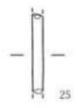
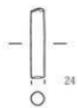
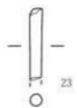


0 1:2 5cm

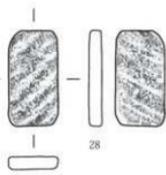
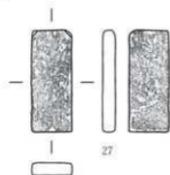
第101図 遺物図(5)1. 石製品・石造品 石板



石筆

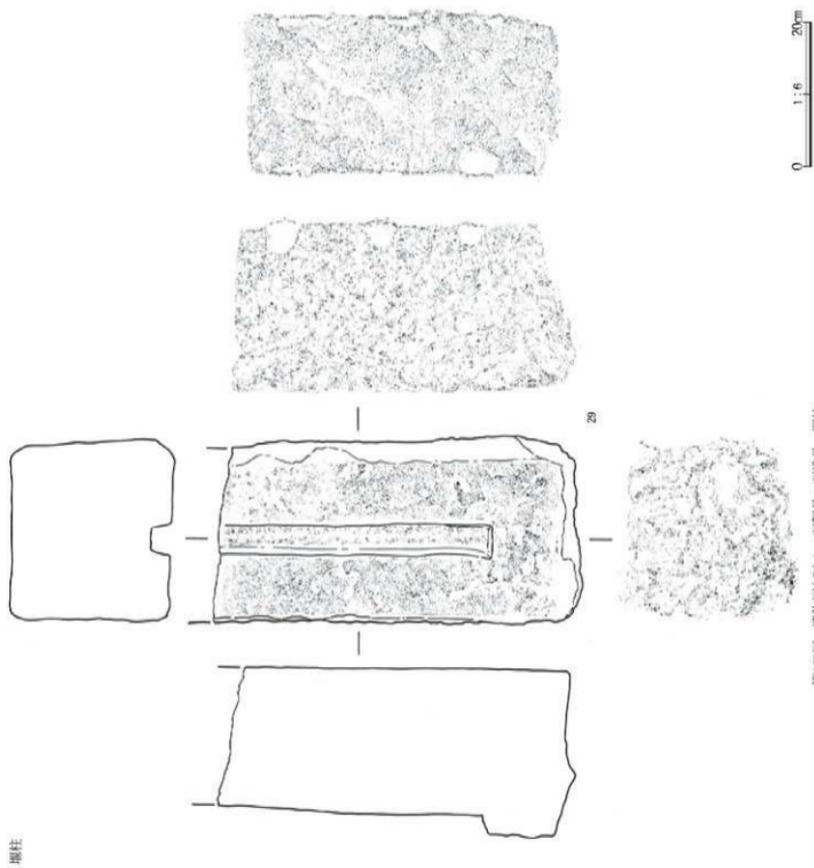


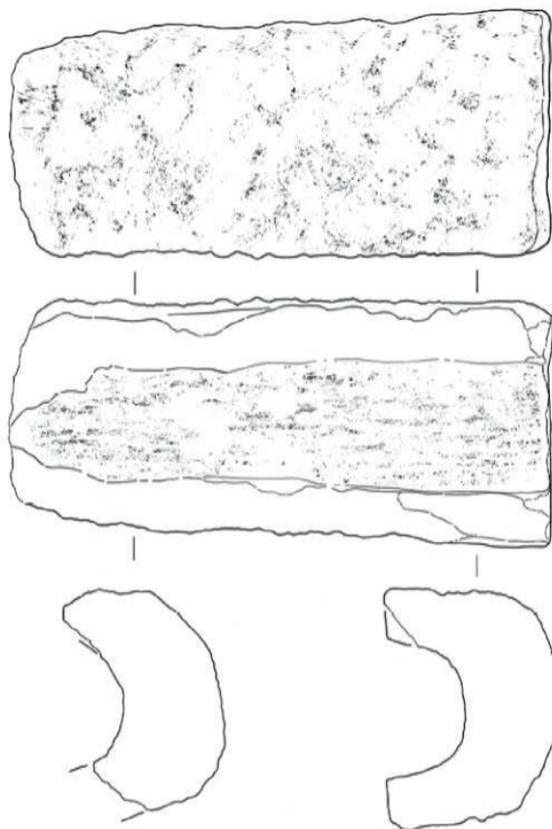
蠟石



0 1:2 5m

第102圖 遺物圖(6)1. 石製品・石造品 石板・石筆・蠟石



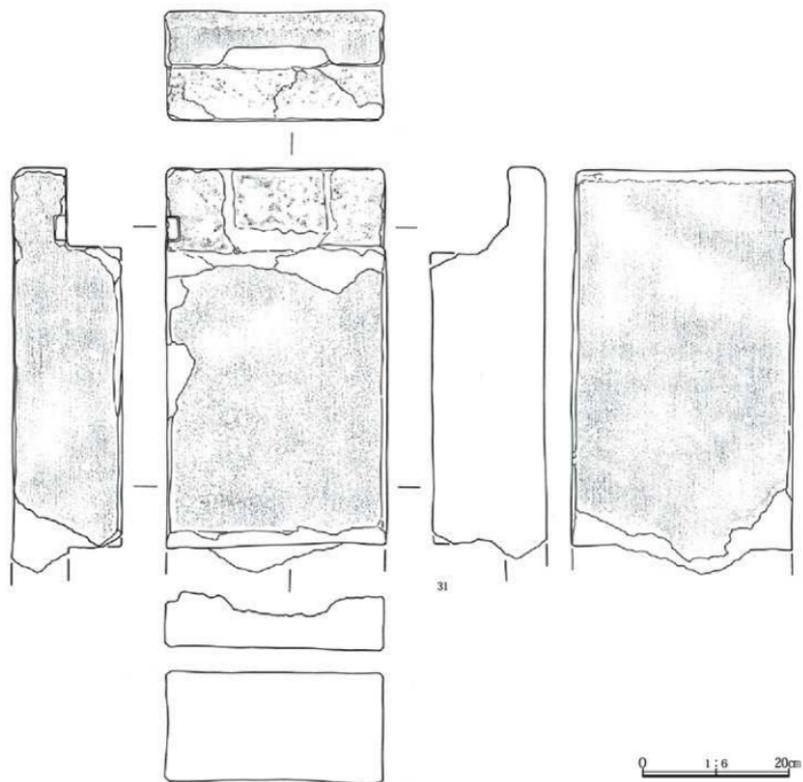


石鐮

30

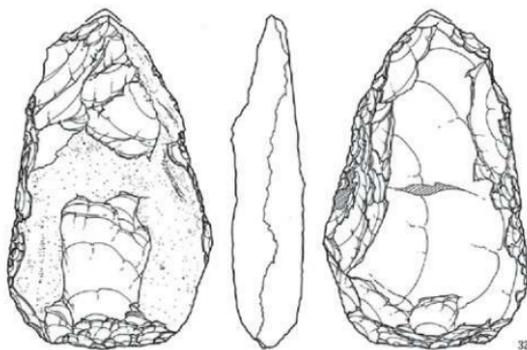
第104図 遺物図(8) 1. 石製品・石成品 石鐮

不明品



第105図 遺物図(9)1. 石製品・石造品 不明品

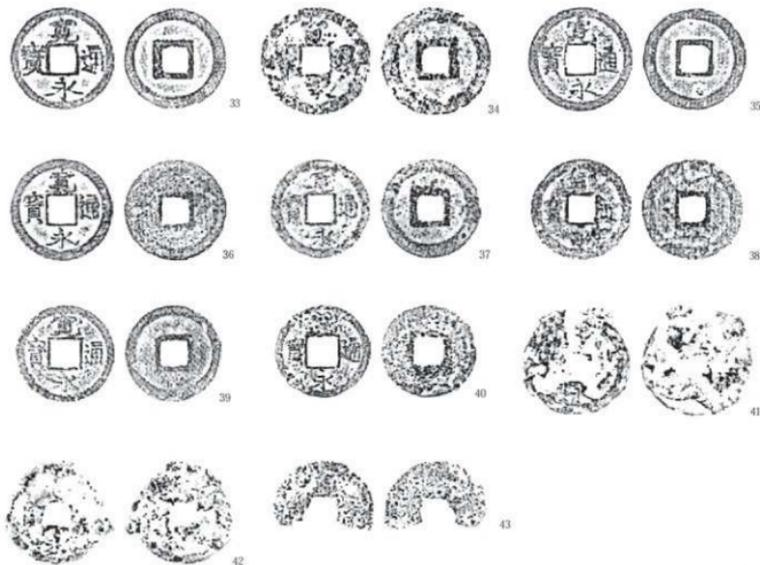
石鏃



32
0 1 2 5m

2. 金屬製品・金屬器

錢貨



0 1 2m

第106圖 遺物圖(10) 1. 石製品・石造品 石鏃 2. 金屬製品・金屬器 錢貨

第3章 検出遺構と出土遺物



44



45



46



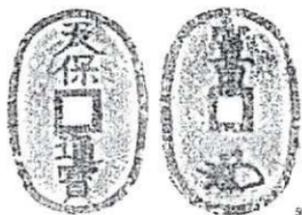
47



48



49



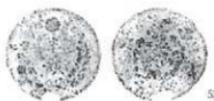
50



51



52



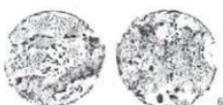
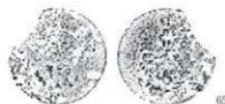
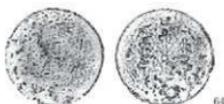
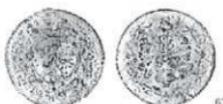
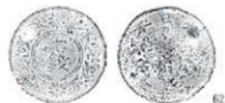
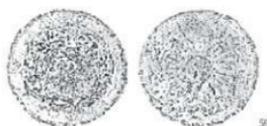
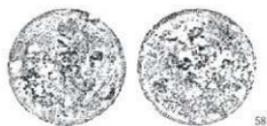
53



54

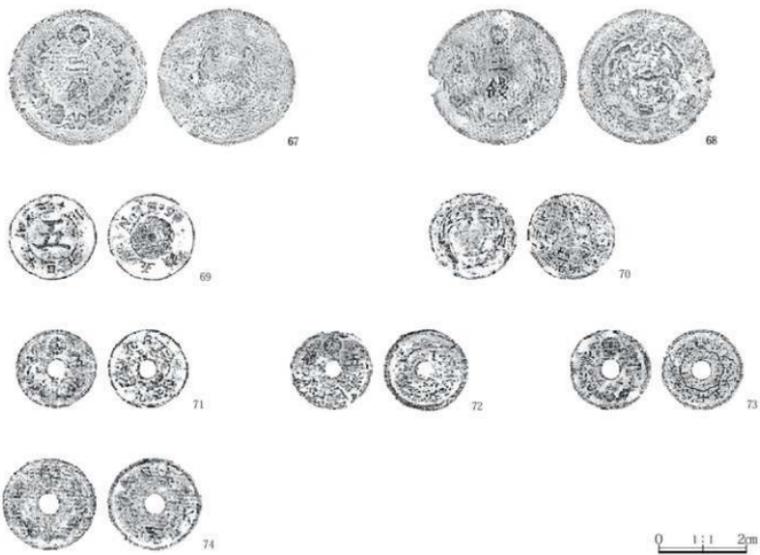
0 1:1 2cm

第107図 遺物図(11)2. 金属製品・金属器 銭貨

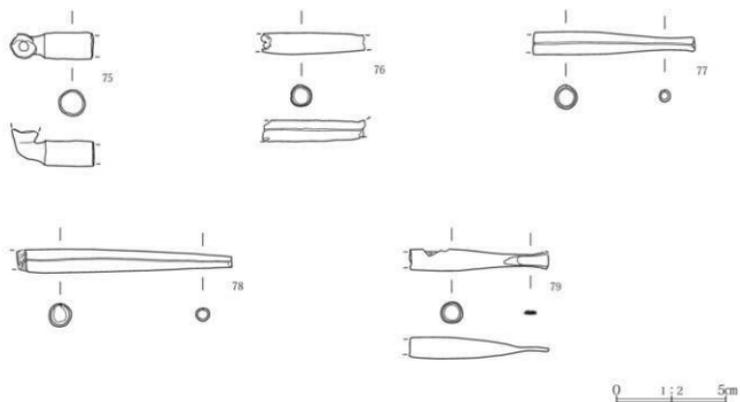


0 1:1 2cm

第3章 検出遺構と出土遺物

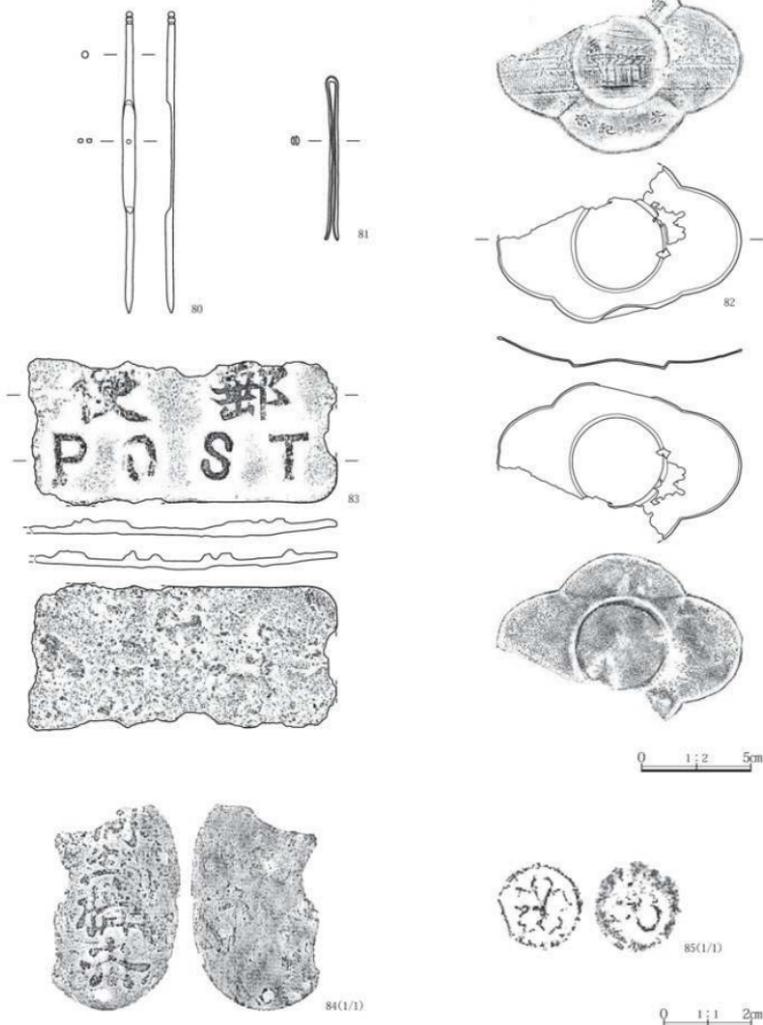


煙管



第109図 遺物図(13) 2. 金属製品・金属器 銭貨・煙管

その他



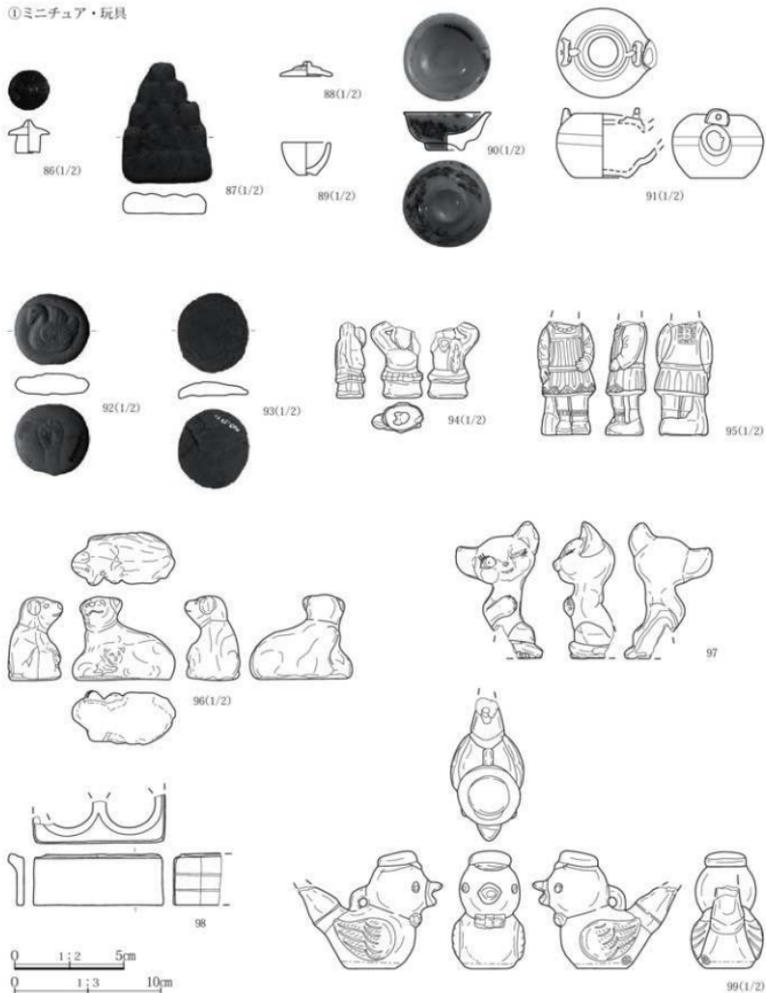
第110図 遺物図(14) 2. 金属製品・金属器 その他

第3章 検出遺構と出土遺物

3. 陶磁器・ガラス製品類

(1) 陶磁器類

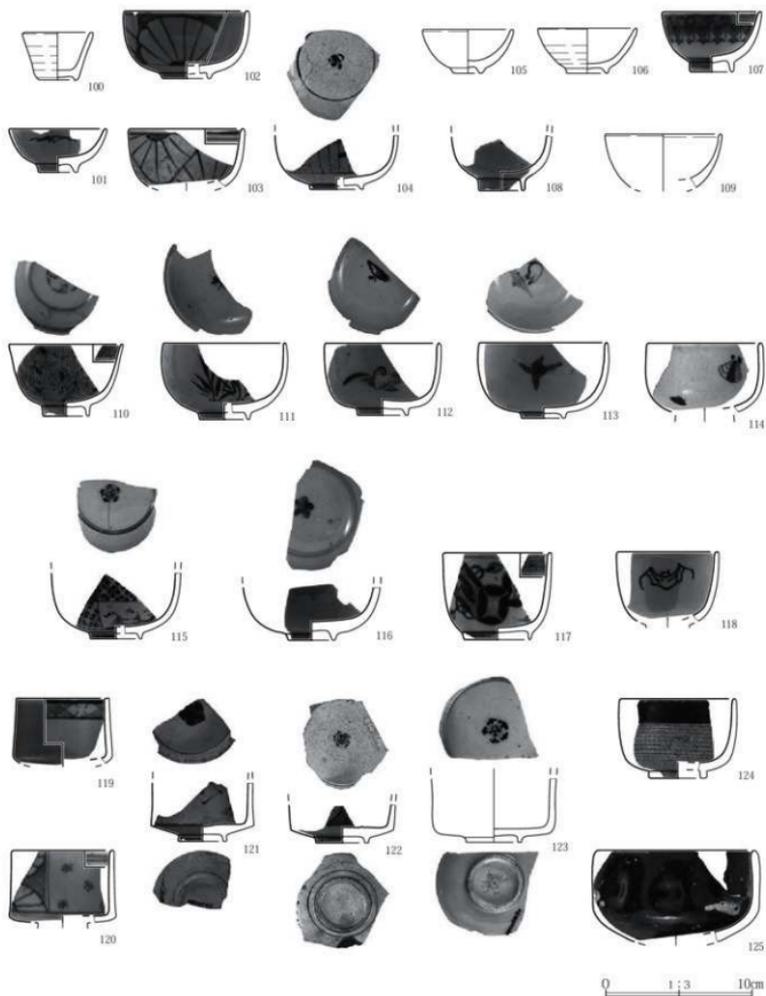
① ミニチュア・玩具



第1111図 遺物図(15)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ①ミニチュア玩具

②喫茶・飲酒器

小杯・小碗・湯呑み



第112図 遺物図(16) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②喫茶・飲酒器 小杯・小碗・湯呑み

第3章 検出遺構と出土遺物



第113図 遺物図(17)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ㊸喫茶・飲酒器 小杯・小碗・湯飲み



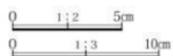
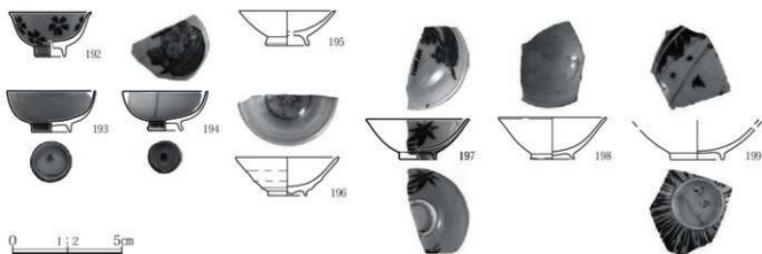
第114図 遺物図(18) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②喫茶・飲酒器 小杯・小碗・湯飲み

第3章 検出遺構と出土物

急須・土瓶



飲酒器



第115図 遺物図(19) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②喫茶・飲酒器 急須・土瓶・飲酒器

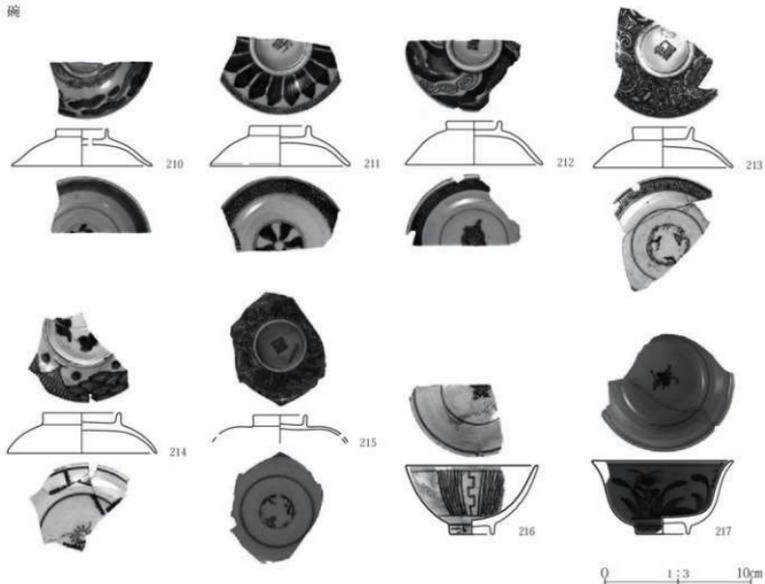


③食器

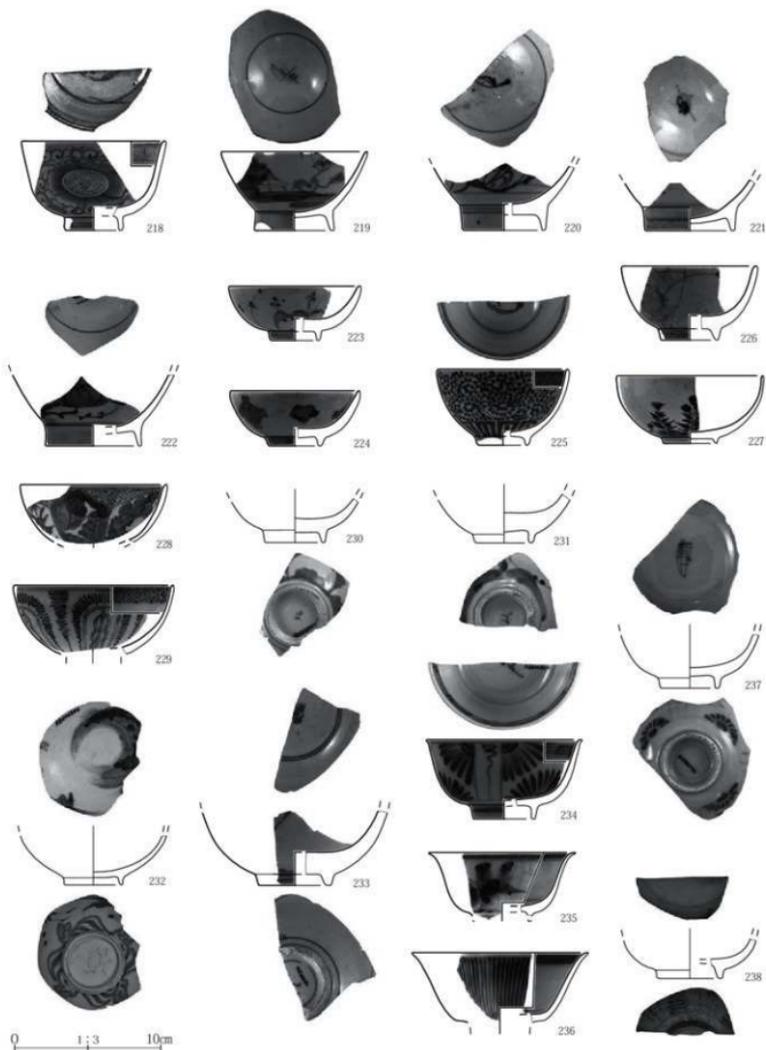
猪口



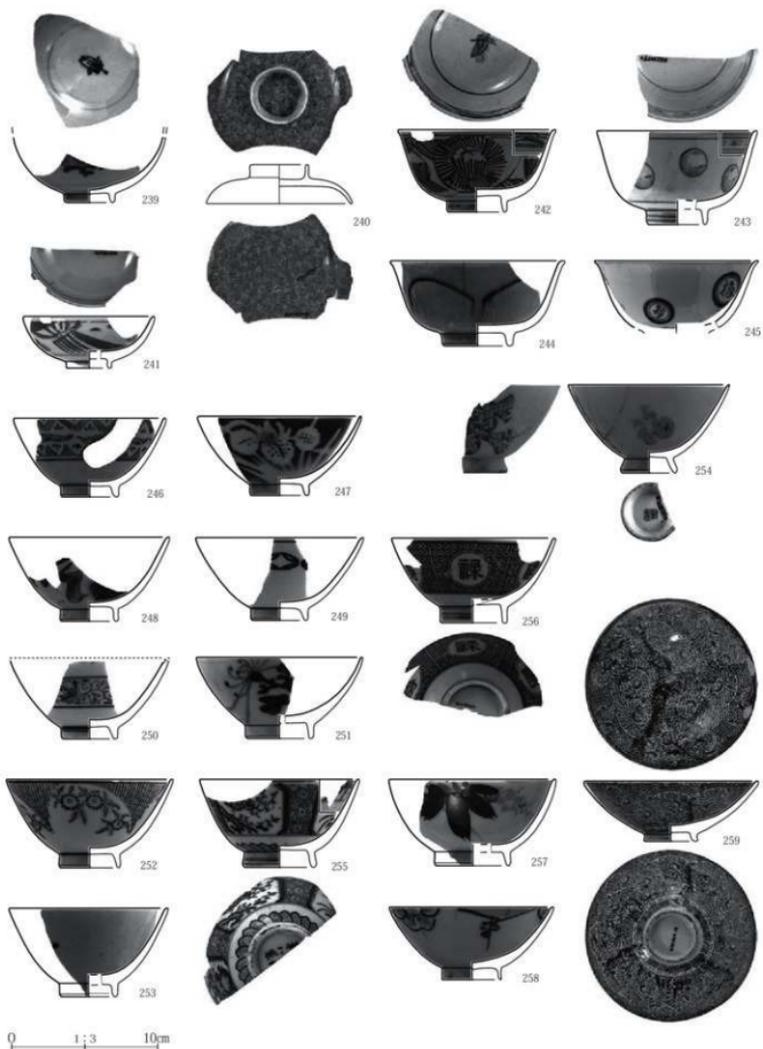
碗



第116図 遺物図(20)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②喫茶・飲酒器 飲酒器 ③食器 猪口・碗

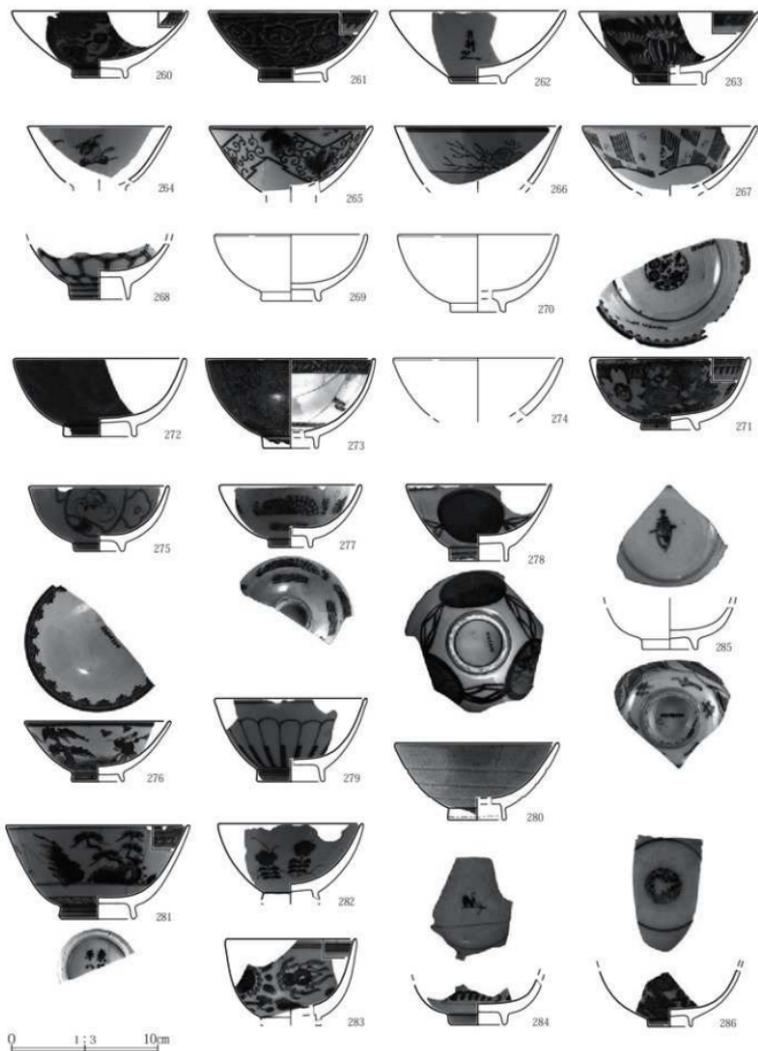


第117図 遺物図(2)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ㊦食器 碗



第118図 遺物図(22) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 碗

第3章 検出遺構と出土遺物

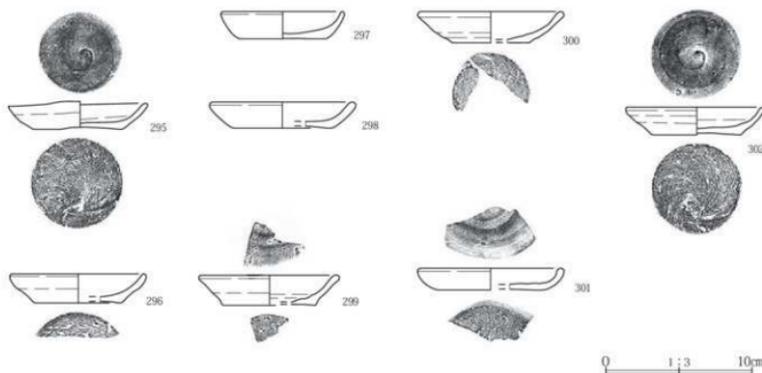


第119図 遺物図(23) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 碗

井



小皿



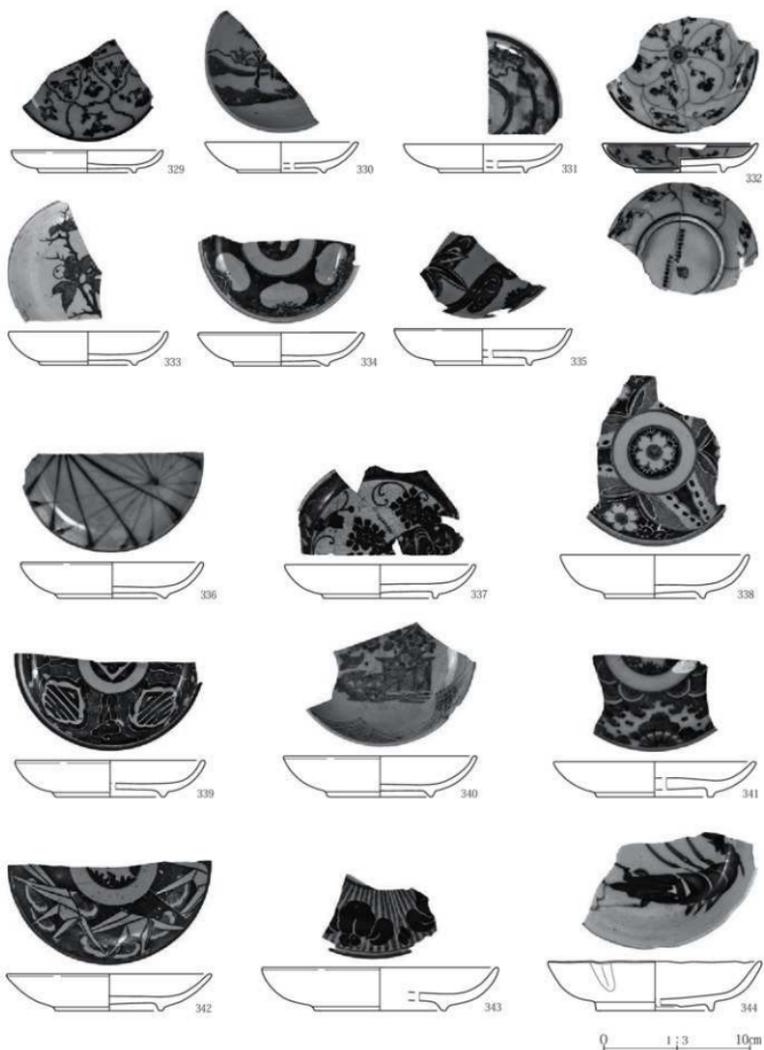
第120図 遺物図(24)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 井・小皿



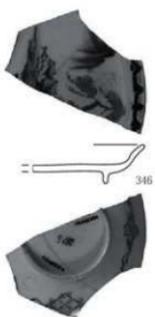
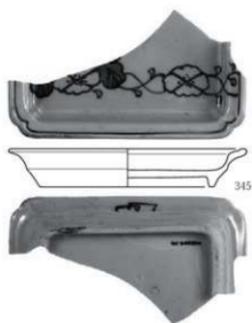
第121図 遺物図(25) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿



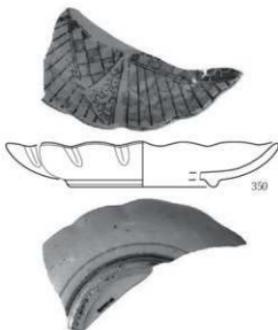
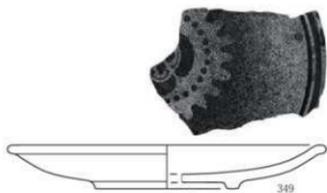
第122図 遺物図(26)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿



第123図 遺物図(27)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿

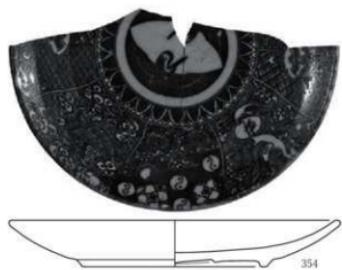


中皿(和食器)



0 1:3 10cm

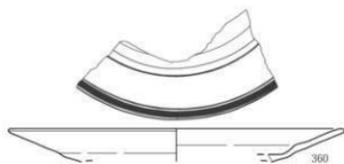
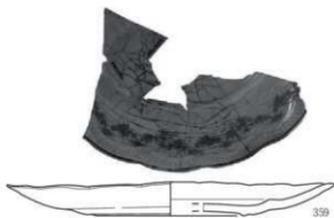
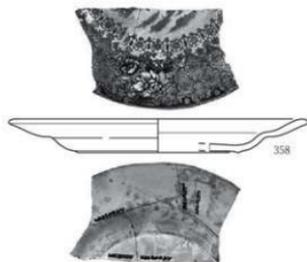
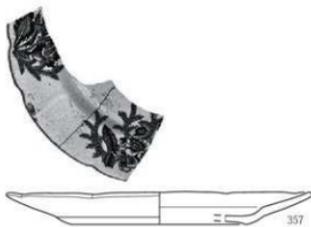
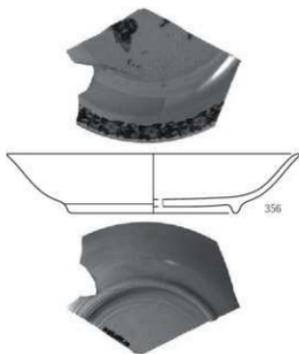
第124図 遺物図(28)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 小皿・中皿(和食器)



0 1:3 10cm

第125図 遺物図(29) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 中皿(和食器)

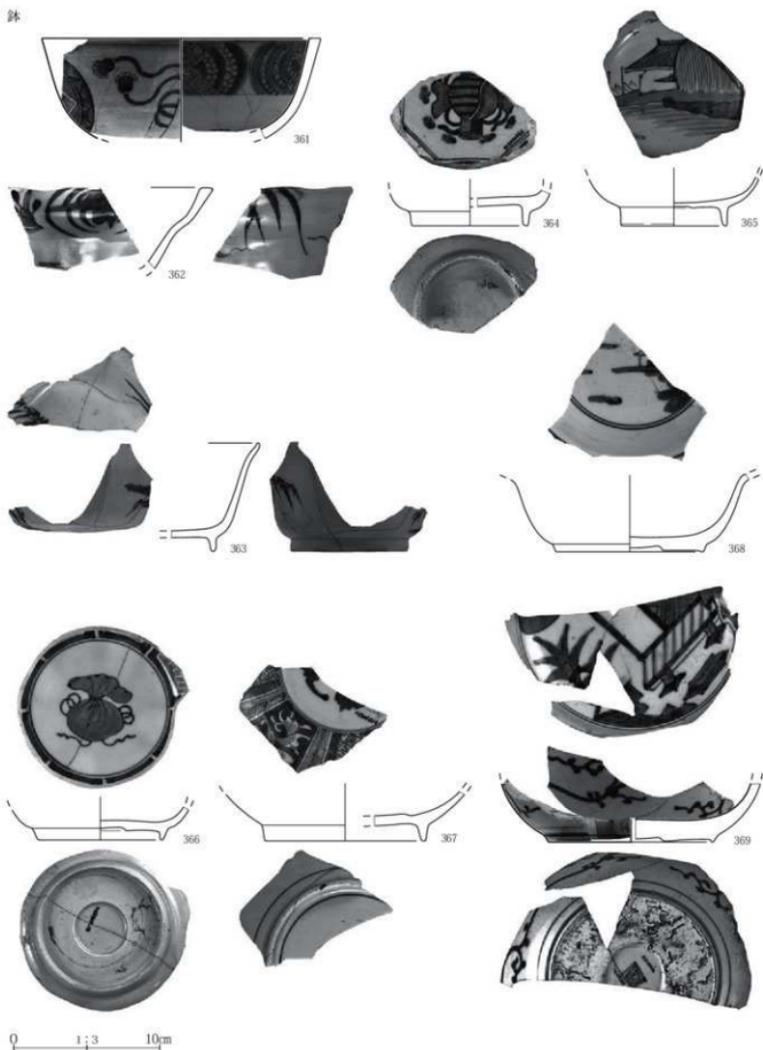
中皿(洋食器)



0 1:3 10cm

第126図 遺物図(30) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 中皿(洋食器)

鉢



第127図 遺物図(31) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 鉢



第128図 遺物図(32) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 鉢

第3章 検出遺構と出土遺物

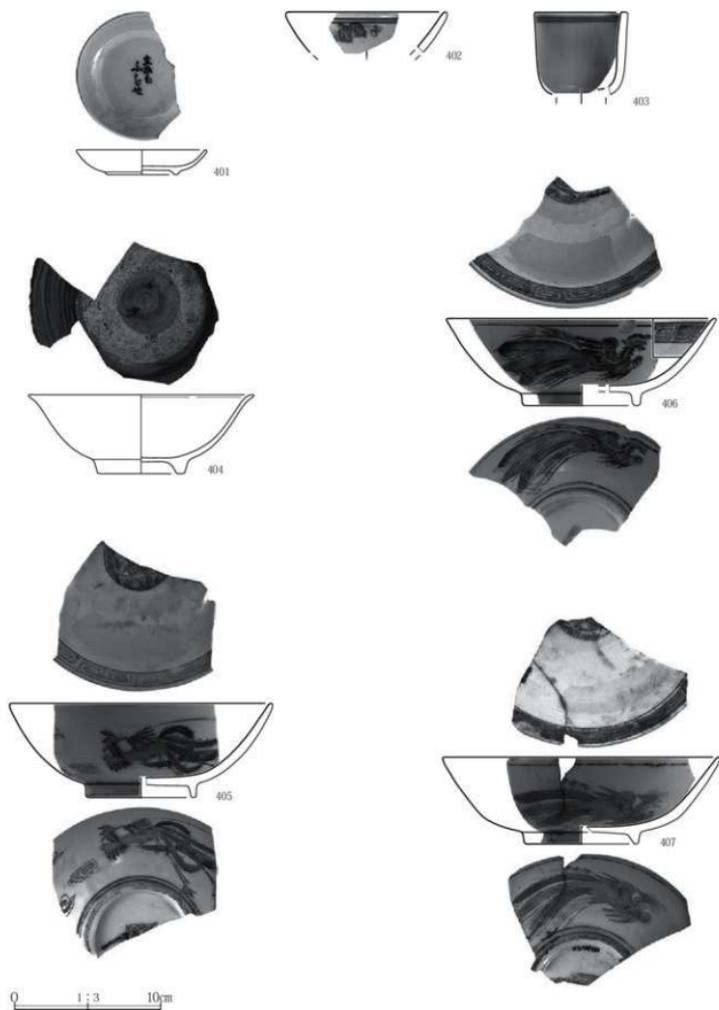


④記念品・販促品・粗品



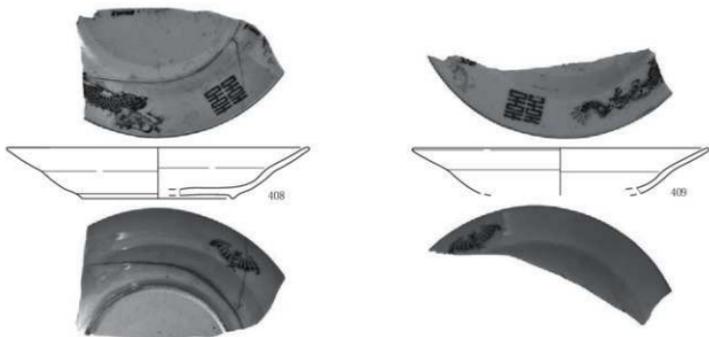
第129図 遺物図(33) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③食器 鉢 ④記念品・販促品・粗品

⑤業務用食器

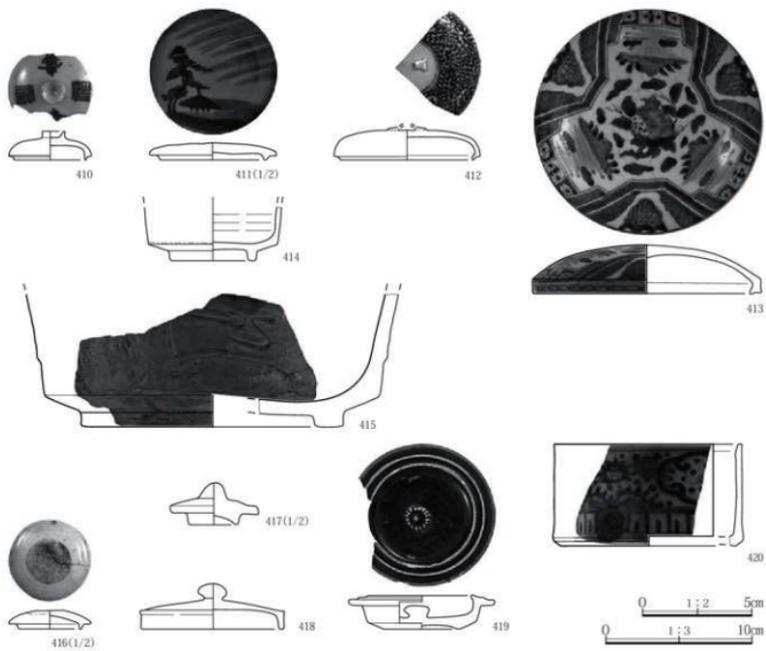


第130図 遺物図(34) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑤業務用食器

第3章 検出遺構と出土遺物



⑥容器・貯蔵具



第131図 遺物図(35) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑤業務用食器 ⑥容器・貯蔵具

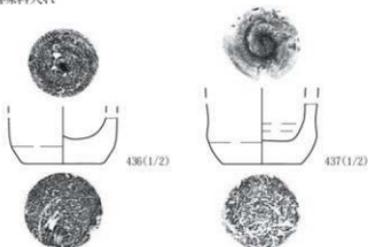


第132図 遺物図(36) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑥容器・貯蔵具

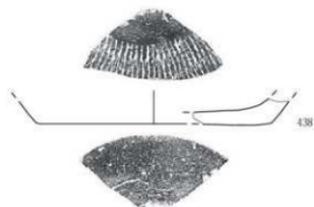
第3章 検出遺構と出土遺物

⑦調味料入れ・調理道具

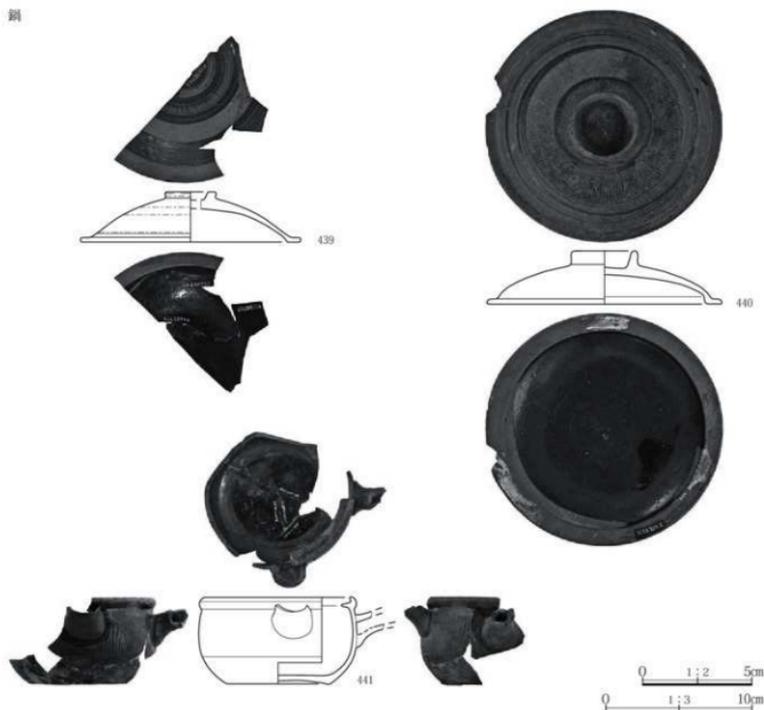
調味料入れ



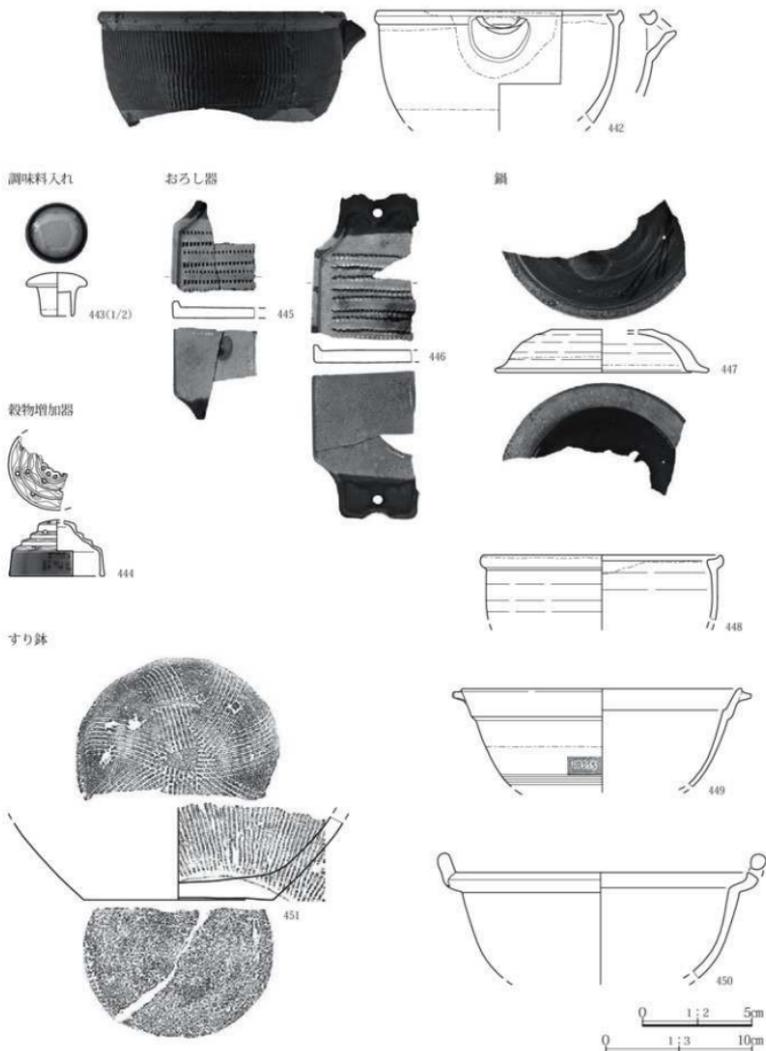
すり鉢



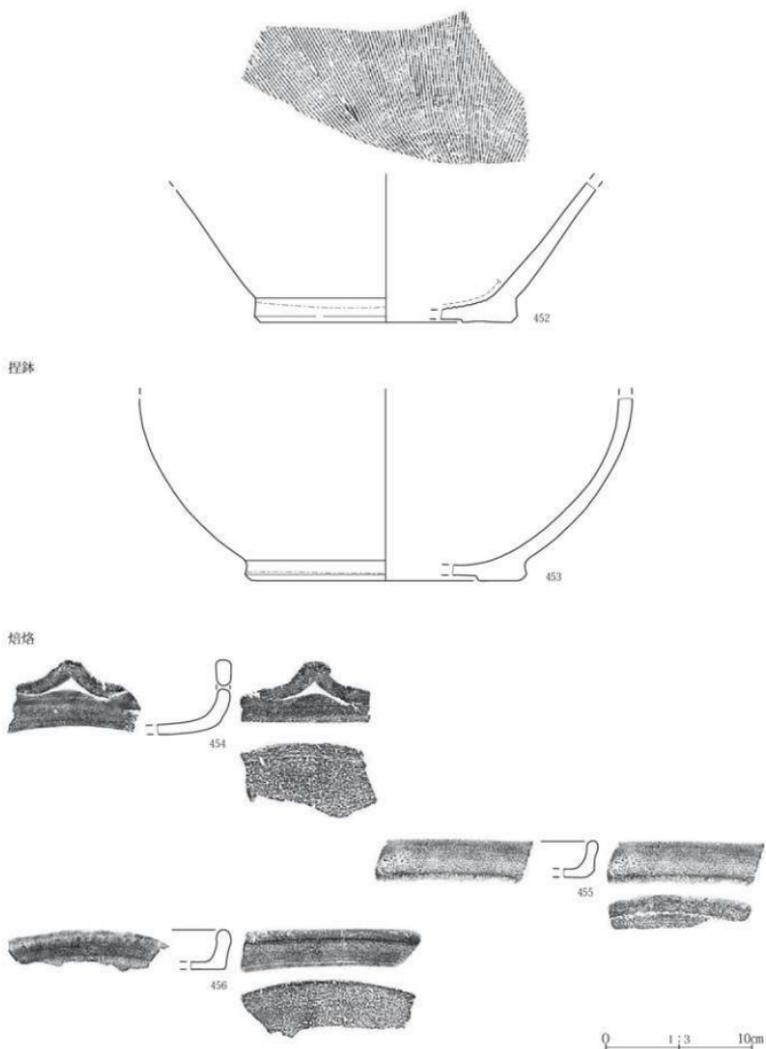
銅



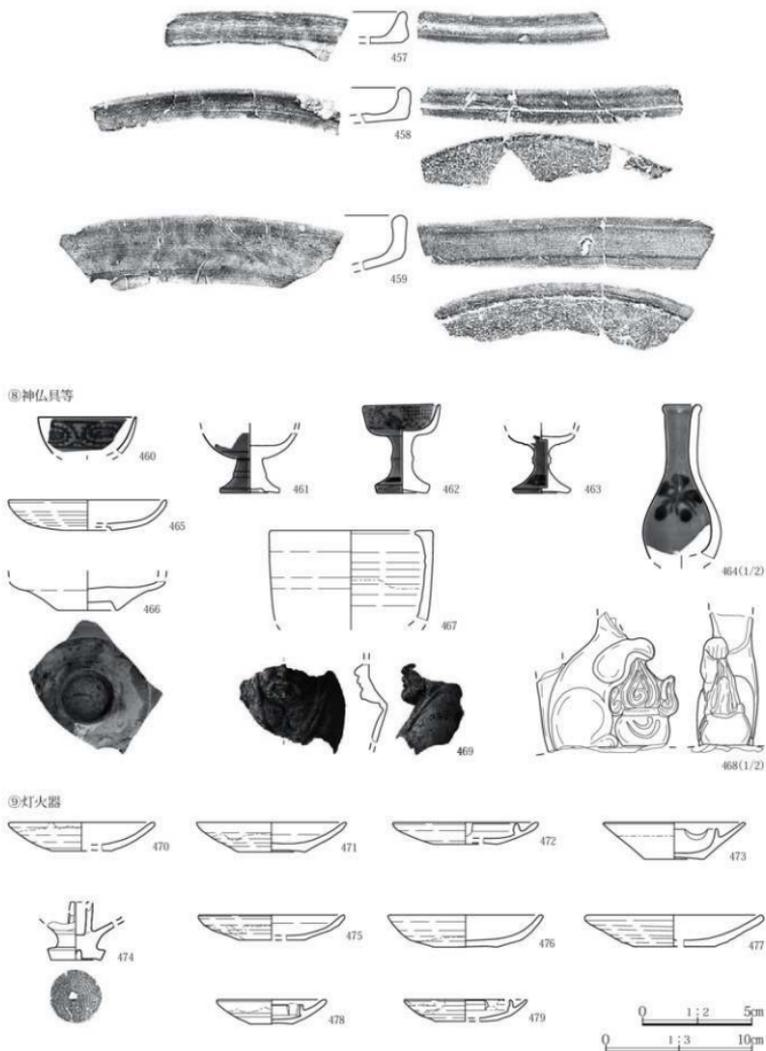
第133図 遺物図(37)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具 調味料入れ・すり鉢・銅



第134図 遺物図(38) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具
銅・調味料入れ・穀物増加器・おろし器・銅・すり鉢

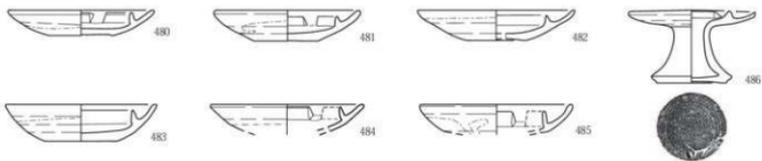


第135図 遺物図(39)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具 すり鉢・捏鉢・焙烙

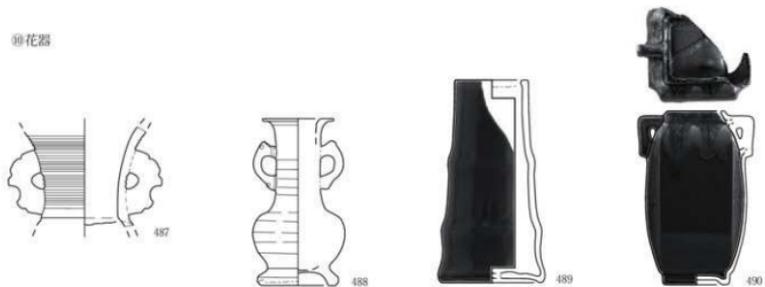


第136図 遺物図(40) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑦調味料入れ・調理道具 焙烙 ③神仏具等 ④灯火器

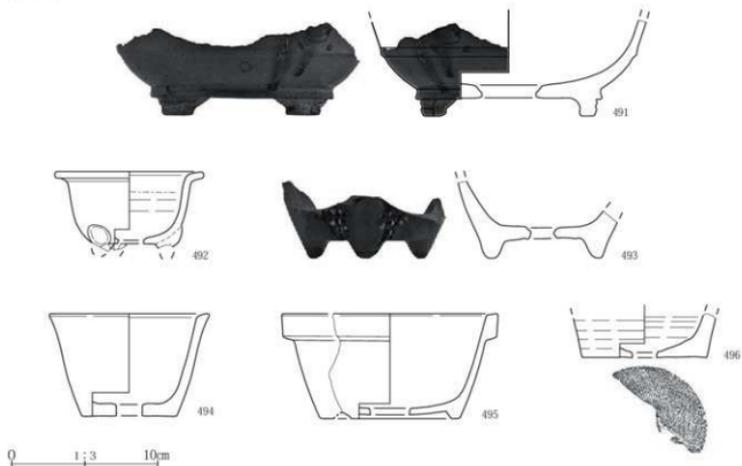
第3章 検出遺構と出土遺物



⑨花器



⑩植木鉢



第137図 遺物図(41)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ⑨灯火器 ⑩花器 ⑩植木鉢

②火具

目皿



497



498



499



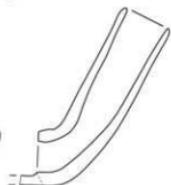
熱板



500



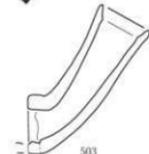
練炭おこし



501



502



503

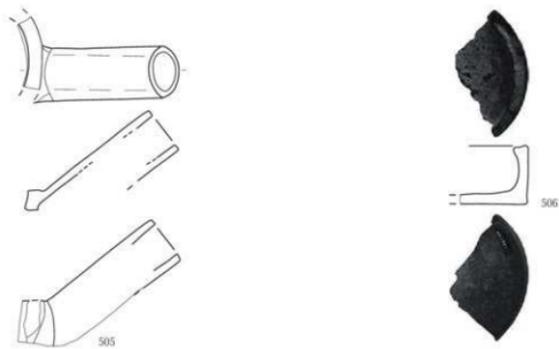


504



第138図 遺物図(42)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②火具 目皿・熱板・練炭おこし

第3章 検出遺構と出土遺物



置輪



0 1:3 10cm

第139図 遺物図(43) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 釜・火具 練炭おこし・置輪

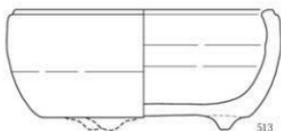


511

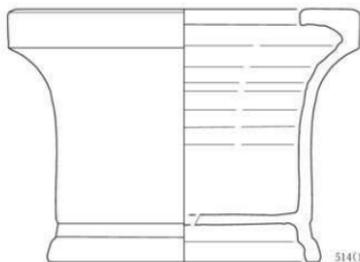


512

火鉢類



513



514(1/5)

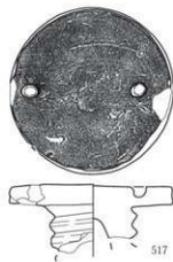
③科学工業陶器



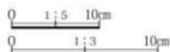
515



516



517



第140図 遺物図(44)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ②火具 置輪・火鉢類 ③化学工業陶器

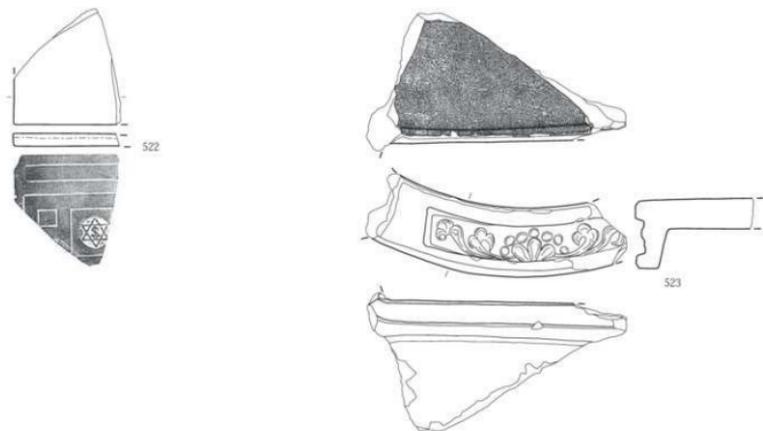
第3章 検出遺構と出土遺物

◎建築・建設関連具

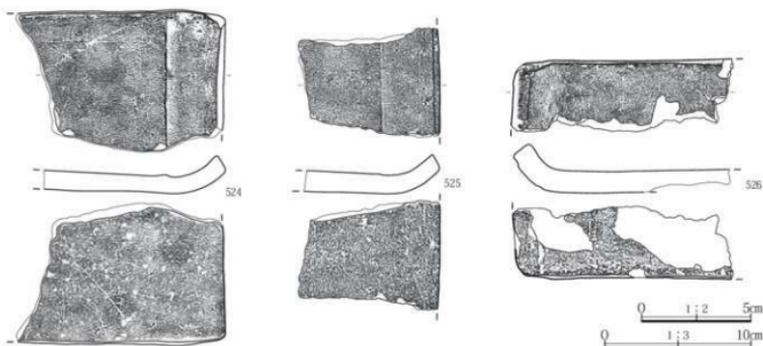
戸車



タイル

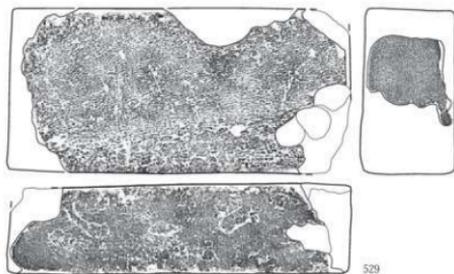
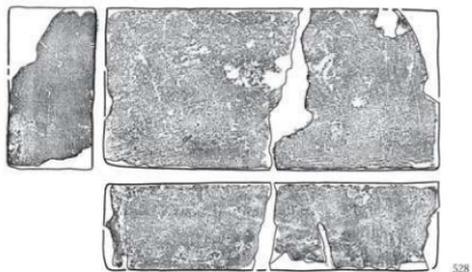
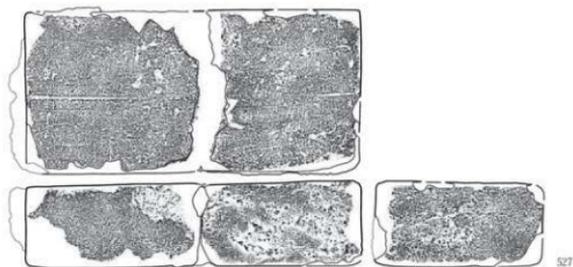


屋根瓦



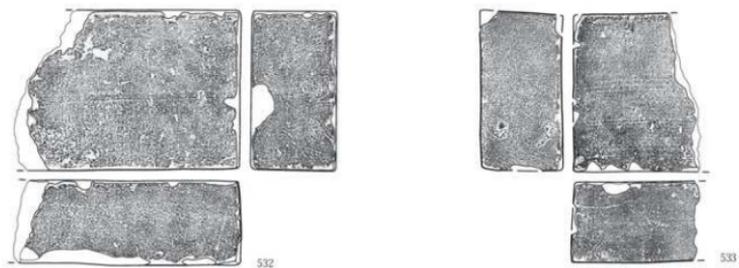
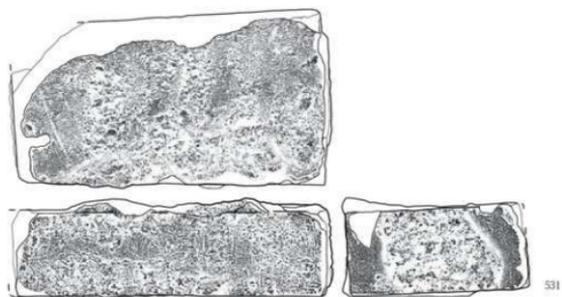
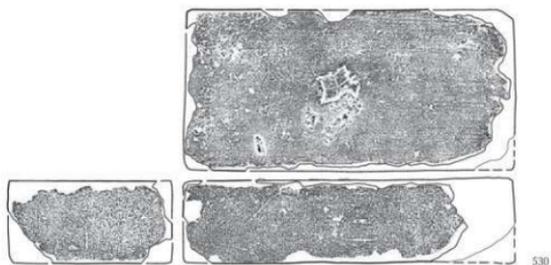
第141図 遺物図(45)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ◎建築・建設関連具 戸車・タイル・屋根瓦

煉瓦



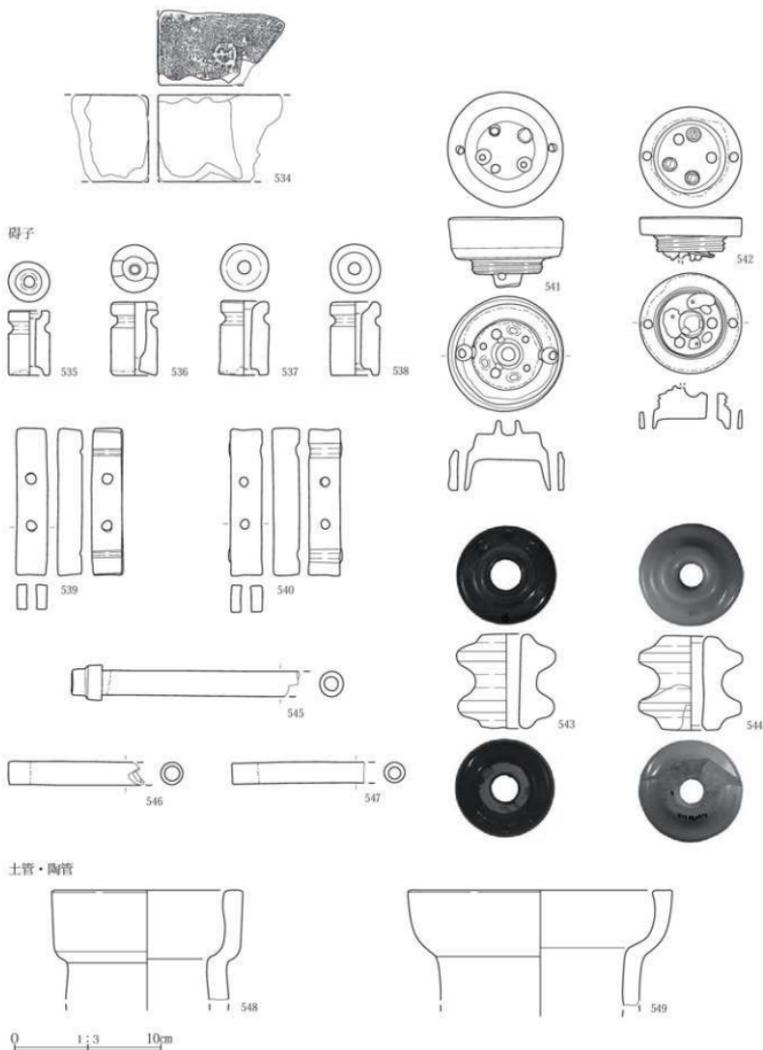
0 1:3 10m

第142図 遺物図(46)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ④建築・建設関連具 煉瓦



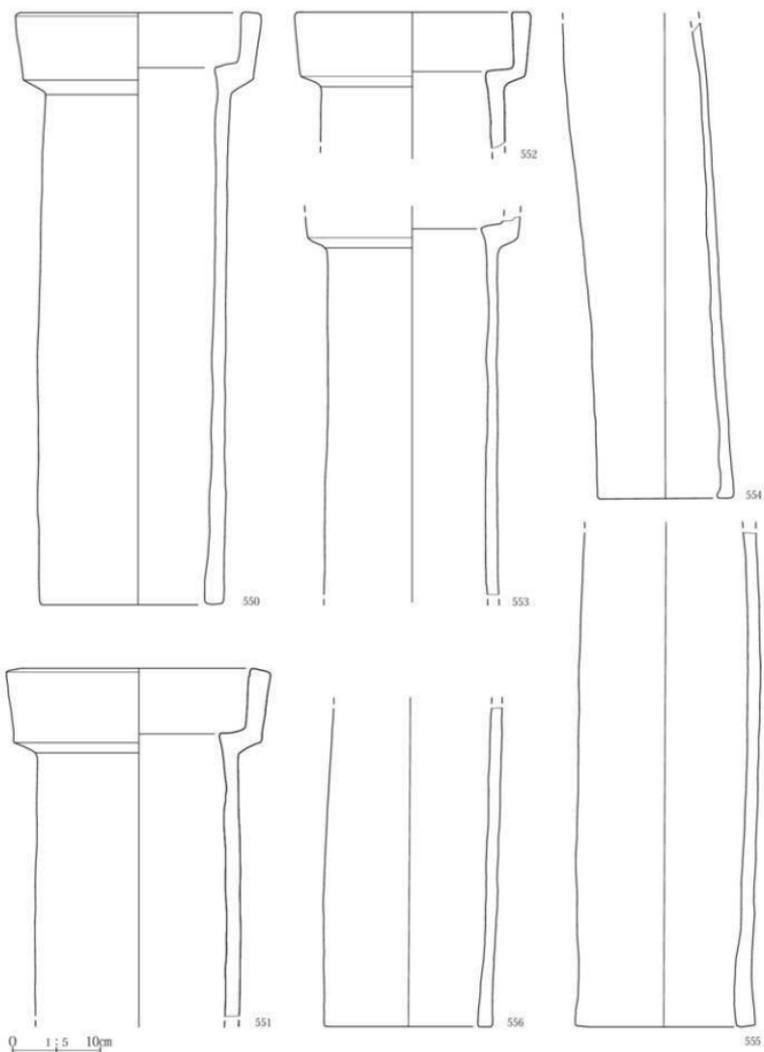
0 1:3 10m

第143図 遺物図(47) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ④建築・建設関連具 煉瓦



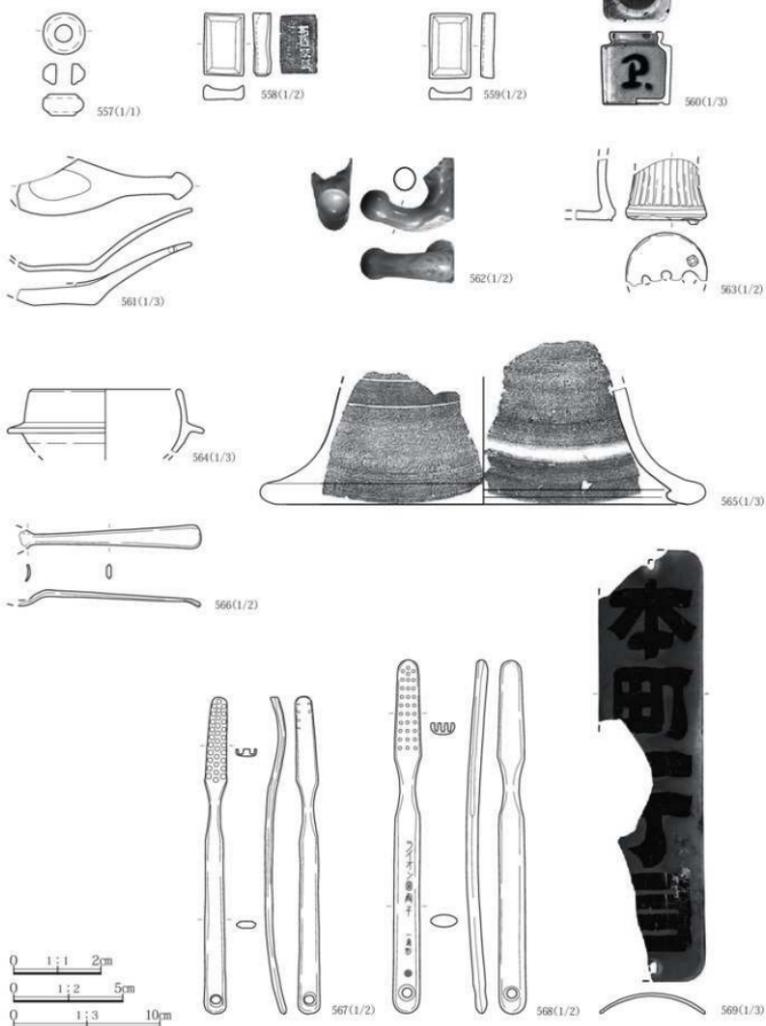
第144図 遺物図(48)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ④建築・建設関連具 煉瓦・罎子・土管・陶管

第3章 検出遺構と出土遺物



第145図 遺物図(49) 3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ④建築・建設関連器具 土管・陶管

③その他

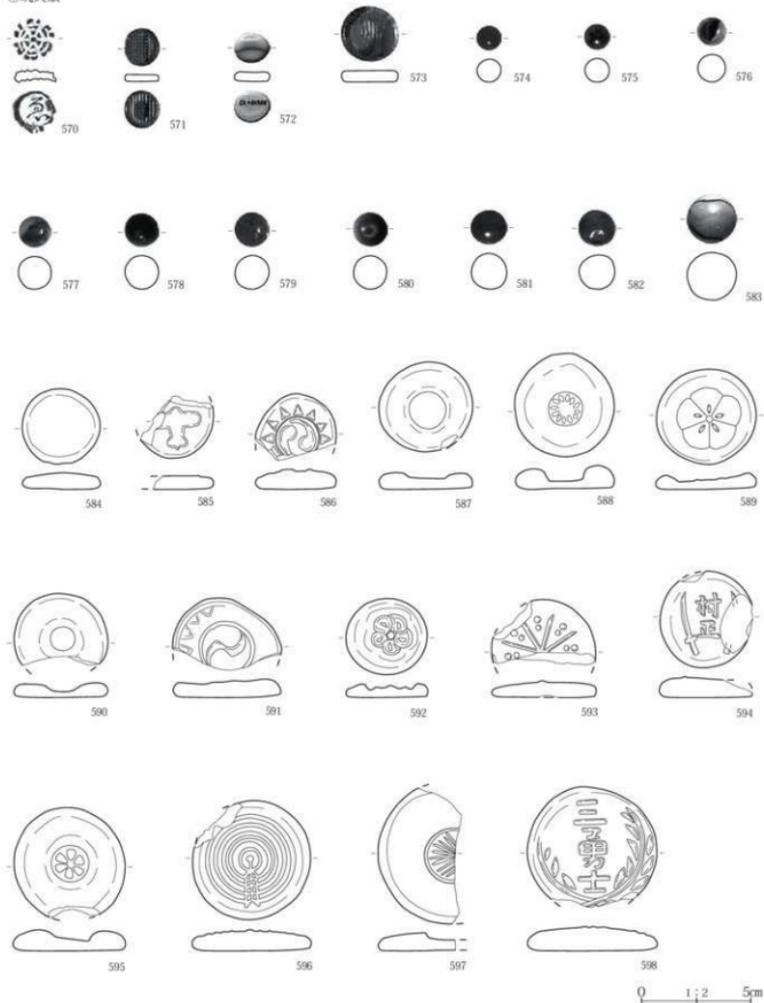


第146図 遺物図(50)3. 陶磁器・ガラス製品類(1)陶磁器等 ③その他

第3章 検出遺構と出土遺物

(2) ガラス製品

① 玩具類



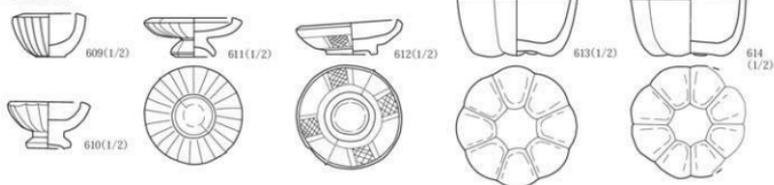
第147図 遺物図(51) 3. 陶磁器・ガラス製品類(2) ガラス製品 ①玩具類

②文具類

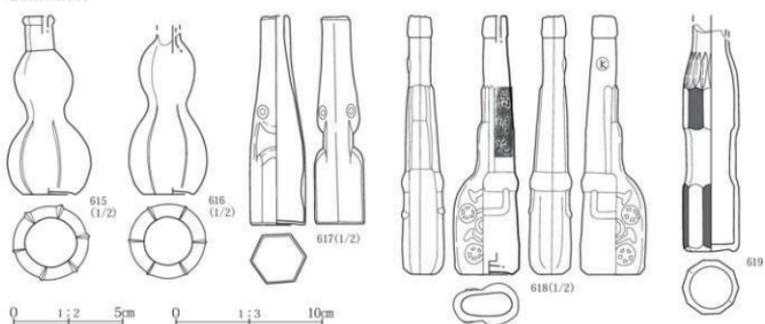
インク瓶等



③菓子容器



④清涼飲料瓶



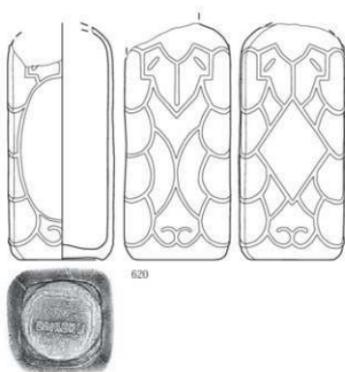
0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

第148図 遺物図(52) 3. 陶磁器・ガラス製品類(2) ガラス製品 ②文具類 インク瓶等・糊瓶 ③菓子容器 ④清涼飲料瓶

第3章 検出遺構と出土遺物

⑤酒瓶



⑥調味料瓶

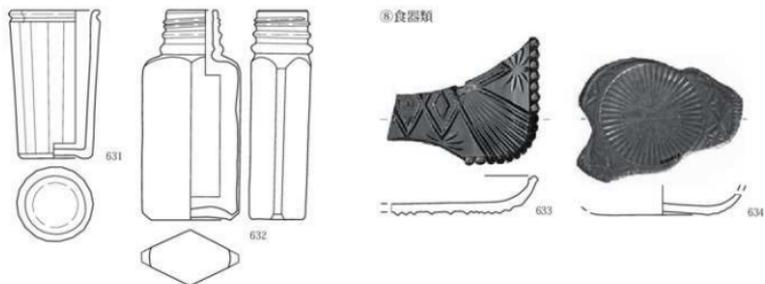


⑦食品瓶

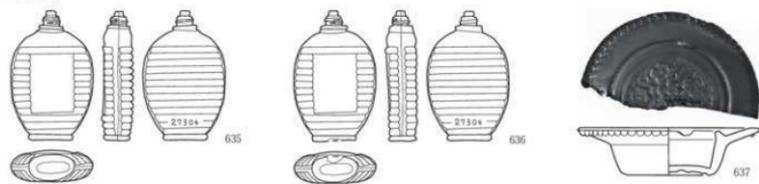


第149図 遺物図(53) 3. 陶磁器・ガラス製品類(2) ガラス製品 ⑤酒瓶 ⑥調味料瓶 ⑦食品瓶

⑧ 食器類

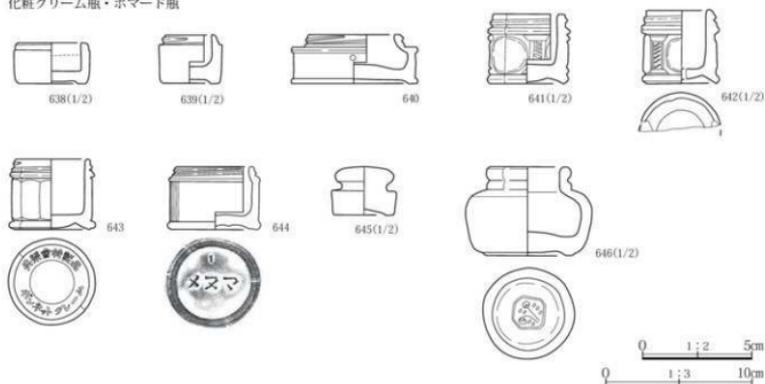


⑨ 喫煙具



⑩ 化粧品

化粧クリーム瓶・ポマード瓶



第150図 遺物図(54) 3. 陶磁器・ガラス製品類(2) ガラス製品 ⑦ 食品瓶 ⑧ 食器類 ⑨ 喫煙具

⑩ 化粧品 化粧クリーム瓶・ポマード瓶

第3章 検出遺構と出土遺物

化粧水・整髪料瓶



①薬瓶

一般用薬瓶

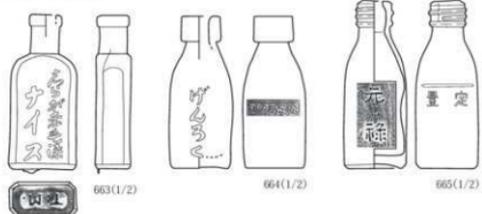


第151図 遺物図(55) 3. 陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ②化粧瓶 化粧水・整髪料瓶

①薬瓶 一般用薬瓶・医療用薬瓶

㊦日常生活瓶

白髪・赤毛染瓶



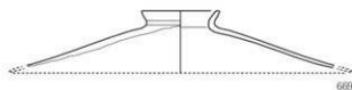
靴・クリーム瓶



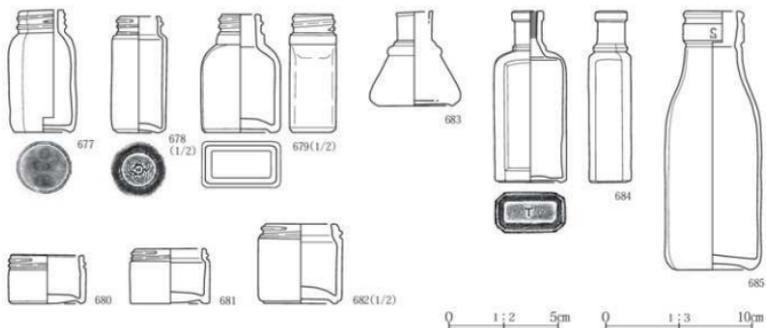
㊦塗料瓶



㊦照明器具



㊦用途不明瓶



第152図 遺物図(56)3. 陶磁器・ガラス製品類(2)ガラス製品 ㊦日常生活瓶 白髪・赤毛染瓶・靴クリーム瓶
㊦塗料瓶 ㊦照明器具 ㊦用途不明瓶

第4章 まとめ

はじめに

桐生新町水路跡は、重要伝統的建造物群保存地区に指定された天神町の一部と本町一丁目、二丁目の用水路が包蔵地として認定されている。今回の発掘調査は本町一丁目から二丁目までの全長540mほどの間で工事が実施される144m、49カ所が対象となった。49カ所の調査地点は令和4年度の調査地点の一部が平成29年度～令和元年度の調査地点の西側に位置する調査地点が存在するため水路に対する調査全長は135mになる。調査対象地は幅が1m～1.6mと限られていたため水路側の両側を同時に検出できた箇所は21区北端の1カ所だけであった。その他、平成29年度・平成30年度・令和元年度の調査と令和2年度の調査では調査範囲が重複し、結果として東西側面を調査した箇所が17区と45区、3区と42区、27区と38区、5区と39区、33区と36区の5カ所あった。

多くの地点では水路東側面からその裏込めの一部を調査している。なお、令和2年度の発掘調査は調査対象地が平成29年度から令和元年度より西に寄るため民地側の西側面石積みとその裏込めを調査している。しかし、水路は平成28・29年度に水道管敷設が行われているため水道管敷設箇所については調査ができず水路自体の状態は分からない。なお、この水道管敷設箇所については桐生市教育委員会文化財保護課が立ち合い調査を行い、2016『16重伝建地区内水路遺構立会調査概報(本町一丁目)』・2017『17桐生新町水路跡立会調査概報(本町二丁目)』として報告している。

構築の状況

水路自体の設計については、文献も残存しておらず分からないのが現状である。しかし、荒戸原に新町を縄張りし、民家が構築された段階で水路構築を想定するならば、裏込めの幅を考慮し、民家の建物は水路自体よりやや西に奥まって建てられていたと考えられる。その後、時代とともに徐々に水路側面寄りに建物が構築されてきたことになる。

新町の町立て当初、水路が設置されていたところは寛文七(1667)年の桐生新町御繩水帳(検地帳)と明治九(1878)年に作成された切絵図を参考にして作成された土地利用形態図や昭和五(1930)年の土地利用形態図と比較すると、本町通の東西に位置する所謂裏通りに当たる通りでは西側の通りの一部しか水路が設置されておらず、桐生新町の拡張と共に水路が延長されていたことが2009年に刊行された『桐生市天神町一丁目、本町一丁目、二丁目地区 伝統的建造物群保存対策調査報告書—織物とともに生きる人々の町・桐生新町—』から分かる。

発掘調査では東西の範囲に限られていたことや歩道東側はガス管敷設により調査をすることが不可能で西側も民地に延びていることや、民地も対象地であった令和2年度の調査でも民地の大部分は、攪乱によって裏込めの状態が分からない状態であった。そうした中でも、裏込めの調査は2019年度の桐生市教育委員会による発掘調査で東側の一部が実施されていると、令和2年度調査の42区で西側が実施できている。この2地点の様相や調査の成果から構築の工程を想定すると次のようになるとみられる。

構築工程

水路自体の掘削及び構築方法は次のような工程であったと推察できる。

第1工程

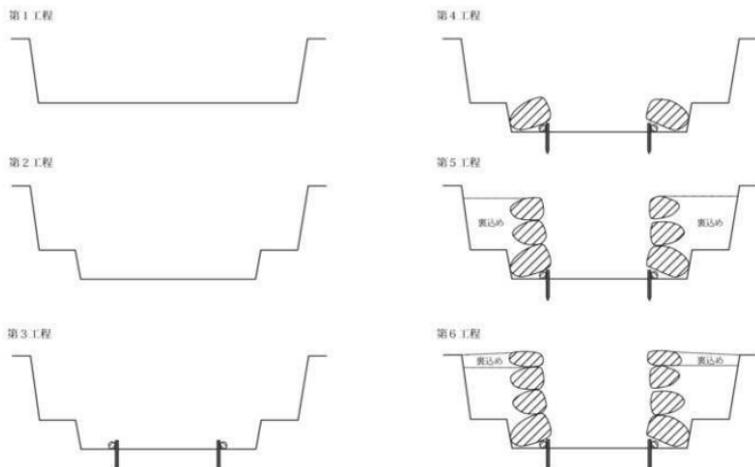
東西が当時の尺度で10尺幅(約3.0m)に設定し、その範囲を深さ2尺3～4寸(約70cm)ほど箱状に掘削する。ただし、側面は崩落を防ぐために垂直ではなく若干の角度をもたせている。そのため、工程での底面は上幅より若干狭くなる。

第2工程

第1工程の掘削後、両側から2尺前後(0.5～0.7m)内側をさらに6寸から1尺(20～30cm)ほど掘削する。ここでも側面は若干の角度をもたせている。

第3工程

内側の深く掘削した側面から30cmほど中心寄りに径10



第153図 桐生新町水路構築工程模式図

cmほどの胴木を設置する。このとき、胴木を固定させるための浅い溝を掘削したか否かは不明である。発掘調査では1段目の礫下面で胴木が地山に食い込み、細い溝状の状態で検出されている箇所が確認されているが、胴木の高さがないと1段目の礫を水路面に向けて斜めに設置するのが難しくなるとみられることから、胴木を固定するための浅い溝は設けられていなかったと判断する。なお、設置した胴木が移動しないように固定するために杭を打ち込んでいることは、発掘調査の成果で確認されている。しかし、杭の打ち込みは等間隔ではなく、細かく撃ち込まれた箇所もあれば、半間以上の間隔をあけて打ち込まれた箇所など様々な状態であった。

胴木は、自然木の枝を払ったものが大部分を占めていたが、丸太材、一部で角材が使用されており、余剰材や家屋解体によってでた材を再利用している。

第4工程

胴木の上に1段目の礫を配置する。1段目は第3工程で設置した胴木に若干かかるように大ぶりの礫を置く。この時、礫は胴木にかけるため、わずかに裏込め側に傾く。なお、水路底面幅は3尺3寸(1.0m)前後になるよ

うにしているが、地点によって3尺から4尺と異なる。この水路底面の違いは片方から順次掘削工事が進められたとみえるより、同時に複数箇所での工事が行われたと想定することが可能である。

第5工程

1段目の上に1段目に使用した礫よりやや小ぶりの礫を斜めから縦長に2段から3段積み上げ、裏込めに砂礫を多く含む粘性のある黒褐～褐色土を充填する。この裏込めに使用された土砂は基本的に地山の掘削土を利用したとみられるが、調査地点で堆積土の確認ができないため断定できていないが、桐生市教育委員会の発掘調査(2018『18桐生新町水路跡発掘調査概報』)によると道路アスファルト舗装下では5～10cmの河床礫を含む暗灰褐色砂礫層や、2～5mmの砂礫を含む赤茶褐色砂礫層が確認されており、こうした礫が混入した土砂が利用されたとみられる。

第6工程

第5工程で積み上げた2段目の礫の上に比較的細長く扁平な礫を積み上げ、裏込めに土砂を充填して仕上げる。ここでは上面が平坦になるように使用する礫を選別して

いる。

水路側面の石積みは一見野面積みのように見えるが、野面積みより礫を縦に積み上げるなどやや異なった積み上げ方をしている。

石積みの積み替え

明治以降、民地人家より雨水などの排水のため陶管が水路を横断して敷設されている。なお、雨水や人家排水は側生新町水路に陶管による排出口を設けることはなく、すべて水路を横断する状態であった。陶管敷設の場所は水路底面より下位と側面中位である。この時、側面石積みは一次取り外され、再度積み直されていることが多い。

前記のように東側面は石積み積み替えを行っても使用する礫は構築当初から使用していた河床礫による部分が大部分であるが、御影石を使用した積み替えている箇所が7区と16区の2カ所で検出している。7区では1段目、16区では河床礫による石積みから御影石を3段に積み替えており、水路東側面を検出した他の区とは異なっている。御影石を使用した積み替えの時期については、その加工技法から明治以降と推察される。また、7区では1段目のみ御影石が使用されており異質な積み方をしている。さらに使用されている御影石の一面には、小孔が等間隔に穿たれており、他に使用されていたものを転用した可能性が窺えた。

さらに民地境と西側面はほぼ一致していたため、人家の塀を御影石などで構築するときは基礎をしっかりとさせるためか、地表下にある水路側面の自然石を取り除き御影石製に積み直しが行われている。

なお、こうした側面の礫が積み直されるのは陶管の生産年代や御影石の加工技術から明治以降になってからとみられる。

構築年代について

桐生市教育委員会では、「桐生新町水路跡の構築時期について堀越靖久氏の「近世期の桐生」（2002『国立歴史民俗博物館研究報告』第95集）では天明八（1788）年に書かれた『天正遺事』と享保十六（1731）年頃に書かれた『今泉見聞録』の記録などから、江戸初期の慶長十（1605）年に本町通りの西側水路を下御壺まで開削したとしている。

また、2002『桐生史年表』には『金子太郎兵衛覚書』に宝暦三（1754）年四月に大堰普請が行われたとの記載がある。さらに安永九（1780）年に描かれた『桐生新町絵図』に天満宮以北から浄蓮寺南側（本町六丁目）まで続く大堰用水を引き入れた水路が描かれていることが確認でき、構築時期はこれ以前と判断できる。これらの資料より慶長十（1605）年に既に水路が縦断していたことも考えられるが、『天正遺事』・『今泉見聞録』の著述年代を考えると、内容について慎重に精査する必要がある。また、宝暦三年以前に大堰壺があったものの、安永九年の絵図と同様な水路網であったかについては不明点がある。」（2013桐生市教育委員会『13本町一丁目水路遺構試掘調査概報』より抜粋）としており、構築年代確認には至っていない。

今回の発掘調査では水路開削時期の解明も一つの課題であった。出土遺物では寛永三（1626）年～万治二（1659）年に铸造された古寛永通寶（第106図33）が裏込めから出土しており、他に年代を示す資料が出土していないなら構築年代を示す資料となりえるが、寛文八（1668）年以降に铸造された新寛永通寶も4区・11区（第106図36・37・39・第107図44）裏込めから出土しており、古寛永通寶の年代までさか上ることはできない。この他、多くの近世陶磁器が出土しているが、その中で最も古い時期に比定されるものは204肥前磁器猪口の1点だけである。この肥前磁器猪口は17世紀末に生産された可能性があるが、18世紀代まで生産されているとのことである。このほかの陶磁器は古いものでも18世紀でほとんどは19世紀代のものであることから、文献の年代を確定できる材料を得ることができなかった。

水路の利用

水路が構築された江戸時代中頃は主に生活用水として使用されていたとみられる。江戸後期天明三（1783）年に桐生の岩瀨吉兵衛によって八丁燃糸器機と水車動力を組み合わせた水力八丁燃糸機が発明された以降、桐生の燃糸は水車を動力としていたとみられる。この水車動力は明治三十年に描かれた桐生市中案内雙六図の旧黄尾邸（本町一丁目）（PL. 2-1）にも水路に水車が設置されていたことから分かる。この水車動力は昭和十年代まで利用されていたことが分かっている。しかし、水車設置場

所以外の多くの地点では、21区に残っていた石製板によって水路自体が覆われていったとみられる。

そうした中で、24区と37区で水路内の流れを堰き止め上流側の水位を高くするための堰が検出されている。37区の堰はコンクリートで造られており、大正から昭和と想定されるが、24区はかこう岩を加工したものである。加工の技術からみると明治期と想定できる。

堰柱石の両側側面の石積み状態をみると1段目と2段目の礫が逆転している様子も窺える。また、堰柱間に設置された床版石の下流側に置かれた水叩き石は側面石積みの下に入り込んでおらず、間に納まる寸法であることから水路構築当初ではなく近代に設置されたとみられる。なお、堰柱石は上部を全体的に打ち欠かれており、高さの調整がなされていることから他の地点から移設してきた可能性も想定できる。

今回の発掘調査では検出していない施設に水路への昇降施設がある。県内の城下町や宿場町などに残る水路では、人家ごとなどに昇降施設が設けられているのを見ることができる。例えば五街道に次ぐ重要街道の一つとされた三国街道では佐渡との往来のため順次整備が進んでいる。慶長六(1601)年に町立てが命じられ宿場として整備された須川宿は、現在たくみの里として歴史的景観を保たれているなか、街道筋には現在でも水路が利用できる良好な状態で存在している。ここでは堰が複数箇所設けられており、さらに人家ごとに水路への昇降施設が設置(下記写真参照)されている。また、場所によっては道路側からも昇降できるように水路両側に取り付けられている箇所も存在している。こうした水路を取り巻く施



三国街道須川宿の水路と昇降施設

設は、桐生新町水路でも設置されていた可能性が窺えるが、現在では昇降施設などの痕跡を確認することができない。

おわりに

今回の桐生新町水路跡発掘調査では、本町一丁目・二丁目に残る水路跡の一部を検出した。その結果、21区のような良好な状態を残す箇所は少なく、1区のように攪乱、10区のような埋設物によって側面石積みや水路が壊されている箇所のほうが目立っていた。また、側面石積み状態も1段目や2段目は残存しているが、最上層はほとんど欠落した状態の箇所が多かったのが現状である。

今回の発掘調査では、以前に実施された桐生市教育委員会の成果以上のものを上げることはできない状況であったが、本町一丁目から二丁目にかけての水路全体の残存状態を知る上では大きな成果を得たと考える。

江戸期には、重要な水利施設として使用されていた水路が明治・大正期を通し、商店では出入りに支障があったためか石橋を掛けて暗渠化し、水路の利用は行われなくなった状況が窺える。しかし、37区では新たにコンクリート製の堰を設けて水路本来の利用が行われていたことが確認できた。遺構としては確認できていないが、桐生の基幹産業である絹織物を担う製糸業ではその動力源として利用されていることも分かっており、水路は地域にとって欠かせない生活施設や産業基盤であったことは確かである。

また、出土遺物は江戸後期から昭和戦前期までの陶磁器類や明治以降のガラス製品をはじめ、明治期の文房具として使用されていた石板や石筆など当時の生活習慣を解明する上で重要な遺物が多くあった。さらに染色関係の陶器も出土しており、桐生の絹織物が盛んであったことを窺い知ることが可能な遺物もみられる。

こうした、出土遺物は江戸後期から明治・大正期の桐生新町地域の生活習慣が再現でき、水路跡自体の成果とともに今回の大きな成果の一つでもある。

遺物観察表

第4表 石製品・石造品観察表

種別 No.	図 No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石・素材等	成形・整形の特徴	備考
第979号 PL.60	1	石製品 砥石	21区裏込め 一部欠損	長 9.7 幅 3.7	厚 2.6 重 196.9	砂岩	上下端部は欠損か未使用状態か不明。各面とも使用されているが、図示した表面は中央が窪みに窪む。
第979号 PL.62	2	石製品 砥石	22区水路下層 完形	長 10.4 幅 4.3	厚 3.1 重 151.9	頁岩	断面形状は下層に比べ上方部 0.8cm と厚く、図示した表面はあまり使用されていないが、裏面、両側面、下層はよく使用されたことよって磨り磨かれた状態である。
第979号 PL.63	3	石製品 砥石	22区水路下層 1/2	長 9.1 幅 4.9	厚 1.9 重 186.2	カーボラタム (人造珪石)	上下とも欠損。表裏面とも使用によって磨り減っている。特に表面が顕著である。
第988号 PL.60	4	石製品 砥石	26区水路上層 ほぼ完形	長 12.2 幅 6.5	厚 2.9 重 314.6	頁岩	表裏とも丁寧に仕上げられているが、側面は表面以上に磨り磨かれた状態。裏面は磨り出し、堤高は砥面1.5mm、海は10.5mm。側面はあまり使用されていない状態である。
第988号 PL.60	5	石製品 砥石	33区水路下層 ほぼ完形	長 12.4 幅 6.0	厚 1.9 重 282.5	頁岩	表裏面、側面はあまり使用しておらず、砥面は磨り出しの磨加1道や使用痕が不明。砥は欠損や磨り減っており本来の高さは不明。
第988号 PL.60	6	石製品 砥石	15区石橋の間 一部欠損	長 12.5 幅 6.5	厚 1.9 重 303.8	頁岩	表裏とも丁寧に仕上げられているが、砥面は磨り出し、裏面に使用時の磨痕が残る。堤高は砥面1mm、海は砥面2mm。砥面はあまり使用されていない状態であるが、海もよく磨り磨かれている。
第999号 PL.60	7	石製品 砥石	38区水路下層 一部欠損	長 13.5 幅 7.4	厚 1.8 重 290.4	頁岩	側面は平滑に仕上げられているが、裏面はやや削り出し上がりである。砥面は中程が窪むほど使用されている。砥面は磨り出し、堤高は砥面で1mm、海は欠損のため不明。裏面には中程に長方形の区画を設け、その中を磨り込んである。区画内下位と区画左上に製品名が刻まれている。区画内中程と区画右側は使用者による磨削。
第999号 PL.61	8	石製品 砥石	22区風呂 表面割離一部 残存	長 12.2 幅 6.4	厚 (1.0) 重 (117.4)	頁岩	表裏の大部分は磨削し磨り減るだけである。砥面は磨り出し、海の加工は丁寧に磨かれているが、裏面はやや雑な仕上げである。堤高は海で5mmほどである。裏面に使用者が氏名を磨削。
第999号 PL.61	9	石製品 砥石	22区水路下層 砥石	長 8.1 幅 6.4	厚 1.7 重 (186.1)	頁岩	各面とも丁寧に仕上げられている。砥面は磨り出し、堤の大部分は欠損。残存部での高さは1〜2mm。砥面はよく磨り込まれているが、磨痕が残る。裏面に上に「中」の磨削。
第999号 PL.61	10	石製品 砥石	26区裏込め 1/3	長 (8.9) 幅 7.4	厚 (1.9) 重 (197.6)	頁岩	側面及び砥面は丁寧に仕上げられている。裏面の中程は浅く凹面になっている。砥面は磨り出し、砥は欠損。砥面は使用によって比較的よく磨り磨かれている。
第999号 PL.61	11	石製品 砥石	8区水路下層 一部欠損	長 8.2 幅 5.1	厚 1.9 重 47.3	頁岩	表面は丁寧に仕上げられているが、裏面に加工痕が残る。砥面は磨り出し、堤高は砥面1mm、海5mmと浅い。砥面はよく使用され磨り磨かれている。海も同様磨かれている。
第1009号 PL.62	12	石製品 石板	24区水路下層 1/2	長 14.1 幅 (15.7)	厚 0.3 重 (117.8)	頁岩	上端部は鋸状工具による切断面が残るが、左側面は大部分が欠け上げられている。裏面、右側面とも磨削が残る。
第1009号 PL.62	13	石製品 石板	30区水路上層 1/4	長 (14.4) 幅 (12.9)	厚 0.5 重 (137.2)	頁岩	上端部、左側面は鋸状工具による切断面が残る。表裏面とも丁寧に仕上げられているが、裏面は細かく平みみられる。表面は磨削が残る。
第1019号 PL.62	14	石製品 石板	24区水路下層 破片	長 (14.6) 幅 (5.8)	厚 0.4 重 (57.3)	頁岩	左側面は使用時に欠損が、断面が重層状態である。表裏面とも磨削が残る。
第1019号 PL.62	15	石製品 石板	24区水路下層 破片	長 (9.1) 幅 (7.5)	厚 0.3 重 (40.5)	頁岩	上端部・左側面には鋸状工具による切断面が残る。表裏面とも磨削が残る。
第1019号 PL.62	16	石製品 石板	30区水路上層 破片	長 (8.4) 幅 (8.3)	厚 0.3 重 (40.2)	頁岩	上端部は平滑に仕上げられている。表面には使用時に細かく格子状に磨削されているがやや凹面があった様である。残存下部に小円孔「井」×の磨削。
第1019号 PL.62	17	石製品 石板	30区水路上層 破片	長 (8.8) 幅 (7.2)	厚 0.3 重 (34.4)	頁岩	上端部は断面三角形に加工。表裏面とも細かく削り磨削が残る。
第1019号 PL.62	18	石製品 石板	21区水路下層 破片	長 (9.2) 幅 (6.6)	厚 0.3 重 (33.0)	頁岩	上端部には鋸状工具による切断面が残る。表面は丁寧に磨り磨かれているが、裏面はやや雑な仕上げりである。表面に磨削が残る。
第1029号 PL.63	19	石製品 石板	24区水路下層 破片	長 (11.7) 幅 (3.7)	厚 0.3 重 (19.0)	頁岩	側面は切断面が残らず丸みをもっている。表面は磨削が残る。
第1029号 PL.63	20	石製品 石板	40区水路下層 破片	長 (6.6) 幅 (7.9)	厚 0.3 重 (19.2)	頁岩	上端部は片対上に仕上げられている。表裏面に磨削が若干残る。
第1029号 PL.63	21	石製品 石板	25区水路上層 破片	長 (7.2) 幅 (6.3)	厚 0.4 重 (32.8)	頁岩	上端部は切断面がみられない。表裏面とも磨削が残る。
第1029号 PL.63	22	石製品 石板	33区水路下層 破片	長 (6.1) 幅 (4.1)	厚 0.2 重 (8.7)	頁岩	上端部は鋸状工具による切断面が残る。裏面には細かく磨削が残る。
第1029号 PL.63	23	石製品 石筆	31区裏込め 使用面側片	長 (3.4) 径 0.6	重 (2.0)	炭ろう石	残存部は上端部が、丸みをもつ。断面はほぼ円形を呈する。表面は磨り磨かれている。下部は欠損。
第1029号 PL.63	24	石製品 石筆	33区水路下層 使用面側片	長 (3.3) 径 0.6	重 (2.7)	炭ろう石	上下とも欠損が。上端は欠損後の使用によるやや磨削。下端は新しい欠損。断面はほぼ円形を呈する。表面は磨り磨かれている。
第1029号 PL.63	25	石製品 石筆	29区水路下層 中間部片	長 (3.8) 径 0.5	重 (1.9)	炭ろう石	上下とも欠損が。断面はほぼ円形を呈する。表面は磨り磨かれている。
第1029号 PL.63	26	石製品 石筆	33区水路下層 中間部片	長 (3.4) 径 0.6	重 (2.4)	炭ろう石	上下とも欠損が。断面はほぼ円形を呈する。表面は磨り磨かれている。
第1029号 PL.63	27	石製品 石筆	26区水路下層 完形	長 4.7 径 1.9	厚 0.6 重 13.2	滑石	各面とも平滑に仕上げられている。使用は各向を利用、そのため向は丸みを帯びている。

種 別 No.	種 類 器 種	出土位置 現 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第10329 PL.63	28 石製品 顕石	30区水路上層 宛形	長 4.4 幅 2.3	厚 0.6 重 16.2		表面とも平滑に仕上げられている。使用は各角を利用、そのため向は丸みを帯びている。	
第10339 PL.64	29 石造品 塚柱	24区東側壁 上部欠損	長 (51.0) 幅 36.2	厚 23.2 重 6590.0	かこ岩	表面部中央付近に下階部12cmを空けて溝(上幅4.7cm×下幅3.0cm×深さ2.7cm)1条を刻む。左右の側面端部には11~14cm間隔に尖穴の彫刻(各3ヶ所)があり、内側面は分節面となっている。出土状態からみて表面部中央の溝には排水用の彫刻が差込まれたのであろう。産地不明。沢久かこ岩とは異なる。	
第10498 PL.64	30 石造品 石礎	42区東側壁 2 段目 一部欠損	長 (49.0) 幅 22.6	厚 8.0 重 17780.0	粗粒輝石安山岩	用水路西側壁面 2 段目に転用。断面形状は楕円状である。排水用の礎として水水路に接続させ、使用したのか。断面厚は底部中央で8.4cm、上縁部で5.0cmを測る。外面整形は斜め方向のノミ跡となっているが、外面部や上縁部は格子状にノミ跡が残り、より平坦に仕上げられている。内面整形は突きノミで丁寧に整形されているが、内側底部の突きノミ跡は摩耗しているように見える。上縁部平面は3/4ほどが破損しており、内外面とも鉄サビが付着する。	
第10598 PL.65	31 石造品 不明	45区竈丸 一部欠損	長 (55.8) 幅 30	厚 15.4 重 4360.0	滑結凝灰岩	厚板材(厚さ15cm)の両端を片斬状に切り込む。切り込み中央付近に凹部があるほか、側面にもホヱ穴(長さ3.3cm)がある。左右の側面や断面には刻み込まないノミが侵入しているが、表面のみ摩耗して突きノミ痕は不明。同型の厚板材を組み合わせ使用したのであろう。産地の、より良質ということであるが、産出地は不明。	
第10698 PL.65	32 切片石器 石鏃	48区竈丸 宛形	長 15.4 幅 6.2	厚 3.0 重 513.8	ホルンフェルス	無縁はハ字状に開き、刃部は直刃状である。無縁加工は右辺側面(往打面側)の加工量が多く、左辺側は形状を整える程度。刃部は表裏面とも加工され、両刃縁を呈す。刃部厚は部分的であり、使用頻度は低い。幅広切片を横切りに用いる。	

第5表 金属製品・金属器観察表

種 別 No.	種 類 器 種	出土位置 現 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第10698 PL.66	33 鉄貨 古銭永通寶	30区裏込め 宛形	径 2.35 孔 0.62	厚 0.11 重 2.7		面、背ともに彫が深々。文字、輪、郭は明瞭。一部磨損が見られる。背の郭の孔がやや右下にずれる。	径=外径
第10698 PL.66	34 鉄貨 新貨永通寶	31区水路上層 一部欠損	径 2.53 孔 0.62	厚 0.13 重 2.8		全面に劣化が見られ、文字はかなり判読しづらい。	径=外径
第10698 PL.66	35 鉄貨 新貨永通寶	4区水路上層 宛形	径 2.43 孔 0.65	厚 0.11 重 2.5		面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。一部磨損に傷が見られる。	径=外径
第10698 PL.66	36 鉄貨 新貨永通寶	30区裏込め 宛形	径 2.37 孔 0.63	厚 0.1 重 2.2		面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く不明瞭。	径=外径
第10698 PL.66	37 鉄貨 新貨永通寶	11区裏込め 宛形	径 2.33 孔 0.62	厚 0.12 重 2.2		面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背側の輪、郭がやや右下に寄る。	径=外径
第10698 PL.66	38 鉄貨 新貨永通寶	11区水路上層 宛形	径 2.39 孔 0.61	厚 0.12 重 2.4		面の文字、輪、郭は明瞭。背はやや彫が浅い。	径=外径
第10698 PL.66	39 鉄貨 新貨永通寶	4区裏込め 宛形	径 2.28 孔 0.61	厚 0.12 重 2.2		面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く、一部磨損まみが見られる。	径=外径
第10698 PL.66	40 鉄貨 新貨永通寶	22区水路上層 宛形	径 2.64 孔 0.64	厚 0.13 重 1.9		面の文字、輪、郭は明瞭。背は全体的に不明瞭。	径=外径
第10698 PL.66	41 鉄貨 新貨永通寶	24区水路上層 破片	径 2.46 孔 -	厚 0.18 重 2.0		劣化によりほとんど判読できない。わずかに「寶」のみ確認できた。	径=外径
第10698 PL.66	42 鉄貨 新貨永通寶	21区水路上層 一部欠損	径 2.36 孔 0.48	厚 0.29 重 1.5		全面が劣化して赤みも見られる。中に方形孔が開いているが、蓋が欲しい。	径=外径
第10698 PL.66	43 鉄貨 新貨永通寶	11区水路上層 1/2	径 (2.25) 孔 0.67	厚 0.13 重 1.2		やや小型。中心に方形の孔が開いている。銭文は不鮮明。	径=外径
第10798 PL.66	44 鉄貨 新貨永通寶	11区裏込め 宛形	径 2.75 孔 0.61	厚 0.15 重 4.8		四文銭。11段。文字、輪、郭は明瞭。	径=外径
第10798 PL.66	45 鉄貨 文久永寶	5区水路上層 宛形	径 2.71 孔 0.72	厚 0.15 重 2.3		草文。面、背ともに劣化が見られるが、ほぼ明瞭。全体がゆがんでいて。	径=外径
第10798 PL.66	46 鉄貨 文久永寶	22区水路上層 宛形	径 2.73 孔 0.66	厚 0.18 重 1.9		真文か。面が劣化して文字が見えづらい。	径=外径
第10798 PL.66	47 鉄貨 文久永寶	22区水路上層 宛形	径 2.64 孔 0.64	厚 0.14 重 2.4		略定。全体に劣化が見られるが文字、輪、郭は明瞭。	径=外径
第10798 PL.66	48 鉄貨 文久永寶	13区竈丸 はばき形	径 2.74 孔 0.54	厚 0.12 重 2.2		背に波は見られるが不明。面、背ともに文字、輪、郭は不明瞭。	径=外径
第10798 PL.66	49 鉄貨 明治以前	21区水路上層 一部欠損	径 3.07 孔 -	厚 0.35 重 3.5		全体が錆に覆われ、劣化しており詳細不明。全体に銅錆が見られる。孔は劣化が激しく形状が分からない状態。	径=外径
第10798 PL.67	50 鉄貨 天保通寶	22区水路上層 宛形	長 4.9 幅 3.31	厚 0.27 重 17.0		背はやや不明瞭。面は明瞭。孔0.57cm。	
第10798 PL.67	51 鉄貨 平銭銅貨	7区裏込め 宛形	径 2.19 幅 2.7	厚 0.12 重 2.7		発行年は不明瞭だが「十」の字は確認できる。明治18(1885)年か。一部文字は判読できるが、ほとんど不明瞭。	径=外径
第10798 PL.67	52 鉄貨 平銭銅貨	7区水路上層 宛形	径 2.2 幅 3.2	厚 0.12 重 3.2		明治10(1877)年代発行。一部銅の足跡が残存する。	径=外径
第10798 PL.67	53 鉄貨 平銭銅貨	7区裏込め 一部欠損	径 2.2 幅 2.8	厚 0.12 重 2.8		下部に半円状の欠けが見られる。人為的な欠損の可能性もある。文字の多くは劣化して判読できない。	径=外径

遺物観察表

種 別 PL No.	No.	種 類 器 種	出土位置 発 見 者	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第10798 PL-67	54	銭貨 平銭副貨か	7区東込め 24区水路下層 完形	径 2.2 厚 0.11 重 2.8		全体が劣化し顔面も発行年も判読できないが、大ききから平銭副貨とみられる。	径=外径
第10898 PL-67	55	銭貨 一銭副貨	19区水路下層 完形	径 2.78 厚 0.16 重 6.4		明治10(1877)年代であることは確認できた。一部劣化が激しい。	径=外径
第10898 PL-67	56	銭貨 一銭副貨	19区水路下層 完形	径 2.77 厚 0.14 重 4.9		全体が劣化で判読できない、わずかに龍が見えるが、龍銭副貨とすると明治6(1873)年～明治21年(1888)発行か。	径=外径
第10898 PL-67	57	銭貨 一銭副貨	7区水路下層 完形	径 2.78 厚 0.14 重 5.3		わずかに縁の周辺と「錢」の文字、龍の顔筋が確認できるが、その他は劣化により不明瞭。	径=外径
第10898 PL-67	58	銭貨 一銭副貨か	21区水路下層 完形	径 2.78 厚 0.15 重 5.5		全体が劣化し、文字が確認できない、大ききから一銭とみられる。	径=外径
第10898 PL-67	59	銭貨 一銭副貨	33区水路下層 完形	径 2.76 厚 0.16 重 5.9		表面は劣化し、ほとんど確認できない、明治31(1898)年～大正4(1915)年発行。	径=外径
第10898 PL-67	60	銭貨 一銭副貨	19区水路下層 ほぼ完形	径 2.29 厚 0.12 重 2.8		大正10(1921)年発行、やや劣化が見られるが、判読可能。	径=外径
第10898 PL-67	61	銭貨 一銭副貨	21区水路下層 完形	径 2.27 厚 0.12 重 2.8		大正11(1922)年発行。	径=外径
第10898 PL-67	62	銭貨 一銭副貨	19区水路下層 完形	径 2.29 厚 0.15 重 3.4		金色の光沢が確認できる。大正12(1923)年発行。	径=外径
第10898 PL-67	63	銭貨 一銭副貨	32区東込め 完形	径 2.33 厚 0.13 重 3.7		大正12(1923)年発行か。首は劣化が激しく、面も発行年が一部判読できない。	径=外径
第10898 PL-67	64	銭貨 一銭副貨	30区水路上層 完形	径 2.32 厚 0.15 重 3.6		欄草は確認できるが、発行年は確認できない。	径=外径
第10898 PL-67	65	銭貨 一銭副貨	21区水路下層 一部欠損	径 2.27 厚 0.13 重 2.2		全体が劣化して文字等が確認できない、わずかに中心部に二重丸が見える。	径=外径
第10898 PL-67	66	銭貨 一銭副貨	22区水路上層 一部欠損	径 2.3 厚 0.2 重 2.5		表面が劣化し、詳細不明。大ききから一銭副貨か。	径=外径
第10998 PL-68	67	銭貨 一銭副貨	7区水路下層 完形	径 3.18 厚 0.22 重 1.28		発行年不明、顔面のある裏側は明瞭だが、年号等の裏側はほぼ不明瞭。	径=外径
第10998 PL-68	68	銭貨 一銭副貨	7区水路下層 完形	径 3.17 厚 0.24 重 11.2		明治14(1881)年発行、顔面はろうじて確認できる。	径=外径
第10998 PL-68	69	銭貨 縮五銭白銅貨	24区水路下層 完形	径 2.06 厚 0.18 重 3.6		明治22(1889)年発行、全体が劣化しているが、ろうじて文字は確認できる。	径=外径
第10998 PL-68	70	銭貨 縮五銭白銅貨	26区水路下層 完形	径 2.04 厚 0.16 重 3.1		全体が劣化する。発行年は確認できないが、明治30(1897)年～明治38(1905)年に発行される。	径=外径
第10998 PL-68	71	小銭 五銭白銅貨	26区水路下層 完形	径 1.86 厚 0.1 重 1.5		大正9(1920)年発行と判断できる。全体が劣化しており図柄は不明。	径=外径
第10998 PL-68	72	小銭 五銭白銅貨	24区水路下層 完形	径 1.92 厚 0.16 重 2.5		大正10(1921)年発行、全体が劣化しているが、一部判読可能。	径=外径
第10998 PL-68	73	小銭 五銭白銅貨	2区水路下層 完形	径 1.89 厚 0.12 重 2.0		大正12(1923)年発行、裏の年号等は見えるが、表はやや不明瞭。	径=外径
第10998 PL-68	74	小銭 十銭白銅貨	22区水路下層 完形	径 2.22 厚 0.15 重 3.1		大正9(1920)年発行、ほぼ劣化により見えなくなっている。発行年は不明瞭。	径=外径
第10998 PL-68	75	銅製品 煙管(煙首)	7区水路下層 一部欠損	長 3.2 幅 1.7 重 8.2		火皿の一部が欠損している。肩を持ち、首は短く羅字の一部が残存する。つなぎ目から内側に見ると確認できる。羅字の厚さは不明。	
第10998 PL-68	76	銅製品 煙管(煙首)	28区水路下層 完形	長 (4.7) 径 1.0 高 7.9		欠損部からわずかに曲がっているため、首首とみられる。つなぎ目は明瞭で内部に羅字が残存する。	
第10998 PL-68	77	銅製品 煙管(吸口)	30区水路上層 完形	長 7.4 径 1.05 重 13.0		わずかに内部に羅字の面跡が確認できる。つなぎ目は明瞭で、口付部がやや広がり厚くなる。	
第10998 PL-68	78	銅製品 煙管(吸口)	31区水路上層 完形	長 9.9 径 1.0 重 14.0		羅字が内部に厚さ1mmほどで残存。つなぎ目は明瞭。	
第10998 PL-68	79	銅製品 煙管(吸口)	24区水路下層 一部欠損	径 6.3 厚 1.0 重 5.6		口付がつぶれている。羅字が内部に残存。つなぎ目は不明瞭。全体的に弧を曲ぐが圧圧によるものか、本来の作りか不明。	
第11098 PL-68	80	銅製品 皮加工具	10区水路下層 一部	長 13.85 幅 0.32 重 0.6	0.1~ 0.35 重 8.5	宝珠状の上部部を持ち、中心部は平らになり、中央に直徑2mmの穴があく。下部部は断面形状が丸く、先端は尖る。	皮加工用コンパスの一部か
第11098 PL-68	81	銅製品 ピン	24区東込め 完形	径 7.52 厚 0.36~ 0.68 重 5.3		アメリカピン。幅0.38m、厚さ0.19の扁平な針金状の銅線を180°折り曲げ片方の先端を上方向にそらせている。	

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				縦	厚			
第11085 PL.68	85	神製品 茶托	11区裏込め 一部欠損	縦 7.3 横 11.4	厚 0.1 重 26.6		中央に神社樓門と回廊、上部に「明」の文字が残り、下部に「参拝記念」との銘がプレスされている。明治神宮の参拝記念と思われ、明治神宮の創建の大正9（1920）年以降のもの。	
第11085 PL.68	84	金属製品 ボスト板板	22区水路下層 一部腐食	縦 6.8 横 (14.0)	厚 0.8 重 195.5		英語で「P05」、日本語で右から「郵便」と書かれている金属製の板。文字は打ち出しではなく、鋳型による製作か。	
第11085 PL.68	84	神製品 部札	30区裏込め 一部欠損	縦 (4.2) 横 (3.1)	厚 0.12 重 5.2		「欄生欄内」と鋳造。下部に穿孔あり。裏札とみられる。	
第11085 PL.68	85	神製品 ボタン	21区水路下層 一部欠損	縦 2.03	厚 0.32 重 1.2		表面に板の刻印があるボタン。裏側は足がつぶされている。	径≠外径

第6表 陶磁器・ガラス製品類観察表

陶磁器

計測値 □=口径、底=底径、高=器高

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				縦	厚				
第11185 PL.69	86	製作地不詳陶器 碗ミニチュア	13区水路下層 完形	口径 1.1 高 1.5		白	きのこ状を呈し、上面に緑色の鉄釉。下面は無釉。	江戸・近代	
第11185 PL.69	87	輸入系上器か 土製品	26区水路下層 完形	長 5.5 幅 3.0	厚 0.8		楕	片面のみで裏面は平坦。何を模ったものか不明。面模か。	江戸・近代
第11185 PL.69	88	製作地不詳陶器 碗ミニチュア	21区水路下層 完形	口 2.4	高 0.7		灰白	外面に緑色釉。上面が菊状の陽刻文。下面無釉。	
第11185 PL.69	89	製作地不詳陶器 碗ミニチュア	24区水路下層 完形	口 2.1 底 0.9	高 1.5		白	外面に金泥が僅かに残る碗ミニチュア。高台以下無釉。型作り。	
第11185 PL.69	90	製作地不詳陶器 碗ミニチュア	24区模乱 完形	口 4.0 底 1.7	高 1.8		灰白	外面は銅板転写による染付。口縁部外反。器壁厚肉。	
第11185 PL.69	91	製作地不詳陶器 土瓶ミニチュア	24区 注ぎ口欠	口 2.5 底 2.5	高 3.0		灰白	上下の型作りで無釉。釣り手孔は穿孔する。踏込み成形である。	
第11185 PL.69	92	製作地不詳陶器 豆皿	33区水路下層 ほぼ完形	長 3.4	厚 0.9		灰白	中央無釉で水鳥を陽刻。側り帯を陰刻で表現。表裏の型作り。	
第11185 PL.69	93	輸入系上器か 足面子	13区水路下層 完形	口 1.1	厚 0.6		楕	美人胸を陰刻する面模か。	
第11185 PL.69	94	輸入系上器か 人形	27区水路下層 完形、頭部欠	幅 1.5	高 -		楕	頭部や左腕欠損。詳細不明。	幅=底幅
第11185 PL.69	95	製作地不詳陶器 人形	22区水路下層 頭部欠	幅 2.0	高 -		白	踏込み成形で無釉。内側外側にピンクの着色残る。	幅=底幅
第11185 PL.69	96	製作地不詳陶器 人形(犬)	13区模乱 完形	幅 4.7 厚 2.9	高 3.9		白	親子の犬。型作りの上絵磁器。赤に着色する。下面は無釉で丸出し。1カ所。	
第11185 PL.69	97	製作地不詳陶器 人形(猫)	24区水路下層 3/4	幅 5.3 厚 2.9	高 9.5		白	ウインクをした猫の人形。踏込み成形で輪下彫。内面は無釉。	
第11185 PL.69	98	製作地不詳陶器 壺か	21区 不明	幅 6.7 厚 3.3	高 3.5		白	踏込み成形で外面に透明釉。上面の内形取りは無釉で着色。内側面は上塗か。	
第11185 PL.69	99	製作地不詳陶器 鳥形水筒	33区 吹き口欠	口 3.3 底 1.9	高 5.4		白	輪下彫のバードホイッスル。羽の後部右に「意匠百橋」。左にスローボーンテッド・スター状のマーク。	
第11285 PL.69	100	肥前磁器か 小杯	33区水路下層 口縁部1/2欠	口 4.8 底 2.9	高 3.3		灰白	高台端部無釉。	江戸時代
第11285 PL.69	101	肥前磁器 小杯	22区 1/2	口 (6.6) 底 (2.5)	高 3.0		灰白	口縁部外面に書文。	江戸時代
第11285 PL.69	102	肥前磁器 小丸碗	21区 1/3	口 (8.4) 底 (3.3)	高 4.7		灰白	外面平帯文の染付。口縁部内面2重圈線。見込み1重圈線。	江戸時代
第11285 PL.69	103	肥前磁器か 小丸碗	21区裏込め 口縁部一部、体 部1/3	口 (7.8)	高 -		灰白	やや焼成不良。外面に菊花文の染付。	江戸時代
第11285 PL.69	104	肥前磁器 小丸碗	26区水路下層 一部	口 4.8 底 3.6	高 -		灰白	外面縁線内に不明文様。見込み1重圈線内に簡略化した五弁花の染付。輪口周し焼成不良。	江戸時代
第11285 PL.69	105	肥前磁器 小碗	2区水路下層 1/2	口 (6.2) 底 2.0	高 3.1		灰白	残存部無文。	江戸時代
第11285 PL.69	106	肥前磁器 小碗	4区裏込め 口縁部1/8、底部 1/2	口 (6.8) 底 2.8	高 3.2		灰白	残存部無文。	江戸時代
第11285 PL.69	107	瀬戸・美濃磁器 小碗	22区裏込め 1/2	口 (6.6) 底 (2.8)	高 4.2		灰白	外面に唐格文の染付。口縁部内面2重圈線。	江戸時代
第11285 PL.69	108	肥前磁器 小碗	38区裏込め 底部1/2	口 3.1	高 -		灰白	貫入入る。体部外面に一部染付残る。	江戸時代
第11285 PL.69	109	肥前磁器 小碗	3区水路下層 1/4	口 (8.0)	高 -		灰白	残存部無文。	江戸時代か
第11285 PL.69	110	肥前磁器 湯洗碗	11区 口縁部一部、底 部1/3	口 (7.8) 底 (3.0)	高 5.0		白	外面、むしろみじ人唐草文か。口縁部内面の染付はにじみにより文様不明。見込み2重圈線内に三友。	江戸時代
第11285 PL.69	111	肥前磁器 丸碗	10区裏込め 口縁部1/4、底部 1/2	口 (8.2) 底 (3.4)	高 5.3		灰白	外面1カ所に草花文?の染付。見込み文様は不明。	江戸時代
第11285 PL.69	112	肥前磁器 丸碗	12区裏込め 口縁部一部、底 部2/3	口 (7.8) 底 3.4	高 5.0		灰白	内外面染付。	江戸時代

遺物観察表

種 別 PL No.	種 類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成色/調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第11298 113	肥前磁器	21区裏込め 1/4	口 底	(8.7) (3.0)	高 5.2	白	内外面身の染付。	江戸時代
第11298 114	肥前磁器	22区水路下層 1/5	口 底	(7.7) -	高 -	灰白	外面に貝の染付、貫入入る。	江戸時代
第11298 115	肥前磁器	26区水路下層 体部一部、底部 2/3	口 底	- 3.4	高 -	白	外面幾何学文内に植物文の染付、口縁部内に團扇。 見込み2重團扇内に五弁花。	江戸時代
第11298 116	肥前磁器 青磁染付筒形碗	26区 上下1/2	口 底	- 3.2	高 -	灰白	外面高台端部を除き青磁釉。見込み2重團扇内にコ ニヤク印刷による五弁花。内面透明釉。	江戸時代
第11298 117	肥前磁器	23区裏込め 1/8	口 底	(7.4) (4.5)	高 6.0	灰白	外面空くし文か、口縁部内面雷文帯。	江戸時代
第11298 118	製作地不詳磁器	21区水路下層 1/2	口 底	(6.8) -	高 -	白	外面細掛きによる輪飾の染付。	江戸時代
第11298 119	肥前磁器 青磁染付筒形碗	25区裏込め 1/5	口 底	(6.3) -	高 -	灰白	やや小型の碗。外面青磁釉、口縁部内面磨化した四 方陣文。見込み1重團扇。	江戸時代
第11298 120	肥前磁器	25区裏込め 筒形碗	口 底	(6.9) -	高 -	灰白	外面片折状と平菊文の染付。高台盤1条の團扇、口 縁部内面2条、見込み1条の團扇。	江戸時代
第11298 PL.69 121	肥前磁器	13区水路下層 底部1/4	口 底	- 3.3	高 -	灰白	割壁や厚い、体部外面と高台筒染付。見込み1重 團扇内にコニヤク印刷による五弁花。	江戸時代
第11298 122	肥前磁器	21区裏込め 筒形碗	口 底	- (3.5)	高 -	灰白	焼成不良、貫入入る。外面染付。見込み1重團扇 に磨化した五弁花。	江戸時代
第11298 123	肥前磁器	22区水路下層 口縁部1/4、底部 筒形碗	口 底	- 3.7	高 -	灰白	青磁染付、体部外面から高台外面に青磁釉。見込み 2重團扇内に五弁花。高台内2重角内に鏡か？生地の凹 凸により不透明。	江戸時代
第11298 124	瀬戸・美濃陶器 煎碗	26区水路下層 1/6	口 底	(7.8) (3.9)	高 5.5	靑灰	体部外面下の筒形施文具による霞文。内面から口縁 部外面鉄釉、高台端部を除く体部外面から高台内鉄化 釉。	江戸時代
第11298 PL.69 125	瀬戸・美濃陶器	13区	口 底	(10.8) -	高 -	灰白	体部を外面からの押圧により窪ませる。内外面に鉄 輪軸輪、部分的に長石軸かける。	江戸時代
第11398 PL.69 126	肥前磁器 小碗	30区裏込め 1/3	口 底	(6.9) (3.8)	高 5.0	白	外面植物文の染付、口縁部内面雷文帯。呉須の色は濃 い。	江戸・近代
第11398 127	肥前磁器か 小碗	13区 口縁部一部、底 部欠	口 底	(8.2) 3.1	高 4.4	白	外面と口縁部面に染付。	江戸・近代
第11398 128	肥前磁器	30区水路下層 1/3	口 底	(7.0) -	高 -	灰白	外面に「織扇山月歌」を染め付けける。口縁部内面2重 團扇。	江戸・近代
第11398 129	瀬戸・美濃陶器 か 小碗	7区水路下層 1/4	口 底	(9.0) -	高 -	白	口縁部端反り、内外面染付。	江戸・近代
第11398 130	瀬戸・美濃陶器	22区水路下層 体部以下2/3	口 底	- 3.0	高 -	白	内外面磨化した文様の染付。	江戸・近代
第11398 131	肥前磁器 碗	7区 1/3	口 底	(8.0) -	高 -	白	外面に「題義公禪房」の漢詩とその風景の染付。内面は 無文。	江戸・近代
第11398 132	瀬戸・美濃陶器	30区裏込め 底部1/2	口 底	- 3.9	高 -	白	外面磨化したした染付。高台内模範時の記号か符丁あり 。	焼継 江戸・近代
第11398 PL.69 133	瀬戸・美濃陶器 か 筒形碗	10区水路下層 口縁部一部、底 部1/2	口 底	(7.8) 3.7	高 4.9	灰白	外面松葉と梅鉢、幾何学文様の染付。高台内不明路、内 面無文。	江戸・近代
第11398 PL.69 134	瀬戸・美濃陶器 か 小杯	25区水路下層 口縁部1/2、底部 欠	口 底	(5.9) (2.2)	高 4.4	白	外面に草花と時々の染付。入造呉須を使用。体部下 面取り。	
第11398 PL.69 135	製作地不詳磁器 小杯	13区裏込め 口縁部1/2欠	口 底	(6.2) 2.6	高 4.1	白	外面入造呉須による染付。高台内不明路。	
第11398 PL.69 136	製作地不詳磁器 小杯	45区裏込め 1/2	口 底	(6.4) 3.3	高 4.1	灰白	体部外面面取り。外面翻板転写によるオリブ褐色の 宝珠くし文。	
第11398 PL.69 137	瀬戸・美濃陶器 か 小杯	11区水路下層 一部欠	口 底	7.2 3.6	高 3.9	白	外面翻板転写による鳳凰と龍の染付。内面無文。高台 内1重團扇内口内「富」製銘。	
第11398 PL.69 138	製作地不詳磁器 小碗	7区	口 底	(7.5) (3.0)	高 4.6	白	外面に磨化した若松文の輪下彩。幹と輪飾。地面は にふい、黄褐色絵具、葉と文字は入造呉須を使用。体部 内に「查屋」字。高台内に「松泉」字銘。	
第11398 PL.69 139	瀬戸・美濃陶器 小碗	27区水路下層 1/2	口 底	(7.6) (3.0)	高 3.2	白	内外面に「わゆるなす文」の染付。入造呉須を使用。	
第11398 PL.69 140	瀬戸・美濃陶器 小碗	7区 1/3	口 底	(8.2) (3.4)	高 4.7	白	外面翻板転写による輪下彩。松は黒絵具、月はにふい 赤褐色。	
第11398 PL.69 141	瀬戸・美濃陶器 か 小碗	24区水路下層 1/2	口 底	(7.9) (3.8)	高 4.8	白	体部外面下中に桜花文の模範。口縁部幅広の呉須塗 り。体部中心と高台外面に緑色の團扇、輪下彩。	
第11398 142	瀬戸・美濃陶器	39区裏込め 口縁部一部、底 部1/2	口 底	(8.1) 4.0	高 4.6	灰白	口縁、外面翻板転写による染付。高台内1重團扇内に 不明路。	二次受焼
第11398 PL.69 143	製作地不詳磁器 小碗	45区裏込め 一部欠	口 底	8.3 3.2	高 4.7	白	外面に山水文の染付。高台内1重團扇内に「万壽」銘。 入造呉須を使用。	

遺物観察表

種 別 PL No.	No.	種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第11398 PL.70	144	製作地不評磁器 染	25区水路下層 1/2	□ 底 (8.0) 底 (3.6)	高 4.7 白	外面二方に簡略化した手描き染付。人造呉須を使用。内面無文。	
第11398 PL.69	145	瀬戸・美濃磁器 か 染	20区水路下層 口縁部1/3, 底部 1/4	□ 底 (8.1) 底 (3.2)	高 4.8 白	口縁部外面の滔文帯ゴム印判。他人造呉須による手描き染付。内面無文。	
第11398 PL.70	146	瀬戸・美濃磁器 青磁染付陶 器	21区水路下層 1/2	□ 底 (8.5) 底 (3.5)	高 5.2 白	外面人造呉須による染付。高台端部を除き青磁輪に近い輪。	
第11398 PL.70	147	瀬戸・美濃磁器 青磁染付陶 器	13区裏込め 口縁部1/4, 底部 1/4	□ 底 (8.6) 底 3.4	高 4.5 白	外面と高台内人造呉須による染付。内面無文。高台端部を除きクローム青磁輪。	
第11398 PL.70	148	製作地不評磁器 染	24区 1/4	□ 底 (8.5) 底 3.0	高 5.3 白	外面線描きによる染付。高台内1重圈線。高台端部外面面取り。	
第11398	149	製作地不評磁器 染	20区水路下層 底部2/3	□ 底 - 底 (3.1)	高 - 白	体部外面輪下彩。高台輪から高台内薄い武直風の輪。高台端部無輪。内面は無文。高台輪楕円内に「松風」字。見込み放射状線。外面直線の染付。人造呉須を使用。	
第11498 PL.70	151	製作地不評磁器 湯飲み	22区水路下層 一部欠	□ 底 7.6 底 3.0	高 5.0 明緑灰	高台端部を除き透明輪。	
第11498 PL.70	152	製作地不評磁器 湯飲み	28区 1/2	□ 底 (7.1) 底 3.1	高 5.1 白	外面に吹き絵と線描きによる輪下彩。高台端部のみ無輪。	
第11498 PL.70	153	製作地不評磁器 湯飲み	22区 完形	□ 底 7.4 底 3.0	高 5.2 白	外面に染付。高台内1重圈線。	
第11498 PL.70	154	製作地不評磁器 湯飲み	22区 完形	□ 底 7.5 底 3.0	高 5.2 明緑灰	高台端部を除き透明輪。	
第11498	155	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	22区裏込め 口縁部1/2	□ 底 (7.8) 底 -	高 - 白	外面に松葉文と「福寿」字文を人造呉須により染付。	
第11498 PL.70	156	瀬戸・美濃磁器 湯飲み	30区水路下層 1/2	□ 底 (7.8) 底 (3.9)	高 4.2 灰白白	外面銅板転写による草花文。高台内1重圈線。人造呉須を使用。	
第11498	157	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	30区水路下層 1/4	□ 底 (8.0) 底 (4.0)	高 4.5 白	外面ゴム印判による染付。内面無文。	
第11498	158	製作地不評磁器 湯飲み	10区水路下層 口縁部1/4, 底部 一部	□ 底 (7.8) 底 (2.2)	高 4.7 明緑灰	生地も明緑灰色。高台外面面取り。高台端部を除き透明輪。	
第11498	159	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	22区水路下層 口縁部一部, 底部 完	□ 底 (8.0) 底 3.0	高 4.7 白	外面人造呉須による染付。高台内1重圈線。	
第11498 PL.70	160	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	31区水路下層 1/2	□ 底 (8.6) 底 4.0	高 4.5 白	外面に幅広の縦線と花文。高台内1重圈線。	
第11498 PL.70	161	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	30区水路下層 1/3	□ 底 (8.0) 底 4.3	高 4.5 白	外面銅板転写による染付。高台内銅板転写による2重角内に「福」字文。	
第11498 PL.70	162	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	22区水路下層 1/2	□ 底 (8.5) 底 3.0	高 3.8 白	内外人造呉須による圈線。	
第11498	163	製作地不評陶器 湯飲み	12区水路下層 口縁部一部, 底部 完	□ 底 (6.4) 底 3.1	高 5.8 灰白	外面黒色絵具による輪下彩。高台端部を除き透明輪。貫入入る。	
第11498	164	製作地不評磁器 湯飲み	24区水路下層 口縁部から体部 一部	□ 底 (6.2) 底 -	高 - 白	外面ゴム印判による幾何学文で梅花の白抜き。人造呉須を使用。	
第11498	165	製作地不評陶器 湯飲み	1区水路下層 体部以下	□ 底 - 底 (2.8)	高 - 灰白	外面人造呉須と鉄絵具による輪下彩。高台内「玉松」字線。高台端部を除き透明輪。貫入入る。	
第11498 PL.70	166	製作地不評磁器 湯飲み	9区水路下層 口縁部1/2欠	□ 底 (5.5) 底 3.9	高 6.9 白	外面金液の圈線。上部圈線下にシタ状文の上縁。左半に灰赤色が残るが右半の上縁具は剥落。口縁部内面金液の1重圈線。	上縁一部硝 色
第11498	167	製作地不評磁器 湯飲み	4区裏込め 口縁部一部, 底部 1/2	□ 底 (6.0) 底 (3.4)	高 5.6 白	体部外面面取り。外面に山水文染付。	
第11498 PL.70	168	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲み	27区 口縁部1/2欠	□ 底 (5.0) 底 (3.5)	高 5.9 白	外面銅板転写による輪下彩。鳥とモミジ主要部は緑色。モミジの一部は淡赤褐色。高台内 梅林。上縁。	
第11498 PL.70	169	製作地不評磁器 湯飲み	40区水路下層 完形	□ 底 5.6 底 3.8	高 6.6 白	上縁。赤の上縁具が残るが、他は剥落。	上縁一部硝 色
第11498 PL.70	170	瀬戸・美濃磁器 湯飲み	30区水路下層 口縁部1/5, 底部 1/4	□ 底 (5.9) 底 4.0	高 6.7 白	外面銅板転写により、慶務文、宝篋くし文、青海波文等を染め付ける。高台内1重圈線。人造呉須を使用。	
第11498 PL.70	171	製作地不評磁器 湯飲み	25区水路下層 口縁部1/3欠	□ 底 (6.0) 底 (3.2)	高 6.6 白	外面黒色絵具によるゴム印判輪下彩。内面無文。	
第11498 PL.70	172	九谷磁器 湯飲み	24区 一部欠	□ 底 6.2 底 3.8	高 6.5 灰白	内面の一方に漢詩？を黒絵具で上縁付け。口縁部から体部外面灰オリーブ色地上に白盛り後、透明輪。その後赤絵具で列点文の上縁。高台内の方形枠内に「九谷」路。	

遺物観察表

種 別 No.	種 類	出土位置 保存 場所	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材	成形・整形の特徴	備 考	
第11498 PL.70	173	製作地不詳磁器 17区水路下層 1/2	口 (6.2) 高 7.0 底 (3.5)	白	残存部無文で白磁か。高台端部外面取付状をなし、 縦い状態になる。		
第11498 PL.70	174	製作地不詳磁器 湯飲み	11区 2/3	口 6.3 高 7.1 底 3.3	白	外面一方に吹き絵による竹と月の輪下彩。竹は人造引 須で月は赤黄色絵具。高台端部外面は面取り。面取り 部に縦い凹線。	
第11498 PL.70	175	製作地不詳磁器 湯飲み	22区水路下層 1/5, 底部完	口 (7.4) 高 7.2 底 3.8	白	外面唐草文染付。高台内「菱」跡。	
第11498 PL.70	176	製作地不詳磁器 湯飲み	24区 1/3	口 (6.3) 高 7.3 底 (4.0)	白	残存部無文。白磁か。高台端部外面小さい段差。高台端 部無縁。	
第11498 PL.70	177	製作地不詳磁器 湯飲み	24区水路下層 1/4	口 (6.9) 高 7.0 底 (4.8)	白	内面から口縁部外面に暗赤色輪。高台端部外面小さい 段。高台端部外面から高台内無縁。	
第11498 PL.70	178	製作地不詳磁器 湯飲み	24区水路下層 1/3	口 (6.5) 高 7.5 底 (3.8)	白	外面梅樹の染付。内面無文。	
第11498 PL.70	179	製作地不詳磁器 湯飲みか	15区 1/2	口 6.6 高 10.2 底 4.0	白	外面と高台内に赤褐色輪。内面は透明輪。高台端部無 縁。口縁部外面は輪を掻き取った後黄色と黒色で施 文。	
第11498 PL.70	180	製作地不詳磁器 湯飲み蓋か	22区水路下層 1/2	口 5.5 高 2.0 底 0.8	白	天井部外面に黄色、赤、酒醒れで不明の2色か3色で 上絵付け。受部先端は無縁。	上絵着色
第11498 PL.70	181	相馬陶器 湯飲み	19区水路下層 完形	口 5.6 高 5.9 底 3.5	灰～褐	内面から口縁部外面貫入の入る鉄輪。体部外面は黄 緑で流水、砂目状小穴で岸を表現か。体部外面以下鉄 灰。	
第11498 PL.70	182	大塚相馬陶器か 湯飲み	21区裏込め 1/4	口 - 高 - 底 (3.8)	灰オリーブ	灰輪厚めに施輪。貫入に墨を入れた。二重貫入。高台端 部褐色に発色。	
第11598 PL.70	183	製作地不詳磁器 蓋	23区水路下層 1/3	口 (5.4) 高 2.2 底 0.9	白	上面手摺き染付。口縁端部下面無縁。	江戸・近代
第11598 PL.70	184	製作地不詳磁器 急須蓋	40区水路下層 完形	口 6.1 高 1.5 底 1.6	灰白	上面に輪下彩で植物文を描く。つまみは鉄輪。側面か ら下面無縁。	
第11598 PL.70	185	製作地不詳磁器 急須蓋	23区裏込め 完形	口 6.4 高 2.4 底 1.4	白	天井部外面染付。小円孔 1カ所。受け部無縁。	
第11598 PL.70	186	製作地不詳陶器 急須蓋	12区水路下層 1/2	口 (7.0) 高 2.3 底 1.5	黄緑	つまみとつまみ両側緑輪。口縁部内面と天井部透明 輪。口縁部下面無縁。天井部に小円孔 1カ所。	
第11598 PL.70	187	製作地不詳陶器 急須蓋か	22区 1/2	口 7.0 高 1.4 底 3.3	橙	つまみから口縁部上面黄褐色輪。下面中央部糸状 調整。	
第11598 PL.70	188	製作地不詳陶器 上蓋蓋か	11区 口縁一部欠	口 - 高 2.2 底 8.8	明渡褐	亀を焼ったつまみ。つまみは鉄輪。外面に赤、黄褐色 で透明に近い輪を施輪。天井部小円孔 1カ所。	
第11598 PL.70	189	蓋子・空間陶器 一部欠	22区 一部欠	口 (11.0) 高 3.5 底 2.4	橙	天井部に小円孔 1カ所。外面白化粧後に人造引須で染 付。外面のみ透明輪。	
第11598 PL.70	190	製作地不詳磁器 急須	32区水路下層 1/2	口 6.6 高 7.9 底 7.0	白	体部複数箇所縦長に窪ませる。外面人造引須による手 摺き染付。底部外面付丁の遺存。	
第11598 PL.70	191	方古陶器か 急須	22区 一部欠	口 8.0 高 9.1 底 8.0	灰白	内面と体部外面透明輪。外面黄色、黄赤、橙色の下絵 輪。底部外面無縁で発熱煎あり。	
第11598 PL.71	192	製作地不詳磁器 蓋	13区水路下層 1/2	口 (5.6) 高 3.1 底 (1.9)	白	外面に桜の染付。外面の一部に茶色の下絵が残る。	
第11598 PL.71	193	製作地不詳磁器 蓋	12区水路下層 口縁部1/2欠	口 6.0 高 2.9 底 2.7	灰白	柳枝手と称される彫型が深い彫形製成。高台外面に染 付。高台内不明路。	
第11598 PL.71	194	製作地不詳磁器 蓋	43区裏込め 杯部1/2, 底部完	口 (5.8) 高 2.7 底 2.2	白	内面上絵。高台外面染付。高台内不明路。	上絵着色
第11598 PL.71	195	製作地不詳磁器 蓋	13区水路下層 1/3	口 (6.3) 高 2.4 底 (2.8)	白	体部から口縁部は開く。高台端部は平円で内縁。残存 部無文。	
第11598 PL.71	196	瀬戸・美濃磁器 か蓋	30区水路下層 1/2	口 7.0 高 2.7 底 2.6	白	高台内無縁で懸架状に突出する。体部外面3本の懸輪 目状平行線。見込みに上絵による花文。上絵具はすべ て剥落。	上絵着色
第11598 PL.71	197	瀬戸・美濃磁器 か蓋	32区水路下層 1/3	口 7.4 高 2.8 底 2.0	白	内面に亀と松。外面にもみじを刷絵転写で染付。	
第11598 PL.71	198	瀬戸・美濃磁器 か蓋	10区水路下層 口縁部1/5, 底部完	口 (7.4) 高 2.9 底 3.0	白	内面の体部から底部にかけて桜の花一つを吹き墨で 描く。雄蕊はピンク色の輪下彩。	文様不鮮明
第11598 PL.71	199	瀬戸・美濃磁器 か蓋	4区 底部完	口 - 高 - 底 3.6	白	見込み波流と鳥文。高台内に横線ぎと同じ材料で記号 か文字を記す。	焼継
第11698 PL.200	200	瀬戸・美濃陶器 徳利	39区裏込め 底部	口 - 高 - 底 (8.0)	灰白～灰オリーブ	体部外面に鉄輪。内面と体部外面両面以下無縁。	江戸時代
第11698 PL.201	201	製作地不詳磁器 徳利	8区水路下層 口縁部	口 (2.8) 高 - 底 -	白	口縁部内面から外面に緑灰色の輪。	
第11698 PL.202	202	製作地不詳陶器 徳利	12区 口縁部	口 (4.8) 高 - 底 -	黄灰	口縁部は玉縁状。外面は青緑に白輪を流す。口縁部 から頸部内面は黄灰鉄輪のように白化した。頸部内面は 顔色の鉄輪。	
第11698 PL.203	203	製作地不詳磁器 徳利	29区水路下層 下半残存	口 - 高 - 底 (5.6)	灰白	外面に型紙刷りで鶴と雲を染付。内面と体部外面下層 以下無縁。	
第11698 PL.204	204	肥前磁器 拵口	28区 1/2	口 (7.3) 高 6.0 底 (5.2)	灰白	外面部文の染付。高台端部のみ無縁。貫入貫入があり、 やや焼成不良。	江戸時代 漆継ぎ
第11698 PL.205	205	製作地不詳磁器 拵口	22区裏込め 口縁部一部、底部 1/2	口 (6.2) 高 5.8 底 3.8	灰白	外面型紙刷りによる松と唐子文。体部外面下層以下無 縁。	

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第11698 PL.71	206	瀬戸・美濃磁器 磁器	14区 1/3	口 底 (6.8) (4.5)	高 5.7 白	外面刷板転写による矢羽根と桜の染付。蛇の目凹型高台。	
第11698 PL.71	207	製作地不詳磁器 磁器	29区水路下層 体部一部、底部 3/4	口 底 - (4.5)	高 - 灰白	外面人造呉須による矢羽根文染付。見込み不明文様。	
第11698 PL.71	208	製作地不詳磁器 磁器	30区水路下層 底	口 (6.8) 底 (4.2)	高 6.0	外面型紙刷りによるいむゆるみじん唐文。口縁部内面型紙刷りによる四方華文。見込み2重圏線内に不明文様。人造呉須を使用。	
第11698 PL.71	209	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	24区 水路1/2、底部 完	口 (8.0) 底 3.6	高 5.8 白	外面刷板転写による牡丹唐文の染付。口縁部内面刷板転写による唐文の染付。	
第11698 PL.71	210	肥前磁器か 瀬戸・美濃 磁器	21区水路下層 1/4	口 (9.5) 底 (3.4)	高 2.6 灰白	内外面に染付。つまみ1重圏線。	江戸時代
第11698 PL.71	211	肥前磁器 瀬戸・美濃 磁器	31区水路下層 1/2	口 (9.5) 底 4.2	高 2.8 白	内外面染付。つまみ1重圏線内に不明跡。	江戸時代
第11698 PL.71	212	肥前磁器 瀬戸・美濃 磁器	21区 口縁部1/4、天井 部1/2	口 (9.4) 底 (3.7)	高 3.0 白	内外面染付。つまみ内不明跡。	江戸時代
第11698 PL.71	213	肥前磁器 瀬戸・美濃 磁器	13区横丸 口縁部1/4、天井 部1/2	口 9.5 底 4.2	高 2.8 白	内外面素焼きによる染付。つまみ内「乾」字刷れ跡。	江戸時代
第11698 PL.71	214	肥前磁器 上京陶器	18区裏込め 1/4	口 (10.2) 底 (5.4)	高 2.8 白	天井部外面に黒と青海波文。つまみ内に千鳥の染付。口縁部内面2重圏線。天井部1重圏線内に不明文様。	江戸時代
第11698 PL.71	215	肥前磁器 上京陶器	11区水路下層 天井部	口 6.6 底 3.6	高 - 白	内外面素焼きによる染付。つまみ内1重圏線内に不明跡。	江戸時代
第11698 PL.71	216	肥前磁器 上京陶器	26区水路下層 小碗	口 (9.0) 底 (3.0)	高 4.8 灰白	内外面に染付。口縁部内面2重圏線。見込み1重圏線内に昆虫文。	江戸時代
第11698 PL.71	217	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	9区水路下層 口縁部1/2、底部 完	口 (9.6) 底 3.6	高 5.1 灰白	外面に草花文を染付。口縁部内面2重圏線。見込み1重圏線内に簡略化した草花文。やや焼成不良。	江戸時代
第11798 PL.71	218	肥前磁器 瀬戸・美濃 磁器	22区水路下層 口縁部一部、高 台1/5	口 (9.8) 底 (3.8)	高 6.2 灰白	内外面素焼きによる染付。	江戸時代
第11798 PL.71	219	肥前磁器 上京陶器	4区 口縁部一部、底 部完	口 (10.0) 底 5.5	高 5.5 白	外面海流風景を描く。見込み1重圏線内に簡略化した寿字文。	江戸時代
第11798 PL.71	220	肥前磁器 上京陶器	22区 下平1/2	口 6.5 底 -	高 - 灰白	内外面染付。見込み1重圏線内に不明文様。	江戸時代
第11798 PL.71	221	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	13区水路下層 底部	口 6.0 底 -	高 - 白	内外面染付。器型やや厚い。	江戸時代
第11798 PL.71	222	肥前磁器 上京陶器	22区水路下層 底部1/3	口 - 底 (6.4)	高 - 灰白	内外面染付。	江戸時代
第11798 PL.71	223	肥前磁器 上京陶器	25区水路下層 1/2	口 (8.9) 底 (3.3)	高 3.8 灰白	外面簡略化した雪輪梅樹文。	江戸時代
第11798 PL.71	224	肥前磁器 上京陶器	18区横丸 1/2	口 (8.9) 底 (3.7)	高 3.8 灰白	外面コンニャク印による井桁と額文。内面無文。	江戸時代
第11798 PL.71	225	肥前磁器 上京陶器	2区水路下層 1/2	口 9.0 底 (3.5)	高 5.3 灰白	外面にいむゆるの繪唐文。口縁部内面四方華文。見込み厚線きによる三友。	江戸時代
第11798 PL.71	226	肥前磁器 上京陶器	26区水路下層 小碗	口 (9.1) 底 (3.9)	高 5.2 灰白	底部器型厚い。外面梅樹文の染付。輪白濁し。焼成不良。	江戸時代
第11798 PL.71	227	肥前磁器 上京陶器	33区裏込め 1/2	口 (10.0) 底 (3.7)	高 4.7 白	外面植物文。下平に貫入する。	江戸時代
第11798 PL.71	228	肥前磁器 上京陶器	30区裏込め 1/5	口 (10.0) 底 -	高 - 白	外面染付。口縁部内面雷文帯。見込み周縁1重圏線。	江戸時代
第11798 PL.71	229	肥前磁器 上京陶器	18区裏込め 1/4	口 (11.0) 底 -	高 - 灰白	内外面素焼きによる染付。	江戸時代
第11798 PL.71	230	肥前磁器 上京陶器	14区水路下層 底部	口 - 底 4.0	高 - 灰白	外面に雪輪の染付。高台内不明跡。	江戸時代
第11798 PL.71	231	肥前磁器 上京陶器	25区水路下層 底部1/2	口 - 底 (3.8)	高 - 灰白	底部器型厚い。外面雪輪梅樹文か。高台内「大」字跡か。	江戸時代
第11798 PL.71	232	肥前磁器 上京陶器	30区裏込め 底部	口 4.0 底 -	高 - 白	外面波濤に鶴文の染付。内面不明文様。二次焼熟か。	江戸時代
第11798 PL.71	233	肥前磁器 上京陶器	26区水路下層 体部一部、底部 1/2	口 - 底 (4.9)	高 - 灰白	外面文様不明。見込み2重圏線内にコンニャク印同による五弁花。高台内1重圏線内に不明跡。底部器型厚い。	江戸時代
第11798 PL.71	234	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	21区水路下層 1/2	口 (10.5) 底 (4.2)	高 5.5 灰白	外面簡略化した平荷花文の染付。口縁部内面雷文帯風の染付。見込み1重圏線内に不明跡。	江戸・近代
第11798 PL.71	235	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	29区水路下層 1/5	口 (10.0) 底 -	高 - 白	外面山水文の染付。内面口縁部と見込み周縁に圏線。	江戸・近代
第11798 PL.71	236	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	29区水路下層 1/8	口 (12.0) 底 -	高 - 白	外面龍蹄の染付。口縁部内面の染付は薄んで不明。見込み周縁2重圏線。	江戸・近代
第11798 PL.71	237	瀬戸・美濃磁器 か 磁器	30区裏込め 底部	口 3.9 底 -	高 - 白	外面染付。見込み1重圏線内に「寿」刷れ跡。	江戸・近代

遺物観察表

種 号 Pl.No.	種 類 No.	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第11878 Pl.71	238	製作地不詳磁器 平碗	20区裏込め 体部片	口 底	- (4.4)	高 -	灰白	内外面に染付。二次被熱により輪が発泡する。	江戸・近代 一次被熱
第11878 Pl.72	239	瀬戸・美濃磁器 平碗	20区裏込め 体部一部、底部 完	口 底	- 3.5	高 -	白	外面不明文様。見込み1重圓縁内に「寿」字文。	江戸・近代
第11878 Pl.72	240	瀬戸・美濃磁器 浅蓋	25区裏込め 口縁部2/3、つ まみ完	口 摘	(10.0) (3.9)	高 2.2	白	つまみを除く内外面翻転写?による唐草文。	
第11878 Pl.72	241	製作地不詳磁器 平碗	25区水路下層 口縁部1/4	口 底	(8.8) (3.0)	高 3.6	白	外面簡略化した上絵。主体は赤で暗緑色と黄色を少量 使用。口縁部内面赤絵目による1重圓縁上絵。	
第11878 Pl.72	242	製作地不詳磁器 平碗	13区裏込め 口縁部1/3、底部 2/3	口 底	(10.6) (3.9)	高 5.7	灰白	内外面人造須具による簡略化した染付。見込み1重圓 縁内に「寿」字文。輪が内潰し輪成不良。	
第11878 Pl.72	243	肥前磁器 碗反碗	30区水路下層 1/4	口 底	(10.8) (3.8)	高 6.5	灰白	外面内面に秋草の染付。口縁部内面不明文様帯。見込 み1重圓縁。	
第11878 Pl.72	244	製作地不詳陶器 碗反碗	24区 口縁部1/4、底部 2/3	口 底	(11.8) (4.7)	高 5.9	灰白	高台端部を除き明青灰色釉。口縁部外面に鉄軸をア ー チ状にかける。高台端部無釉。	
第11878 Pl.72	245	製作地不詳磁器 平碗	28区水路下層 1/2	口 底	(11.1) -	高 -	白	外面加みを削いだ絵具で内「福」、「寿」のゴム印 判。高台縁の墨線は人造須具。	
第11878 Pl.72	246	製作地不詳磁器 平碗	3区水路上層 口縁部1/4、底部 2/3	口 底	(10.4) 4.0	高 5.4	白	外面ゴム印判による下絵付け。	
第11878 Pl.72	247	製作地不詳磁器 平碗	13区 口縁部1/4、底部 1/2	口 底	(11.0) (3.8)	高 5.5	白	外面にアヤメ?の吹き絵輪下彩。	
第11878 Pl.72	248	製作地不詳磁器 平碗	22区水路下層 口縁部一部、底 部完	口 底	(10.8) (3.8)	高 5.8	灰白	外面黒色絵具による吹き墨下絵付け。	
第11878 Pl.72	249	製作地不詳磁器 平碗	25区水路上層 口縁部一部、底 部完	口 底	(11.4) 3.9	高 5.7	白	口縁部外面ゴム印判による染付。人造須具を使用。内 面無文。	
第11878 Pl.72	250	瀬戸・美濃磁器 平碗	20区水路下層 体部一部、底部 完	口 底	(10.8) 3.7	高 -	白	外面に人造須具を用いたゴム印判?で唐草文を染め 付け。	
第11878 Pl.72	251	製作地不詳磁器 平碗	11区 1/2	口 底	(11.3) (4.6)	高 5.7	白	外面一方に人造須具による菊花の染付。内面無文。	
第11878 Pl.72	252	瀬戸・美濃磁器 平碗	22区水路下層 1/2	口 底	(11.4) (4.0)	高 6.2	灰白	外面ゴム印判による染付。	
第11878 Pl.72	253	製作地不詳磁器 平碗	22区水路下層 1/5	口 底	(10.8) (3.7)	高 6.2	灰白	外面の一部に染付が認められる。高台端部外面取 り。	
第11878 Pl.72	254	九谷磁器 平碗	15区 1/2	口 底	(11.0) (3.6)	高 6.1	白	外面に「福寿」の上絵。「寿」字の輪郭は金銀。高台内「九 谷」の上絵字路。	上絵着色
第11878 Pl.72	255	瀬戸・美濃磁器 平碗	24区 口縁部一部、底 部1/2	口 底	(10.8) (4.8)	高 6.1	白	口縁。外面幾何学文帯間に梅輪と草花文。高台内「□ 軒平八製」路。ゴム印判による染付。人造須具を使用。	
第11878 Pl.72	256	製作地不詳磁器 平碗	24区裏り方 1/3	口 底	(11.2) (4.6)	高 5.9	白	外面ゴム印判?による丸文と「福祿寿」字路。高台内1 重圓縁。人造須具を使用。	
第11878 Pl.72	257	製作地不詳磁器 平碗	25区水路下層 1/4	口 底	(11.3) (5.0)	高 6.0	白	外面梅輪と笹?の輪下彩。梅花はピンク。梅莖は褐色。 笹は緑色絵具を使用。内面無文。	
第11878 Pl.72	258	製作地不詳磁器 平碗	21区 口縁部1/2、底部 完	口 底	(11.2) 4.0	高 5.0	白	口縁部外面に花文等の染付。	
第11878 Pl.72	259	製作地不詳磁器 平碗	33区 完形	口 底	11.9 3.7	高 4.2	灰白	型紙網りによる染付。	
第11878 Pl.72	260	製作地不詳磁器 平碗	8区 口縁部一部、底 部完	口 底	(12.0) (3.8)	高 4.6	白	内外面型紙網りによる染付。人造須具を使用。	
第11878 Pl.72	261	製作地不詳磁器 平碗	21区 1/2	口 底	(11.5) (4.5)	高 4.9	白	内外面型紙網りによる染付。絵具は人造須具。高台外 面手書き染付。	
第11878 Pl.72	262	製作地不詳磁器 平碗	28区水路下層 口縁部一部、底 部2/3	口 底	(11.9) 3.8	高 5.0	白	文様全体が不明であるが、「月餅」の文字を人造須具 で記す。	
第11878 Pl.72	263	製作地不詳磁器 平碗	21区水路下層 1/5	口 底	(12.3) (4.7)	高 5.0	白	人造須具による手書き染付。	
第11878 Pl.72	264	製作地不詳磁器 平碗	12区水路下層 口縁部1/3	口 底	(9.8) -	高 -	白	種柄空の上絵。釘鏝の先端が見え、箸八或も描かれた 。西遊記の上絵で子供用であろう。	
第11878 Pl.72	265	瀬戸・美濃磁器 平碗	26区 口縁部1/3	口 底	(11.1) -	高 -	白	外面に人造須具を用いたゴム印判で唐草文を染め付 ける。	
第11878 Pl.72	266	製作地不詳磁器 平碗	23区裏込め 1/2	口 底	(11.4) -	高 -	灰白	体部外面ゴム印判による染付。	
第11878 Pl.72	267	製作地不詳磁器 平碗	45区水路下層 1/3	口 底	(11.9) -	高 -	白	外面ゴム印判による染付。	

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 存 存	計測値		胎土/焼成色/調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高				
第11998	268	瀬戸・美濃磁器 か 平焼	24区水路下層 体部以下	口 底	- 4.0	高 -	白	外面人造呉須による亀甲文、内面無文。	
第11998	269	製作地不詳陶器 丸焼	2区水路下層 口縁部一部、底部 1/2	口 底	(10.4) 4.1	高 4.6	灰白	高台端部を除き緑色釉。磁器の焼成不良か。	
第11998	270	瀬戸・美濃磁器 か 丸焼	3区裏込め 口縁部1/3、底部 一部	口 底	(11.0) (3.8)	高 5.4	白	高台端部を除き緑色釉。無文。	
第11998	271	瀬戸・美濃磁器 か 丸焼	24区 1/2	口 底	(10.7) 3.8	高 5.0	灰白	見込み1重圓縁を除き型紙刷りによる染付。人造呉須を使用。	
第11998	272	製作地不詳磁器 丸焼	7区水路下層 丸焼	口 底	(11.8) (5.0)	高 5.4	灰白	高台端部を除き灰オリーブ色で斑な釉を施す。	
第11998	273	製作地不詳磁器 丸焼	13区 1/2	口 底	(11.4) (3.7)	高 6.2	白	内外面型紙刷りによる染付。人造呉須使用。	
第11998	274	瀬戸・美濃磁器 か 丸焼	24区裏込め 口縁部1/3	口 底	(11.4) -	高 -	白	内外面緑色釉。無文。	
第11998	275	製作地不詳磁器 上絵染	12区水路下層 口縁部1/2次、底部 部完	口 底	9.6 3.4	高 4.5	白	機械轆轤成形。外面に小輪と大黒縁の筋の上絵。小輪の反対側にやや内れた光沢のない部分があり、上絵具で着色されていた可能性がある。	上絵着色
第11998	276	肥前磁器か 丸焼	33区裏込め 1/2	口 底	(10.0) 3.6	高 4.2	白	外面手描きによる松と唐子文、口縁部内面環状文。人造呉須。	
第11998	277	製作地不詳磁器 丸焼	22区 1/3	口 底	(9.6) (2.8)	高 4.3	白	外面に植物文の上絵。上絵は剥落。	上絵着色
第11998	278	製作地不詳磁器 丸焼	9区 口縁部1/4、底部 完	口 底	(9.9) 4.0	高 5.3	白	外面人造呉須。緑色、灰オリーブ色の釉下彩。高台内1重圓縁。内面無文。	
第11998	279	製作地不詳磁器 丸焼	15区 口縁部1/4、底部 1/2	口 底	(10.2) (4.4)	高 5.7	白	外面人造呉須による菊花状の染付。	
第11998	280	製作地不詳磁器 丸焼	23区 1/2	口 底	(11.1) (3.8)	高 5.3	灰白	外面3葉の円縁。高台端部を除き透明釉。買入器。	
第11998	281	製作地不詳磁器 丸焼	12区水路 1/2	口 底	(12.5) (5.0)	高 6.5	灰白	口縁、内外面黒色絵具による下絵付け。胎部分はゴム印付け。高台内に「東二平」のゴム印跡。	
第11998	282	製作地不詳磁器 丸焼	24区水路下層 口縁部1/4	口 底	(9.9) -	高 -	白	体部外面人造呉須による草花文の染付。内面無文。高台内1重圓縁。	
第11998	283	瀬戸・美濃磁器 丸焼	22区水路下層 破片	口 底	(8.8) -	高 -	白	外面人造呉須による龍の染付。口縁部内面3葉の圓縁。高台内1重圓縁。	
第11998	284	肥前磁器か 丸焼	33区水路下層 破片	口 底	- 4.0	高 -	灰白	内外面磨略化した染付。人造呉須か。	焼継
第11998	285	瀬戸・美濃磁器 丸焼	30区裏込め 底部	口 底	- (3.7)	高 -	白	外面磨略化した染付。見込み2重圓縁内に磨略化した「寿」字文。	
第11998	286	製作地不詳磁器 丸焼	11区 底部	口 底	- 3.1	高 -	白	外面型紙刷り染付。見込み1重圓縁と型紙刷りによる三友。人造呉須使用。	
第12098	287	製作地不詳磁器 丹身	25区水路下層 口縁部1/8	口 底	- (13.8)	高 -	白	外面人造呉須を使用した手描き染付。全面施釉。	
第12098	288	製作地不詳磁器 丹身	22区 口縁部1/4次	口 底	16.4 6.3	高 7.8	灰白	機械轆轤成形。外面に獅子、雷文、牡丹の上絵。上絵具は赤、金、緑等である。	上絵一部着色
第12098	289	製作地不詳磁器 丹身	13区水路下層 口縁部1/5、底部 完	口 底	(16.0) 6.2	高 7.8	白	機械轆轤成形。外面は菊花文の区画内に牡丹等を描く。赤色上絵具のみ残存。他の色は剥落。	上絵一部着色
第12098	290	製作地不詳磁器 丹身	5区水路下層 1/3	口 底	(16.4) (6.5)	高 7.8	白	外面雷文の区画内に桜と車輪状文様を上絵。上絵具は赤色と金色が残る。口縁部内面赤絵具による2重圓縁上絵。	上絵一部着色
第12098	291	製作地不詳磁器 丹身	13区 口縁部1/4、底部 1/2	口 底	(16.7) (6.6)	高 7.8	白	機械轆轤成形。外面に獅子、雷文、牡丹の上絵。上絵具は赤、金が一部に残る。口縁部内面は赤絵の2重圓縁。	上絵着色
第12098	292	製作地不詳磁器 丹身	22区裏込め 1/3	口 底	- (15.8)	高 -	灰白	有蓋であろう。外面青海波と千鳥の上絵。口縁部内面に2葉の圓縁。部分的に赤絵具が残る。	上絵着色
第12098	293	製作地不詳磁器 丹身	7区水路下層 1/3	口 底	(15.2) -	高 -	白	外面雷文を有する花卉の染付。口縁部内面幅広の2重圓縁。人造呉須を使用。	
第12098	294	製作地不詳磁器 丹身	7区裏込め 1/3	口 底	- (6.4)	高 -	白	内外面人造呉須による染付。	
第12098	295	在地区系土器	21区 ほぼ完形	口 底	9.3 6.2	高 1.8~ 1.6		黒色鉱物含む。楕円部左回転糸切無調整。底部内面左回転の轆轤目。	江戸時代か
第12098	296	在地区系土器	26区水路下層 皿	口 底	(9.1) (6.0)	高 2.0	楕	内面の底部と体部境不明。底部切り難し技法摩滅のため不明。	江戸・近代
第12098	297	在地区系土器	41区水路下層 皿	口 底	(8.4) (6.0)	高 1.9	楕	内面の体部と底部境不明。汚れにより底部外面の観察不可能。	
第12098	298	在地区系土器	33区水路下層 1/3	口 底	(10.0) (6.7)	高 1.8	楕	酸化鉄?により砂が付着し、器面観察不可能。	

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 発 見 形 態	計測値	胎土/焼成色調 石材・素材等	成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第12098	299	在地系土器	1区水路下層 1/4	口径(9.6) 底(6.3)	高 2.1	白	底部外面系切か、水による汚れ付着で器表観察不可。
第12198	300	在地系土器 PL.73	13区水路下層 1/2	口径(9.6) 底(5.2)	高 2.2	白	轆轤形。底部外面の切り痕し技法は厚縁により不明。内面の体部と底部縁不明。
第12098	301	在地系土器	24区水路下層 1/4	口径(10.0) 底(7.2)	高 1.5	白	底部回転糸切無調整か。口縁丸みを持って低く立ち上る。
第12098	302	在地系土器	12区 完形	口径(9.4) 底(6.1)	高 1.9	白	赤色粘土粒含む/胎 底部左回転糸切無調整。底部内面左回転の轆轤目。内面は体部と底部縁不明。
第12198	303	肥前磁器 小皿	11区水路下層 一部欠	口径(9.0) 底(5.4)	高 2.2	灰白	八角小皿。内面にモミジを描き、濃みを入れる。短冊状又は墨摺りか。
第12198	304	肥前磁器 小皿	25区 1/2	口径(9.9) 底(5.1)	高 2.0	灰白	口縁部外面内面亀甲文の染付。見込み2重圏線内に五弁花。外面手描き染付。
第12198	305	肥前磁器 皿	4区裏込め 口縁部1/2欠	口径(12.6) 底(8.3)	高 2.4	灰白	口縁部内面簡略化した唐草文。見込み五弁花小型のコンニャク印判。見込みの自動割ぎ部分に酸化アルミナ塗布。外面無文。
第12198	306	肥前磁器 皿	4区裏込め 1/4	口径(14.0) 底(6.4)	高 2.4	灰白	口縁部内面簡略化した唐草文。見込みの自動割ぎ部分に酸化アルミナ塗布。外面無文。
第12198	307	肥前磁器 皿	18区覆乱 1/5	口径(12.6) 底(6.9)	高 2.8	白	体部口縁部輪花に作る。内面牡丹と蝶の染付。胎の目四型高台。
第12198	308	肥前磁器 皿	4区 1/2	口径(13.4) 底(7.8)	高 4.0	灰白	内外面唐草文。見込み2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。高台内1重圏線内の底欠損により不明。
第12198	309	肥前磁器 皿	25区覆乱 1/5	口径(15.4) 底(10.0)	高 3.3	灰白	体部内面いむゆる硝唐草文。外面唐草文。胎の目四型高台。
第12198	310	肥前磁器 皿	33区裏込め 口縁部一部、底部1/2	口径(14.8) 底(8.3)	高 4.7	灰白	口縁部輪花。見込み五弁花コンニャク印判。高台内1重圏線内。2重角内に満福字跡。
第12198	311	肥前磁器 皿	11区水路下層 口縁部1/8、底部1/5	口径(18.1) 底(10.7)	高 5.7	灰白	体部内面染付。見込み2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。体部外面唐草文。高台内1重圏線内に角枠内の満福字跡か。
第12198	312	肥前磁器	13区水路下層 口縁部1/8	口径(19.2)	高 -	灰白	内面宝珠状の染付。外面唐草文。
第12198	313	肥前磁器か PL.73	45区裏込め 1/5	口径(7.9) 底(5.1)	高 -	白	内面と口縁端部で変色。丸文の染付。胎の目四型高台。
第12198	314	肥前磁器	11区水路下層 底部1/2	口径(9.1)	高 -	灰白	内面山水文の染付。胎の目四型高台。
第12298	315	肥前磁器 PL.73	22区 底部1/2	口径(8.8) 底(8.8)	高 -	灰白	内外面染付。高台内に使職師の記号。
第12298	316	三田青磁 地皿鉢	30区裏込め 底部片	口径(13.2) 底(6.4)	高 -	灰白	型による成形で文様は簡略。厚い青磁輪。高台端部無輪で輪脚赤褐色に発色。輪は部分的に2重に見える。
第12298	317	瀬戸・美濃陶器 PL.73	13区水路下層 1/4	口径(13.2) 底(6.4)	高 3.6	灰白	内面から体部外面白土刷毛付。高台端部を露き黄色味を帯びた灰輪。貫入する。
第12298	318	瀬戸・美濃陶器 PL.74	13区裏込め 1/4	口径(13.3) 底(6.4)	高 3.6	灰白	内外面簡略化した文様の染付。高台端部を除き透明輪を施施。
第12298	319	肥前磁器 PL.74	27区水路下層 口縁部1/2欠	口径(9.9) 底(5.8)	高 2.4	灰白	口縁。内面に東屋山水文。口縁部輪花。
第12298	320	肥前磁器 PL.74	30区水路下層 1/3	口径(10.0) 底(5.4)	高 2.2	灰白	口縁。内面に東屋山水文。口縁部輪花。焼成不良。
第12298	321	瀬戸・美濃陶器 PL.74	25区 1/4	口径(11.2) 底(6.0)	高 1.9	白	見込み鎖と雲文。口縁部内面2重圏線の染付。外面雷文と雲文?。高台内1重圏線内に不閉路。
第12298	322	製作地不詳磁器 小皿	13区覆乱 底部	口径(6.9) 底(6.9)	高 -	白	内面型により菊皿状の凹み。見込みは型による亀の簡略文に呉須を入れる。胎の目四型高台。
第12298	323	肥前磁器か PL.74	21区水路下層 1/2	口径(3.2) 底(3.2)	高 3.7	白	中央が丸みを帯びた方形形か。内外面に染付。高台内不明路。
第12298	324	製作地不詳磁器 小皿	1区 完形	口径(7.5) 底(3.7)	高 2.3	白	四隅に切り込みを入れる。四隅と見込みに染付。
第12298	325	製作地不詳磁器 PL.74	22区水路下層 1/2	口径(9.1) 底(5.0)	高 2.2	灰白	口縁。内面に人造呉須と赤鉛目による銅板転写下絵。外面人造呉須による簡略。
第12298	326	製作地不詳磁器 PL.74	22区水路下層 1/3	口径(9.3) 底(5.0)	高 2.3	白	内面人造呉須、シケン色、黄色の下絵付け。
第12298	327	瀬戸・美濃陶器 白磁小皿	42区水路下層 1/4	口径(10.0) 底(5.0)	高 2.1	灰白	白磁寿文皿。見込みの文様は印影。
第12298	328	瀬戸・美濃陶器 青磁小皿	24区裏込め 1/2	口径(10.6) 底(6.0)	高 1.8	白	内面から高台外面にクム青磁輪。高台内面から高台内に透明輪。高台端部無輪。
第12398	329	製作地不詳磁器 小皿	36区水路下層 1/3	口径(10.2) 底(6.6)	高 1.5	灰白	内面人造呉須による染付。
第12398	330	製作地不詳磁器 小皿	33区裏込め 1/2	口径(10.4) 底(6.0)	高 2.1	白	内面銅板転写による染付。
第12398	331	瀬戸・美濃陶器 小皿	23区裏込め 1/4	口径(10.8) 底(6.0)	高 2.0	灰白	内面銅板転写による染付。

遺物観察表

種 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第12398 PL.74	332	瀬戸・美濃磁器 か 小皿	309K水路下層 1/2	口 底 (10.6, 6.0)	高 2.0	白	内外面藍芝文の染付。人造呉須を使用。高台内不明跡。	
第12398 PL.74	333	製作地不詳磁器 小皿	195K水路下層 1/3	口 底 (11.0, 6.5)	高 2.3	白	機械軸轆成形形。内面刷板転写による染付樹木。黒色絵具を使用。	
第12398 PL.74	334	製作地不詳磁器 小皿	233K水路下層 1/3	口 底 (11.0, 6.4)	高 2.3	灰白	機械軸轆成形形。内面刷板転写による緑色の撰文。	
第12398 PL.74	335	製作地不詳磁器 小皿	115K水路下層 1/4	口 底 (12.1, 6.6)	高 2.5	灰白	内面刷板転写による流氷と植物文の染付。人造呉須使用。外面無文。	
第12398 PL.74	336	製作地不詳磁器 小皿	225K水路下層 1/2	口 底 (12.3, 7.3)	高 2.5	灰白	機械軸轆成形。内面鉄絵具と人造呉須による下絵。	
第12398 PL.74	337	製作地不詳磁器 小皿	218K水路下層 1/2	口 底 (12.8, 7.8)	高 2.3	白	内面刷板転写による染付。	
第12398 PL.74	338	製作地不詳磁器 小皿	509K 口縁部1/4, 底部 2/3	口 底 (12.7, 6.8)	高 3.0	灰白	機械軸轆成形。内面刷板転写による蝶と桜の染付。口縁、外面無文。	
第12398 PL.74	339	製作地不詳磁器 小皿	242K水路下層 1/2	口 底 (13.0, 7.5)	高 2.5	灰白	口縁。内面刷板転写による染付。機械軸轆成形形。	
第12398 PL.74	340	製作地不詳磁器 小皿	333K水路下層 1/2	口 底 (13.2, 7.0)	高 2.8	灰白	内面上絵で植物文。赤絵具部分的に残る。	上絵着色
第12398 PL.74	341	製作地不詳磁器 小皿	309K水路下層 1/6, 底部 2/3	口 底 (13.7, 8.0)	高 2.4	白	口縁。内面刷板転写による染付。	
第12398 PL.74	342	製作地不詳磁器 小皿	311K 1/2	口 底 (14.0, 7.3)	高 2.5	白	口縁。体部内面刷板転写染付で松と鶴。見込みに三友。	
第12398 PL.74	343	瀬戸・美濃磁器 か 小皿	222K水路下層 1/4	口 底 (16.0, 9.0)	高 3.0	灰白	機械軸轆成形。口縁。内面刷板転写による染付。	
第12398 PL.75	344	製作地不詳磁器 小皿	215K 1/3	口 底 (14.6, 8.0)	高 3.4	白	輪下彩による海老文。海老は茶色。植物の葉と思われる緑部あり。口縁部は輪花。	
第12498 PL.75	345	製作地不詳磁器 小皿	17.3	長 幅 (16.2, 10.0)	高 2.7	白	輪花の長方形形。内面人造呉須と緑色絵具の輪下彩。外面不明文様。高台部無軸轆。	
第12498 PL.75	346	製作地不詳磁器 小皿	395K水路下層 1/3	口 底 (16.1, 9.0)	高 2.7	白	木瓜形か楕円形。高台内不明跡。	
第12498 PL.75	347	瀬戸陶器か 小皿	295K水路下層 破片	口 底 -	高 -	浅黄	高台端部を除き施釉。縁のみ貫入する。器表は明黄褐色。底部内面2重四脚。	
第12498 PL.75	348	肥前磁器 皿	398K水路下層 1/3	口 底 (17.1, 10.0)	高 3.3	灰白	口縁部輪花。内面いわゆるみじ人唐草。見込みに三友。高台内1重圓縁内に成化年製銘。	江戸時代
第12498 PL.75	349	瀬戸・美濃陶器 皿	255K見込め 口縁部一部、底部 1/4	口 底 (21.4, 9.7)	高 3.0	明黄緑	口縁部上面鉄絵具による2条の圓縁。内面鉄絵具による吹き絵。体部外面鉄絵具による3条の圓縁。高台端部を除き灰釉。貫入する。	江戸時代
第12498 PL.75	350	製作地不詳磁器 皿	215K 1/4	口 底 (18.7, 9.8)	高 3.0	灰白	口縁部輪花。高台脇3重圓縁。内面上絵による牡丹文や唐草文。	
第12598 PL.75	351	肥前磁器か 上絵皿	111K 口縁部1/8, 底部 2/3	口 底 (19.0, 12.8)	高 3.3	白	内面人造呉須による柿丹と柿間に上絵。上絵具は赤と緑。鈍い褐色等。外面は染付。高台内1重圓縁内に不明文様は墨書か。	
第12598 PL.75	352	肥前磁器 皿	395K水路下層 1/2	口 底 (21.3, 12.9)	高 4.7	灰白	内面に人造呉須による山水文の染付。口縁部内外面の文様は墨書か。	
第12598 PL.76	353	製作地不詳磁器 皿	302K 1/2	口 底 (22.7, 12.0)	高 3.4	白	刷板転写によるウォーパターンの。人造呉須を使用。外面刷板転写による唐草文。人造呉須を使用。蛇の目型高台。	
第12598 PL.75	354	製作地不詳磁器 皿	212K 1/2	口 底 (22.4, 12.6)	高 3.2	灰白	内外面刷板転写による染付。蛇の目型高台。	
第12698 PL.76	355	製作地不詳磁器 洋食器皿	215K 1/2	口 底 (17.9, 8.5)	高 3.4	灰白	口縁。内面ラスターで見込みに宝船を大きく描く。	上絵一部着色
第12698 PL.76	356	製作地不詳磁器 洋食器皿	216K 1/6	口 底 (20.0, 11.4)	高 4.1	白	型成形の洋食器皿。口縁部内面に花文。見込みに櫻の上絵。上絵具は薄い青色。見込みに型成形時の皺状痕残る。高台端部を除き透明釉。	
第12698 PL.76	357	製作地不詳陶器 洋食器皿	245K水路下層 1/5	口 底 (20.6, 12.0)	高 2.3	灰白	硬質陶器か。内面暗赤褐色の刷板転写と思われる輪下彩。口縁部輪花。残存部全面透明釉。	
第12698 PL.76	358	製作地不詳陶器 洋食器皿	305K水路下層 1/8	口 底 (20.0, 11.5)	高 2.3	灰白	内面刷板転写によると考えられる輪下彩。絵具は緑色系。硬質陶器か。	
第12698 PL.76	359	製作地不詳陶器 洋食器皿	115K水路下層 1/4	口 底 (22.5, 10.0)	高 2.3	灰白	硬質陶器か。口縁部輪花。口縁部内面に型で別点と波状文を隔隔。口縁部内面に黄緑色と薄い青色の輪下彩。口縁端部内面に金液による上絵。残存部の全面透明釉。貫入する。	
第12698 PL.76	360	製作地不詳陶器 洋食器皿	245K 1/5	口 底 (23.0, 12.6)	高 2.3か	灰白	硬質陶器風の洋食器皿。口縁部内面とリム付近に磁釉色の圓縁。	
第12798 PL.76	361	肥前磁器 鉢	295K見込め 1/4	口 底 (18.3, 11.0)	高 -	灰白	内外面手描き染付。口縁部上端手描き染付。	江戸時代
第12798 PL.76	362	肥前磁器 青磁染付鉢	185K見込め 口縁部片	口 底 -	高 -	白	体部内面青磁釉。口縁部内面から外面透明釉。透明釉部分に染付。青磁釉部分は腹方向の四脚。	江戸時代

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 発 見 場	計測値			胎土/焼成色 原料・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口	高	径			
第12798	363	肥前磁器鉢	9区水路下層 口縁部一部、底部 1/3	口 径 (8.4)	高 -	径 -	灰白	口縁部から体部8角形か、体部外面から内面に染付。	焼跡 江戸時代
第12798	364	肥前磁器鉢	30区裏込め 鉢	口 径 (7.7)	高 -	径 -	白	体部八角形の鉢。見込み巻物と小輪の染付。高台内に 焼跡時の首丁と記号あり。	焼跡 江戸時代
第12798	365	肥前磁器鉢	38区水路下層 鉢	口 径 (7.1)	高 -	径 -	灰白	内面海浜風景の染付。蛇の目四型高台。	江戸時代
第12798 PL.76	366	肥前磁器 磁器部	30区水路 磁器部	口 径 (8.5)	高 -	径 -	白	体部内面染付。見込み宝珠と小輪の染付。蛇の目四型高台。高 台部に焼跡時の首丁?	焼跡 江戸時代
第12798	367	肥前磁器 鉢	30区水路下層 底部1/4	口 径 (11.0)	高 -	径 -	白	高台部見込み盛り上がる。体部輪花に作る。内面染付。 外面無輪。高台内1重無輪。	焼跡 江戸時代
第12798 PL.76	368	肥前磁器 青磁染付鉢	22区 体部以下1/4	口 径 (10.0)	高 -	径 -	灰白	体部外面青磁輪。内面染付。蛇の目四型高台。	江戸時代
第12798	369	肥前磁器 青磁染付鉢	28区水路下層 底部1/2	口 径 (11.2)	高 -	径 -	灰白	体部内面青磁輪。見込み建物の染付。外面唐草文。蛇の 目四型高台。高台内二重角枠内に「御」字銘。	江戸時代
第12898 PL.77	370	製作地不詳磁器 小鉢	9区 底形	口 径 (8.8)	高 4.8	径 4.3	白	内面に植物文。見込みに波千鳥。	
第12898 PL.77	371	製作地不詳磁器 小鉢	7区 1/3	口 径 (11.5)	高 5.1	径 4.9	白色	四方を輪花とする。内面宝珠と小輪を人造呉須。縁の 一部をピンクに近い色で描く。外面の宝珠状文は人 造呉須による。	
第12898 PL.77	372	瀬戸・美濃磁器 か 鉢	22区水路下層 1/2	口 径 (12.7)	高 5.3	径 (6.0)	灰白	内外面梅花と松葉文の下輪付け。絵具不明。	
第12898 PL.77	373	製作地不詳磁器 施下彩鉢	12区 1/3	口 径 (13.1)	高 5.7	径 6.6	白	内面人造呉須による同心円。外面は無輪染付。内外面 緑色絵具によるシマツ文の輪下彩。	
第12898 PL.77	374	製作地不詳磁器 鉢	28区裏込め 鉢縁一部、底部 2/3	口 径 (14.4)	高 5.5	径 5.7	灰白	内外面銅板転写による染付。人造呉須を使用。高台端 部のみ無輪。	
第12898 PL.77	375	製作地不詳磁器 鉢	30区 1/2	口 径 (14.0)	高 6.4	径 (5.4)	灰白	銅板転写で樹木と鳥を外側から内面にかけて連続し て描く。人造呉須を使用。高台端部無輪。	
第12898	376	製作地不詳磁器 鉢	9区裏込め 口縁部1/8、底部 1/3	口 径 (15.3)	高 5.7	径 (5.9)	白	高台端部を除きクロム青磁輪。口縁部内面に銅色の鉄 輪を施す。高台外面面取り。	
第12898 PL.77	377	製作地不詳磁器 鉢	28区 口縁部一部、底 部1/2	口 径 (14.4)	高 6.5	径 6.5	白	口紅。口縁部から体部上位波状に作る。口縁部に挟り があり全体形状不明。体部内面白土施文。高台端部 を除き薄青磁輪。	
第12898	378	製作地不詳磁器 土輪鉢	11区 1/4	口 径 (7.5)	高 5.7	径 (8.5)	白	機械輪成形成形。口縁部から体部輪花。体部外面花弁 状に印刷。体部内面書文帯部に「寿」と幾何学的文様を 上輪で配する。見込みは赤絵具による上輪。	上輪一部赤 色
第12898	379	製作地不詳磁器 鉢	40区水路下層 口縁部一部、底 部1/4	口 径 (20.0)	高 6.6	径 (10.0)	白	機械輪成形成形。口縁。高台端部から高台内無輪。	
第12998 PL.77	380	硯平陶器か 鉢	22区水路下層 破片	口 径 (9.7)	高 4.1	径 (8.8)	灰白	高台端部を除き黄色輪。外面に2葉の凸線。	
第12998 PL.77	381	硯平陶器か 鉢	24区水路下層 1/6	口 径 (15.0)	高 -	径 -	橙	体部外面に1葉の凸輪。内外面透明輪か。内外面暗赤 褐色色。	
第12998 PL.77	382	硯平陶器か 鉢	36区水路下層 口縁部から体部 1/2迄	口 径 (5.9)	高 4.2	径 4.9	灰白	底部外面を除き黄色輪。外面二方に輪輪前の白土で花 弁と部を描き。裏と表を緑の上絵具。緑色を金で描 く。底部外面に首丁の遺墨。	
第12998 PL.77	383	硯平陶器か 不詳	21区水路下層 破片	口 径 -	高 -	径 -	淡黄	内外面黄色輪輪輪後に口縁端部に緑色輪。細かい貫入 入る。	
第12998 PL.77	384	製作地不詳磁器 土輪蓋	11区裏込め 底部	口 径 2.4	高 -	径 -	白	内面に暗褐色で屋号と「越後屋」の上輪。高台外面と高 台内染付。	江戸・近代
第12998 PL.77	385	製作地不詳磁器 部・楕口	25区水路下層 底形	口 径 3.9	高 3.4	径 2.8	白	外面に貝黄(銅板転写?)で「うまい酒 勇輝」と施文。 取戻品の酒部蓋と箱口の裏面品目。	取戻品
第12998	386	瀬戸・美濃磁器 か 蓋・楕口	25区水路下層 口縁部1/2	口 径 (4.0)	高 -	径 -	白	外面に「口堂」の染付。	取戻品か
第12998 PL.77	387	製作地不詳磁器 蓋	22区水路下層 口縁部1/2、底部 完	口 径 (5.2)	高 3.1	径 2.5	白	上輪はすてき釜。口縁端部無輪。体部内面に「調州酒 遣」。見込みに野庭の絵。高台内「谷田」と記載。	記念蓋
第12998	388	製作地不詳磁器 蓋	22区水路下層 口縁部1/3	口 径 (5.4)	高 -	径 -	白	上輪はすてき釜。口縁端部無輪。体部内面 障障記念 京都御所二の宮の文字。	記念蓋
第12998 PL.77	389	瀬戸・美濃磁器 小碗	22区水路下層 2/3	口 径 (7.8)	高 4.5	径 (3.9)	白	外面に「上毛陶生」の文字。口の丸状文を口縁部外面か ら内面に銅板転写で描く。外面に意図の一部が認めら れるが、店名部分が欠け。	取戻品
第12998 PL.77	390	瀬戸・美濃磁器 小碗	7区 1/3	口 径 (8.0)	高 4.9	径 (3.8)	白	口の丸状文を口縁部外面から内面に銅板転写で施文。	取戻品
第12998	391	瀬戸・美濃磁器 か 碗	13区覆瓦 口縁部1/4、体部 一帯	口 径 (7.8)	高 -	径 -	白	「高村氏」の文字を外面に、口の丸状文を口縁部外面か ら内面に銅板転写?で施文。	取戻品
第12998 PL.77	392	瀬戸・美濃磁器 か 混飲み	22区水路下層 口縁部1/4、底部 完	口 径 (6.8)	高 4.7	径 2.9	白	外面手描き染付。高台内「矢野茶店」の染付。	取戻品

遺物観察表

種 別 PL.No.	種 類 No.	出 土 位 置 残 存 率	計測値	胎土/焼成色調 石材・素材等	成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考			
第1298PL-77	393	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲みみか	24区 1部欠	口 底	7.9 3.8	高 4.3	白	見込み板文内に「露酒 登祿齋 好友 書上醸造」の文字、外面二方に板文を銅板転写で染付。	取製品
第1298PL-394	394	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲みみか	24区水路下層 1/8	口 底	(7.7) (3.8)	高 4.6	白	外面に「上毛桐生」の文字を銅板転写で書く。高台境と高台に開縁。	取製品
第1298PL-395	395	製作地不詳磁器 湯飲み	22区水路下層 1/2	口 底	(7.9) (2.8)	高 4.8	白	外面は不明印判?とゴム印判による染付。見込みに「マルキ織屋店 電一三八」の染付。	取製品
第1298PL-396	396	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲みみか	21区 口縁部1/8、底部 完	口 底	(8.3) (3.4)	高 4.8	白	外面ゴム印判染付。見込みに「吉田クリニング 電話二八七二番」の染付。	取製品
第1298PL-77	397	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲みみか	24区水路下層 1/2	口 底	- 3.0	高 -	白	見込み瓢箪内に「石炭 燗炭 電三三八番」の染付。口内に記された屋号?は不明。	取製品
第1298PL-398	398	製作地不詳磁器 湯飲み	9区水路下層 1/2	口 底	5.3 5.5	高 6.8	白	深い湯飲み。口縁部外面2条の上縁開縁。開縁側落。体部外面に小さくピンクで「本町ニマヤシ」の上縁。	取製品 上縁着色
第1298PL-77	399	製作地不詳陶器 湯飲み	47区裏込め ほぼ完全	口 底	6.5 3.7	高 7.0	灰白	口内、外面灰からオリブ黒と白土の丸文。体部外面によく灸くクスリ 星野商店 桐生市本町一電六二四四番」の下縁付け。店名上には星マーク内に「の」のマークも書く。	取製品
第1298PL-400	400	製作地不詳陶器 湯飲み	22区水路下層 1/4	口 底	(6.2)	高 -	灰白	外面に「大谷谷目特約店 カワチ製造 桐生市島田町」の黒色絵具による染付。	取製品
第1308PL-78	401	製作地不詳磁器 小皿	24区 2/3	口 底	8.9 4.8	高 1.7	灰白	見込みに「生せほ ぶじや」の染付。蕎麦屋の葉巻用小皿。	営業用食器
第1308PL-78	402	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲みみか	30区水路下層 1/2	口 底	(10.9)	高 -	白	口縁部外面グリーン2重縁の下縁。器型厚。口縁部外面に上縁。上縁は開縁。	上縁着色 給食用食器
第1308PL-403	403	瀬戸・美濃磁器 か 湯飲みみか	24区水路下層 1/2	口 底	(6.4)	高 -	灰白	口縁部外面グリーン2重縁の下縁。器型厚。	給食用食器
第1308PL-404	404	磁子・笠即陶器 か 井	24区水路下層 1/2	口 底	(15.4) 6.0	高 5.5	浅黄	機械輪軸成形。内面に鉄軸系の軸を薄く刷毛塗り。見込みは蛇の目状に無輪軸。	貯けうなぎ 井の身か
第1308PL-405	405	製作地不詳磁器 井	24区 1/4	口 底	(17.8) (7.2)	高 6.5	灰白	外面に上縁の鳳凰文。内面は雷文帯と見込みに三友。高台内不明跡。	上縁一部着色
第1308PL-406	406	製作地不詳磁器 井	25区水路下層 1/4	口 底	(18.3) (7.9)	高 6.0	灰白	機械輪軸成形。外面鳳凰の上縁で、赤色と割に青灰色の一部残る。内面は雷文帯と見込みに三友の上縁。赤色は赤色の一部残る。高台内不明跡。	上縁一部着色
第1308PL-407	407	製作地不詳磁器 井	38-39区水路下層 1/4	口 底	(19.0) (7.6)	高 6.0	白	赤絵わずかに残る。口縁部内面雷文帯。外面鳳凰文。高台内不明跡。	上縁着色
第1318PL-78	408	製作地不詳磁器 皿	23区 1/4	口 底	(20.5) (10.5)	高 3.5	白	口縁部内面赤色の双喜文、黄色と緑により能を書く。口縁部外面は赤色の幅縁文。	409と同型品 上縁一部着色
第1318PL-409	409	製作地不詳磁器 皿	2区水路下層 1/4	口 底	(20.4)	高 -	白	口縁部全面金散り。口縁部内面赤色の双喜文、黄色と緑、赤色により能を書く。口縁部外面は赤色の幅縁文。	408と同型品
第1318PL-78	410	肥前磁器 蓋	25区裏込め 口縁部一部、天 井部2/3	口 底	(5.0) (1.0)	高 2.0	灰白	外面「福寿」字二重の染付。	江戸時代
第1318PL-78	411	肥前磁器 合子蓋	12区水路下層 完形	径 受	5.8 4.8	高 0.8	灰白	上面に東屋山水の染付。口縁部無縁。天井部無文。	江戸時代受 受け
第1318PL-412	412	肥前磁器 蓋	23区裏込め 1/4	口 受	(10.0) (9.0)	高 -	白	外面いむゆる納戸草文。受け部に酸化アルミナ散布。	江戸時代受 受け
第1318PL-78	413	肥前磁器 蓋	30区 完形	口 底	14.2 3.3	高 3.3	白	上面に海浜風景の染付。天井部無文。口縁部下面無縁。	江戸時代
第1318PL-414	414	瀬戸・美濃陶器 不詳	9区裏込め 底部4/5	口 底	(6.7) 1.9	高 -	灰白	内面から体部外面錆色の鉄軸。	江戸時代
第1318PL-415	415	瀬戸・美濃陶器 水甕	30区 底部1/4	口 底	(18.0)	高 -	灰白	体部外面境による染文。体部外面と内面に灰輪。高台脇以下無縁。	江戸時代
第1318PL-78	416	製作地不詳磁器 白磁蓋	32区水路下層 完形	口 受	3.7 3.0	高 0.8	白	天井部外面中央付近無縁。無文。	江戸時代受 受け
第1318PL-78	417	製作地不詳陶器 蓋	15区裏込め 完形	口 底	2.2 1.0	高 1.9	灰黄緑	上面白化粧地に無縁。	江戸時代
第1318PL-78	418	製作地不詳磁器 白磁蓋	30区 完形	口 底	9.7 1.9	高 3.2	白	上縁の磨痕もなく白磁であろう。被せ蓋。天井部外面周縁は凹縁状に窪む。口縁部端のみ無縁。	江戸時代
第1318PL-78	419	瀬戸・美濃陶器 蓋	13区 一部欠	口 底	10.0 5.3	高 2.4	灰白	下面面取り部以下同様開縁。上面鉄軸。器型や厚く、壺型の蓋であろう。	江戸時代
第1318PL-420	420	肥前磁器 段重か	11区 1/8	口 底	(12.8) (12.0)	高 7.0	白	外面やや磨耗した唐草?宝珠?等の染付。口縁部端と端部内面輪軸。車の最下段か蓋物の身。	江戸時代
第1328PL-78	421	製作地不詳磁器 磁栓	22区水路下層 金属部欠	口 底	2.4 0.8	高 3.0	白	機械式の磁栓で金属部分は欠。欠口挿入部分は無縁。	

遺物観察表

種 別 PL.No.	種 類	出土位置 保存部	計測値	胎土/焼成色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第13298 PL.78	製作地不評磁器 磁椀	195K水路下層 金属部欠	口 2.0 底 0.8 高 3.1	白	機械式の胎径で金属部分は欠失。胎口挿入部分は無縁	
第13298 PL.78	製作地不評磁器 合子蓋	12K黄込め 完形	径 6.8 高 0.8	灰白	側面と上面に銅板転写染付。人造引目を使用。口縁部のみ無縁。内面無蓋。	
第13298 PL.78	製作地不評磁器 完形	30K水路上層 完形	口 3.6 底 2.2 高 1.9	灰白	縁のヘタを模った蓋。底面を緑色緑化粧。底面は無縁。	
第13298 PL.78	水平陶器か 磁器	33K水路下層 口縁部1/8	口 (8.8) 受 (16.6)	灰白	明黄色色の釉。口縁部のみ無縁。細かい貫入。入る。	
第13298 PL.78	製作地不評陶器 磁器	24K 1/2	口 (11.2) 受 (9.0)	灰白	口縁部無縁。外面に入造引目と褐色で施文。内外面透明釉。細かい貫入。入る。	
第13298 PL.78	製作地不評陶器 磁器	31K 1/4	口 (11.0) 高 -	にぶい・黄	天井部外面鉄軸。天井部褐色釉。口縁部白くかけで下面の白土拭う。	
第13298 PL.78	製作地不評陶器 磁器	24K 2/3	口 13.4 高 4.7	灰黄	上面白土で施文後に天井部内外面透明釉。口縁部白化粧で無縁。残存部に小円孔なし。	
第13298 PL.78	製作地不評陶器 蓋	25K・29K水路 下部	口 (8.0) 受 (14.2)	灰白	口縁部下の突起先端部を除き透明釉。上面の文様は印刷。	
第13298 PL.78	在池系土器 部	22K 一部欠	幅 1.1 受 6.4 高 3.3	白色藍物含む/灰	表面黒色。焼し焼成。輪軸型。形。	
第13298 PL.78	製作地不評磁器 段重	195K水路下層 口縁部一部。底部 1/2	口 (11.0) 底 (10.0) 高 (6.8)	灰白	外面銅板転写による唐と唐文の染付。人造引目を使用。内面無文。重ね無縁。体部外面下部以下回転部回り。最下段の面。	
第13298 PL.78	肥前磁器 段重	30K黄込め 破片	口 - 底 (10.0) 高 -	白	外面染付。残存部に確認されないが、底部外面に焼跡時と考えられる数字7が記される。高台外無縁で砂子付着。	焼跡
第13298 PL.78	製作地不評陶器 磁器	21K水路下層 1/5	口 (10.9) 底 (10.8) 高 4.9	淡黄	高台端部面取り。口縁部と内面及び高台端部を除き透明釉。外面に緑色の絵具で唐か竹文の下絵。	
第13298 PL.78	水平陶器か 合子身	21K黄込め 1/4	口 (5.7) 底 (4.0) 高 2.8	灰白	高台端部と受け部を除き黄色釉。細かい貫入。入る。	
第13298 PL.78	製作地不評陶器 磁器	22K水路下層 1/4	口 (8.0) 高 -	灰	体部外面凹縁。外面に白土と黒鉛具で直線文。口縁部内面から外面に透明釉?。	時期不詳
第13308 PL.78	在池系土器 磁器	12K黄込め 破片	口 - 底 3.7 高 -	赤色粘土粒含む/糖	底部左回転糸切無調整。底部内面中央山形に突き出る	江戸時代
第13308 PL.78	在池系土器 磁器	30K黄込め 破片	口 - 底 3.5 高 -	赤色粒含む/糖	底部外面糸切と思われるが、薄線により不明。底部内面左回転の輪軸目。	江戸時代
第13308 PL.78	明・明右陶器 すり鉢	39K黄込め 底部片	口 - 底 (16.0) 高 -	赤黒	見込みと体部境は湾曲する。底部すり目は不明。	江戸時代
第13308 PL.78	製作地不評陶器 行平蓋	32K黄込め 体部1/3。口縁部 一部	口 (15.0) 高 3.4	灰白	天井部内面に鉄泥を2条施し。鉄泥間に飛脱。天井部内面に錆色の鉄軸。	江戸・近代
第13308 PL.79	製作地不評陶器 行平蓋	30K 口縁部1/4。底部 完	口 16.0 高 3.7	黒黒	天井部外面に鉄泥を2条施し。鉄泥間に飛脱。天井部内面に鉄軸。口縁部下部に内径3方。	江戸・近代
第13308 PL.79	製作地不評陶器 行平蓋	24K 口縁部1/4。底部 完	口 10.0 底 7.0 高 6.0	灰	小型の行平蓋。体部外面に飛脱。口縁部外面から体部外面に鉄泥。内面に鉄軸。蓋受け部と底部外面無縁。	江戸・近代
第13408 PL.79	製作地不評陶器 行平蓋	31K水路下層 3/4	上 (16.4) 下 - 高 -	灰白	体部外面の飛脱部分に鉄泥。注ぎ口と内面に鉄軸。残存部に取っ手がなく。欠損部に片手が付く可能性高い。	江戸・近代
第13408 PL.79	製作地不評磁器 磁器	10K水路下層 磁器	口 2.8 底 2.0 高 2.0	白	上面凹縁に1重線縁の染付。外面下端から筒部内面無縁。器底少ツースなどの蓋であろう。	
第13408 PL.79	製作地不評磁器 磁器	47K黄込め 動物増加加	口 (12.5) 底 (6.4) 高 3.9	白	上面に小円孔を設ける。外面に「実用新家」(製物増)の文字が残る。文字は古印用印付。	国産炊き用品
第13408 PL.79	製作地不評陶器 おろし器	13K水路下層 破片	長 - 幅 - 厚 1.0	灰白	おろし目は剣突で作成。持ち手部分に茶色。本体に透明釉。	
第13408 PL.79	製作地不評陶器 おろし器	21K水路下層 2/3	長 幅 - 厚 0.8	灰白	持ち手に吊り下げ用の円孔。持ち手は茶色。本体は透明釉。おろし目はやや粗い。	
第13408 PL.79	製作地不評陶器 蓋	45K水路下層 1/3	口 (14.6) 高 -	灰白	天井部外面錆色の鉄軸で製と縁縁で施文。口縁上面鉄軸化。口縁部下面無縁。天井部内面鉄軸。天井部に小円孔1方。	
第13408 PL.79	製作地不評陶器 磁器	15K水路下層 1/4	口 (16.2) 高 -	灰黄緑	内外面に鉄軸。蓋受け部無縁。体部に直線の釘跡具の可能性もある。	
第13408 PL.79	美濃陶器 磁器	40K水路上層 1/4	口 (19.0) 高 -	にぶい・黄緑	内面から体部外面中に暗褐色釉。低い取っ手1方所残存。底部外面は同心内の沈陥。体部外面下に「岐955」の生産者番号。底部外面覆付着。	陶磁器代用品
第13408 PL.79	製作地不評陶器 磁器	30K水路下層 1/4	口 (21.8) 高 -	淡黄	内外面に錆色の鉄軸。只取鉢の取っ手1方所残存。	
第13408 PL.79	明・明右陶器 すり鉢	21K黄込め 底部	口 (13.0) 高 -	赤黒	内面の底部と体部境は明瞭。底部すり目は放射状。	
第13508 PL.79	磁子・笠即陶器 すり鉢	15K 体部一部。底部 1/4	口 (17.2) 高 -	にぶい・黄緑	内面すり目は密に入れる。内面は鉄軸化処理でこく薄く無縁。外面は高台外面中心以上に茶色の鉄軸を施軸。	
第13508 PL.79	磁子・笠即陶器 磁器	25K黄込め 体部以下1/4	口 (18.3) 高 -	明黄緑	内面から高台外面に鉄軸。見込みは製造具痕跡。	
第13508 PL.79	在池系土器 磁器	13K黄込め 破片	口 - 底 - 高 -	にぶい・黄緑	丸底で取っ手なし。釣り手を口縁部に貼り付ける。底部外面周縁に小まじり段差。	酸化炭酸焼成

遺物観察表

種 別 Pl. No.	種 類 No.	出土位置 残存部位	計測値		胎土/地成色調 石片・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第13598	455	在地系土器か 磁器	30K水路下層 破片	口 底	- 高	黒色胎土/明 黄釉	口縁部底い。丸底。取っ手なしし約り手は不明。	酸化炎焼成	
第13598	456	在地系土器	30K水路下層 破片	口 底	- 高	黒色胎土含む/ ぶい黄釉	口縁部底い。丸底。取っ手なしし約り手は不明。	酸化炎焼成	
第13608	457	在地系土器か 磁器	30K裏込め 破片	口 底	- 高	黒色胎土含む/相 模	口縁部底い。丸底。取っ手なしし約り手は不明。	酸化炎焼成	
第13608	458	在地系土器 磁器	8区水路下層 破片	口 底	- 高	黒色胎土含む/ ぶい相	口縁部底い。丸底。取っ手なしし約り手は不明。	酸化炎焼成	
第13608	459	在地系土器 磁器	22K 破片	口 底	- 高	黒色胎土含む/相 模	丸底。取っ手なしし約り手は不明。	酸化炎焼成	
第13608	460	肥前磁器 仏飯器	13K水路下層 杯部1/4	口 底	(6.4) 高	灰白	外面にいわゆる蝋書草文。		
第13608	461	肥前磁器 仏飯器	26K水路下層 底部から脚部	口 底	4.0 高	灰白	杯部に團扇。底面中央窪む。底面蛇ノ目部分にアルミ ナ塗布。		
第13608	462	製作地不詳磁器 仏飯器	33K 杯部1/2欠	口 底	5.2 3.3	高 6.1	灰白	外面赤絵。	土絵一部着 色
第13608	463	製作地不詳磁器 仏飯器	13K裏込め 杯部	口 底	3.3 (3.6)	高	灰白	杯部と脚部外面に團扇転写による染付。	
第13608	464	肥前磁器 神酒徳利	22K裏込め 13杯部から体部 1/2	口 底	1.6 高	灰白	体部外面1方所に染付。	神具	
第13608	465	製作地不詳陶器 かわらけか	38K水路下層 1/4	口 底	(10.7) (3.2)	高 2.1	灰白	口縁部外面以下回転削削り。口縁部から体部外面上に青 磁釉。輪軸は薄く水色を呈する。脚と思われる盛り上 がり1方所残存するが、欠損部多く不明。	神具か
第13608	466	肥前磁器か 香炉か	30K裏込め 底部	口 底	4.0 高	灰白	高台内に不明溝書。底部外面埋緑から体部外面上に青 磁釉。輪軸は薄く水色を呈する。脚と思われる盛り上 がり1方所残存するが、欠損部多く不明。		
第13608	467	肥前磁器 青磁火入	36K裏込め 1/6	口 底	(11.2) 高	灰オリーブ	内面中位から外面に青磁釉。		
第13608	468	製作地不詳磁器 稲荷瓦	21K 2/3	幅 底	2.7 6.2	高 (6.5)	白	鑄込み成形。上段磁器。向かって左側に置く。右部、 脚部等欠損。	
第13608	469	東系土器上層 漆器大銅像か	12K水路下層 部から脚部	口 底	- 高	明黄釉	外型による成形。着色は残らない。		
第13608	470	瀬戸・美濃陶器	22K水路下層 1/3	口 底	10.0 4.0	高 2.0	内面: 黒 断面: 淡黄	口縁部外面以下回転削削り。鑄輪を施し、体部外面以 下の軸を拭う。	江戸時代
第13608	471	瀬戸・美濃陶器	22K水路下層 2/3	口 底	10.2 4.6	高 2.0	淡黄	口縁部外面以下回転削削り。鑄輪を施し、体部外面以 下の軸を拭う。	江戸時代
第13608	472	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	22K水路下層 1/6	口 底	10.0 (4.0)	高 1.5	灰白	受け部に口縁と同じ高さ。受け部に「U」字状の挟り。 鑄輪を施した後、外面の軸を拭う。	江戸時代
第13608	473	製作地不詳陶器 打火受皿	22K 口縁部ほぼ欠	口 底	(9.7) 4.1	高 2.5	淡黄	器高が高く、内面から口縁部外面に灰輪。口縁部外面 は丁寧な回転削削り。	江戸・近代
第13608	474	瀬戸・美濃陶器 しょうそく	26K水路下層 底部から脚部	口 底	3.3 高	灰白	脚部は無軸で脚部以外は鉄軸。脚部底は回転糸切で中 空に小孔を穿つ。	江戸・近代	
第13608	475	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	15K裏込め 1/4	口 底	(9.9) (4.5)	高 1.7	淡黄	口縁部外面以下回転削削り。鑄輪を施し、体部外面以 下の軸を拭う。	
第13608	476	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	21K水路下層 1/3	口 底	(10.5) 4.4	高 2.2	淡黄	口縁部外面以下回転削削り。鑄輪を施し、体部外面以 下の軸を拭う。	
第13608	477	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	12K水路下層 1/3	口 底	(12.2) (5.5)	高 2.2	淡黄	口縁部外面以下回転削削り。鑄輪を施し、体部外面以 下の軸を拭う。	
第13608	478	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	30K水路下層 ほぼ完形	口 底	7.3 3.0	高 1.7	灰	受け部に「U」字状の挟り。口縁部外面以下回転削削 り。鑄輪を施した後口縁部外面以下の軸を拭う。	
第13608	479	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	36K水路下層 1/3	口 底	(8.3) (4.2)	高 1.5	陶灰	受け部に「コ」字形の挟りか。口縁部外面以下回転削削 り。鑄輪を施した後外面の軸を拭う。	
第13798	480	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	25K水路下層 口縁部一部欠	口 底	10.0 4.3	高 1.8	灰	受け部に「U」字状の挟り。口縁部外面以下回転削削 り。鑄輪を施した後口縁部外面以下の軸を拭う。	
第13798	481	製作地不詳陶器 打火受皿	12K水路下層 口縁部一部欠	口 底	9.8 4.5	高 2.1	灰	受け部に「U」字状の挟り。鑄輪を施した後外面の軸を拭 う。	
第13798	482	製作地不詳陶器 打火受皿	30K裏込め 1/2	口 底	(10.7) 4.0	高 2.1	淡黄	受け部には欠損。外面体部下位以下は丁寧な回転削削 削り。内側から口縁部外面に灰輪。	
第13798	483	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	26K 1/2	口 底	(10.2) 5.0	高 2.6	淡黄	受け部挟り部欠損。口縁部外面以下回転削削り。鑄輪 を施した後口縁部外面以下の軸を拭う。	
第13798	484	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	26K水路下層 1/4	口 底	(10.5) 高	灰	受け部に「U」字状の挟り。口縁部外面以下回転削削 り。鑄輪を施した後口縁部外面以下の軸を拭う。		
第13798	485	瀬戸・美濃陶器 打火受皿	26K水路下層 1/5	口 底	(10.3) 高	灰	受け部に「U」字状の挟り。口縁部外面以下回転削削 り。鑄輪を施した後口縁部外面以下の軸を拭う。		
第13798	486	製作地不詳陶器 打火受台	14K裏込め 口縁部2/6欠	口 底	(8.5) 4.7	高 5.0	灰	内面から脚部外面下側に灰輪。受け部に浅い「U」字 状挟り1方所。脚部下面右回転糸切無調整。	
第13798	487	瀬戸・美濃陶器 花瓶	25K水路下層 脚部	口 底	- 高	灰	外面沈線彫る。双耳取り付け。内外面鑄輪。	江戸時代	
第13798	488	瀬戸・美濃陶器 か花瓶	25K水路下層 口縁部3/4欠	口 底	(4.8) 5.2	高 11.5	白	白磁双耳花瓶。土絵の彫線彫認められない。	
第13798	489	製作地不詳磁器 青磁花瓶	24K 1/2	口 底	(4.8) 6.8	高 14.0	灰白	鑄込み成形で竹をかたどる。口縁部から体部外面下 面にクム青磁。	

遺物観察表

種 別 No.	種 類	出土位置 残存部	計測値	胎土/焼成色 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第13778 PL.80	490	製作地不詳陶器 花皿	24K水路下層 1/2	口 径 4.0 底 径 4.2	高 12.0	灰白	鑄込み成形。内面透明釉。外面青灰釉で口縁部より白釉 施す。高台端部鉄泥。	
第13778 PL.80	491	瀬戸・美濃陶器 か 柿木鉢	21K 底部1/2	口 径 12.6	高 -	淡黄	底部に凹孔1カ所。体部外面に失透性の浅緑色釉を施 し、青釉を流す。脚は2カ所残存し、4脚と推定され る。	
第13778 PL.80	492	製作地不詳陶器 柿木鉢	41K水路下層 1/3	口 径 (9.9)	高 -	橙	軟質施釉陶器。3脚と推定されるが、残存は2脚。口縁 部内面から底部外面に黒色釉。内面は化雑風に黒色釉 を薄く施釉。	小型備録か
第13778 PL.80	493	製作地不詳磁器 柿木鉢	19K水路下層 底部2/3	口 径 7.4	高 -	灰白	隅切りをした横断面方形で、底部に1カ所の凹孔を引 ける。4脚と推定される。表面に白土を点描した後、須 須の吹き墨地文上に植物を描く。脚端部を除き透明 釉。	備録か
第13778 PL.80	494	在地系土器上 部 柿木鉢	41K水路下層 1/4	口 径 (11.0)	高 7.1	黒	断面中央黒灰色。器表付近灰白色。焼し焼成の上器 木鉢。	
第13778 PL.80	495	在地系土器上 部 柿木鉢	45K水路下層 1/6	口 径 (14.6)	高 7.2	橙	型作りで口縁部外面橙白色に塗彩。	
第13778 PL.80	496	在地系土器上 部 柿木鉢	15K水路下層 底部1/2	口 径 (8.5)	高 -	橙	輪軸整形の上器で底部に水抜き穴らしき筋跡が残る。	
第13808 PL.80	497	瀬入系土器上 部 日皿	29K水路下層 完形	長 9.7 厚 1.2		金雲母含む/白	7カ所に凹孔を設ける。上面無釉より器面残れる。	
第13808 PL.80	498	瀬入系土器上 部 日皿	12K水路下層 1/3	径 (11.2)	高 -	白色鉱物含む/灰 白	円形でスリット状に複数筋跡をくり抜く。	
第13808 PL.80	499	在地系土器上 部 日皿	30K裏込め 破片	径 -	高 -	黒色鉱物含む/に ぶい・黄橙	下面回転系切縁。凹孔を複数あける。	
第13808 PL.80	500	瀬入系土器上 部 取っ手	24K水路下層 1/4	径 (13.0)	高 -	にぶい・黄橙	中央と端部に電線のとがが残る。1線の電熱器熱板であ ろう。	
第13808 PL.80	501	在地系土器上 部 取っ手	38K水路下層 取っ手	径 3.75 長 14.5	高 12.3	黒色鉱物含む/淡 橙	取っ手部分は輪軸整形。皿部分は貼り付け。皿部分の 通風口楕円形。	径-取手の径 長-取手の長
第13808 PL.80	502	在地系土器上 部 取っ手	32K 取っ手	径 3.55 長 13.9	高 -	黒色鉱物含む/橙	取っ手部分は輪軸整形。皿部分は貼り付け。皿部分の 通風口楕円形。	径-取手の径 長-取手の長
第13808 PL.80	503	在地系土器上 部 取っ手	11K水路下層 取っ手	径 3.9 長 11.3	高 10.5	黒色鉱物含む/橙	取っ手部分は輪軸整形。皿部分は貼り付け。皿部分の 通風口楕円形。	径-取手の径 長-取手の長
第13808 PL.80	504	瀬入系土器上 部 取っ手	21K水路下層 取っ手	径 3.7 長 10.0	高 9.7	黒色鉱物含むま ない/灰白	取っ手部分型作りで厚さは均一。皿部の通風口は円 形。	径-取手の径 長-取手の長
第13908 PL.80	505	瀬入系土器上 部 取っ手	19K水路下層 取っ手	径 3.6 長 (8.9)	高 8.9	黒色鉱物含むま ない/黄白 黄橙 断面:にぶ い・黄橙	取っ手部分型作りで厚さは均一。皿部の通風口は円形 の可能性高い。	径-取手の径 長-取手の長
第13908 PL.80	506	在地系土器上 部 取っ手	21K水路下層 取っ手	口 径 -	高 -	黒色鉱物含む/内 面・浅黄橙 断面: 黄橙	内面と口縁端部熱で変色。	
第13908 PL.80	507	在地系土器上 部 取っ手	38K水路下層 破片	口 径 -	高 3.2	黒色鉱物含む/外 面・黒黒 内面:黄 橙 断面:灰、 浅黄橙	側面に凹孔?を設ける。	江戸・近代
第13908 PL.80	508	在地系土器上 部 取っ手	30K水路下層 破片	口 径 -	高 3.8	黒色鉱物含む/黒 面	底面幅が狭いが、受け部は高い。	
第13908 PL.80	509	在地系土器上 部 取っ手	32K裏込め 破片	口 径 -	高 5.0	黒色鉱物含む/黒 面	底面湾曲する。受け部は高い。	
第13908 PL.80	510	在地系土器上 部 取っ手	29K水路下層 破片	口 径 -	高 3.6	黒色鉱物含む/黒 面	受け部の傾斜がやや大きい。底面に覆れが認められ る。	
第14008 PL.80	511	在地系土器上 部 取っ手	21K 破片	口 径 -	高 3.7	黒色鉱物含む/黒 面	底面に覆付着。	
第14008 PL.80	512	瀬入系土器上 部 取っ手	38K水路下層 破片	口 径 -	高 5.5	金雲母含む/外 面:灰、にぶい・ 黄橙 内面:にぶ い・黄橙 断面:に ぶい・黄橙	側面に凹孔。	
第14008 PL.80	513	在地系土器上 部 取っ手	21K 1/2	口 径 (17.5)	高 8.3	黒色鉱物含む/黒 面	断面中央灰色。器表付近灰白色。貼り付け脚が2カ所 残存し、脚は3カ所であろう。口縁端部外面に凹 輪。	
第14008 PL.80	514	製作地不詳陶器 磁器鉢	21K 1/4	口 径 (40.5)	高 (29.3)	橙	鉱物を含み焼き締まりは強い。高台の飾り孔は形状、 個数共に不揃い。内面と高台内面無釉。外面緑色系濃淡 の斑状の釉。	
第14008 PL.80	515	製作地不詳陶器 磁器蓋	33K 完形	口 径 10.7 径 10.4	高 2.2	明赤釉	上面右回転系切無調整。下面の突起は低い円筒状。無 釉。上面右回転系切無調整。下面は方孔目。下面に中 空突起貼り付け。突起の1カ所穿孔。穿孔は焼成時の 破損防止用か。金属音がするほど焼き締まる。	径=凸径
第14008 PL.80	517	製作地不詳陶器 磁器蓋	21K 下部2区	径 11.1	高 -	灰黄	金属音がするほど焼き締まる。鉄線部の釉を薄く施 釉。左右の型で成形。先端欠陥。	
第14118 PL.81	518	製作地不詳磁器 戸車	11K水路下層 完形	外 径 3.0 内 径 0.8	厚 0.7	白	側面は無釉で酸化アルミナ塗布。内外面は透明釉。	江戸・近代 外=外径 内=内径
第14118 PL.81	519	製作地不詳磁器 戸車	12K水路下層 完形	外 径 3.2 内 径 1.2	厚 0.8	白	側面は無釉。内外面は透明釉。	江戸・近代 外=外径 内=内径

遺物観察表

種 別 No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第14198 PL.81	520 製作地不評磁器 戸草	19区水路下層 1/2	94 内	3.5 厚 0.7	灰白	側面は無輪,内外面は透明輪。	江戸・近代 外=外径 内=内径
第14198 PL.81	521 製作地不評磁器 戸草	21区水路下層 3/4	94 内	1.5 厚 1.0	白	側面は無輪で酸化アルミナ塗布,内外面は透明輪。	江戸・近代 外=外径 内=内径
第14198 PL.81	522 製作地不評陶器 タイル	21区 1/4	口 底	- 厚 0.8	淡黄	乾式タイルであろう。表面はピンク色の輪,裏面は白 内に罫を組み合わせたマークを施す。	
第14198 PL.81	523 瓦 軒先瓦	38区水路下層 瓦頭部1/2	長 幅	- 高 -	灰白	瓦頭面に唐草文,瓦頭部分は欠損。	
第14198 PL.81	524 瓦 十能瓦	30区水路下層 破片	長 幅	- 厚 1.3	黄緑	凸面は輪縁状の型痕,凹面は強い撫で調整,断面は 黒色,器表は水の影響で褐色物付着。	
第14198 PL.81	525 瓦 十能瓦	21区水路上層 破片	長 幅	- 厚 0.9	灰黄	凸面は輪縁状の型痕,凹面は強い撫で調整,断面は 灰色,凸面器表は灰白色。	
第14198 PL.81	526 瓦 十能瓦	4区裏込め 破片	長 幅	- 厚 1.5	灰白	凸面は輪縁状の型痕,凹面は強い撫で調整,器表は 灰色で感じ発成。	
第14298 PL.81	527 煉瓦 普通煉瓦	24区水路下層 1/3	長 幅	23.8 高 5.9	明赤褐色	手抜煉瓦,平に刷の押印,側文内の「生」字は不鮮明で 確認できない。	樹生産
第14298 PL.81	528 煉瓦 普通煉瓦	3区 一部欠	長 幅	22.8 高 6.0	橙	平の面に切斷痕が残る,1カ所に楕円形内に右から 「免齋」押印が認められる。上敷免齋である。	日本煉瓦製
第14298 PL.81	529 煉瓦 普通煉瓦	23区 一部欠	長 幅	23.0 高 6.2	橙	切斷痕が残る,押印は認められない,日本煉瓦か下 敷製であろう。	
第14398 PL.81	530 煉瓦 普通煉瓦	24区水路下層 一部欠	長 幅	22.5 高 5.6	明赤褐色	手抜煉瓦,平に刷の押印,側文と同じ上と側文の 一部らしき印が残る。	樹生産
第14398 PL.82	531 煉瓦 普通煉瓦	1区 一部欠	長 幅	22.0 高 6.8	にぶい赤褐色	平の面に切斷痕が残る,コンクリートの付着が多く押印は 不明,日本煉瓦か下敷製であろう。	
第14398 PL.82	532 煉瓦 普通煉瓦	21区 1/2	長 幅	11.0 高 5.8	橙	残存部に押印認められない,手抜煉瓦。	
第14398 PL.82	533 煉瓦 普通煉瓦	22区 1/4	長 幅	11.0 高 5.5	輪暗赤褐色	残存部に押印認められない,手抜煉瓦。	
第14498 PL.82	534 煉瓦 普通煉瓦	13区 破片	長 幅	- 高 6.0	橙	平に切斷痕が残る小片,平に「口」状文内に「十二」の押 印,生産会社不明。	
第14498 PL.82	535 製作地不評磁器 フリップ母子	23区水路下層 完形	上 下	2.6 高 4.5	白	上部に溝を巡らす。下面は無輪。	上=上径 下=下径
第14498 PL.82	536 製作地不評磁器 フリップ母子	24区水路上層 完形	上 下	3.0 高 5.1	白	上部に溝を巡らす。上面に「U」字状の切り込み,下面 は無輪。	上=上径 下=下径
第14498 PL.82	537 製作地不評磁器 フリップ母子	22区裏込め 完形	上 下	3.1 高 5.1	白	上部に溝を巡らす。下面は無輪。	上=上径 下=下径
第14498 PL.82	538 製作地不評磁器 フリップ母子	45区水路下層 完形	上 下	2.9 高 5.1	白	上部に溝を巡らす。下面は無輪。	上=上径 下=下径
第14498 PL.82	539 製作地不評磁器 2線クリート	21区水路下層 完形	長 幅	9.8 厚 1.6	白	電線を固定する2カ所を「U」字状に窪ませる,固定穴 は2カ所。	
第14498 PL.82	540 製作地不評磁器 2線クリート	33区水路下層 完形	長 幅	10.0 厚 1.8	白	電線を固定する2カ所を「U」字状に窪ませる,固定穴 は2カ所。	
第14498 PL.82	541 製作地不評磁器 シーリングロー ゼット	26区 一部欠	径 高	7.9 高 4.8	白	蓋は欠損,取付穴は2カ所,電圧等の記載なし。	芯=芯径
第14498 PL.82	542 製作地不評磁器 シーリングロー ゼット	21区 身	径 高	7.0 高 -	白	蓋は欠損,取付穴は2カ所,電圧等の記載なし。	芯=芯径
第14498 PL.82	543 製作地不評磁器 引留母子	33区水路下層 完形	上 下	3.1 高 6.5	白	下面を除き青色輪。上面に「ウ」の染付。	上=上径 下=下径
第14498 PL.82	544 製作地不評磁器 引留母子	24区水路上層 一部欠	上 下	3.1 高 6.5	白	下面を除き透明輪,上面に下線で「朝」の文字,文字は 不鮮明で使用器具不明。	上=上径 下=下径
第14498 PL.82	545 製作地不評磁器 引留母子	38区水路下層 端部欠	径 長	1.6 長 -	白	つば部分外面から内面に透明輪。	
第14498 PL.82	546 製作地不評磁器 引留	22区水路上層 1/2	径 長	1.5 長 -	白	端部外面から内面に透明輪。	
第14498 PL.82	547 製作地不評磁器 引留	22区水路上層 1/2	径 長	1.5 長 -	白	端部外面から内面に透明輪。	
第14498 PL.82	548 納入系上蓋か 土質か	21区水路上層 破片	口 底	(13.0) 高 -	黒色鉱物含む/橙	木型による成形か。	
第14498 PL.82	549 納入系上蓋か 土質か	25区水路下層 ソケット部片	口 底	(18.0) 高 -	赤色粒含む/橙	断面中央黒色,器表付近灰白色,ソケット部分内溝,ソ ケット部分に接合痕。	
第14598 PL.83	550 製作地不評陶器 陶管	48区 4/5	口 底	28.0 高 68.6	橙	マンガン輪。	
第14598 PL.83	551 製作地不評陶器 陶管	30区 1/3	口 底	30.2 高 -	橙	輪縁不明,内面に成形時の縦方向スジ明瞭。	
第14598 PL.83	552 製作地不評陶器 陶管	24区 ソケット部1/4	口 底	26.9 高 -	橙	マンガン輪か。	
第14598 PL.83	553 製作地不評陶器 陶管	21区 直管部1/3	口 底	- 高 -	橙	輪縁不明,内外面に成形時の縦方向スジ明瞭。	
第14598 PL.83	554 製作地不評陶器 陶管	21区 3/4	口 底	- 高 -	橙	マンガン輪,内面に組作りの接合痕複数段残る,外面 2方向に型輪跡?残る。	

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 部 種	出土位置 数 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第14598 PL.83	555	製作地不評陶器	24区 3/4	口 底 20.5	高 -	白 -	マンガン釉。内面に成形時の縦方向スリ跡。
第14598 PL.84	556	製作地不評陶器	6区裏込め 管筒	口 底 19.2	高 -	白 -	マンガン釉。外面四方に型痕あり。
第14608 PL.84	557	製作地不評磁器	11区水路下層 紐玉か	外 内 0.9	厚 0.5	白 -	白磁。円孔内と円孔間縁無軸。
第00098 PL.84	558	製作地不評磁器	21区水路下層 急須皿	長 幅 1.8	厚 0.7	白 -	白磁で下面と一方の側面は無軸。下面に「花巻家製」の押印。
第14608 PL.84	559	製作地不評磁器	2区水路下層 急須皿	長 幅 1.8	厚 0.6	白 -	白磁。下面と一方の側面は無軸。
第14608 PL.84	560	製作地不評陶器	30区水路下層 北瓶蓋	口 底 (3.4) (4.5)	高 5.0	灰白 -	外面に「P」の染付。高台部分のみ無軸。透明釉に貫入する。
第14608 PL.84	561	製作地不評陶器	24区水路下層 白磁レンゲ	長 幅 -	高 -	灰白 -	取っ手先端の括れ部に無軸部分。括れ部分を引っかけて使成か。
第14608 PL.84	562	製作地不評磁器	30区水路下層 フック	幅 厚 -	高 4.3	灰白 -	上部欠損。白磁。壁に接する部分は無軸。
第14608 PL.84	563	製作地不評磁器	9区裏込め 平皿	口 下 3.7	高 -	白 -	体部外面透明釉。内面と端部無軸で端部に円孔。端部突起1カ所残存。用途不明。
第14608 PL.84	564	右地系土器	21区水路下層 釜形土器	口 底 (10.0)	高 -	外面:黒褐 断面:黒	轆轤整形。罫を有する羽形蓋で体部外苑は回転彫削り。
第14608 PL.84	565	右地系土器	4区 磁片	口 底 (30.4)	高 -	黒色鉄物含む/黒褐	断面黒色。器表付近灰白色。器外面調整は丁寧であるが、内面は轆轤目が残っており、火具類の高台と推定される。
第14608 PL.84	566	銅筋 スプーン	39区水路下層 2区欠損	長 幅 -	厚 -	高 -	柄とつばの一部が残存。用途は不明。
第14608 PL.84	567	銅筋 歯ブラシ	22区水路下層 長は欠失	長 幅 14.6	厚 0.4	赤褐 -	商品名や会社名は確認できない。
第14608 PL.84	568	牛骨か 歯ブラシ	43区水路下層 長は欠失	長 幅 16.3	厚 0.5	灰白 -	柄は反る。柄にライオン歯磨子一文字の印刷文字と赤い●印。柄の吊り穴は両面から穿孔。
第14608 PL.84	569	銅筋 表示板	26区水路下層 2/3	長 幅 30.2	厚 0.2	白 -	電柱等に取り付けられる「本町一丁目」の町名表示板。上下に取り付け穴。経年劣化で変色・硬化する。

ガラス製品

種 別 PL.No.	No.	種 類 部 種	出土位置 数 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第14798 PL.84	570	ガラス おはじきか	26区水路下層 完形	長 2.0 短 1.9	厚 0.5	透明	楕円形。表面は花形を呈し、裏面は「糸」のエンボス。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	571	ガラス おはじき	26区水路下層 完形	長 1.8 短 1.6	厚 0.3	緑灰/透明	表面は格子目。裏面は平行線。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	572	ガラス おはじき	27区裏込め 完形	長 1.7 短 1.5	厚 0.4	白/水	楕円形。表裏で直行する平行線。表に水色の細い線。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	573	ガラス おはじき	47区水路下層 完形	長 2.7 短 2.6	厚 0.5	透明/オレンジ	楕円形。表面のみ平行線。中にオレンジ色ガラスを封入。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	574	ガラス ビー玉	33区水路下層 完形	径 1.2	高 -	緑灰/透明	気泡微量含む。	
第14798 PL.84	575	ガラス ビー玉	33区水路下層 完形	径 1.2	高 -	暗緑灰/透明	やや色ムラがある。	
第14798 PL.84	576	ガラス ビー玉	33区水路下層 完形	径 1.4	高 -	透明/黄	断面星形の黄色ガラス封入。	
第14798 PL.84	577	ガラス ビー玉	24区水路下層 完形	径 1.6	高 -	透明/赤	断面星形の赤色ガラス封入。	
第14798 PL.84	578	ガラス ビー玉	25区水路下層 完形	径 1.8	高 -	暗緑灰/透明	大きな目の気泡微量入る。	
第14798 PL.84	579	ガラス ビー玉	33区水路下層 完形	径 1.7	高 -	緑灰色透明	大きな目の気泡含む。	
第14798 PL.84	580	ガラス ビー玉	25区水路下層 完形	径 1.6	高 -	白/赤	白色半透明と赤色ガラスのマール模様。	
第14798 PL.84	581	ガラス ビー玉	24区水路下層 完形	径 1.7	高 -	緑灰/透明	気泡少量含む。	
第14798 PL.84	582	ガラス ビー玉	26区水路下層 完形	長 2.0 幅 1.8	高 -	青/透明	気泡が入り、やや歪な形状。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	583	ガラス ビー玉	11区水路下層 完形	径 2.3	高 -	白	白色不透明ガラスに細い赤色線。	
第14798 PL.84	584	ガラス 右廻り	1区水路下層 一部欠	長 3.5 幅 -	厚 0.8	暗緑/透明	無文。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	585	ガラス 右廻り	31区水路下層 1/3	長 (3.5) 幅 -	厚 0.6	オリーブ灰/透明	気泡微量含む。表面に飛行機のエンボス。	長=長径 短=短径
第14798 PL.84	586	ガラス 右廻り	31区水路下層 2/3	長 3.7 幅 -	厚 0.9	暗オリーブ灰/透明	気泡含む。三角文と巴文のエンボス。	長=長径 短=短径

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 部 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成色調 石材・素材等	成形・装飾の特徴	備 考
第14789 PL.84	587	ガラス 石罫り	1区水路下層 一部欠	長 4.3× 4.1 短 -	厚 0.8	暗青灰/透明	気泡含む。中央円形に窪ませる。 長=長径 短=短径
第14790 PL.84	588	ガラス 石罫り	7区水路下層 一部欠	長 4.5× 4.8 短 -	厚 1.0	暗緑灰/透明	気泡含む。中央くぼみ内にエンボスで文様。 長=長径 短=短径
第14791 PL.84	589	ガラス 石罫り	11区水路下層 完形	長 4.5 短 -	厚 0.7	暗緑/透明	気泡含む。中央に花文を押し。 長=長径 短=短径
第14792 PL.84	590	ガラス 石罫り	26区水路下層 2/3	長 4.3 短 -	厚 0.7	緑/透明	気泡含む。中央を円形に窪ませる。 長=長径 短=短径
第14793 PL.84	591	ガラス 石罫り	26区水路下層 1/2	長 5.0× 4.7 短 -	厚 0.8	緑灰/透明	気泡含む。中央に三角文と巴状文を押し。楕円形。 長=長径 短=短径
第14794 PL.84	592	ガラス 石罫り	26区水路下層 完形	長 3.5× 3.7 短 -	厚 0.7	緑灰/透明	気泡含む。中央に花文を押し。 長=長径 短=短径
第14795 PL.84	593	ガラス 石罫り	42区水路下層 1/2	長 4.7 短 -	厚 0.7	オリーブ灰/透明	気泡含む。交差する直線と丸文のエンボス。 長=長径 短=短径
第14796 PL.84	594	ガラス 石罫り	24区水路下層 一部欠	長 4.5 短 -	厚 1.0	薄青/透明	気泡含む。2振り月の刻削と「村正」のエンボス。 長=長径 短=短径
第14797 PL.84	595	ガラス 石罫り	19区水路下層 一部欠	長 5.1× 5.3 短 -	厚 1.0	にぶい赤/透明	気泡含む。中央くぼみ内にエンボスで文様。 長=長径 短=短径
第14798 PL.84	596	ガラス 石罫り	33区水路下層 一部欠	長 5.4 短 -	厚 1.0	暗緑/半透明	気泡含む。表面全体に矢羽文のエンボス。 長=長径 短=短径
第14799 PL.84	597	ガラス 石罫り	42区水路下層 1/2	長 (6.6) 短 -	厚 0.8	オリーブ灰/透明	気泡含む。中央くぼみ内に放射状のエンボス。 長=長径 短=短径
第14799 PL.84	598	ガラス 石罫り	24区水路下層 一部欠	長 5.9 短 -	厚 1.1	暗赤黒/透明	「三勇士」のエンボスがあり、薄青三勇士指すものと推測される。 長=長径 短=短径
第14800 PL.85	599	ガラス インク瓶か	12区水路下層 完形	□ 2.3 高 5.4	青緑/透明	コルク蓋。円筒形の体部周囲にラベルを貼るタイプ。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	600	ガラス インク瓶か	39区水路下層 完形	□ 2.8 高 6.7	透明	コルク蓋。底部に「SIMCO」のエンボス。パーティングライン明瞭。 縦崎インキ	
第14800 PL.85	601	ガラス インク瓶か	1区水路下層 一部欠	□ (2.0) 高 7.4	透明	コルク蓋。底部に「SIMCO」のエンボス。パーティングライン明瞭。 縦崎インキ	
第14800 PL.85	602	ガラス インク瓶か	30区水路下層 完形	□ 1.8 高 4.3	青緑/透明	体部円筒形のインク瓶に形状が似る。ねじ口。底部の菱形内に「SK」のエンボス。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	603	ガラス ワンダーインク 瓶か	12区水路下層 完形	□ 1.7 高 5.4	透明	体部六角形。上部円筒形の瓶。ねじ口で円孔のある樹脂製中蓋あり。内部に黒色物質。底部○内に「M」のエンボス。 丸蓋製か	
第14800 PL.85	604	ガラス インク瓶か	44区水路下層 完形	□ 1.9 高 5.5	透明	背に「PILOT MADE IN JAPAN」; 底部に「0」; 「46」のエンボス。ねじ口。 パイロット製	
第14800 PL.85	605	ガラス インク瓶か	33区水路下層 完形	□ 1.1 高 5.4	透明	気泡含まないが、底部の厚薄不均一。体部に「クロンボ」; 底部に「ヤマト」のエンボス。 ロイドインキ社製か	
第14800 PL.85	606	ガラス 瓶か	7区 完形	□ 4.6 高 4.4	青緑/透明	体部に「ヤマト」; 底部に「ヤマト」のエンボス。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	607	ガラス 瓶か	7区水路下層 完形	□ 4.7 高 4.5	青緑/透明	「ヤマト」類。瓶と同色。同形。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	608	ガラス 瓶か	22区水路下層 完形	□ 6.2 高 5.9	青緑/透明	ねじ口。大きい気泡含む。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	609	ガラス ペロペロか	24区裏込め 完形	□ 2.5 高 2.0	透明	器壁厚く、機型製の製品。外面に断面三角形の縦線。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	610	ガラス ペロペロか	25区水路下層 完形	□ 3.2 高 2.2	青緑/透明	コンボートの器形。外面には花弁状の凹凸を付ける。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	611	ガラス ペロペロか	7区横丸 完形	□ 3.7 高 1.8	薄緑/透明	コンボート皿形。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	612	ガラス ペロペロか	22区水路下層 完形	□ 4.5 高 -	透明	高台を有する皿状の器形。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	613	ガラス 菓子型か	13区水路下層 完形	□ 5.5 高 2.7	透明	器壁厚く、花形を呈する。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	614	ガラス 菓子型か	23区水路下層 □口線部/2欠	□ (5.1) 高 2.7	透明	器壁厚く、花形を呈する。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	615	ガラス ニッキ水瓶か	26区 完形	□ 1.3 高 8.3	薄緑/透明	瓢箪形。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	616	ガラス ニッキ水瓶か	24区水路下層 □口線部欠	□ - 高 -	透明	瓢箪形。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	617	ガラス ニッキ水瓶か	11区水路下層 完形	□ 1.2 高 9.7	透明	口縁シアークット。ラムネ瓶形。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	618	ガラス ニッキ水瓶か	26区水路下層 完形	□ 1.0 高 11.9	透明	高射瓶を模した瓶。「高射瓶」と○内に「K」のエンボス。口縁シアークット。パーティングライン明瞭。 長=長径 短=短径	
第14800 PL.85	619	ガラス 瓶か	33区水路下層 □口線部欠	□ 3.8× 3.7 高 -	透明	正方形の四方に葡萄の葉と房をデザイン化した浮き線で表す。底部に「DAIKOKU」のエンボス。オーシャンウイスキーの瓶 清酒飲料瓶か	
第14998 PL.86	620	ガラス 洋酒瓶	45区水路下層 料部以下	□ 5.5× 5.5 高 -	透明	方形瓶の四方に葡萄の葉と房をデザイン化した浮き線で表す。底部に「DAIKOKU」のエンボス。オーシャンウイスキーの瓶 大葡萄洋酒瓶	

遺物観察表

種 別 PL.No.	種 類 ビニル瓶	出 土 位 置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第14998 PL.86	621 ガラス ビール瓶	11K 完形	口 2.2 底 6.4 高 28.9	茶/透明	パーティングライン明瞭。肩にマークと「TRADE MARK」 下部に「DAIIPPON BREWERY Co., Ltd.」のエンボス。	
第14998 PL.86	622 ガラス 調味料瓶	22K水路上層 完形	口 2.6 底 4.5 高 8.5	透明	「日本専売公社」のエンボス。反対面に「」のエンボス。 気泡含まないパーティングライン明瞭。	日本専売公 社瓶
第14998 PL.86	623 ガラス 調味料瓶	22K水路上層 完形	口 1.2 底 3.5 高 7.0	透明	底部外面に「味の素」、「o」のエンボス。	味の素瓶
第14998 PL.86	624 ガラス 調味料瓶か	23K水路下層 一部欠	口 1.5 底 3.0 高 7.4	透明	ねじ口。厚みがあり、カウツガラス製の瓶。扇形のラベル 貼付箇所を設ける。	
第14998 PL.86	625 ガラス 調味料瓶か	15K 完形	口 2.2 底 3.2 高 7.0	青緑/透明	10角形瓶。パーティングライン明瞭。ねじ口。	
第14998 PL.86	626 ガラス 食品瓶	22K水路下層 完形	口 4.0 底 3.8 高 5.7	透明	ねじ口。体部横断面は8角形。	
第14998 PL.86	627 ガラス 食品瓶	11K 完形	口 6.0 底 4.5 高 8.0	青緑/透明	パーティングライン明瞭。広口瓶。	
第14998 PL.86	628 ガラス 食品瓶	24K 完形	口 5.0 底 3.1 高 9.4	緑/透明	器壁やや厚い。パーティングライン明瞭。	
第14998 PL.86	629 ガラス 食品瓶	22K水路下層 完形	口 2.0 底 3.5 高 9.2	緑/透明	体部横断面8角形。パーティングライン明瞭。口はやや 窄縮。	
第14998 PL.86	630 ガラス 食品瓶	21K 完形	口 5.0 底 3.2 高 8.3	青緑/透明	器壁厚い。体部断面8角形の広口瓶。口縁部のみパー ティングライン明瞭。	
第15008 PL.86	631 ガラス 食品瓶	22K水路下層 完形	口 6.0 底 4.5 高 10.3	緑/透明	体部横断面は18角形。口縁部のみパーティングライン 明瞭。	
第15008 PL.86	632 ガラス 食品瓶	30K水路上層 完形	口 3.5 底 5.4 高 14.5	透明	ねじ口。体部に比べて口径大きい。体部横断面は菱形。 パーティングライン明瞭。	
第15008 PL.86	633 ガラス 瓶	12K水路上層 破片	口 - 底 - 厚 0.7	透明	方形か長方形の皿。	
第15008 PL.86	634 ガラス 瓶か	28K 底部	口 1.1 底 7.1 高 -	透明	プレスガラス。外面に切子模の文様。	
第15008 PL.87	635 ガラス オイル瓶か	22K水路上層 一部欠	口 0.5 底 2.2 高 8.9	透明	表面に平坦なラベル貼付位置。背面下部に「27304」の エンボス。底部に「」エンボス3カ所。ねじ口。	ライター用 か
第15008 PL.87	636 ガラス オイル瓶か	21K 完形	口 0.5 底 2.9 高 9.0	透明	表面に平坦なラベル貼付位置。背面下部に「27304」の エンボス。底部に「」エンボス3カ所。ねじ口。	ライター用 か
第15008 PL.87	637 ガラス 灰皿	24K水路上層 1/2	口 12.0 底 17.7 高 3.2	透明	プレスガラス。底部外面に花文。	
第15008 PL.87	638 ガラス 化粧瓶か	12K水路下層 完形	口 3.0 底 5.0× 3.0 高 1.9	茶/透明	被せ蓋。中に白色物が残存。	クリーム瓶
第15008 PL.87	639 ガラス 化粧瓶	22K水路下層 完形	口 2.2 底 2.5× 1.2 高 2.3	白	小型。ねじ口。パーティングライン不明瞭。	クリーム瓶
第15008 PL.87	640 ガラス 化粧瓶か	15K 完形	口 6.3 底 8.5× 3.4 高 3.4	白	浅く、体部は平坦であるが、「0」押印1カ所。ねじ口。 パーティングライン不明。	クリーム瓶
第15008 PL.87	641 ガラス 化粧瓶	22K水路下層 完形	口 3.3 底 3.4× 2.8 高 3.2	白	小型。ねじ口。パーティングライン明瞭。	クリーム瓶
第15008 PL.87	642 ガラス 化粧瓶か	13K水路下層 1/2	口 (2.8) 底 (3.1) 高 3.4	白	ねじ口。小型。	クリーム瓶
第15008 PL.87	643 ガラス 化粧瓶	1区擾乱 化粧瓶	口 4.9 底 5.2× 2.2 高 4.9	白	底部に「共榮會特製品 ボンネットクリーム」のエンボ ス。体部12角形。ねじ口。	クリーム瓶
第15008 PL.87	644 ガラス 化粧瓶	25K水路上層 化粧瓶	口 5.2 底 5.9 高 4.4	白	ねじ口。底部に「1」「メヌマ」のエンボス。ラベル貼付 箇所は平坦。	クリーム瓶
第15008 PL.87	645 ガラス 瓶蓋	22K水路下層 完形	口 2.0 底 2.6 高 2.2	白	クリーム瓶の瓶盖。パーティングライン明瞭。	646の蓋
第15008 PL.87	646 ガラス 化粧瓶	22K水路下層 完形	口 3.7 底 4.0 高 4.1	白	クリーム瓶。底部資生堂のエンボスマーク。パーティ ングライン明瞭。	645の身
第15198 PL.87	647 ガラス 化粧瓶	24K 完形	口 1.8 底 1.5 高 11.5	透明	舞臺に「レイトレード」、「LITFOOD」のエンボス。コルク 栓。パーティングライン明瞭。	
第15198 PL.87	648 ガラス 化粧瓶	22K 完形	口 2.2 底 5.5× 3.3 高 15.9	透明	体部のラベル貼付場所以外は白目調。コルク栓。パー ティングライン明瞭。	
第15198 PL.87	649 ガラス 化粧瓶	33K水路上層 胴部欠	口 0.6 底 2.1 高 5.2	透明	表裏両面左下部に「月の友」エンボス。	
第15198 PL.88	650 ガラス 化粧瓶	7区 完形	口 1.6 底 6.4× 3.3 高 10.7	透明	底部壁厚不均一。側面に滑り止めの凹凸。パーティ ングライン明瞭。	
第15198 PL.88	651 ガラス 化粧瓶	21区 ほぼ完形	口 0.8 底 4.5 高 12.0	透明	断面木皿形。ねじ口。先細り口。気泡なくパーティ ングライン明瞭。	
第15198 PL.88	652 ガラス 化粧瓶	1区水路下層 化粧瓶	口 1.0 底 5.0 高 12.1	半透明	ねじ口。本体はすりガラス状。底部に資生堂マークと 「3」のエンボス。花輪マークは蓋状。	
第15198 PL.88	653 ガラス 化粧瓶	25K水路下層 一部欠	口 1.0 底 6.3× 2.3 高 14.3	薄紫/透明	口は段をなして細くなる。ねじ口。パーティングライ ンあり。底部に「Hme」のエンボス。	

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第15198 PL.88	654	ガラス 薬瓶	1区水路下層 完形	長 幅	6.0 3.5× 2.8	厚 1.4	透明	口縁はシアークットで扁平なイチジク形の瓶、パー ティングライン不明瞭。	
第15198 PL.88	655	ガラス 薬瓶	24区水路下層 口縁部欠	口 幅	- 3.4	厚 1.1	透明	扁平なイチジク形の瓶、パーティングライン不明瞭。	
第15198 PL.88	656	ガラス 薬瓶か	13区裏込め 完形	口 幅	2.0 3.0	高 6.5	透明	やや広口のコルク栓瓶、パーティングライン不明瞭。	
第15198 PL.88	657	ガラス 薬瓶	42区覆乱 完形	口 幅	1.7 2.1	高 6.2	緑青/透明	コルク栓、「タムシトリ」のエンボス。	
第15198 PL.88	658	ガラス 瓶	27区覆乱 完形	口 幅	1.0 1.5× 1.0	高 5.3	緑青/透明	体部横断面楕円形状の小型瓶、コルク栓、パーティ ングライン不明瞭。器厚不均一。	
第15198 PL.88	659	ガラス 瓶	33区水路下層 口縁部1/2欠	口 幅	(1.9) 3.8	高 10.5	透明	体部の裏に「覆香本舖」、「守田製薬」のエンボス。底部 外面にバリ残る。表はラベルを貼付。コルク栓。	
第15198 PL.88	660	ガラス 飲酒瓶	11区水路下層 完形	口 幅	3.4 3.6	高 5.1	白/半透明	底部に「WENTHOLIATUM REG. TRADE MARK」のエンボス。ね じ口。	
第15198 PL.88	661	ガラス 薬瓶	33区覆乱 完形	口 幅	1.4 2.6	高 7.5	透明	体部1方所にエンボスの目盛り。ねじ口。パーティ ングライン不明瞭。	
第15198 PL.88	662	ガラス 薬瓶	21区覆乱 一部欠	口 幅	- 4.0	高 10.0	透明	外面にエンボスによる目盛り1方所。パーティ ングライン不明瞭。	
第15298 PL.88	663	ガラス 瓶	21区水路下層 完形	口 幅	1.4 2.8× 1.6	高 7.0	緑青	体部の一方に「志らが赤毛染」「ナイス」、底部外面に 「TW」のエンボス。底部外面にバリ残る。横断面面取り した長方形。	
第15298 PL.88	664	ガラス 染料瓶	19区水路下層 完形	口 幅	1.2 2.5	高 7.0	透明	パーティングライン不明瞭。体部に「ひろろく」、「コノス 」定量のエンボス。	
第15298 PL.88	665	ガラス 染料瓶	8区水路下層 完形	口 幅	1.2 2.4	高 7.8	透明	ねじ口。体部に「元緑」、「定量」のエンボス。パーティ ングライン不明瞭。	
第15298 PL.88	666	ガラス クリーム瓶か	12区水路下層 完形	口 幅	6.3 6.5	高 3.0	青緑/透明	浅い中間形瓶で靴クリーム瓶と同形状。	靴クリーム 瓶か
第15298 PL.88	667	ガラス クリーム瓶	23区 完形	口 幅	4.9 5.9	高 2.9	透明	ねじ口。体部に「☆コロンプス」のエンボスを2カ所。 底部外面に小さく「T」と「J」のエンボス。	靴クリーム 瓶
第15298 PL.89	668	ガラス フックナー瓶	23区水路下層 完形	口 幅	1.5 2.2	高 7.1	透明	ねじ口。体部に「マヌッカラー 姉妹品」のエンボス。 パーティングライン不明瞭。気泡含まない。	
第15298 PL.89	669	ガラス 傘	32区裏込め 破片	上 径	(5.1) 傘	高 -	乳白	いわゆるP1セード。	
第15298 PL.89	670	ガラス 瓶	39区水路下層 完形	口 幅	1.8 2.1	高 4.7	透明	小型瓶。気泡含まない。パーティングライン不明瞭。	
第15298 PL.89	671	ガラス 瓶	42区水路下層 完形	口 幅	1.8 2.2	高 4.6	透明	小型瓶。パーティングライン不明瞭。	
第15298 PL.89	672	ガラス 瓶	23区水路下層 完形	口 幅	1.7 2.0	高 4.7	透明	小型瓶。底部に「K 14」のエンボス。	
第15298 PL.89	673	ガラス 瓶	23区水路下層 完形	口 幅	1.1 1.3	高 5.7	透明	細く器高が高い。コルク栓。気泡含まないが、器厚不均 一。	
第15298 PL.89	674	ガラス 瓶	11区水路下層 完形	口 幅	1.3 1.7	高 6.9	透明	細く器高が高い。コルク栓。体部にホタルの絵と「ホタ ル目」のエンボス。パーティングライン不明瞭。	
第15298 PL.89	675	ガラス 瓶	23区水路下層 完形	口 幅	1.5 1.8	高 4.9	透明	体部横断面は内形。底部花文内に「花」のエンボス。	
第15298 PL.89	676	ガラス 瓶	42区水路下層 完形	口 幅	3.6 2.8	高 5.8	白/半透明	ねじ口。底部に「K 4」のエンボス。パーティングライ ン不明瞭。	
第15298 PL.89	677	ガラス 瓶	21区 完形	口 幅	3.0 3.8	高 8.5	透明	底部外面に「A」、「70」、「A 4」の押き文字。	
第15298 PL.89	678	ガラス 瓶	33区水路下層 完形	口 幅	1.8 1.8	高 5.4	透明	小型円筒状の瓶。底部にツツ輪状文内に「K」のエンボ ス。	
第15298 PL.89	679	ガラス 瓶	42区水路下層 完形	口 幅	1.7 3.6× 2.1	高 5.5	透明	底部厚い。体部横断面長方形。パーティングライン不 明。	
第15298 PL.89	680	ガラス 瓶	42区水路下層 完形	口 幅	4.8 4.7	高 3.4	青緑/透明	器高低い。ねじ口。器厚不均一。	
第15298 PL.89	681	ガラス 瓶	44区水路下層 完形	口 幅	4.8 5.3	高 3.8	透明	器高低い。パーティングライン不明。ねじ口。	
第15298 PL.89	682	ガラス 瓶	42区覆乱 完形	口 幅	3.2 3.3	高 3.6	緑青/透明	ねじ口。器厚不均一。気泡含む。	
第15298 PL.89	683	ガラス 瓶	29区水路下層 口縁部1/2欠	口 幅	2.5 5.1	高 6.5	透明	フラスコ形を呈する。パーティングライン不明瞭。	
第15298 PL.89	684	ガラス 瓶	7区 完形	口 幅	4.4 2.4	高 11.9	透明	共蓋で口縁部内面すりガラス状。底部に「T・」のエン ボス。両面にラベル貼付箇所あり。	
第15298 PL.89	685	ガラス 瓶	12区 完形	口 幅	3.7 5.0	高 17.9	青緑/透明	王冠蓋。大きい気泡微量含む。	



写真図版





1 桐生本町 遠景 北東

2 天満宮付近上空より見た近年の本町一・二丁目の町並み
桐生市教育委員会提供 北

3 南西上方より見る天満宮境内の遠望 桐生市教育委員会提供 西



4 近年の本町通の町並み 桐生市教育委員会提供 南



機業
真尾宗平

1 旧真尾邸(本町一丁目)桐生市中案内雙六(明治30)
桐生市教育委員会提供



2 本町一から天満宮を望む(大正4年) 桐生市教育委員会提供 南



3 曾我邸(本町一丁目・昭和37年) 桐生市教育委員会提供 東



4 書上商店2(本町二丁目・大正昭和) 桐生市教育委員会提供 東



5 矢野本店(本町二丁目)から南方向(大正4年)
桐生市教育委員会提供 北



6 本町二から三丁目を望む(大正4年)
桐生市教育委員会提供 北



7 近年の本町通と天満宮 桐生市教育委員会提供 南



8 現在の桐生本町二丁目 本町通 南



1 7区 水路完掘 東側面2段目 西



2 7区 水路完掘 東側面2段目 北



3 7区 東側面石積み状態 西



4 7区 掘り方 北



5 7区 東側面1段目 北



6 7区 東側面1段目 西



7 7区 土層断面A-A' 北



8 7区 裏込め・石積み遺物出土状態 西

PL.4



1 8区 水路完掘 東側面2段目 西



2 8区 水路完掘 東側面2段目 南



3 8区 東側面石積み状態 南西



4 8区 掘り方 西



5 8区 東側面1段目 西



6 8区 東側面1段目 北西



7 8区 土層断面A-A' 北



8 8区 裏込め上部遺物出土状態 北



1 49区 水路完掘 西側面2段目 東



2 49区 西側面石積み状態 東



3 49区 土層断面A-A' 南



4 9区 水路完掘 東側面2段目 南



5 9区 東側面石積み状態 西



6 9区 掘り方 西



7 9区 東側面1段目 西



8 9区 東側面2段目下段 西

PL.6



1 9区 土層断面A-A' 南



2 9区 土層断面B-B' 北



3 9区 水路内遺物出土状態 北



4 10区 水路完掘 東側面2段目 南



5 10区 水路完掘 東側面2段目 西



6 10区 東側面石積み状態 西



7 10区 掘り方 南



8 10区 掘り方 西



1 10区 掘り方 西



2 10区 東側面1段目 西



3 10区 土層断面A-A' 南



4 10区 土層断面B-B' 北



5 11区 水路完備 東側面2段目 南西



6 11区 東側面石積み状態 南西



7 11区 東側面石積み状態 西



8 11区 東側面石積み状態 西

PL.8



1 11区 東側面石積み状態 西



2 11区 桐木検出状態 南西



3 11区 杭検出状態 南



4 11区 杭検出状態 西



5 11区 東側面1段目 南西



6 11区 東側面1段目 南



7 11区 土層断面A-A' 南



8 11区 土層断面B-B' 北



1 11区 水路内遺物出土状態 南東



2 11区 藁込め・石積み遺物出土状態 西



3 11区 取り上げた杭



4 12区 水路完掘 東側面2段目 南



5 12区 東側面石積み状態 西



6 12区 掘り方 西



7 12区 胴木検出状態 西



8 12区 東側面2段目下段 西

PL.10



1 12区 土層断面A-A' 南



2 12区 土層断面B-B' 北



3 12区 水路内遺物出土状態 東



4 12区 水路内遺物出土状態 東



5 11区 礎検出状態 北



6 11区 完掘状態 東



7 11区 脚木検出状態 北



8 1・48区 土層断面A-A' 南



1 48区 水路完掘 西側面2段目 東



2 48区 水路完掘 西側面2段目 北



3 48区 掘り方 東



4 48区 胴木検出状態 北



5 48区 西側面1段目 東



6 1・48区 土層断面C-C' 南



7 48区 陶管検出状態 東



8 13区 水路完掘 東側面2段目 南

PL.12



1 13区 東側面石積み状態 西



2 13区 掘り方 胴木検出状態 南



3 13区 胴木検出状態 西



4 13区 胴木痕 杭痕検出状態 西



5 13区 東側面1段目 西



6 13区 土層断面A-A' 南



7 13区 土層断面B-B' 北



8 13区 水路内遺物出土状態 西



1 14区 水路完掘 東側面2段目 南



2 14区 水路完掘 東側面2段目 西



3 14区 東側面石積み状態 西



4 14区 掘り方 西



5 14区 東側面1段目 西



6 14・47区 土層断面A-A' 南



7 14区 裏込め遺物出土状態 西



8 47区 西側面検出状態 東

PL.14



1 47区 裏込め側確認面 西



2 47区 西側面石積み状態 東



3 47区 掘り方 水路側 東



4 47区 掘り方 裏込め側 西



5 47区 西側面1段目 東



6 14・47区 土層断面C-C' 北



7 15区 水路完掘 東側面2段目 南



8 15区 水路完掘 東側面2段目 西



1 15区 東側面石積み状態 南西



2 15区 掘り方 胴木検出状態 東



3 15区 胴木検出状態 東



4 15区 東側面1段目 南



5 15区 土層断面A-A' 南



6 15区 土層断面B-B' 北



7 15区 水路内遺物出土状態 東



8 15区 水路内遺物出土状態 東



1 46区 発掘調査前 南



2 46区 水路完掘 西側面検出状態 東



3 46区 西側面2段目 東



4 46区 土層断面B-B' 北



5 16区 裏込め完掘状態・東側面2段目(裏込め側から) 東



6 16区 裏込め完掘状態・東側面2段目(裏込め側から) 南東



7 16区 土層断面A-A' 北



8 16区 土層断面B-B' 北



1 16区 裏込め遺物出土状態 東



2 16区 裏込め遺物出土状態 北東



3 45区 水路完掘 西側面 東



4 45区 掘り方 東



5 45区 西側面1段目 東



6 45・17区 土層断面A-A' 南



7 45・17区 土層断面D-D' 北



8 45区 水路内遺物出土状態 東

PL.18



1 17区 裏込め完掘状態・東側面2段目 西



2 17区 裏込め完掘状態・東側面2段目 南



3 17区 裏込め完掘状態・東側面石積み状態(裏込め側から) 東



4 17区 裏込め状態・東側面石積み状態(裏込め側から) 東



5 45・17区 土層断面B-B' 南



6 45・17区 土層断面C-C' 北



7 18区北 裏込め完掘状態・東側面2段目(裏込め側から) 東



8 18区北 裏込め完掘状態・東側面2段目(裏込め側から) 北



1 18区北 東側面石積み状態(裏込め側から) 南



2 18区北 掘り方 東



3 18区北 東側面1段目(裏込め側から) 東



4 18区北 土層断面A-A' 南



5 18区北 土層断面B-B' 北



6 18区南 裏込め・東側面石積み状態(裏込め側から) 東



7 18区南 裏込め・東側面石積み状態(裏込め側から) 北



8 18区南 掘り方 東

PL.20



1 18区南 東側面1段目(裏込め側から) 東



2 18区南 東側面2段目(裏込め側から) 東



3 18区南 裏込め・東側面石積み状態(裏込め側から) 東



4 44区 調査状況 東



5 44区 土層断面C-C' 右手上に西側面最上面を掘出 北



6 19区 水路完掘 東側面2段目 南



7 19区 水路完掘 東側面2段目 西



8 19区 東側面石積み状態 西



1 19区 掘り方 北



2 19区 桐木痕検出状態 西



3 19区 杭痕検出状態 西



4 19区 杭痕断面状態 東



5 19区 東側面1段目 南



6 19区 東側面1段目 西



7 19区 東側面2段目下段 西



8 19区 土層断面A-A' 南



1 19区 土層断面B-B' 北



2 19区 水路内遺物出土状態 東



3 19区 水路内遺物出土状態 南



4 20区 水路完掘 東側面2段目 南



5 20区 水路完掘 東側面2段目 西



6 20区 東側面石積み状態 西



7 20区 掘り方 西



8 20区 東側面1段目 南



1 20区 東側面1段目 西



2 20区 東側面2段目下段 西



3 20区 土層断面A-A' 南



4 20区 土層断面B-B' 北



5 43区 西側面検出状態・裏込め検出状態 北



6 43区 裏込め 東



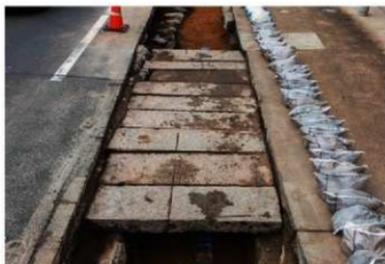
7 43区 西側面1段目 東



8 43区 土層断面A-A' 南



1 21区 石積(溝蓋)検出状態 南



2 21区 石積(溝蓋)検出状態 近接 北



3 21区 水路完掘・最上面 北



4 21区 水路完掘・最上面 近接 北



5 21区 東側面石積み状態 北側 北西



6 21区 東側面石積み状態 南側 南



7 21区 東側面石積み状態 近接 西



8 21区 西側面石積み状態 北東



1 21区 西側面石積み状態 東



2 21区 掘り方 北



3 21区 掘り方 北



5 21区 胴木痕検出状態 南



4 21区 胴木痕検出状態 北



6 21区 胴木痕検出状態 南西



1 21区 桐木検出状態 西



2 21区 桐木・杭検出状態 西



3 21区 杭断面 南



4 21区 東側面1段目 北



5 21区 東側面2段目 北



6 21区 土層断面B-B' 北



7 21区 水路内遺物出土状態 南



8 21区 水路内遺物出土状態 南



1 21区 石積(満蓋)



2 21区 取り上げた杭



3 22区北 東側面石積み上面検出状態 北



4 22区北 東側面石積み検出状態 北



5 22区北 水路完掘 東側面最上面 北西



6 22区北 水路完掘 東側面最上面 南



7 22区北 東側面石積み状態 西



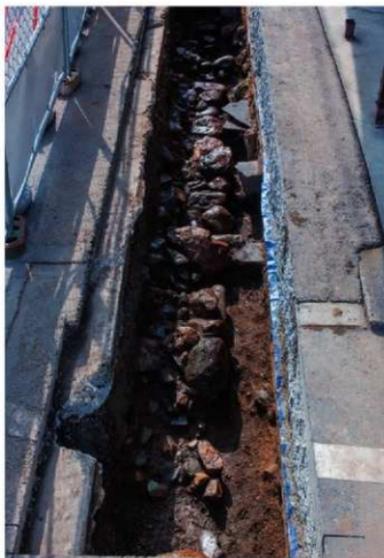
8 22区北 掘り方 南



1 22区北 胴木検出状態 南



3 22区北 胴木検出状態 近接 西



2 22区北 1段目 北



4 22区北 2段目下段 南



5 22区北 2段目上段 南



1 22区中 水路完掘 東側面2段目 南



2 22区中 水路完掘 東側面2段目 北



3 22区中 東側面石積み状態 調査区北側 西



4 22区中 東側面石積み状態 調査区南側 西



5 22区中 掘り方 南



6 22区中 掘り方 部分 西



7 22区中 掘り方 部分 西



1 22区中 東側面1段目 南



2 22区中 東側面1段目 部分 西



3 22区中 東側面2段目下段 南



4 22区中 東側面2段目下段 部分 西



5 22区中 東側面2段目中段 南



7 22区南 水路完掘 東側面1～2段目 南



6 22区中 東側面2段目中段 部分 西



1 22区南 水路完掘 東側面1～2段目 南



2 22区南 東側面石積み状態 西



3 22区南 東側面石積み状態 南



4 22区南 掘り方 陶管検出状態 南



5 2区 水路完掘 東側面2段目 南



6 2区 水路完掘 東側面2段目 西



7 2区 東側面石積み状態 南東



8 2区 掘り方 南



1 23区 東側面1段目 北西



2 23区 水路完掘 東側面2段目 南



3 23区 水路完掘 東側面2段目 北西



4 23区 東側面石積み状態 西



5 23区 東側面石積み状態 西



6 23区 掘り方 南



7 23区 胴木痕検出状態 西



1 23区 胸木痕検出状態 南



2 23区 胸木痕検出状態 南



3 23区 東側面石積み1段目 西



4 23区 東側面石積み1段目 南



5 23区 東側面2段目下段 南西



6 23区 東側面2段目下段 北西



1 3区 調査開始前 南東



2 3区 露検出状態(露は再度埋め戻し) 北



3 3区 東側面裏込め土(右手の褐色土) 北



4 42区 発掘調査開始前状況 南



5 42区 アスファルト除去後 東



6 42区 水路完掘 西側面2段目 南



7 42区 水路完掘 西側面2段目 東



8 42区 掘り方 北



1 42区 西側面裏込め掘り方 東



2 42区 西側面1段目 東



3 24区北 水路完掘 東側面2段目 南西



4 24区北 水路完掘 東側面2段目 北



5 24区南 水路完掘 東側面2段目 南



6 24区南 水路完掘 東側面2段目 北



1 24区北 東側面石積み状態 西



2 24区北 東側面石積み状態 西



3 24区南 東側面石積み状態 西



4 24区南 東側面石積み状態 西



5 24区北 掘り方 北



6 24区南 掘り方 北



1 24区北 東側面1段目 北



2 24区南 東側面1段目 南



3 24区北 東側面2段目 南西



4 24区南 東側面2段目 南西



5 24区北 堰検出状況 東



6 25区北 堰検出状況 北



7 24区北 堰床版石・水叩き石 西



8 25区北 堰床版石・水叩き石 南東



1 22・2・23・3・42・24区 土層断面A-A' 南



2 22・2・23・3・42・24区 土層断面B-B' 北



3 22・2・23・3・42・24区 土層断面E-E' 南



4 22・2・23・3・42・24区 土層断面H-H' 北



5 22・2・23・3・42・24区 土層断面I-I' 東



6 22区中 水路内遺物出土状態(50天保通費) 西



7 22区中 掘り方遺物出土状態 南



8 22区南 水路内遺物出土状態 西



1 22区 取り上げた胴木



2 22区 取り上げた杭



3 23区 水路内遺物出土状態 西



4 24区 水路内遺物出土状態 西



5 24区 水路内遺物出土状態 西



6 24区 水路内遺物出土状態 東



7 41区 水路完掘 西側面 東



8 41区 水路埋没・堆積土状態 南

PL.40



1 40区 水路完掘 西側面1段目 東



2 40区 水路土層断面 北



3 25区 水路完掘 東側面2段目 北



4 25区 東側面石積み状態 西



5 25区 掘り方 北



6 25区 胴木検出状態 北



7 25区 胴木検出状態 西



8 25区 東側面1段目 東



1 25区 取り上げた杭1



2 25区 取り上げた杭3



3 4区 東側面2段目・裏込め 南



4 4区 東側面1段目・裏込め 西



5 4区 土層断面A-A' 南西



6 4区 土層断面B-B' 北西



7 4区 裏込め遺物出土状態(39号永通寶) 北



8 4区 裏込め遺物出土状態 東



1 5区 水路完掘 東側面2段目(裏込め側から) 東



2 5区 水路完掘 東側面2段目 北



3 5区 東側面石積み状態(裏込め側から) 東



4 5区 東側面石積み撤去後 北西



5 5区 東側面1段目(裏込め側から) 東



6 5区 東側面1段目 北



7 5・39区 土層断面A-A' 南



8 5・39区 土層断面B-B' 北



1 39区 西側面最上面 南



2 39区 水路掘削 西側面最上面 東



3 39区 掘り方 東



4 39区 脚木痕・杭痕 東



5 39区 西側面1段目 東



6 39区 西側面2段目 東



7 5・39区 土層断面A-A' 南



8 5・39区 土層断面B-B' 北



1 6区 東側面最上面(裏込め側から) 南東



2 6区 水路掘削後・東側面最上面 西



3 6区 水路掘削後・東側面最上面 西



4 6区 東側面1段目 南



5 6区 東側面2段目下段 北



6 6区 東側面2段目上段 南



7 6区 土層断面A-A' 南



8 6区 裏込め遺物出土状態 東



1 26区 水路完掘・2段目 北



2 26区 水路完掘・2段目 西



3 26区 東側面石積み状態 西



4 26区 掘り方 南東



5 26区 桐木枠出状態 南西



6 26区 東側面1段目 南



7 26区 東側面2段目下段 西



8 26区 東側面2段目上段 南

PL.46



1 26区 土層断面A-A' 南



2 26区 土層断面B-B' 北



3 26区 水路内遺物出土状態 南



4 26区 水路内遺物出土状態 西



5 27区 水路完備・2段目(左側褐色土水道管敷設土) 南



6 27区 東側面石積み状態 西



7 27区 掘り方 北



8 27区 桐木検出状態 北



1 27区 東側面1段目 南



2 27区 東側面2段目 南



3 38・27区 土層断面A-A' 南



4 38・27区 土層断面B-B' 北



5 27区 水路内遺物出土状態 北西



6 27区 水路内遺物出土状態 北



7 38区 水路完掘・2段目 北



8 38区 水路完掘 西側面2段目 南東



1 38区 水路完掘 西側面石積み状態 東



2 38区 掘り方 南



3 38区 胸木検出状態 南



4 38区 西側面1段目 南



5 38区 西側面2段目下段 北



6 38・27区 土層断面C-C' 北



7 38区 水路底面遺物出土状態 南



8 28区 水路完掘 東側面2段目 南



1 28区 水路完備 東側面2段目 近接 南



2 28区 東側面石積み状態 西



3 28区 掘り方 南



4 28区 東側面1段目 南



5 28区 東側面2段目下段 南



6 28区 土層断面A-A' 南



7 28区 土層断面B-B' 北



8 28区 水路内遺物出土状態 南



1 29区 水路完掘 東側面2段目 南



2 29区 水路完掘 東側面2段目 西



3 29区 東側面石積み状態 西



4 29区 掘り方 銅木検出状態 南



5 29区 銅木・杭痕検出状態 南



6 29区 東側面1段目 西



7 29区 裏込め遺物出土状態 南



1 30区 水路完掘 東側面2段目 南



2 30区 水路完掘 東側面2段目 北西



3 30区 水路完掘 東側面石積み状態 西



4 30区 掘り方 南



5 30区 掘り方 刷木痕・杭痕検出状態 西



6 30区 東側面1段目 遺物出土状態 西



7 30区 土層断面A-A' 南



8 30区 土層断面B-B' 北



1 31区 水路完掘・東側面2段目 西



2 31区 水路完掘・東側面2段目 西



3 31区 掘り方 南



4 31区 桐木検出状態 北



5 31区 取り上げた桐木



6 31区 東側面1段目 北



7 31区 東側面2段目中段 西



1 31区 土層断面A-A' 南



2 31区 土層断面B-B' 北



3 31区 水路内遺物出土状態 北



4 31区 石橋痕 西



5 32区 水路掘削 東側面最上面 南



6 32区 水路掘削 東側面最上面 西



7 32区 掘り方 南



8 32区 割木・杭痕検出状態 南東



1 32区 東側面1段目 西



2 32区 東側面2段目下段 西



3 32区 東側面2段目中段 西



4 32区 東側面2段目上段 西



5 32区 土層断面A-A' 南



6 32区 土層断面B-B' 北



7 32区 水路内遺物出土状態 南東



8 32区 水路内に廃棄された石橋 西



1 37区 水路完掘 西側面最上面(右の1石) 東



2 37区 水路完掘 西側面最上面(手前の1石) 北



3 37区 西側面石積み状態 東



4 37区 西側面1段目 東



5 37区 西側面2段目下段 東



6 37区 西側面2段目上段 東



7 37区 土層断面A-A' 南



8 33区 水路完掘 東側面最上面調査区北側 西



1 33区 水路完掘 東側面最上面 北



2 33区 東側面石積み状態 西



3 33区 東側面石積み状態 西



4 33区 掘り方 西



6 33区 胴木・杭痕検出状態 北



5 33区 東側面1段目 南



1 33区 東側面2段目下段 西



3 33区 東側面2段目上段 南



2 33区 東側面2段目下段 西



4 33・36区 土層断面A-A' 南



5 33・36区 土層断面B-B' 北



6 33区 水路内遺物出土状態 南



7 33区 水路内遺物出土状態 西



1 36区 調査地点(着工前) 南



2 36区 水路完掘 西側面最上面 東



3 36区 西側面石積み状態 東



4 36区 掘り方 東



5 36区 西側面1段目 東



6 36区 西側面2段目下段 東



7 36区 西側面2段目上段 東



8 33区・36区 土層断面C-C' 南



1 34区・35区 調査地点 南東



2 34区 調査地点 南



3 34区 水道管敷設確認面 東



4 34区 土層断面A-A' 北



5 35区 調査地点 北



6 35区 水道管敷設確認面 東



7 35区 水道管敷設確認面 東



8 35区 土層断面A-A' 北

PL.60

1. 石製品・石造品
磁石



硯





13



14



15



16



17



18



石筆



蠟石



PL.64

塚柱



石槌



不明品



31

石鐵



32

PL.66

2. 金属製品・金属器
銭貨



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66

PL.68



煙管



その他



3. 陶磁器・ガラス製品類

(1) 陶磁器等

① ミニチュア・玩具



② 喫茶・飲酒器

小杯・小碗・湯飲み



PL.70



急須・土瓶



飲酒器



192



193



194



196



197



199



④ 食器

猪口



204



206



208



209

碗



211



212



213



214



217



219



222



223



227



232



234



219



225



229



238



238





240



242



243



244



246



247



252



254



255



256



257



258



261



263



265



259



270



271



273



275



276



278



279



281



282

井



288



289



290

小皿



300



302



303



304



305



307



308



310



313



315



317







中皿（和食器）



中皿（洋食器）



353



355



357



358



356

鉢



362



369



366



368



④記念品・販促品・粗品



PL.78

◎業務用食器



◎容器・貯蔵具



⑦調味料入れ・調理道具
銅



440



442

調味料入れ



443

おろし器



445

銅



447



449

穀物増加器



444



450

⑧神仏具等



462



464

⑨灯火器



471



478



481



473



480



484



476



486

PL.80

花器



487



488



489



490

植木鉢



492



493



494



495

火具 目皿



496



497

火鉢類



513

化学工業陶器



514



515



516



516



517



517



517

瓦建築・建築関連用具
戸車



518



519



520

タイル



522

城瓦



527



528

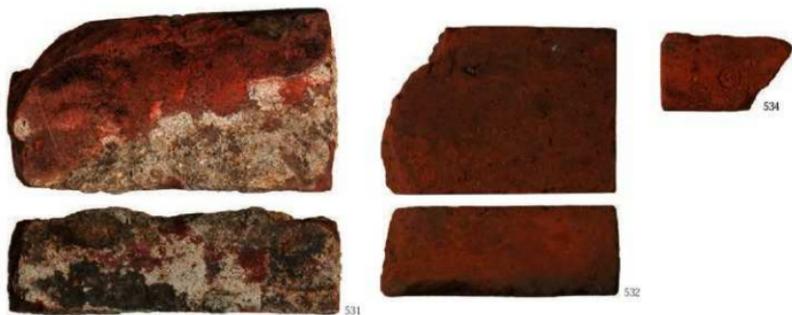


529

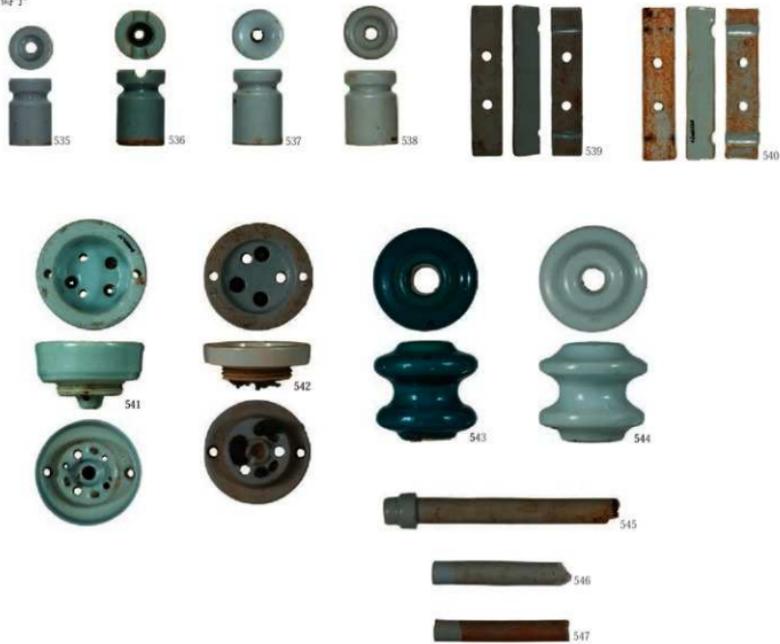


530

PL.82



罎子



土管·陶管



PL.84

珍その他



(2) ガラス製品

①玩具類



②文具類
インク瓶等



③菓子容器



④清涼飲料瓶



PL.86

⑤ 酒瓶



⑥ 調味料瓶



⑦ 食品瓶



⑧ 食器類



◎喫煙具



◎化粧瓶

化粧クリーム瓶・ポマード瓶



化粧水・整髪料瓶





①薬瓶
一般用薬瓶



医療用薬瓶



②日常生活瓶
白髪・赤毛染瓶



化粧クリーム瓶



綠料瓶



668

用途不明瓶



670



671



672



673



674



675



676



677



678



679



680



681



682



683



684



685

報告書抄録

書名ふりがな	きりゅうしんまちすいろあと
書名	桐生新町水路跡
副書名	主要地方道桐生田沼線無電柱化推進計画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	726集
編著者名	神谷佳明 / 矢口裕之 / 田村 博 / 大西雅広
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20230719
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	きりゅうしんまちすいろあと
遺跡名	桐生新町水路跡
所在地ふりがな	きりゅうしほんちよういっちようめ・ほんちようにちようめ
遺跡所在地	桐生市本町1丁目・本町2丁目
市町村コード	10203
遺跡番号	1383
北緯(世界測地系)	36° 24' 59" 22-36° 25' 14" 21
東経(世界測地系)	139° 20' 33" 63-139° 20' 44" 41
調査期間	20180101-20180228、20190101-20190228、20191001-20191231、20210101-20210331
調査面積	199.4
調査原因	道路改良工事(電線地中化工事)
種別	集落
主な時代	江戸 / 近代 / 現代
遺跡概要	水路1
特記事項	江戸時代17世紀代に構築された水路。水路裏込めや内部からは近世後半から現代までの陶磁器、ガラス製品をはじめ、近世から現代の生活習慣を検討する上で貴重な遺物が出土している。
要約	江戸時代初頭に新たに形成された集落に生活・農業用水として構築された水路跡。明治から昭和(戦前)までは利用されていたが、戦後昭和30年代に埋め戻されている。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第726集

桐生新町水路跡

主要地方道桐生田沼線無電柱化推進計画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和5(2023)年7月14日 印刷

令和5(2023)年7月19日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上海印刷工業株式会社

